

第668号住居跡（第128図）

位置 調査区西部のC 4 c9 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 東西長は4.1mで、南北長は北側が調査区域外へ延びており、2.6mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN - 3° - Eである。壁高は12~44cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部と南壁際の一部が踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ12~15cmで、位置から判断して支柱穴と考えられる。

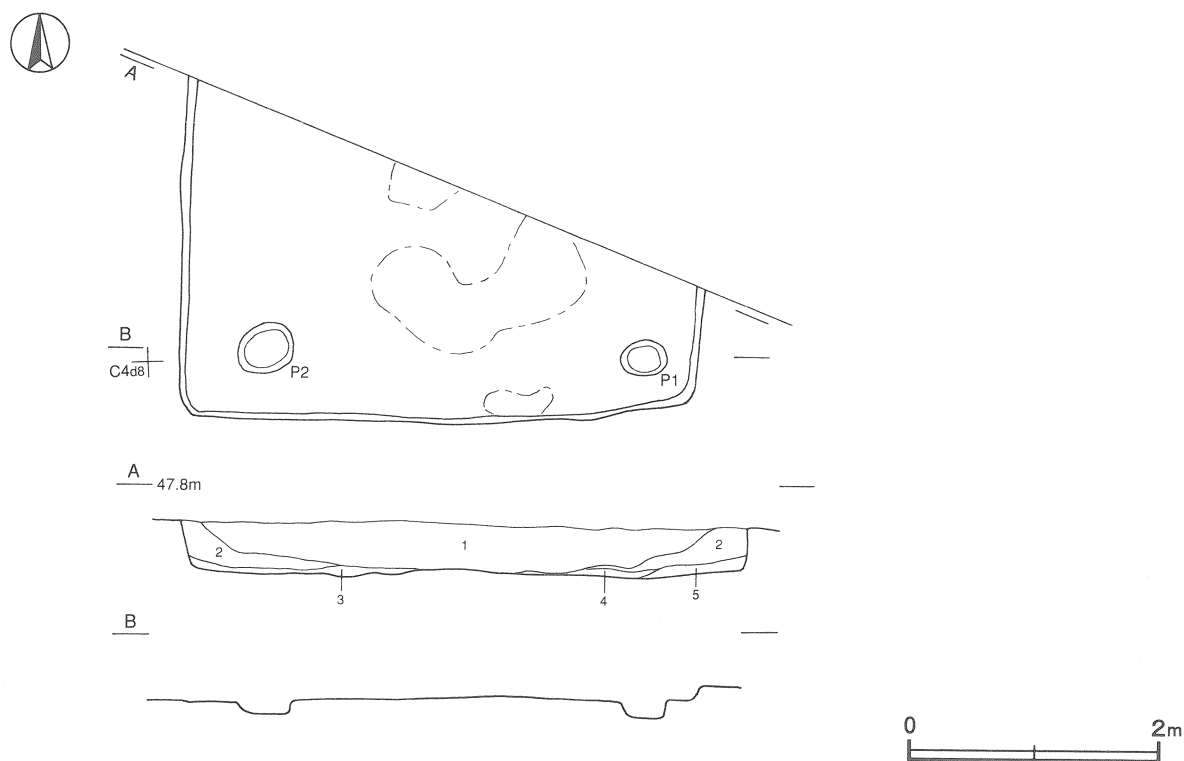
覆土 5層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|-----------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、縮り強 | | |

遺物出土状況 土師器片3点(坏)、縄文土器片1点が出土している。いずれも細片で図示できるものはなかった。

所見 遺構の大半が調査区域外にあり、全容をつかむことができなかった。良好な出土遺物はないが、遺構の形態や主軸方向と周囲の住居跡から判断して、時期は8世紀以降と考えられる。



第128図 第668号住居跡実測図

第669号住居跡（第129・130図）

位置 調査区西部のC 4 c8 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第670号住居跡を掘り込んでいる。

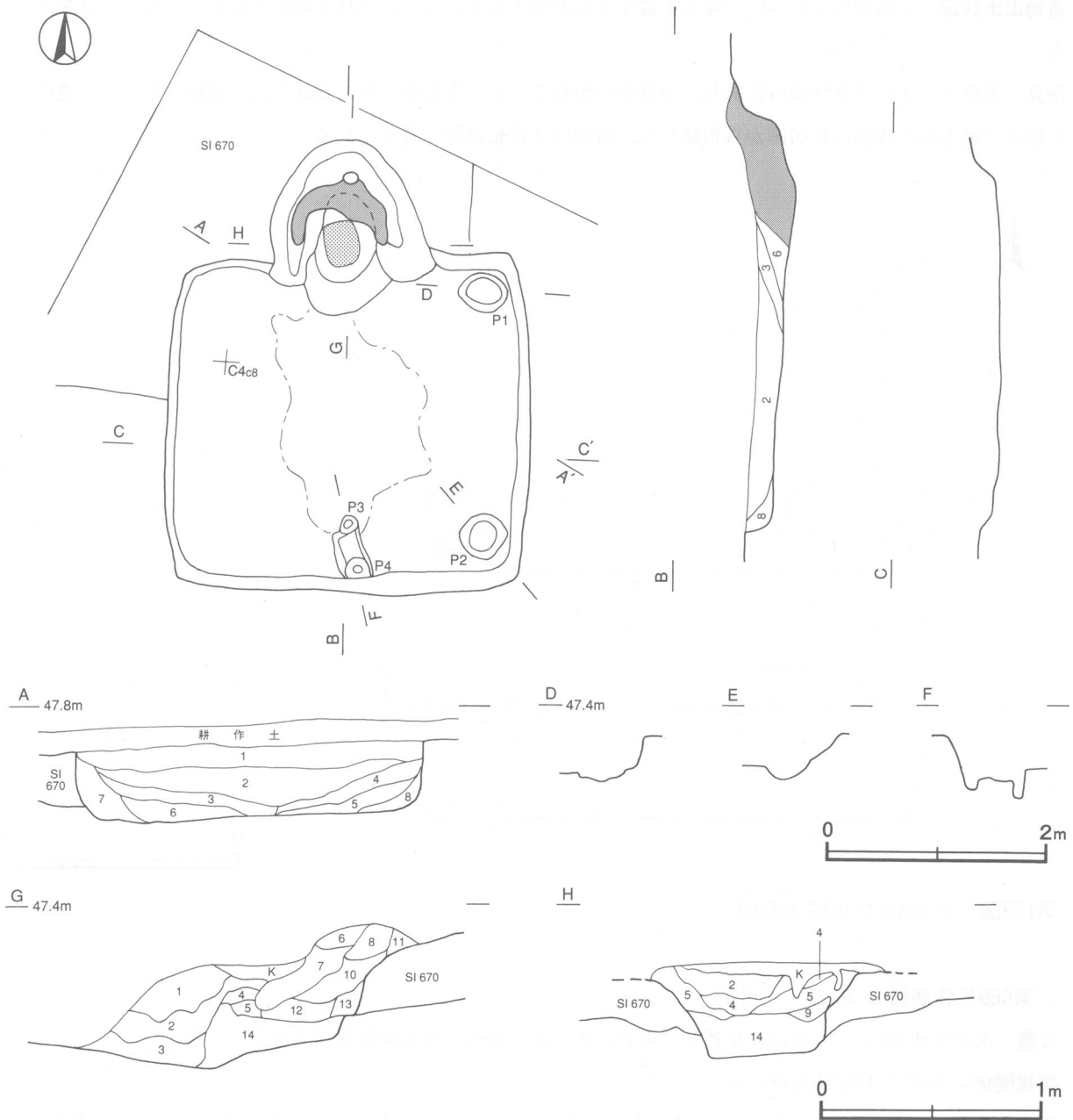
規模と形状 長軸3.3m、短軸3.1mの方形で、主軸方向はN - 7° - Wである。壁高は12~20cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 南から北へ緩やかに傾斜しており、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは160cmで、壁外へ110cmほど掘り込んでおり、袖部幅は150cmである。天井部は残存していないが、第6～8層が崩落した天井の一部と推測される。袖部は地山と第670号住居跡の覆土を掘り残し、粘土を貼り付けて構築されており、そこから天井部をアーチ状に作っていたものと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量、粘性弱
- 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、粘性強、縮り弱
- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・粘土ブロック微量、粘性強、縮り弱
- 4 灰褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量、粘性強、縮り極めて弱
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量、粘性弱
- 6 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量、粘性強、縮り弱



第129図 第669号住居跡実測図

- 7 灰 褐色 粘土ブロック多量, ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量, 粘性強, 縮り弱
- 8 灰 褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量, ローム粒子微量, 粘性弱
- 9 赤 褐色 焼土ブロック多量, 粘性極めて弱, 縮り強
- 10 黒 褐色 焼土粒子微量, 縮り弱
- 11 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性弱
- 12 暗 赤 褐色 焼土ブロック中量, 炭化物・粘土ブロック少量, ローム粒子微量, 縮り弱
- 13 黒 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量, 縮り弱
- 14 暗 赤 褐色 焼土ブロック・炭化物多量, ロームブロック微量, 粘性強, 縮り弱

ピット 4か所。P1は深さ10cmで北東部に, P2は深さ12cmで南東部に位置し, それぞれ径約40cmの円形で底面は皿状である。貯蔵穴的な機能が推測されるが, 性格は不明である。P3・P4は深さ25cmと20cmで南壁際中央の竈に対面する位置にあり, 出入口施設に伴うものと考えられる。

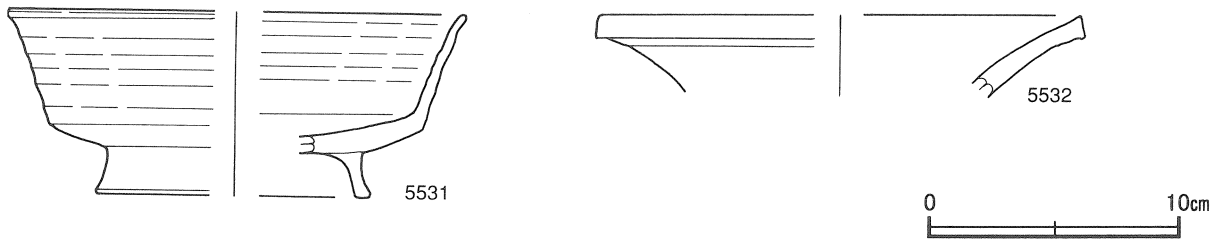
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 黒 色 ローム粒子微量 2 黒 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量, 縮り弱 3 黒 褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量, ロームブロック微量, 粘性弱 4 黒 色 ローム粒子微量 5 黒 褐色 ロームブロック少量, 縮り弱 | <ul style="list-style-type: none"> 6 黒 褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量, 粘土粒子微量 7 灰 褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量, 縮り弱 8 黒 褐色 ローム粒子中量, 粘性強, 縮り弱 |
|---|--|

遺物出土状況 土師器片78点(坏22, 鉢2, 甕54), 須恵器片13点(坏6, 高台付坏4, 甕3), 弥生土器片2点, 土師質土器片1点(内耳鍋), 石器1点(磨石)が出土している。竈内にやや集中しているが, 多くが細片で図示できるものは少なかった。

所見 時期は良好な出土遺物は少ないが, 規模や主軸方向と併せて9世紀前葉と考えられる。



第130図 第669号住居跡出土遺物実測図

第669号住居跡出土遺物観察表 (第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5531	須恵器	高台付坏	[18.2]	7.4	[10.8]	長石, 黒色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	40%
5532	須恵器	甕	[19.0]	(3.3)	-	長石	暗灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%

第693号住居跡 (第131図)

位置 調査区西部のC4 a3区に位置し, 南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第673号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 遺構のほとんどが調査区域外にあり, 南西コーナー部と考えられる部分のみ検出された。現状では長軸2.0m, 短軸0.9mで, 形状は方形もしくは長方形と考えられ, 主軸方向はN-2°-Wである。壁高は60cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁溝が調査区域内では全周している。

ピット P1は深さ6cmで南西部に位置しているが, 性格は不明である。

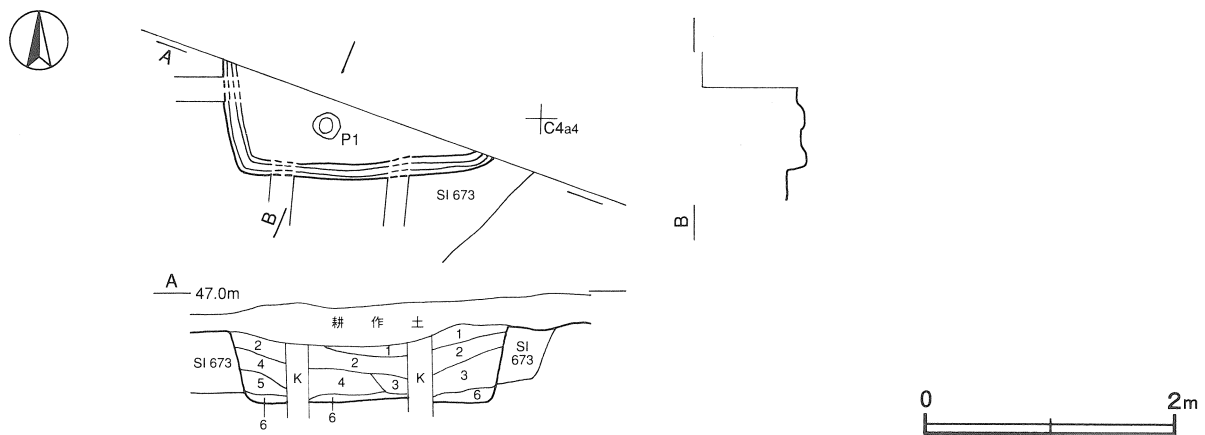
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量、焼土ブロック極微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒色 | ロームブロック微量、縮り弱 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、縮り弱 |

遺物出土状況 土師器片5点（甕）が出土しているが、細片で図示できるものはなかった。

所見 遺構の大半が調査区域外へ延びており、全容をつかむことができなかった。5世紀後半と考えられる第673号住居跡を掘り込んでいることと主軸方向から、時期は8世紀以降と考えられる。



第131図 第693号住居跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡（第132図）

位置 調査区中央部のE9c1区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置しており、本年度調査区域内でP10が検出された。

重複関係 平成13年度調査区域で第489号住居跡を掘り込み、第485号住居、第1047・1048号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡である。桁行方向をN-86°-Eとする東西棟で、規模は桁行長が7.5m、梁間長が4.8mである。柱間寸法は2.5mを基調としている。

柱穴 P10の平面形は円形で深さは70cm、P1～P9の平面形は円形または楕円形で、深さは40～80cmである。

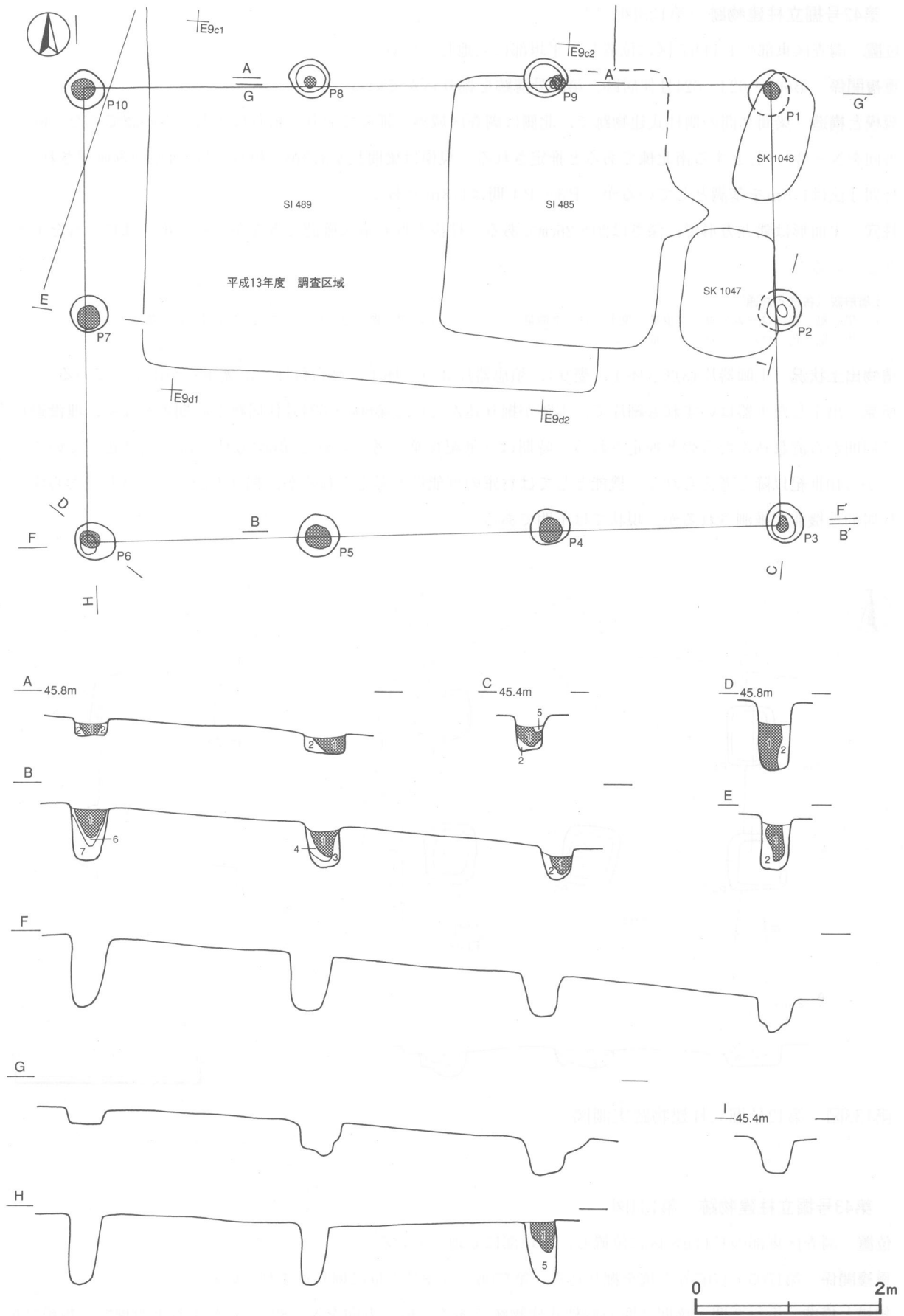
柱の抜き取り痕（第1層）がP2以外の柱穴で確認された。土層番号は『辰海道遺跡1』に対応している。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|---------------|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量、縮り弱 | 5 黒褐色 | 炭化粒子微量、縮り弱 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量、縮り強 | | |

遺物出土状況 平成13年度調査区域で、混入したと考えられる礫片1点が出土している。

所見 第11号掘立柱建物跡と柱筋を揃えて並列している。性格は不明であるが、時期を『辰海道遺跡1』では重複関係から10世紀前半と推測している。



第132図 第12号掘立柱建物跡実測図

第42号掘立柱建物跡（第133図）

位置 調査区東部のF11b7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第604・623・624号住居跡、第38号溝跡を掘り込んでいる。

規模と構造 梁間2間の側柱式建物跡で、北側は調査区域外へ延びており、桁行は1間のみ確認できた。桁行方向をN-8°-Eとする南北棟であると推定される。規模は梁間長が3.3m、桁行長は2.1mのみ確認された。柱間寸法は1.5mを基調としているが、P3・P4間は1.8mである。

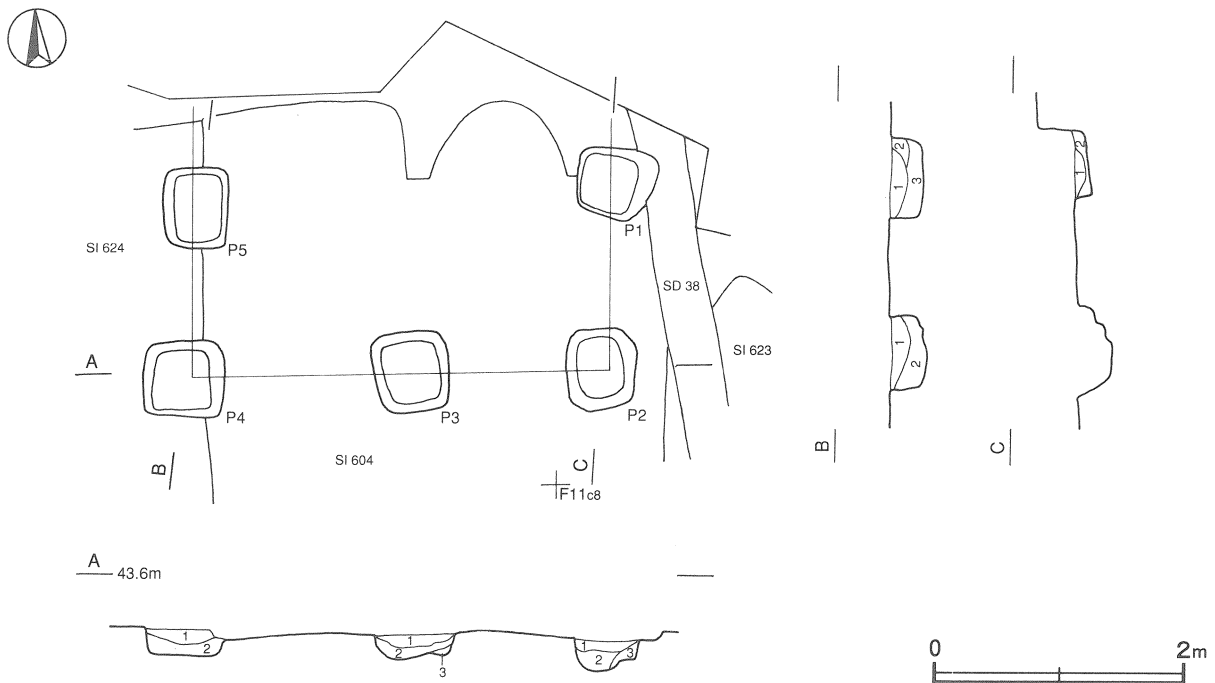
柱穴 平面形は隅丸方形で、深さは20~26cmである。柱抜き取り痕は確認できなかった。覆土はロームを主体としている。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 3 黒褐色 ロームブロック中量、締り強 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片13点（坏4，甕9），須恵器片3点（坏1，高台付坏1，甕1）が出土している。

所見 出土した土器はいずれも細片で、本跡が掘り込んでいる第604・624号住居跡と時期差がなく、埋没過程で周囲から流れ込んだものと推定される。時期は9世紀後葉と考えられる第604号住居跡を掘り込んでいることから10世紀以降と考えられる。機能としては倉庫の可能性も考えられるが、掘り方がしっかりしておらず、住居的な機能が推測されるが、現状では不明である。



第133図 第42号掘立柱建物跡実測図

第43号掘立柱建物跡（第134図）

位置 調査区東部のF11g8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1705・1707号土坑を掘り込み、第1706・1728号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡である。桁行方向をN-89°-Eとする東西棟で、規模は桁行長が5.6m、梁間長が4.2mである。柱間寸法は不均一で、P1・P2間が約2.3m、P1・P10間、P3・P4

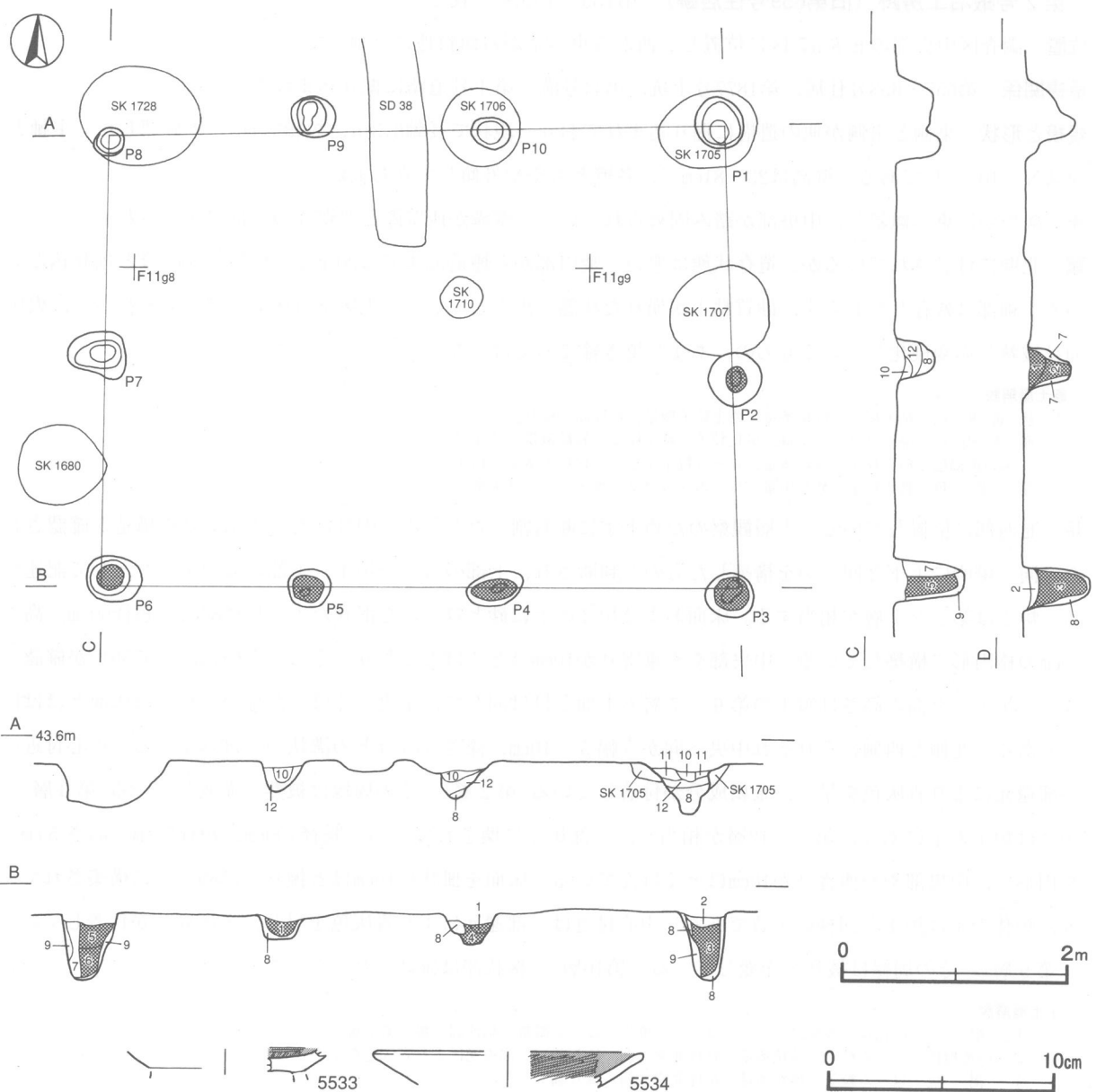
間、P6・P7間が約2.1m、P2・P3間、P7・P8間が約1.95m、P5・P6間、P8・P9間が約1.8m、P4・P5間が約1.65m、P9・P10間が約1.5mである。

柱穴 平面形は円形で、深さは25～65cmである。柱抜き取り痕はP2～P6で確認され、第1～6層が相当する。その他の層は埋土で、ロームを主体としている。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ロームブロック少量, 締り強 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量, 締り強 |
| 3 黒褐色 ロームブロック中量 | 9 黒褐色 ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 ロームブロック微量 | 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 ロームブロック少量 | 12 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片33点(坏21, 碗2, 鉢1, 甕9), 須恵器片1点(蓋)が出土している。ほとんどが埋土からであるが, P3の柱抜き取り痕から内面に黒色処理が施された土師器坏と, 須恵器蓋の細片が出土している。



第134図 第43号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

所見 出土した土器は埋土からのものがほとんどで細片が多かったが、5533や5534のように内面に黒色処理が施された土師器碗や皿が出土しているのに対し、須恵器は蓋以外に出土していないことから、時期は9世紀後葉以降と考えられる。機能としては倉庫の可能性も考えられるが、掘り方がしっかりしておらず、柱筋・柱間寸法なども均一ではないため、住居的な機能が推測されるが、現状では不明である。

第43号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5533	土師器	碗	-	(1.1)	-	長石, 黒雲母	黒	普通	高台貼り付け	P10覆土中	5%
5534	土師器	皿	[12.0]	(1.6)	-	石英, 長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ	P6覆土中	5%

(3) 鍛冶工房跡

第2号鍛冶工房跡(旧第659号住居跡)(第135~139図, 表2)

位置 調査区中央部のE8h7区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第657・658号住居, 第1877号土坑, 第44号溝, 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 東側と南側が他の遺構に掘り込まれており、現状で長軸6.3m, 短軸5.1mのみ確認した。主軸方向はN-10°-Eである。壁高は23~81cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部が踏み固められている。壁溝が西壁際と北壁際の一部に確認された。

竈 北壁に付設されているが、遺存状態は悪い。焚口部から煙道部までは90cmで、壁外へ20cmほど掘り込んでいる。袖部は残存しておらず、砂質粘土が崩れた状態で出土している。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化しているものの、あまり焼き締まってははいない。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子・砂粒多量, 焼土粒子微量, 粘性弱, 締り強
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量, 粘性弱
- 3 にぶい黄褐色 粘土粒子・砂粒多量, ローム粒子中量, 炭化粒子微量, 粘性弱
- 4 暗褐色 粘土粒子・砂粒中量, ロームブロック・焼土ブロック少量

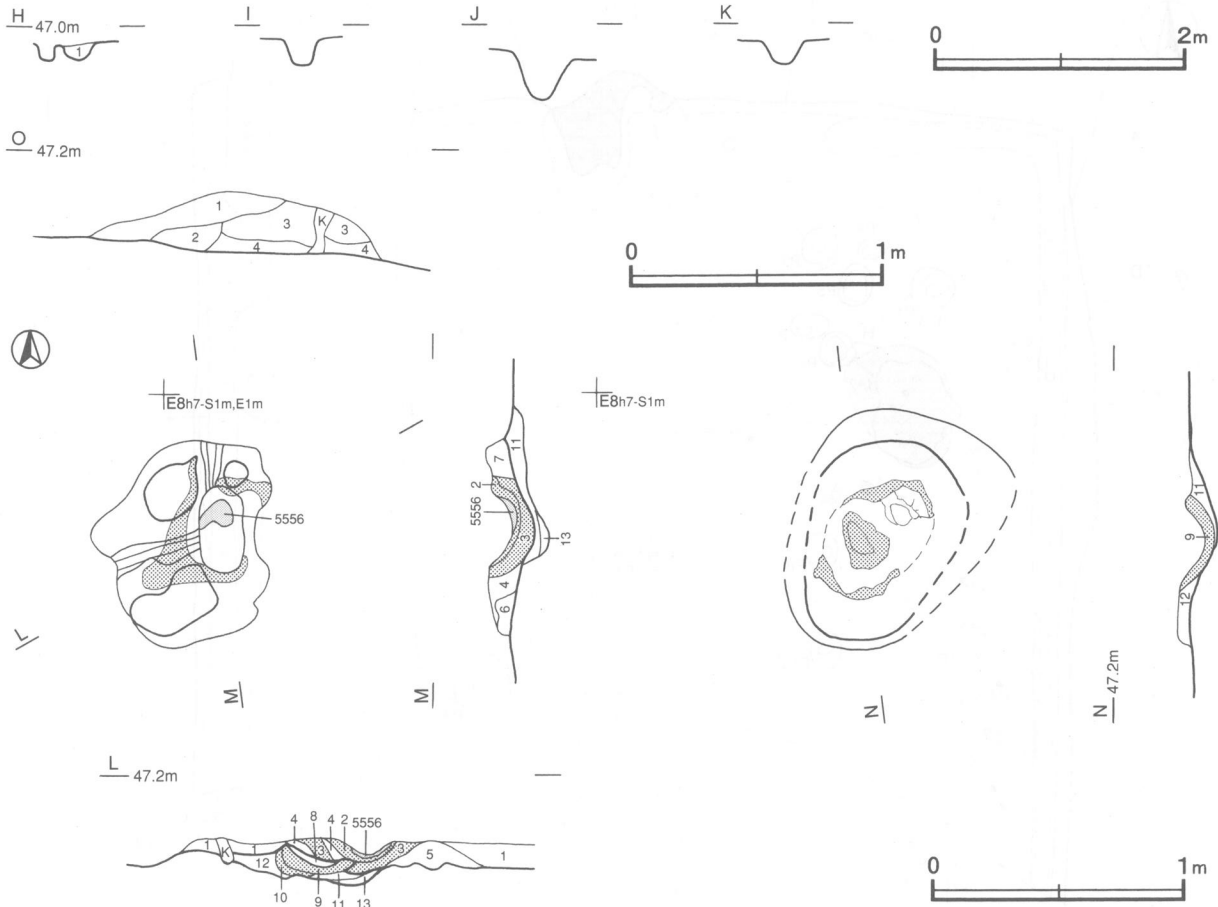
炉 北西部に位置している。土層観察のため十字に断ち割ったところ、内部にもう1基同様の構造が確認された。同じ場所に上下2回、炉を構築したものと判断され、上部のものを炉1、下部のものを炉2として記述する。炉1は第2~7層が相当する。床面および炉2の上に砂とロームを混ぜた土で長径85cm, 短径60cm, 高さ10cmの楕円形に構築している。中央部やや東寄りが10cmほどくぼんでおり、そこから碗状滓(5556)が確認された。炉1の上面の高さは覆土の第6・7層の上面とほぼ同じで、中央のくぼんだ部分の高さは床面とほぼ同じである。北側と西側にそれぞれ中央へ向かう幅5~10cm, 深さ5cmほどの溝状のくぼみがある。中心付近は一部還元により青灰色を呈し、金属成分が付着している(第2層)。その周縁は被熱し赤変している(第3層)。炉2は炉1の下にあり、第9~12層が相当し、一部炉1に壊されている。長径100cm, 短径75cm, 高さ5cmの楕円形で、中央部やや西寄りが10cmほどくぼんでいる。床面を皿状に10cmほど掘りくぼめた上に構築されており、炉体の土は炉1と同様の土質である。中心付近は一部還元により青灰色を呈し、金属成分が付着している(第9層)。その周縁は被熱し赤変している(第10層)。碗状滓は確認されなかった。

炉土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック微量, 粘性弱(覆土第7層)
- 2 にぶい黄橙色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱, 締り強(一部還元により青灰色を呈す)
- 3 赤褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱, 締り強
- 4 明褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱, 締り強
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性弱, 締り強



第135图 第2号鍛冶工房跡実測図(1)



第136図 第2号鍛冶工房跡実測図(2)

- 7 黒褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性弱
- 8 黒色 炭化粒子多量, 粘性・縮り弱
- 9 黄橙色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱, 縮り強 (一部還元により青灰色を呈す)
- 10 赤褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱
- 11 褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性弱, 縮り強
- 12 褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘性非常に弱, 縮り強
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 縮り弱

ピット 11か所。P1は深さ45cmで、掘り方と位置から主柱穴の可能性はあるが、他に主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。P2は長径25cm, 短径20cmの楕円形で、炉の北西に位置し、深さは15cmで底面は皿状である。覆土中から鉄滓・粒状滓・鍛造剥片が多量に出土している。P3～P11は深さ11～35cmで、多くが炉の周辺に位置し、工房作業時の柱穴であった可能性があるが、性格は不明である。

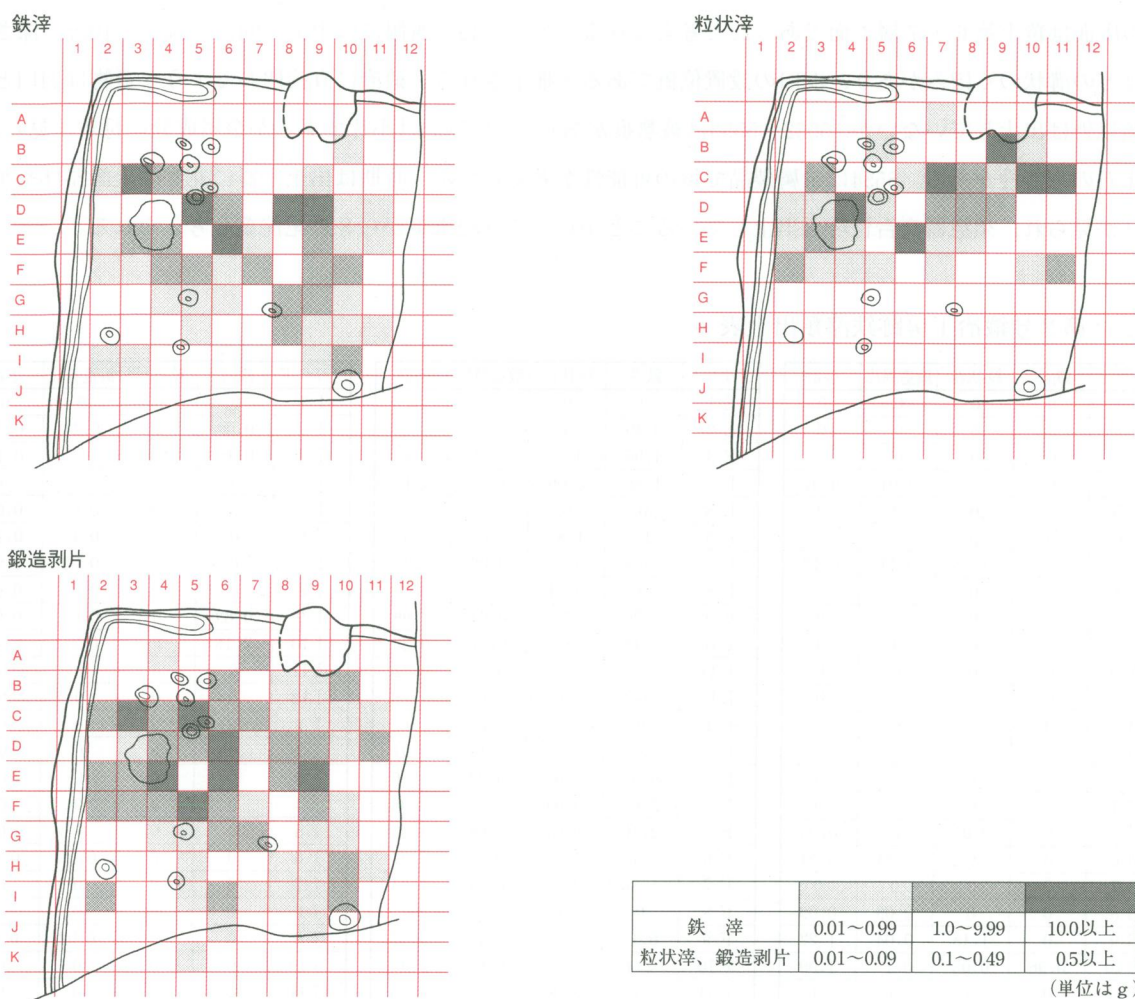
P2土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 粘性弱

覆土 8層に分層される。第6・7層は炭化物を多く含み、第1～5層は西側の斜面上部から流れ込んだ様相を示している。第6層以下が人為堆積した後、第1～5層が自然堆積したものと考えられる。なお、第6層は土質的には第7層と同じであるが、若干の硬化が見られる部分である。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 炭化粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック微量, 粘性弱, 縮り強
- 7 黒褐色 炭化粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック微量, 粘性弱
- 8 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第137図 第2号鍛冶工房跡鉄滓類出土分布図

遺物出土状況 土師器片185点（坏83，高坏2，甕100），須恵器片27点（坏7，高台付坏3，蓋8，甕9），弥生土器片3点，土製品片13点（羽口），鉄製品3点（釘1，鋸カ1，不明1），鉄滓60点，焼礫2点が出土している。覆土下層から出土したものは5535・5550・5553・5554で，その内の5550・5553・5554および，5544は炉の周辺から出土している。第7層中からは3087.41g（鉄滓2820.1g，粒状滓47.41g，鍛造剥片219.9g）の鉄滓類が，炉体および炉内の土からは289.25g（鉄滓187.34g，粒状滓0.68g，鍛造剥片101.23g）の鉄滓類が出土している。P2の覆土中からも203.72g（鉄滓175.4g，粒状滓4.22g，鍛造剥片24.1g）の鉄滓類が出土している。また，グリッドを基準に50cm単位の方眼を組み，床面付近の土を選別した結果，表2に示す通り，多量の鉄滓類を確認した。さらに，それらを除いた覆土全体からは1895.6gの鉄滓類が出土し，鉄滓類の合計は5631.81gである。

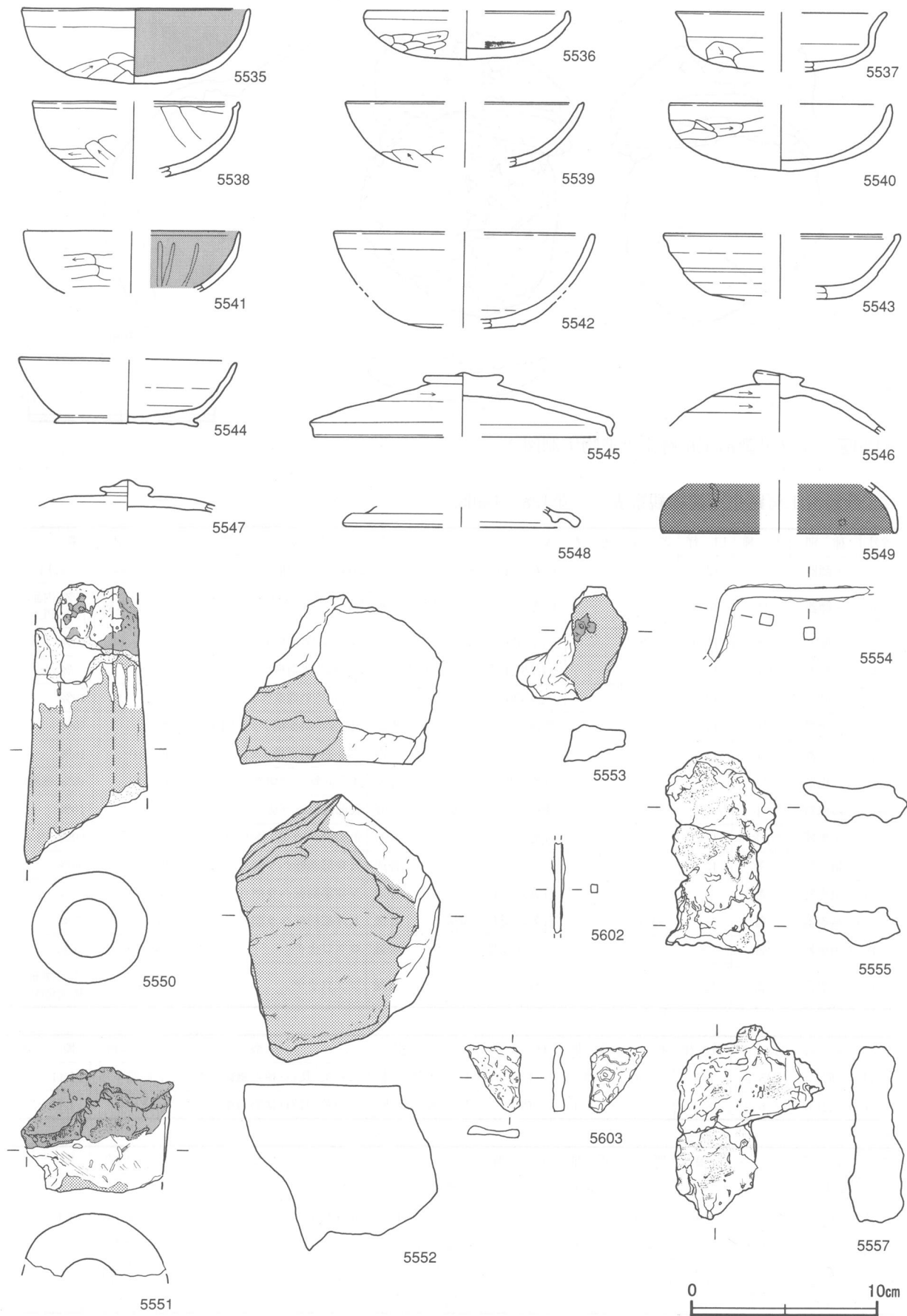
所見 北西部の炉は構造や出土した遺物などから鍛冶炉と考えられ，出土した多量の粒状滓，鍛造剥片から見て，鍛錬鍛冶が行われていたものと考えられる。遺構全体としてはその形状や，竈の存在から当初は住居として使用し，その後工房に転用したものと推測される。炉2は床面上に構築されており，床面付近の土から鍛造剥片や粒状滓が出土していることから炉2操業時の床面は住居として使用していた時の床面と同様であったと考えられる。炉1は炉2の上に構築されており，床面より約10cm高く，これはおおむね覆土第6・7層の上面

にあたる。第6層は硬化しており、層中から多量の鍛造剥片を含む鉄滓類が出土していることから、炉1操業時の床面は覆土第6・7層上面であったと考えられる。炉1の北と西側には中央へ向かう幅5～10cm、深さ5cmほどの溝状のくぼみがあり、羽口の設置位置であると推定される。鍛冶に直接関わるような遺物は羽口と鉄滓類以外は出土していないが、5552・5553は被熱痕があり、特に5553は小片であるが金属成分の付着が見られ、金床石の可能性もある。5554は金属製品で鋳の可能性が考えられる。時期は出土土器に丸底の土師器杯や須恵器杯が見られ、須恵器高台付杯も出土していることから、7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。

表2 第2号鍛冶工房跡鉄滓類出土表

グリッド	鉄滓	粒状滓	鍛造剥片	小計	グリッド	鉄滓	粒状滓	鍛造剥片	小計	グリッド	鉄滓	粒状滓	鍛造剥片	小計
A 1	0	0	0	0	E 1	0	0	0	0	I 1	0	0	0	0
A 2	0	0	0	0	E 2	0.49	0.04	0.12	0.65	I 2	0.09	0	0.24	0.33
A 3	0	0	0	0	E 3	4.96	0.3	0.21	5.47	I 3	0.18	0	0	0.18
A 4	0	0	0.01	0.01	E 4	1.86	0.06	1.24	3.16	I 4	0	0	0	0
A 5	0	0	0	0	E 5	0	0	0	0	I 5	0	0	0.02	0.02
A 6	0	0	0	0	E 6	10	1.84	0.85	12.69	I 6	0	0	0.13	0.13
A 7	0	0.02	0.11	0.13	E 7	0.08	0.04	0.08	0.2	I 7	0	0	0.04	0.04
A 8	0	0	0	0	E 8	0	0.01	0.15	0.16	I 8	0	0	0.02	0.02
A 9	0	0	0	0	E 9	2.36	0	0.63	2.99	I 9	0.89	0	0.03	0.92
A 10	0	0	0	0	E 10	0.16	0	0.07	0.23	I 10	2.18	0	0.25	2.43
A 11	0	0	0	0	E 11	0.17	0	0.05	0.22	I 11	0	0	0	0
A 12	0	0	0	0	E 12	0	0	0	0	I 12	0	0	0	0
B 1	0	0	0	0	F 1	0	0	0	0	J 1	0	0	0	0
B 2	0	0	0	0	F 2	0.51	0.21	0.19	0.91	J 2	0	0	0	0
B 3	0	0	0	0	F 3	0.51	0.03	0.22	0.76	J 3	0	0	0	0
B 4	0	0	0	0	F 4	2.68	0.04	0.36	3.08	J 4	0	0	0	0
B 5	0	0.05	0	0.05	F 5	2.46	0.01	1.68	4.15	J 5	0	0	0	0
B 6	0	0	0.14	0.14	F 6	0.13	0	0.14	0.27	J 6	0	0	0.05	0.05
B 7	0	0	0	0	F 7	1.86	0.01	0.04	1.91	J 7	0	0	0	0
B 8	0	0	0.09	0.09	F 8	0	0	0	0	J 8	0	0	0	0
B 9	0	1.18	0.04	1.22	F 9	6.15	0	0.18	6.33	J 9	0	0	0.02	0.02
B 10	0.96	0.03	0.1	1.09	F 10	2.4	0	0.05	2.45	J 10	0	0	0	0
B 11	0	0	0	0	F 11	0	0.36	0	0.36	J 11	0	0	0	0
B 12	0	0	0	0	F 12	0	0	0	0	J 12	0	0	0	0
C 1	0	0	0	0	G 1	0	0	0	0	K 1	0	0	0	0
C 2	0.7	0	0.11	0.81	G 2	0	0	0	0	K 2	0	0	0	0
C 3	19.45	0.16	3.04	22.65	G 3	0	0	0	0	K 3	0	0	0	0
C 4	1.04	0	0.12	1.16	G 4	0.58	0	0.08	0.66	K 4	0	0	0	0
C 5	0.34	0	0.71	1.05	G 5	0.33	0	0.09	0.42	K 5	0	0	0.03	0.03
C 6	0.91	0.02	0.43	1.36	G 6	0.33	0	0.11	0.44	K 6	0.02	0	0	0.02
C 7	0	0.85	0.32	1.17	G 7	0	0	0.19	0.19	K 7	0	0	0	0
C 8	0	0.27	0.01	0.28	G 8	1.1	0	0	1.1	K 8	0	0	0	0
C 9	0.72	0.02	0.06	0.8	G 9	1.72	0	0.03	1.75	K 9	0	0	0	0
C 10	0	0.73	0.03	0.76	G 10	0.4	0.01	0.03	0.44	K 10	0	0	0	0
C 11	0	0.99	0.04	1.03	G 11	0	0	0	0	K 11	0	0	0	0
C 12	0	0	0	0	G 12	0	0	0	0	K 12	0	0	0	0
D 1	0	0	0	0	H 1	0	0	0	0					
D 2	0	0.07	0	0.07	H 2	0	0	0	0					
D 3	0	0.02	0.01	0.03	H 3	0	0	0	0					
D 4	0	0.74	0.15	0.89	H 4	0	0	0	0					
D 5	22.65	0.01	0.6	23.26	H 5	0.26	0	0.08	0.34					
D 6	8.05	0	1.58	9.63	H 6	0	0	0	0					
D 7	0	0.16	0.02	0.18	H 7	0	0	0	0					
D 8	13.55	0.22	0.34	14.11	H 8	5.8	0	0.02	5.82					
D 9	10.12	0.17	0.4	10.69	H 9	0.01	0	0.03	0.04					
D 10	0.53	0	0.09	0.62	H 10	0.36	0	0.11	0.47					
D 11	0.08	0	0.16	0.24	H 11	0.42	0	0.04	0.46					
D 12	0	0	0	0	H 12	0	0	0	0					
					総計					130.55	8.67	16.61	155.83	

(単位はg)



第138図 第2号鍛冶工房跡出土遺物実測図(1)



第139図 第2号鍛冶工房跡出土遺物実測図(2)

第2号鍛冶工房跡出土遺物観察表 (第138・139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5535	土師器	坏	12.3	4.1	-	石英, 長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	南西・中央・南縁部下層	50%, PL40
5536	土師器	坏	[10.8]	2.7	-	石英, 長石	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	南西部上層	45%, 内面墨付着, PL40
5537	土師器	坏	[11.4]	(3.2)	-	長石, 赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	竈内	20%
5538	土師器	坏	[10.8]	(4.1)	-	長石, 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	5%
5539	土師器	坏	[12.7]	(3.6)	-	長石, 赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	10%
5540	土師器	坏	[11.8]	3.6	-	長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	竈内	10%
5541	土師器	坏	[11.6]	(3.3)	-	長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	10%
5542	須恵器	坏	[13.2]	5.2	-	石英, 長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	15%, 被熱痕
5543	須恵器	坏	[12.7]	(3.5)	-	長石	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%
5544	須恵器	高台付坏	[11.7]	3.5	7.8	石英, 長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	炉上面	60%, PL40
5545	須恵器	蓋	[15.8]	3.4	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	30%
5546	須恵器	蓋	-	(3.3)	-	石英, 長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	20%
5547	須恵器	蓋	-	(1.7)	-	石英, 長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%
5548	須恵器	蓋	-	(1.1)	-	長石, 白雲母	灰黄	普通	ロクロナデ	覆土中	5%
5549	須恵器	蓋	[12.6]	(2.7)	-	長石	灰オリーブ	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 内外面自然釉・炭化物付着

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5550	羽口	(15.2)	6.7	3.0	(398)	粘土	ナデ, 被熱痕, 胎土に石英・長石・植物繊維含む	炉西脇下層	PL44
5551	羽口	(6.9)	8.1	[2.9]	(150.1)	粘土	ナデ, 被熱痕, 胎土に石英・長石・植物繊維含む	覆土中	PL44

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5552	金床石カ	9.2	11.0	14.5	1460	砂岩	被熱痕	P 7 内	PL47
5553	金床石カ	6.3	6.0	2.8	70.8	砂岩	被熱痕, 炭化物・金属付着	炉東脇下層	PL47
5602	釘	(4.9)	(0.35)	0.5	(2.26)	鉄	両端を欠く	第7層中	
5554	鏝カ	(4.1)	(8.6)	0.7	(21.5)	鉄	両端を欠く	炉南東脇下層	
5603	不明	(3.6)	2.8	0.7	(7.6)	鉄	先端一部を欠く	第7層中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5555	鉄滓	10.9	5.9	2.4	185.3	表面茶褐色，地黒褐色	覆土中	
5556	椀状滓	15.5	11.5	11.4	596	着磁，表面茶褐色，地黒褐色，一部青灰色	炉1中心部	PL48
5557	椀状滓	10.6	7.8	3.3	277	着磁，表面茶褐色，地黒褐色	覆土中	

(4) 土坑

第1713号土坑（第140図）

位置 調査区東部のF11j0区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状 径134cm，深さ56cmの円形である。底面は凹凸があり，壁は外傾して立ち上がっている。

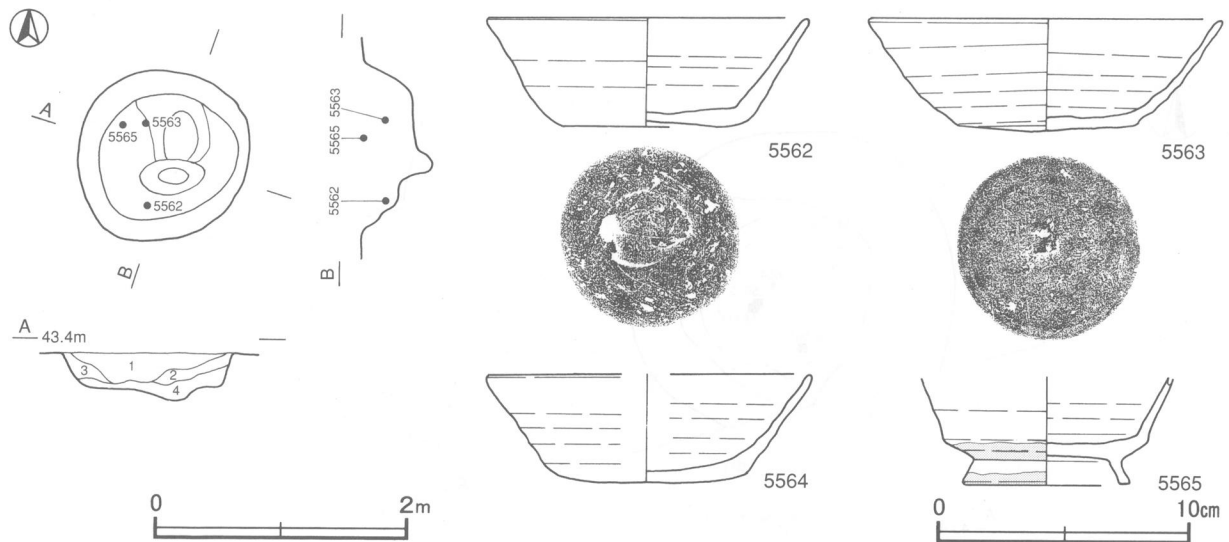
覆土 4層に分層される。ロームブロックや焼土・炭化物を含み，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
- 2 黒色 ロームブロック少量，鹿沼バミス微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量，鹿沼バミス微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量，鹿沼バミス微量

遺物出土状況 土師器片4点(坏1，甕3)，須恵器片5点(坏2，高台付坏1，甕2)が出土している。5562・5563は覆土中層から，5565は覆土上層から出土している。5564は覆土中からの出土である。

所見 性格は不明であるが，時期は出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第140図 第1713号土坑・出土遺物実測図

第1713号土坑出土遺物観察表（第140図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5562	須恵器	坏	12.7	4.3	6.8	小礫，石英，長石，黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中層	95%，PL40
5563	須恵器	坏	14.0	4.5	7.0	小礫，長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中層	90%，PL40
5564	須恵器	坏	[13.0]	4.4	[7.8]	石英，長石	黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	30%
5565	須恵器	高台付坏	-	(4.3)	6.6	小礫，長石，黒色粒子	灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土上層	80%，外面一部自然釉，PL40

(5) 井戸跡

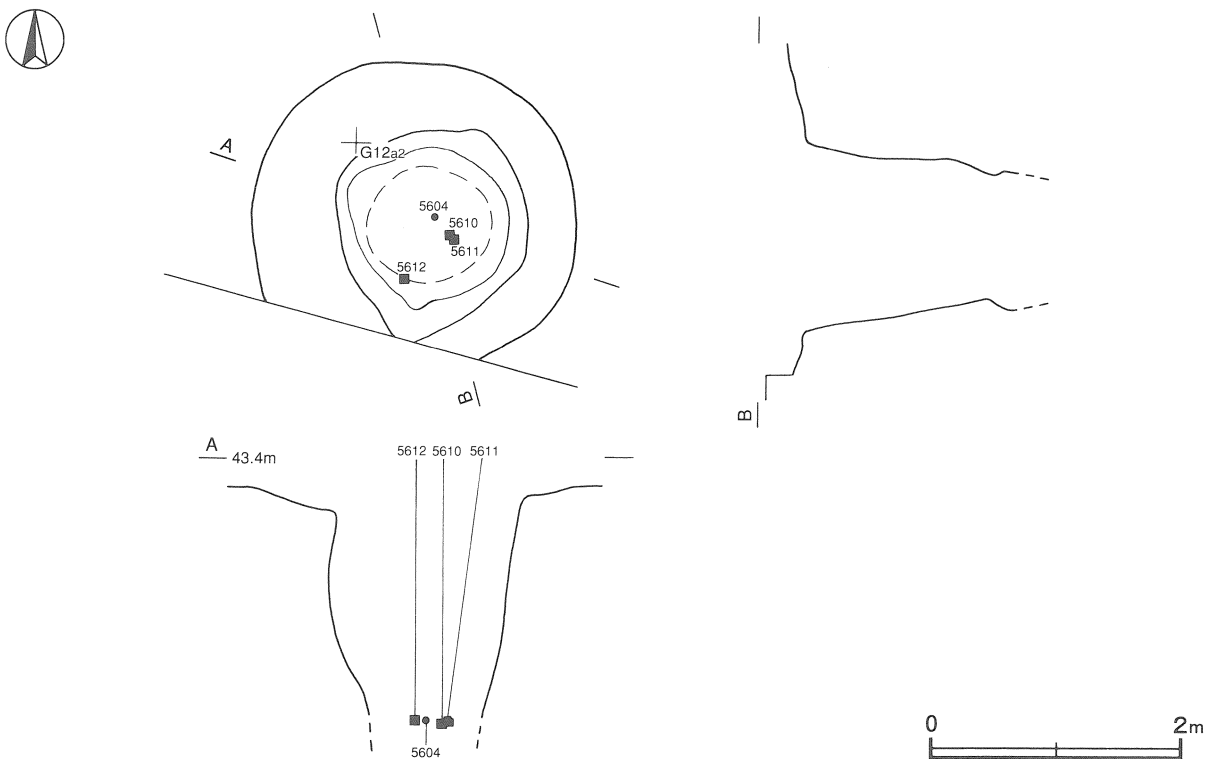
第60号井戸跡 (第141・142図)

位置 調査区東部のG12a2区に位置し、平坦部に立地している。

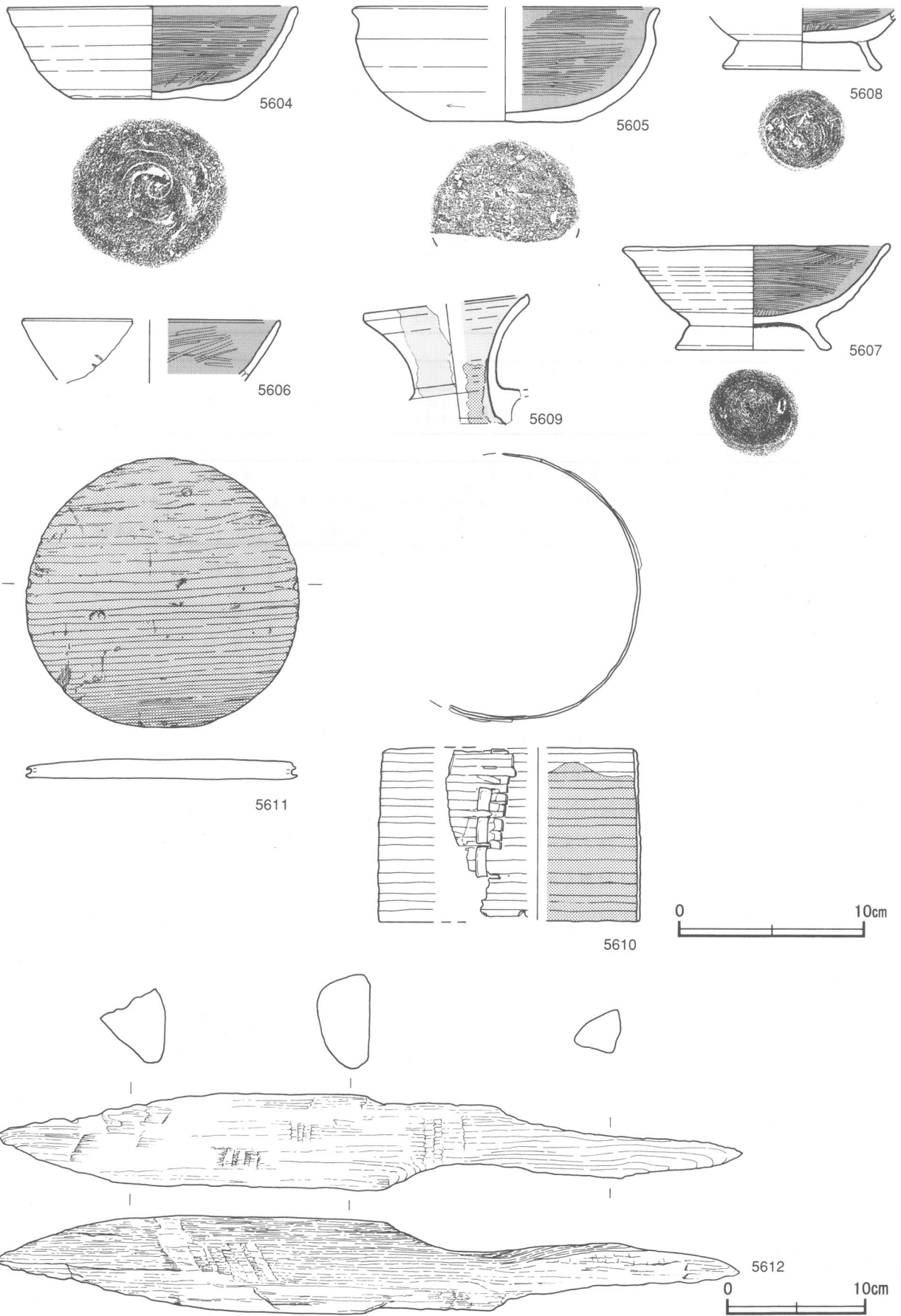
規模と形状 径約2.6mの円形で、深さは遺構確認面から約2.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上端部が開いている。

遺物出土状況 土師器片115点 (坏26, 碗11, 甕78), 須恵器片25点 (坏10, 甕15), 灰釉陶器片2点 (皿1, 平瓶1), 木製品3点 (曲物側板1, 曲物底板1, 不明1), 木片が地下水面付近に集中して出土し、図示した遺物中では5604・5607・5610～5612がそれにあたる。

所見 地下水面付近に多数の遺物が集中して出土している。木片が出土しているが、ほとんどのものは加工痕が見られず、井戸枠や製品とは考えられない。一点のみ加工痕の見られる5612が出土しているが、性格は不明である。5607は高台圏内に墨と朱墨の痕が見られ、硯に転用したものと考えられる。5609は内面に漆が多量に付着しており、漆の貯蔵具として使用していたと考えられる。5610・5611は同一個体の側板と底板と思われる、樹種は榊吉田生物研究所に分析調査を依頼した結果、側板・底板ともにマツ科モミ属と同定された。同属にはトドマツ、モミ、シラベがあり、類例から判断するとモミであろう。側板を留める綴じ皮は桜皮と推測される。底板の側面に木釘が4本見られることから、底板固定法はクレゾコ木釘留と考えられる。5610・5611ともに内面に漆が付着しており、貯蔵具に使用していたと考えられる。時期は須恵器が出土し、土師器碗を伴うものの土師器小皿が見られないことから、10世紀前葉には廃絶していたものと考えられる。



第141図 第60号井戸跡実測図



第142図 第60号井戸跡出土遺物実測図

第60号井戸跡出土遺物観察表 (第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5604	土師器	坏	15.6	5.0	7.9	石英, 長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラミガキ	地下水面付近	95%, PL40
5605	土師器	坏	[16.5]	6.2	7.9	石英, 長石	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ, 底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	50%, PL40
5606	土師器	坏	[14.0]	(3.4)	-	石英, 長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 体部外面墨書「□」
5607	土師器	椀	14.1	5.8	8.0	石英, 長石	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	地下水面付近	90%, 高台圈内墨・朱墨痕, 観転用, PL40
5608	土師器	椀	-	(3.3)	8.6	石英, 長石, 黒雲母	褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面放射状ヘラミガキ	覆土中	30%
5609	灰釉陶器	平瓶	[8.8]	(6.9)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 赤みの明るい灰黄	良好	ロクロナデ, 灰釉流し掛けカ	覆土中	10%, 内面漆付着, 炭投産, PL41

番号	器種	径	高さ	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5610	曲物側板	14.6	9.4	0.2	(49.4)	マツ科モミ属	桜皮綴じ, 合わせ部付近内面にケビキ線, 内面に漆付着	地下水面付近	3片に分離, PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5611	曲物底板	14.7	14.6	1.2	141.6	マツ科モミ属	側面に木釘4本, 片面に漆付着	地下水面付近	PL48
5612	不明	53.4	7.0	4.5	620	木(樹種不明)	表裏に幅6~7mmの鑿状工具痕	地下水面付近	

(6) 溝跡

第37号溝跡 (第143図)

位置 調査区東部のF12e1区からF12i2区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第613・616~618号住居と第1770号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 F12i2区から北方向(N-1°-W)へ直線的に延び, 確認された長さは約15mである。規模は上幅65~80cm, 下幅50~60cm, 深さ8~10cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層されるが, 覆土は薄く堆積状況は不明である。

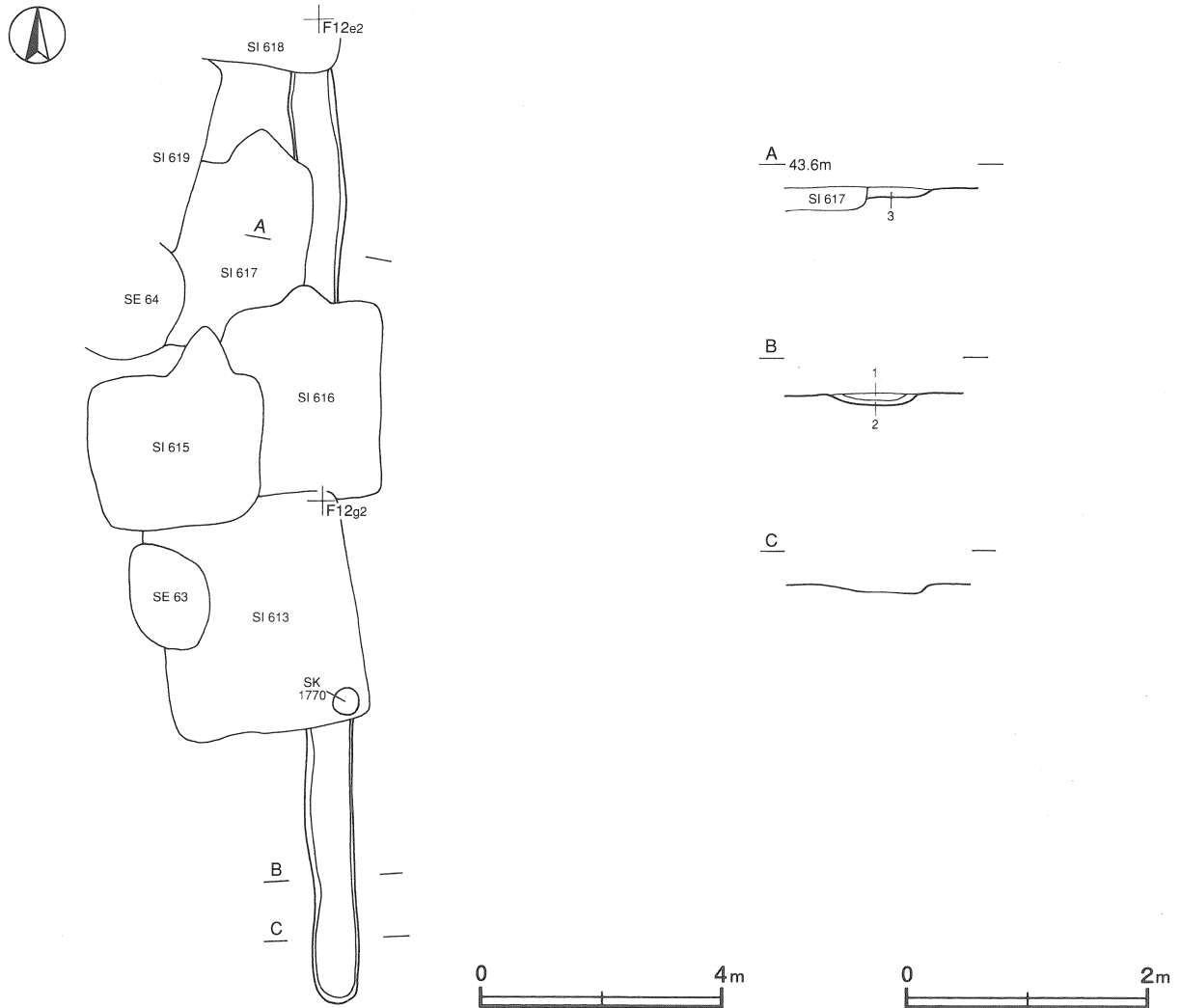
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子中量

- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点(坏2, 甕15), 須恵器片1点(坏)が出土しているが, いずれも細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 ほぼ南北方向に伸びており, 境界溝としての性格を持つものと考えられる。時期を判断できるような良好な遺物が出土していないが, 8世紀中葉と考えられる第617号住居に掘り込まれていることから, 時期はそれ以前と考えられる。



第143図 第37号溝跡実測図

3 その他の遺構と遺物

奈良・平安時代以降の時代の遺構と遺物と、時期不明の遺構と遺物について記述する。なお、平成13年度の調査で一部が報告されている遺構については『辰海道遺跡1』から実測図を一部転載し、今回調査した部分と併せて報告する。

(1) 土坑

今回の調査で283基の土坑を確認した。以下、遺構や遺物に特徴のある19基について記述する。その他のものは一覧表で掲載する。

第1646号土坑（第144図）

位置 調査区東部のF11c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第621号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径46cm、短径32cmの楕円形で、深さは40cm、長軸方向はN-0°である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや焼土を含み、人為堆積と考えられる。

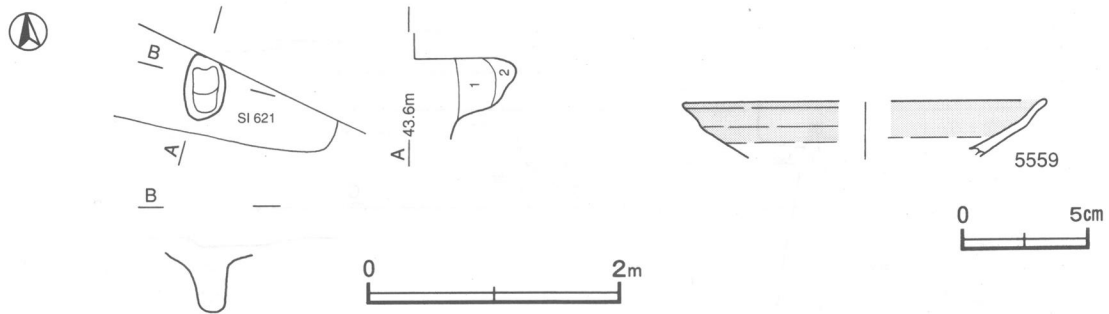
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック少量、粘性強

遺物出土状況 土師器片2点(坏1, 甕1), 灰釉陶器片1点(折縁皿)が出土している。5559は覆土中から出土している。

所見 10世紀以降と考えられる第621号住居跡を掘り込んでいることから、時期はそれ以降と考えられる。出土した5559は10世紀代の灰釉陶器折縁皿で、第621号住居跡から流れ込んだものであると推定される。



第144図 第1646号土坑・出土遺物実測図

第1646号土坑出土遺物観察表 (第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5559	灰釉陶器	折縁皿	[14.5]	(2.3)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰オリーブ	良好	ロクロナデ, 灰釉漬け掛け	覆土中	5%, 猿投産折戸 53号窯式, PL41

第1656号土坑 (第145図)

位置 調査区東部のF12i4区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長径98cm, 短径82cmの楕円形で、深さは15cm, 長軸方向はN-56°-Wである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

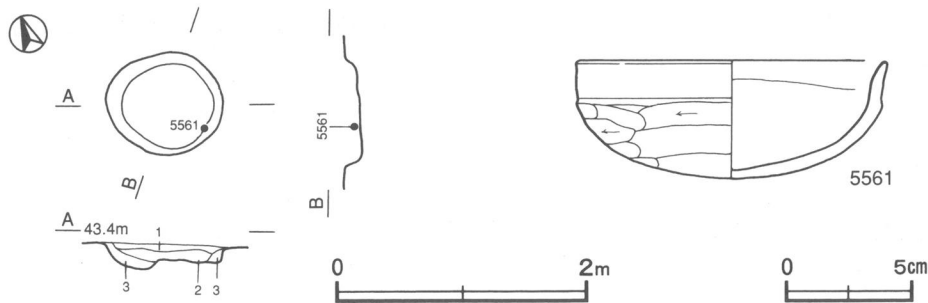
覆土 3層に分層される。焼土や炭化物を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量, 締り強

2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量, 締り強

3 褐色 ローム粒子中量, 締り強



第145図 第1656号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片11点（坏7，甕4）が出土している。5561は南側の覆土下層から出土している。
所見 性格は不明であるが，時期は出土土器から6世紀以降と考えられる。

第1656号土坑出土遺物観察表（第145図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5561	土師器	坏	12.3	4.7	-	石英,長石, 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ,内面ナ デ	南側下層	90%,PL41

第1717号土坑（第146図）

位置 調査区東部のF11b5区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状 西半分が調査区域外にあるため全容は不明であるが，径約110cmの円形と推測される。深さは38cmである。底面はほぼ平坦で，壁はやや外傾して立ち上がっている。

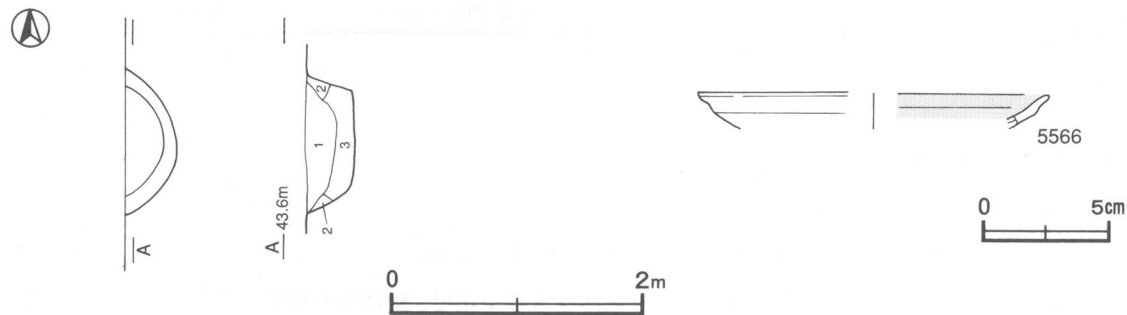
覆土 3層に分層される。焼土・炭化物を含み，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量，締り弱
 2 黒褐色 ロームブロック少量，締り弱
 3 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量，締り弱

遺物出土状況 土師器片1点（甕），須恵器片1点（甕），灰釉陶器片1点（皿）が出土している。5566は覆土中からの出土である。

所見 性格は不明であるが，時期は出土土器から9世紀以降と考えられる。



第146図 第1717号土坑・出土遺物実測図

第1717号土坑出土遺物観察表（第146図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5566	灰釉陶器	皿	[14.0]	(1.4)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰オリーブ	良好	灰釉刷毛塗り	覆土中	5%,内面自然釉, 猿投産黒笹14号 窯式カ,PL41

第1745号土坑（第147図）

位置 調査区東部のF11g6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第635号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径50cmの円形で，深さは21cmである。底面は皿状で，壁はやや外傾して立ち上がっている。

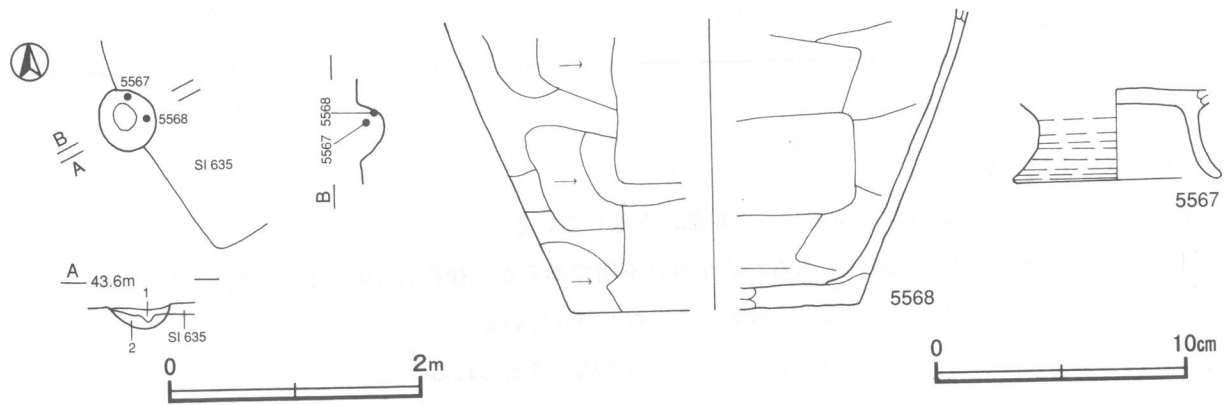
覆土 2層に分層されるが，覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片2点(坏1, 椀1), 須恵器片11点(坏1, 高台付坏1, 甕9)が出土している。5567・5568は東側の覆土中層から出土している。

所見 10世紀後葉と考えられる第635号住居跡を掘り込んでおり, 時期はそれ以降と考えられる。出土した5567・5568は10世紀代の土器で, 第635号住居跡から流れ込んだものであると考えられる。



第147図 第1745号土坑・出土遺物実測図

第1745号土坑出土遺物観察表 (第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5567	土師器	椀	-	(3.7)	[8.4]	長石, 金雲母, 赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中層	30%
5568	土師器	甕	-	(11.7)	[11.4]	小礫, 石英, 長石	褐	普通	内面ヘラナデ	覆土中層	10%

第1802号土坑 (第148図)

位置 調査区南部のK12c1区に位置し, 平坦部に立地している。

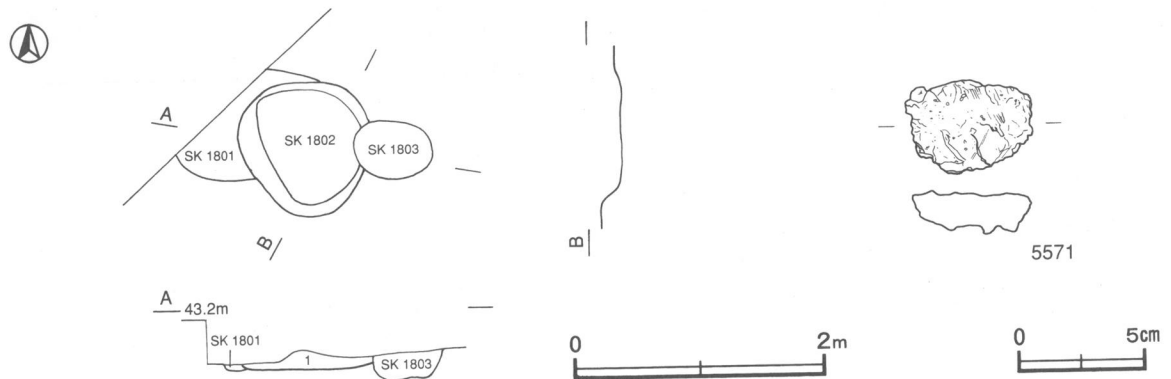
重複関係 第1801号土坑を掘り込み, 第1803号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径約90cmの円形で, 深さは15cmである。底面はほぼ平坦で, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層で覆土は薄く, 堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量



第148図 第1802号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片5点(坏3, 甕2), 鉄滓1点が出土しているが, 細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5571は覆土中から出土している。

所見 時期を判断できる遺物は出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。

第1802号土坑出土遺物観察表 (第148図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5571	鉄滓	3.7	5.0	1.8	26.0	表面茶褐色, 内面黒褐色, 炭化物付着	覆土中	

第1813号土坑 (第149図)

位置 調査区南部のK12c2区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 径約30cmの円形で, 深さは24cmである。底面は皿状で, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

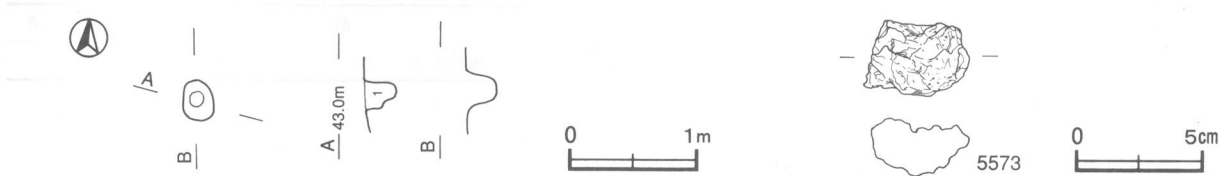
覆土 単一層で堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片3点(甕), 鉄滓1点が出土しているが, 細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5573は覆土中から出土している。

所見 時期を判断できる遺物は出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



第149図 第1813号土坑・出土遺物実測図

第1813号土坑出土遺物観察表 (第149図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5573	鉄滓	3.0	4.1	2.2	27.9	着磁, 表面茶褐色, 内面黒褐色	覆土中	

第1819号土坑 (第150図)

位置 調査区南部のK12b4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第430号住居跡・第1818号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸110cm, 短軸96cmの隅丸長方形で, 深さは38cm, 長軸方向はN-24°-Eである。底面は北から南に向かって傾斜しており, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックを多く含み, 人為堆積と考えられる。底面に炭化材が見られる。

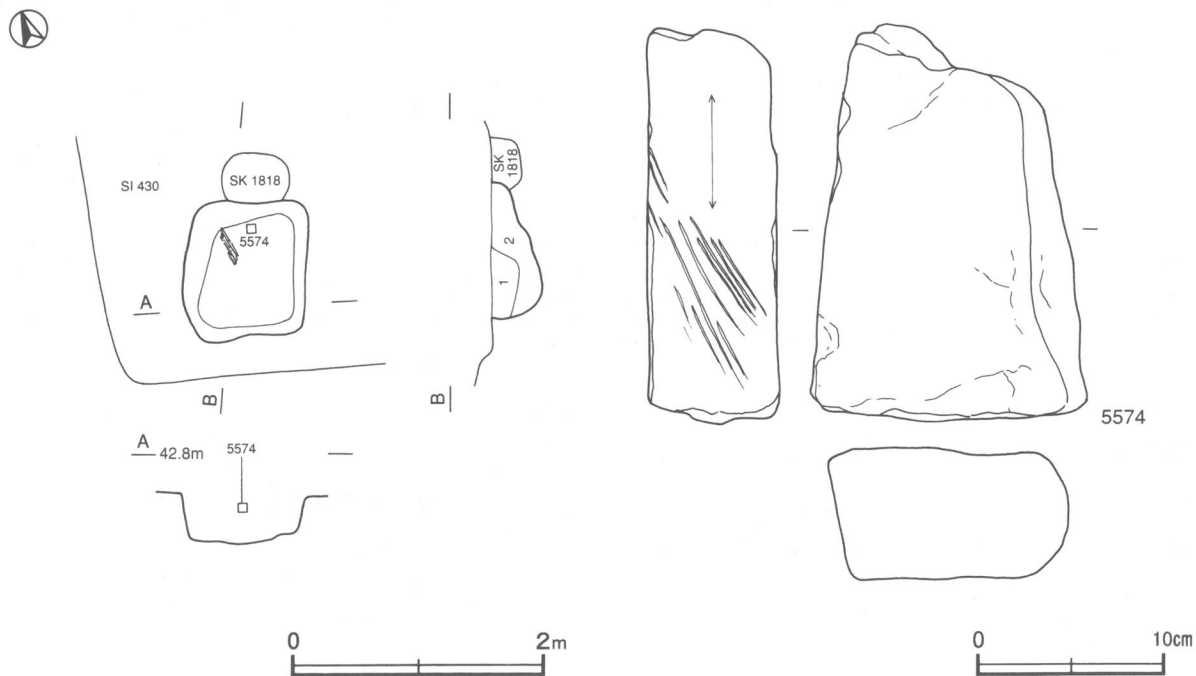
土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片6点(坏1, 甕5), 石器1点(砥石)が出土しているが, 細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5574は北側の覆土中層から出土している。

所見 時期を判断できる遺物は出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



第150図 第1819号土坑・出土遺物実測図

第1819号土坑出土遺物観察表 (第150図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5574	砥石	21.2	14.7	7.0	3140	砂岩	砥面1面, 溝状の擦痕8本	覆土中層	

第1821号土坑 (第151図)

位置 調査区南部のK12c2区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 径約100cmの不整円形で、深さは24cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

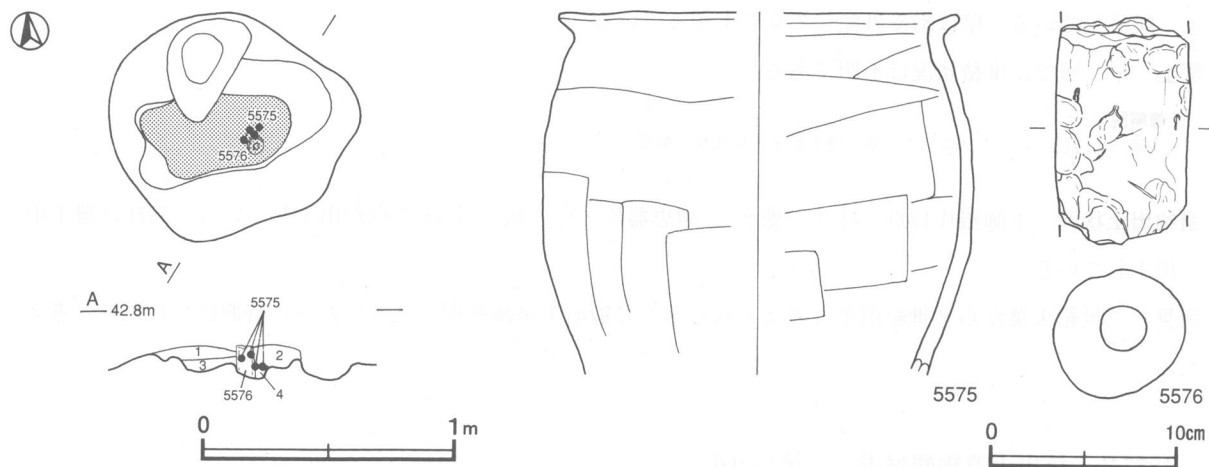
覆土 4層に分層される。焼土や炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。また、底面が被熱し、赤変しているが、強く焼け締まっではない。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 におい赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片36点(坏2, 甕34), 須恵器片2点(蓋1, 甕1), 土製品1点(羽口)が出土している。5576は中央やや東寄りの底面から直立した状態で出土し, 5575はその周囲から出土した破片が接合したものである。須恵器片は細片で破断面が摩滅しており, 流れ込みと考えられる。

所見 底面が被熱し, 赤変している。中央やや東寄りの底面から羽口が直立した状態で出土しているが, 赤変した部分は強く焼け締まっはならず, 鉄滓類も出土していないことから, 鍛冶関連の遺構とは考えられない。形状から, 竪穴住居跡の竈の火床面であった可能性も考えられるが, 周囲に遺構覆土や硬化面, 竈の袖部材, 粘土などが検出されていないことから, 竪穴住居跡ではなく掘り込みの浅い(あるいはない)平地式の建物跡の炉である可能性が考えられる。その場合, 出土した羽口は支脚に転用されたものと推測される。第664号住居跡では竈の火床面奥から羽口が2点, 同様な状態で出土しており, それらも支脚として使用された可能性があり, 本跡との関連性がうかがえる。時期は出土土器から10世紀以降と考えられる。



第151図 第1821号土坑・出土遺物実測図

第1821号土坑出土遺物観察表 (第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5575	土師器	甕	[20.7]	(19.4)	-	石英, 長石, 金雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	覆土中層	15%

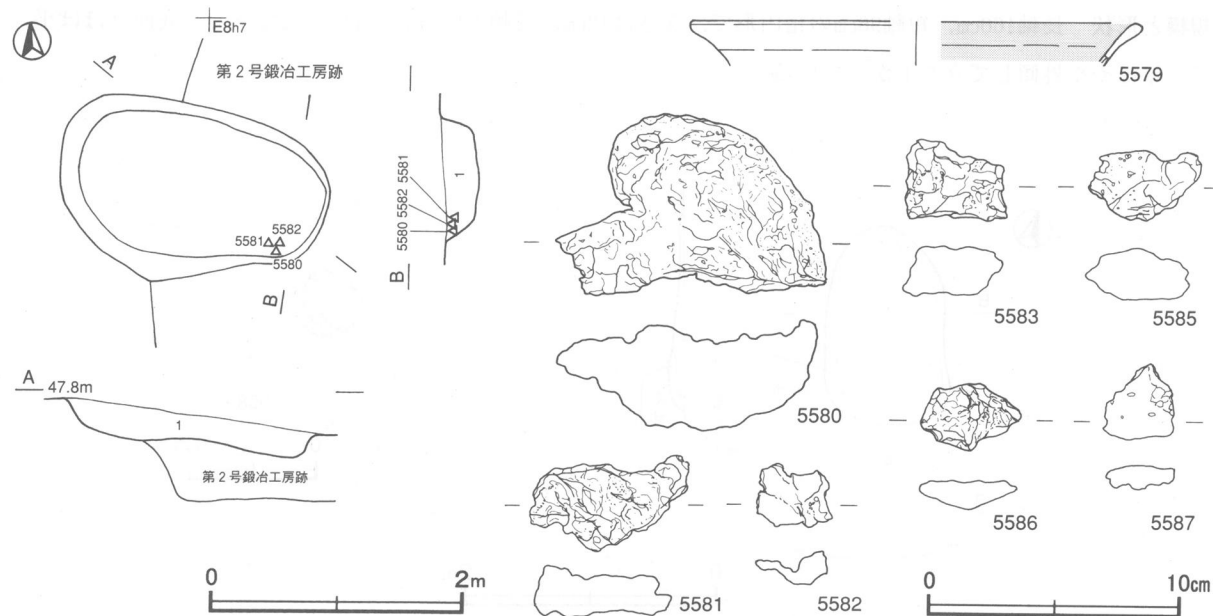
番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5576	羽口	(13.2)	7.5	2.5	(608)	粘土	ナデ, 指頭圧痕, 胎土に石英・長石含む	中央部底面	PL44

第1877号土坑 (第152図)

位置 調査区中央部のE 8 h7 区に位置し, 西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2号鍛冶工房跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径218cm, 短径138cmの楕円形で, 深さは28cm, 長軸方向はN-80°-Wである。底面は皿状で



第152図 第1877号土坑・出土遺物実測図

東へ傾斜している。壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片12点（坏3，甕9），須恵器片1点（瓶），鉄滓7点が出土している。5579は覆土中から出土している。

所見 7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる第2号鍛冶工房跡を掘り込んでおり、時期はそれ以降と考えられる。

第1877号土坑出土遺物観察表（第152図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5579	須恵器	瓶	[17.7]	(1.8)	-	緻密、黒色粒子	黄灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5%、内面自然釉、猿投窯産カ

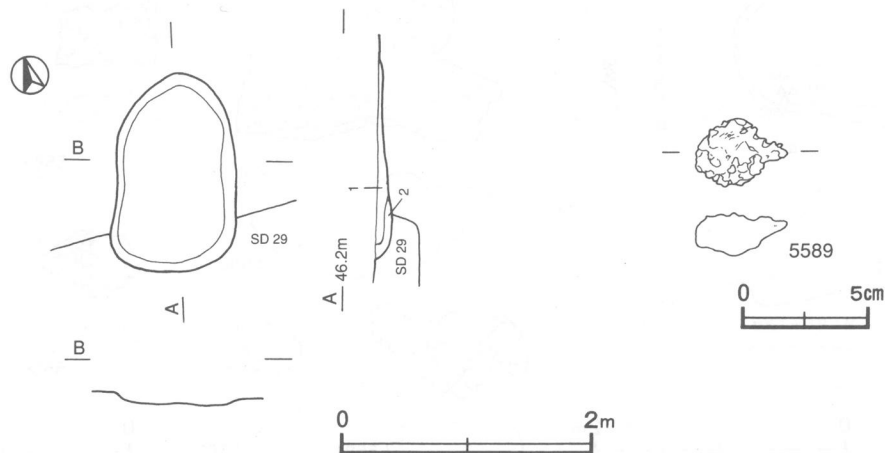
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5580	椀状滓	7.2	10.8	4.5	332	着磁、表面茶褐色、内面暗褐色、底面に炉壁附着	南東部上層	
5581	鉄滓	3.7	6.4	2.2	47.7	着磁、表面茶褐色、内面暗褐色	南東部上層	
5582	鉄滓	2.5	3.0	1.3	5.9	表面・内面茶褐色	南東部上層	
5583	鉄滓	4.0	3.2	2.0	41.5	表面茶褐色、内面暗褐色	覆土中	
5585	鉄滓	4.5	2.8	2.0	17.0	表面茶褐色、内面暗褐色	覆土中	
5586	鉄滓	2.8	4.0	1.3	8.3	黒褐色、炉壁附着	覆土中	
5587	鉄滓	2.8	3.1	1.0	6.5	黒褐色、炉壁附着	覆土中	

第1879号土坑（第153図）

位置 調査区中央部のE8b0区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第29号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸160cm、短軸96cmの楕円形で、深さは12cm、長軸方向はN-11°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。



第153図 第1879号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 明褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片2点(坏1, 碗1), 鉄滓1点が出土しているが, 細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5589は覆土中から出土している。

所見 時期を判断できる遺物は出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。

第1879号土坑出土遺物観察表 (第153図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5589	鉄滓	2.8	3.6	1.8	18.5	着磁, 暗赤褐色	覆土中	

第1903号土坑 (第154図)

位置 調査区中央部のE 8 c 0 区に位置し, 西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第1905・1906号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸150cm, 短軸88cmの長方形で, 深さは48cm, 長軸方向はN-83°-Wである。底面はほぼ平坦で, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

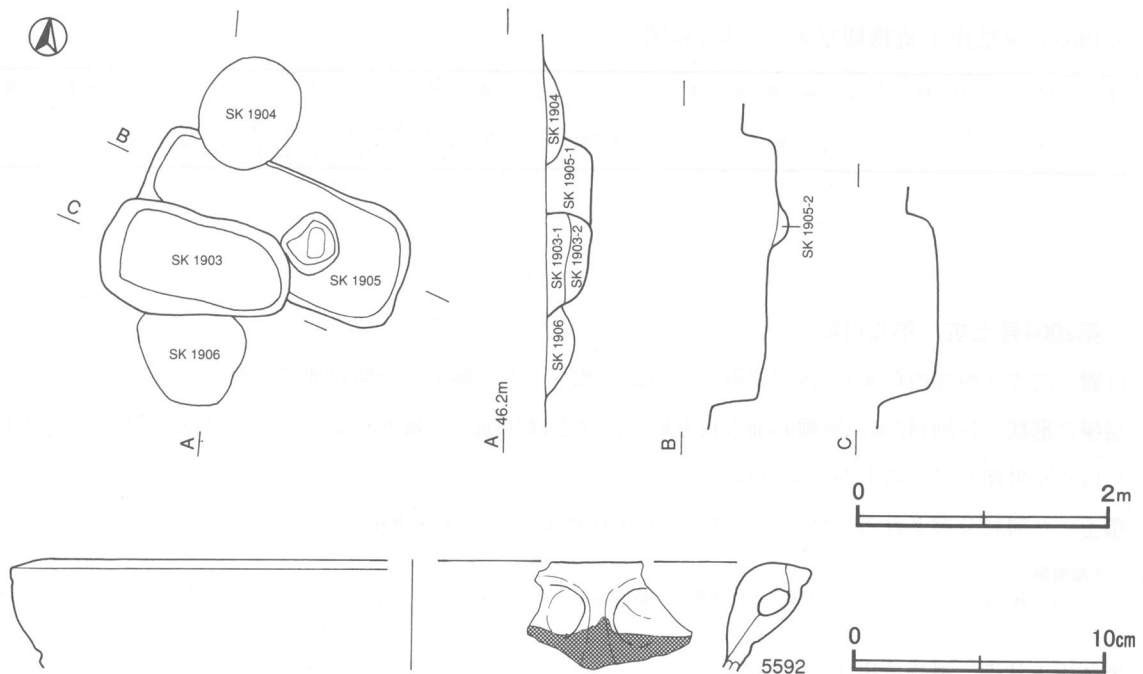
覆土 2層に分層される。ロームブロックを多く含み, 人為堆積と考えられる。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片8点(坏5, 碗1, 甕2), 須恵器片1点(甕), 土師質土器片1点(内耳鍋)が出土しているが, 細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5592は覆土中から出土している。



第154図 第1903・1905号土坑, 第1903号土坑出土遺物実測図

所見 遺構の形状および出土土器から、中世以降の墓坑と考えられる。

第1903号土坑出土遺物観察表 (第154図)

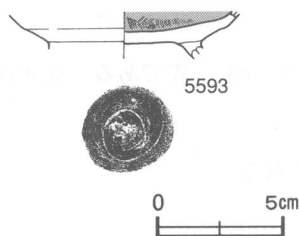
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5592	土師質土器	内耳鍋	[32.0]	(4.4)	-	石英,長石,金雲母	明赤褐	普通	耳部貼り付け	覆土中	5%,内面炭化物付着

第1905号土坑 (第154・155図)

位置 調査区中央部のE8c0区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第1903・1904号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸210cm,短軸94cmの長方形で、深さは44cm,長軸方向はN-63°-Wである。底面はほぼ平坦で中央にくぼみがある。壁はやや外傾して立ち上がっている。



覆土 2層に分層される。ロームブロックを多く含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック中量,鹿沼バミス微量
- 2 にぶい褐色 ローム粒子多量,縮り弱

遺物出土状況 土師器片4点(坏1,碗2,甕1),須恵器片1点(甕)が出土しているが、細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5593は覆土中から出土している。

第155図 第1905号土坑出土遺物実測図

所見 時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状から中世以降の墓坑と考えられる。

第1905号土坑出土遺物観察表 (第155図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5593	土師器	碗	-	(1.9)	-	長石,金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け,底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	10%

第2004号土坑 (第156図)

位置 調査区西部のC4f7区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 長軸147cm,短軸95cmの長方形で、深さは50cm,長軸方向はN-0°である。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

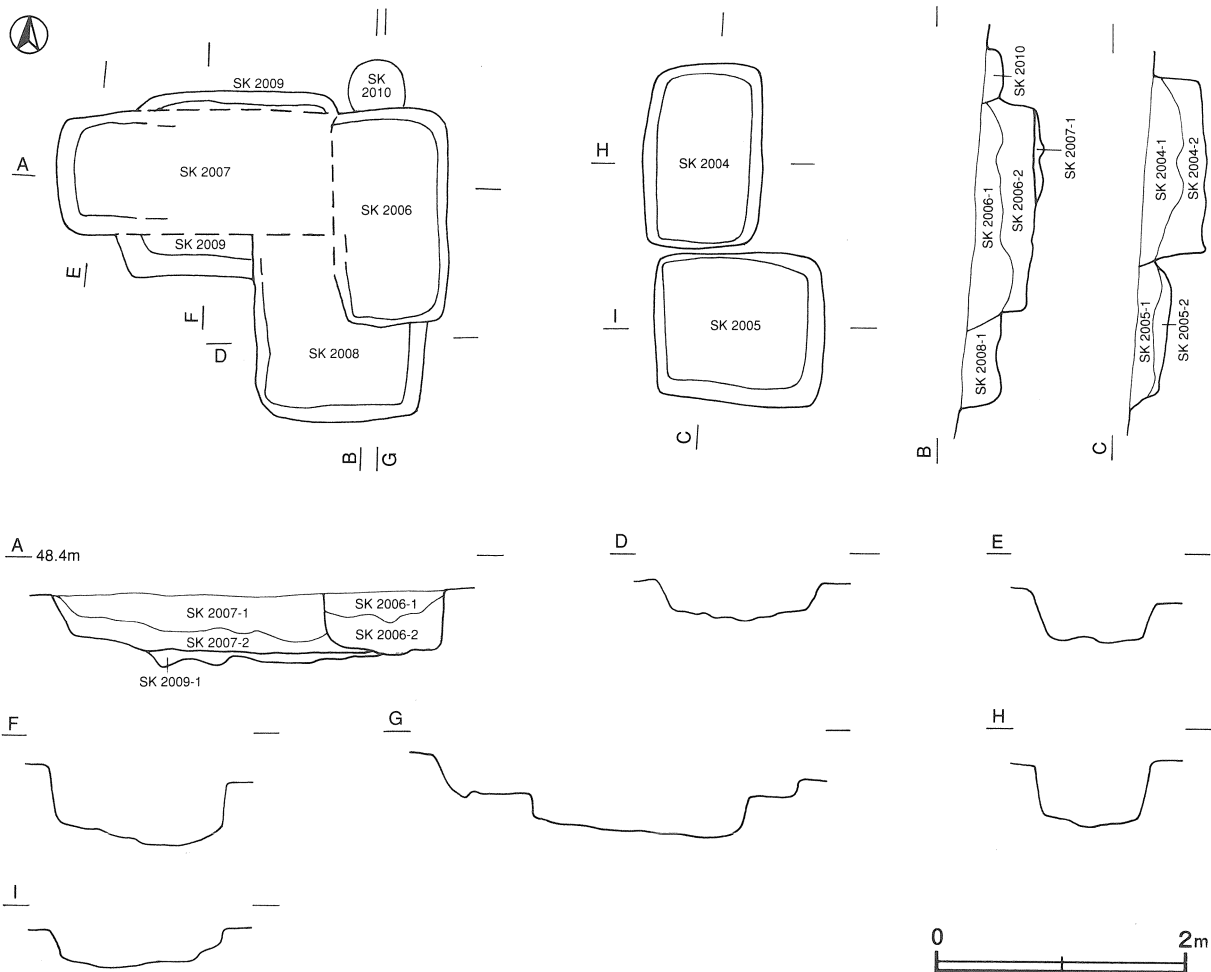
覆土 2層に分層される。ロームブロックや炭化物を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量,炭化物微量,粘性弱
- 2 黒褐色 ロームブロック少量,炭化物微量,縮り弱

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。



第156図 第2004～2009号土坑実測図

第2005号土坑（第156図）

位置 調査区西部のC 4 g7 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 長軸135cm、短軸119cmの長方形で、深さは30cm、長軸方向はN-90°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや炭化物を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量、粘性弱 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量、粘性弱

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。

第2006号土坑（第156図）

位置 調査区西部のC 4 f7 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2007・2008・2009号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸171cm、短軸90cmの長方形で、深さは42cm、長軸方向はN-0°である。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや炭化物を含み、人為堆積と考えられる。底面には、薄く炭化物が堆積している。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量、粘性・締り弱
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量、粘性弱、締り極めて弱

遺物出土状況 土師器片2点（甕）、陶器片1点（碗）、縄文土器片1点が出土している。陶器片は近世のものである。

所見 出土遺物及び遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。

第2007号土坑（第156図）

位置 調査区西部のC4f6区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2008・2009号土坑を掘り込み、第2006号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は135cmで、東西長は東側が第2006号土坑に掘り込まれているため、220cmのみ確認された。平面形は長方形と推測され、長軸方向はN-90°-Eで、深さは45cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。底面には薄く、炭化物が堆積している。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、粘性弱
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、粘性・締り弱

遺物出土状況 土師器片3点（甕）が出土しているが、細片で破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

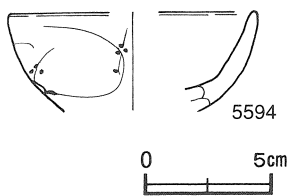
所見 遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。

第2008号土坑（第156・157図）

位置 調査区西部のC4g7区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2009号土坑を掘り込み、第2006・2007号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は135cmで、南北長は北側が第2006・2007号土坑に掘り込まれているため、120cmのみ確認された。平面形は方形もしくは長方形と推測され、長軸方向はN-0°で、深さは35cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。



覆土 単一層であるが、ロームブロックや炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。底面には薄く、炭化物が堆積している。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量、締り極めて弱

遺物出土状況 磁器片1点（碗）が覆土中から出土している。

所見 出土遺物および遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。

第157図 第2008号土坑
出土遺物実測図

第2008号土坑出土遺物観察表（第157図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5594	磁器	碗	[9.8]	(3.9)	-	緻密	灰白、明オリープ灰	普通	染付（梅樹文）	覆土中	20%、肥前産（くらわんか手）、18c

第2009号土坑（第156図）

位置 調査区西部のC 4 f 6 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2006・2007・2008号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は150cmで、東西長は東側が第2006号土坑に掘り込まれているため、170cmのみ確認された。平面形は長方形と推測され、長軸方向はN-90°-Eで、深さは55cmである。底面は凹凸があり、壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層であるが、ロームブロックや炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。底面には、薄く炭化物が堆積している。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、締り弱

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺構の形状から、近世以降の墓坑と考えられる。

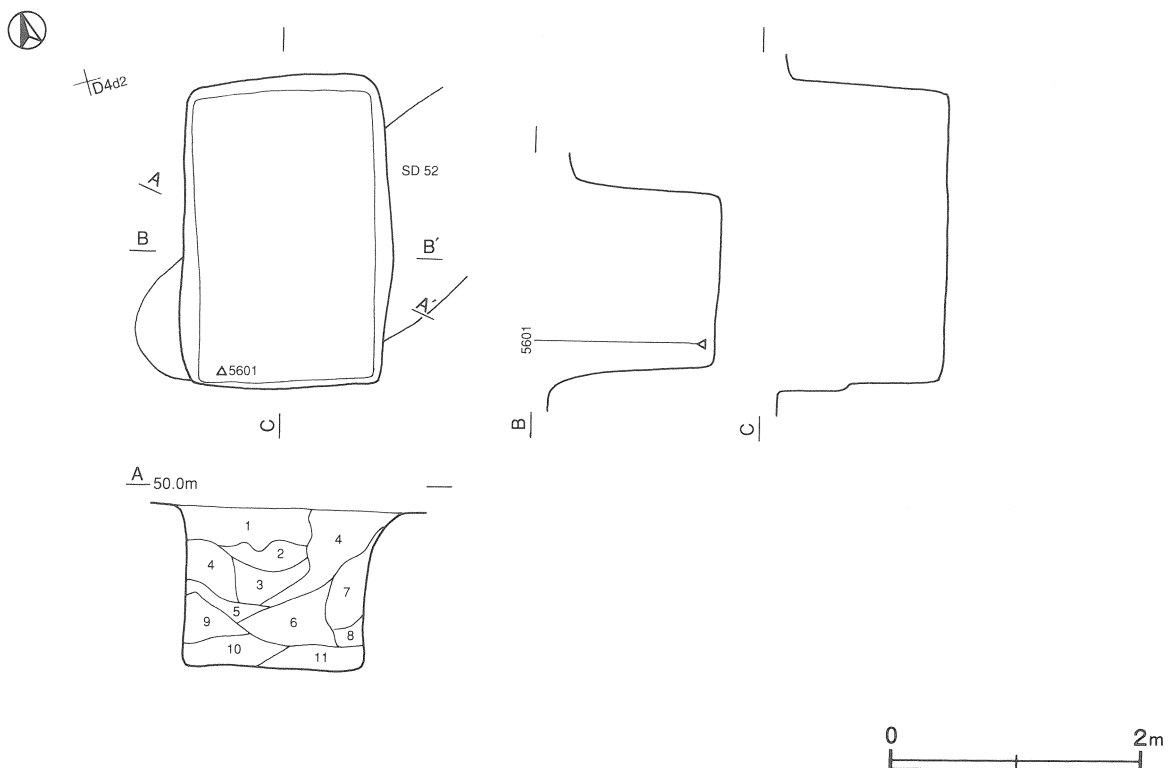
第2045号土坑（第158・159図）

位置 調査区西部のD4d2区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第52号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸250cm、短軸165cmの長方形で、深さは132cm、長軸方向はN-15°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 11層に分層される。ブロック状に堆積し、人為堆積と考えられる。



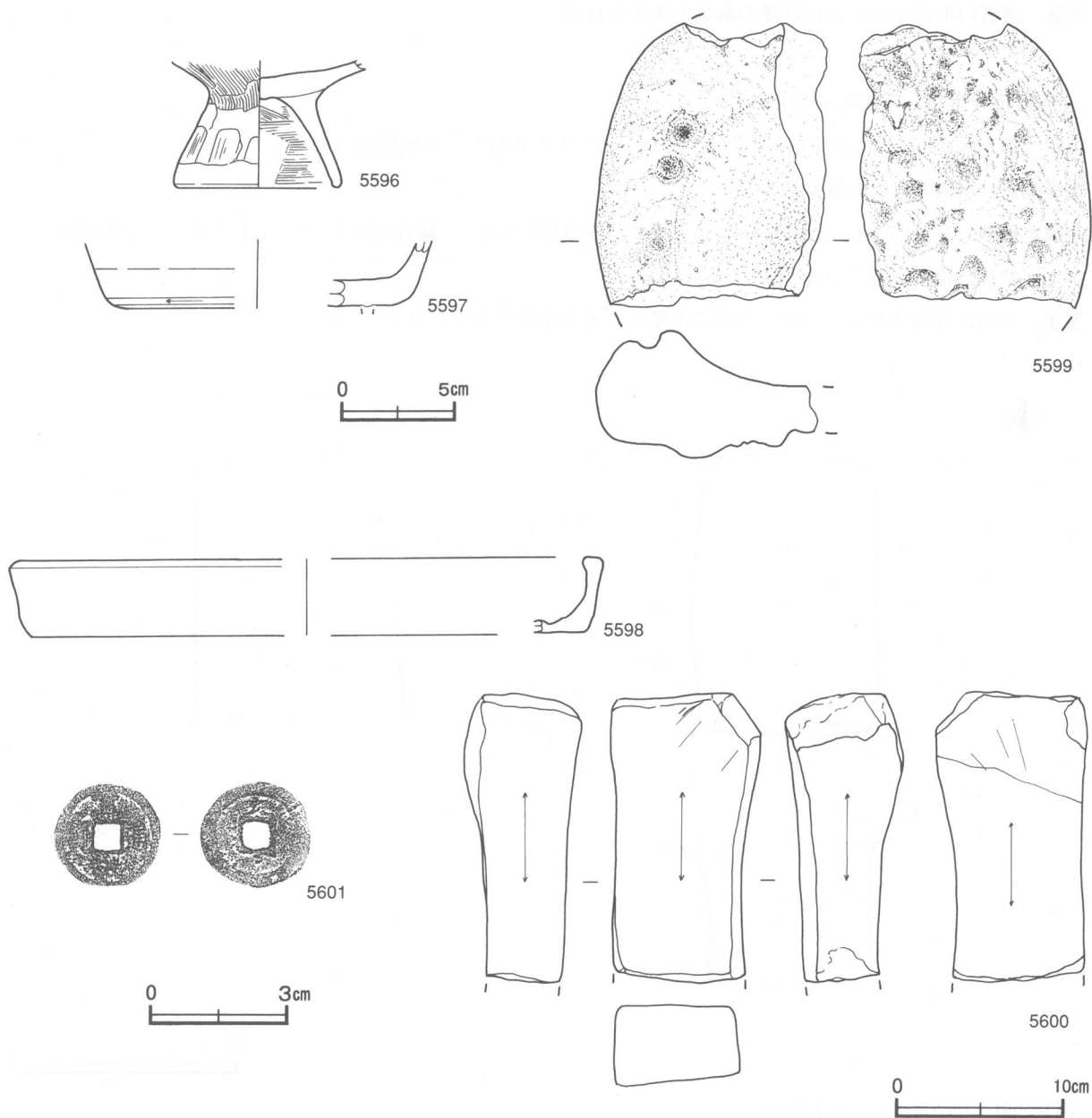
第158図 第2045号土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック微量 | 8 橙色 | 鹿沼バミス中量, ローム粒子少量, 締り弱 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子中量, 締り弱 | 11 黒褐色 | ローム粒子微量, 締り弱 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 締り弱 | | |

遺物出土状況 土師器片19点(坏5, 台付甕1, 甕13), 須恵器片8点(高台付坏1, 甕7), 瓦質土器6点(焙烙), 陶器片11点(碗5, 皿6), 縄文土器片5点, 石器4点(砥石1, 石皿1, 剥片2), 古銭1点が出土している。ほとんどの遺物は覆土の上層から中層にかけて出土している。

所見 多数の遺物が出土しているが, 出土状況からほとんどは遺構に伴うものではなく, 流れ込みによるものと考えられる。最も新しい遺物が近世末期のものであるため, 時期はそれ以降であると考えられ, 形状と堆積状況から遺構の廃絶時にごみ穴として使用されたものと考えられる。



第159図 第2045号土坑出土遺物実測図

第2045号土坑出土遺物観察表 (第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5596	土師器	台付甕	-	(5.7)	7.6	石英, 長石	にぶい赤褐	普通	外面・台部内面ハケ目調整, 台部端部横ナデ	覆土中	10%
5597	須恵器	高台付坏	-	(3.1)	-	石英, 長石, 黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%
5598	瓦質土器	焙烙	[33.0]	4.6	[32.6]	長石, 金雲母	褐灰	普通	耳部貼り付け(剥離), 底部砂目痕	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5599	石皿	(13.8)	(17.0)	7.7	(1580)	安山岩	内面摩滅, 表裏にくぼみ	覆土中	PL47
5600	砥石	(17.4)	8.9	6.5	(1400)	砂岩	砥面4面	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5601	寛永通寶	2.5	0.6	0.11	2.3	銅	背面(上)「文」	南西部下層	新寛永, 初铸年寛文8年(1668), PL48

(2) 井戸跡

第61号井戸跡 (第160図)

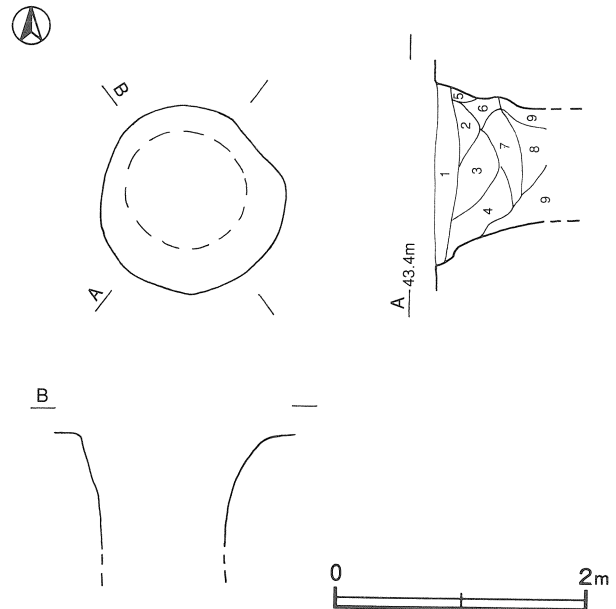
位置 調査区東部のF12j1区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.5m, 短径1.4mの円形で, 深さは遺構確認面から約0.9m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。

覆土 9層に分層される。層内にロームブロック・焼土・炭化物を含み, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量, 締り弱
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量, 締り弱
- 3 黒色 ロームブロック微量, 締り弱
- 4 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量, 締り弱
- 5 黒褐色 ロームブロック少量, 締り弱
- 6 黒褐色 ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量, 締り弱
- 7 黒色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量, 締り弱
- 8 黒色 ローム粒子微量, 締り弱
- 9 黒色 ロームブロック少量, 締り弱



第160図 第61号井戸跡実測図

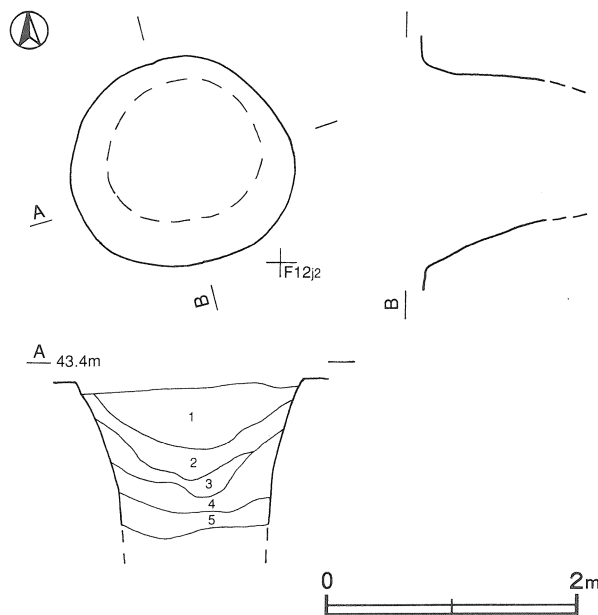
遺物出土状況 土師器片13点(坏4, 碗2, 甕7), 須恵器片10点(坏1, 甕9), 灰釉陶器片1点(碗)が出土しているが, いずれも細片で図示できるものはなかった。

所見 隣接して第60・62号井戸跡があり, 何らかの関係性がうかがえる。出土した土器は細片が多いが, 灰釉陶器片が出土しており, 時期は9世紀以降である可能性が考えられる。

第62号井戸跡 (第161図)

位置 調査区東部のF12i1区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.8m, 短径1.7mの円形で, 深さは遺構確認面から約1.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。



第161図 第62号井戸跡実測図

覆土 5層に分層される。レンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化物・鹿沼パミス微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量,焼土ブロック・鹿沼パミス微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 4 黒褐色 砂粒少量,ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片73点(坏29,甕44),須恵器片7点(坏1,甕6),灰釉陶器片1点(長頸瓶カ)が出土しているが、いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 隣接して第60・61号井戸跡があり、何らかの関係性がうかがえる。出土した土器は細片が多いが、灰釉陶器片が出土しており、時期は9世紀以降である可能性が考えられる。

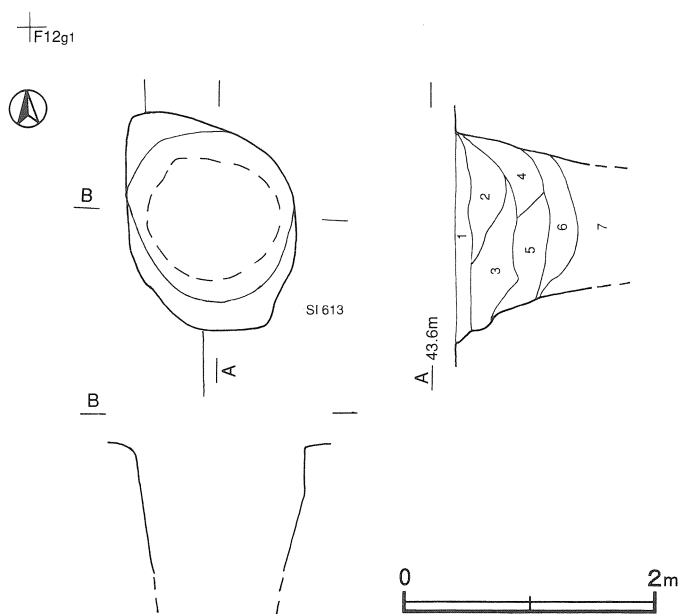
第63号井戸跡 (第162図)

位置 調査区東部のF12g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第613号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部と南部が崩落によりやや広がっているが、おおむね長径1.4m、短径1.25mの円形で、深さは遺構確認面から約1.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。

覆土 7層に分層される。ロームブロックを多く含み、第2～5層は南北から交互に堆積した様相を示しており、人為堆積と考えられる。



第162図 第63号井戸跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量,焼土ブロック・炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量,締り弱
- 4 黒褐色 ロームブロック少量,鹿沼パミス微量,締り弱
- 5 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス・礫微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量,炭化物少量,締り弱
- 7 暗褐色 ロームブロック中量,炭化粒子微量,締り弱

遺物出土状況 土師器片30点(坏6,甕24),須恵器片2点(坏1,甕1)が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

所見 10世紀前葉と考えられる第613号住居跡を掘り込んでおり、時期はそれ以降と考えられる。

第64号井戸跡 (第163図)

位置 調査区東部のF12f1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第617・619号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.4m、短径2.0mの楕円形で、深さは遺構確認面から約1.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は漏斗状で上部が開いている。

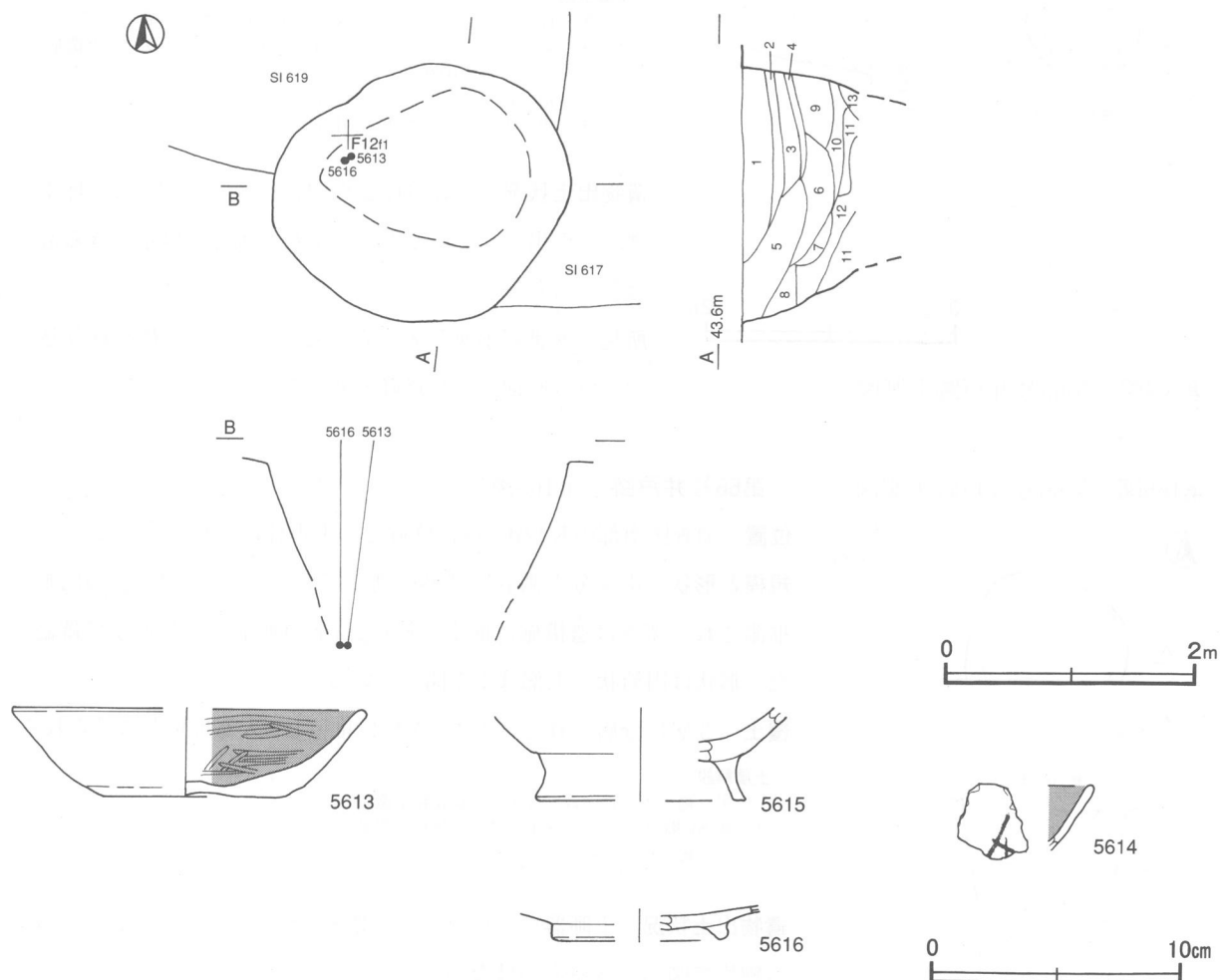
覆土 13層に分層される。ブロック状に南側から堆積した様相を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・鹿沼パミス微量、粘性強	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量、粘性強
2	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	8	暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
3	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性強	9	黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性強
4	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量、粘性・締り強	10	黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
5	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘性強	11	暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量、締り弱
6	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス少量	12	褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
			13	黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、締り弱

遺物出土状況 土師器片50点(坏16, 碗2, 甕32), 須恵器片2点(坏), 灰釉陶器片3点(皿1, 長頸瓶カ2)が出土している。5613・5616は地下水面よりやや下から出土した。

所見 9世紀後葉と考えられる第619号住居跡を掘り込んでおり、時期は10世紀以降と考えられる。



第163図 第64号井戸跡・出土遺物実測図

第64号井戸跡出土遺物観察表 (第163図)

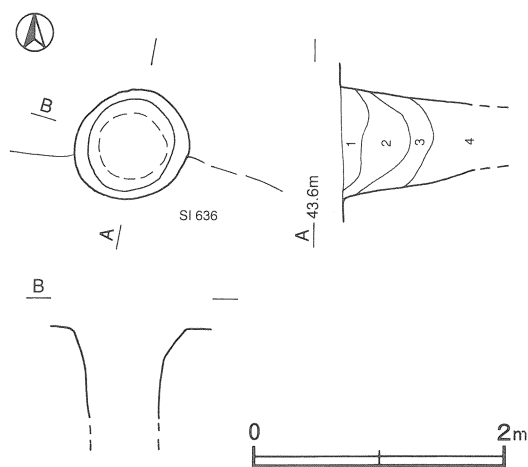
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5613	土師器	坏	[13.8]	3.5	7.3	石英, 長石, 黒雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラミガキ	地下水面下	60%
5614	土師器	坏	-	(2.7)	-	長石	にぶい褐	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 体部外面墨書「□」
5615	土師器	椀	-	(3.7)	(8.2)	石英, 長石	にぶい褐	普通	高台貼り付け	覆土中	15%
5616	灰釉陶器	皿	-	(1.4)	[7.0]	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰白	良好	高台貼り付け, 底部内面灰釉刷毛塗り, 直接重ね焼き痕	地下水面下	10%, 猿投産黒笹90号窯式

第65号井戸跡 (第164図)

位置 調査区東部のF11h9区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第636号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.9mの円形で, 深さは遺構確認面から約1.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。



覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積し, 自然堆積と考えられる。

土層解説

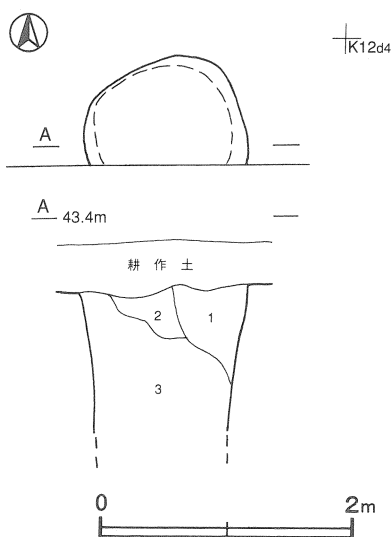
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量, 締り強
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量, 締り強
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片2点(坏), 須恵器片3点(坏1, 甕2)が出土しているが, いずれも細片で図示できるものはなかった。

所見 8世紀前葉と考えられる第636号住居跡を掘り込んでおり, 時期はそれ以降と考えられる。

第164図 第65号井戸跡実測図

第165図 第66号井戸跡実測図



第66号井戸跡 (第165図)

位置 調査区南部のK12d3区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 南半分が調査区域外へ延びているが, 径約1.3mの円形と推測され, 深さは遺構確認面から約1.2m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。

覆土 3層に分層される。ブロック状に堆積し, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片10点(坏2, 甕8)が出土しているが, いずれも細片で図示できるものはなかった。

所見 出土土器はいずれも細片で, 時期は不明である。

第67号井戸跡（第166図）

位置 調査区東部のF11f0区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.1m、短軸1.8mの長方形で、深さ30cmの竪穴状掘り込みの中央に、径0.85mの円形の掘り込みがある。竪穴部の北壁に沿った部分は10cmほど高く段になっており、北西コーナー部には径18cm、深さ15cmのピットがある。また、中央の掘り込みの深さは遺構確認面から約1.0m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。

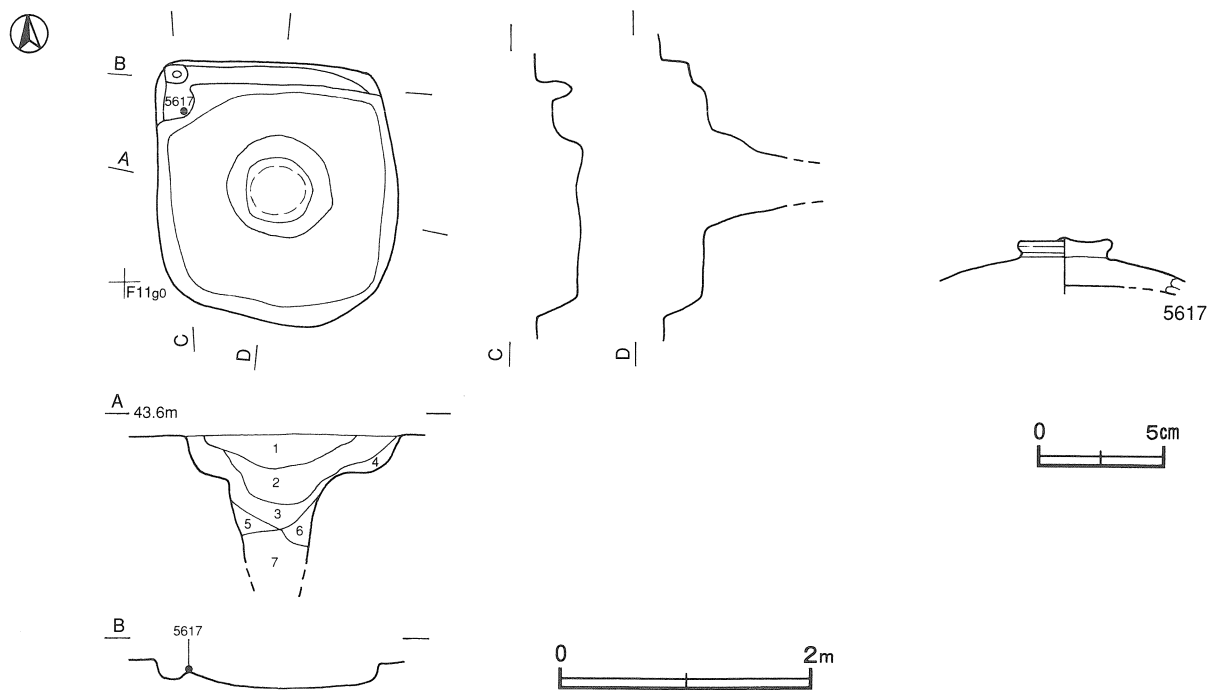
覆土 7層に分層される。東西から交互に堆積した様相を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量，締り強 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量，締り弱 |
| 4 暗褐色 | 鹿沼パミス中量，ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片8点（坏2，甕6），須恵器片3点（坏1，蓋1，甕1）が出土している。5617は北西部の一段高くなった部分から出土している。

所見 長方形の竪穴の中央に井戸が掘り込まれている。竪穴部と北西コーナー部にあるピットは井戸の上屋構造や釣瓶などに関連するものと推測される。出土した5617は8世紀代のもので、時期はそれ以降と考えられる。

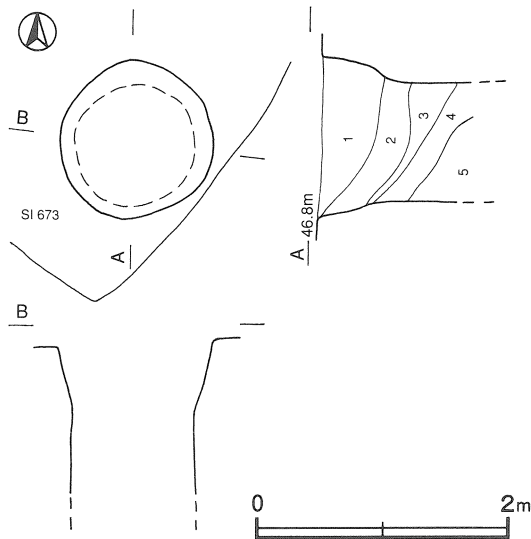


第166図 第67号井戸跡・出土遺物実測図

第67号井戸跡出土遺物観察表（第166図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5617	須恵器	蓋	-	(2.3)	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	北西部中層	10%

第68号井戸跡 (第167図)



第167図 第68号井戸跡実測図

位置 調査区西部のC 4 a3 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第673号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.25mの円形で、深さは遺構確認面から約1.2m下の地下水面付近まで確認した。形状は円筒状で上部はやや開いている。

覆土 5層に分層される。覆土中に焼土や粘土を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量, 締り弱 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土ブロック微量, 締り弱 |
| 3 | 黒褐色 | 粘土ブロック微量, 締り弱 |
| 4 | 黒褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土粒子微量, 締り弱 |
| 5 | 黒色 | 粘土ブロック少量, 締り弱 |

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土しているが、第673号住居跡と同時期のもので、流れ込みと考えられる。

所見 5世紀後半と考えられる第673号住居跡を掘り込んでおり、時期はそれ以降と考えられる。

(3) 溝跡

今年度の調査で20条の溝を確認し、そのうち奈良・平安時代と考えられる1条以外は中・近世のものと、時期が不明なものである。以下、遺構と遺物について記述する。

第27号溝跡 (付図・第168図)

位置 調査区中央部のE 8 e9 区からE 9 h1 区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第1909号土坑、第44号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 E 9 h1 区から北西方向(N-37°-W)に緩やかに弧を描きながら調査区域外へ延びている。確認された長さは約15mである。規模は上幅45~135cm, 下幅25~120cm, 深さ9~20cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 3層に分層される。『辰海道遺跡1』と土層番号は対応しているが、第2・3層は今年度調査区域内でのみ確認されたものである。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 | 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 | 明褐色 | ローム粒子中量 | | | |

遺物出土状況 今年度調査区域から遺物は出土していない。

所見 時期を特定できるような遺物は出土していないが、『辰海道遺跡1』では中世に比定されている第28号溝に並行していることから、時期を中世の可能性があるとしている。

第28号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区中央部のE 8 d9 区からE 9 h1 区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 平成13年度調査区域で第4号掘立柱建物跡を掘り込み、第4号道路に掘り込まれている。

規模と形状 E 9 h1 区から北北西方向（N-14°-W）に延び、E 9 f1 区から北西方向（N-41°-W）に緩やかに曲がりながら調査区域外へ延びている。確認された長さは約19mである。規模は上幅110～190cm、下幅45～60cm、深さ20～30cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 3層に分層される。第1～3層は今年度調査区域内でのみ確認されたもので、『辰海道遺跡1』と土層番号は対応していない。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片14点（坏6，甕8），須恵器片1点（甕），縄文土器片1点が出土しているが、いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期を特定できるような遺物は出土していないが、『辰海道遺跡1』では16世紀代に比定されている第4号道路に掘り込まれていることから、時期をそれ以前としている。

第29号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区中央部のE 8 b9 区からE 9 b3 区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 平成13年度調査区域で第489号住居跡、第1057・1324～1359号土坑を掘り込み、第13号掘立柱建物に掘り込まれている。平成14年度調査区域で第1907号土坑を掘り込み、第1879号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 E 9 b3 区から西方向（N-95°-W）へ直線的に調査区域外へ延びている。確認された長さは約15mである。規模は上幅85～120cm、下幅40～80cm、深さ45～50cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 4層に分層される。土層番号は『辰海道遺跡1』と対応しているが、第4層は今年度調査区域内でのみ確認され、第2層は今年度調査区域内では確認されなかった。ブロック状に堆積し、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片13点（坏5，椀2，甕6），須恵器片3点（坏2，甕1），陶器片1点（鉢）が出土している。いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 本年度調査区域内では、時期を判断できるような遺物は出土しておらず、性格も不明であるが、『辰海道遺跡1』では墓域を区画するための溝である可能性を指摘している。

第34号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区東部のF 12 j3 区からG 12 a3 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1772号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 G 12 a3 区から北北東方向（N-16°-E）へ直線的に延び、確認された長さは約3.6mである。規模は上幅45～60cm、下幅40～50cm、深さ15cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第35号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区東部のF12i4区からG12a4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1788・1791号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 G12a4区から北北東方向（N-10°-E）へ直線的に伸び、確認された長さは約5.2mである。

規模は上幅35～60cm、下幅25～45cm、深さ15～20cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第36号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区東部のF12g2区からF12h2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第612号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 F12h2区から北方向（N-6°-W）へ直線的に伸び、確認された長さは約5.5mである。規模は上幅35～50cm、下幅30～40cm、深さ5cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点（坏1、甕2）が出土しているが、いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 9世紀前葉と考えられる第612号住居跡を掘り込んでいることから、時期はそれ以降と考えられる。

第38号溝跡（付図・第168・169図）

位置 調査区東部のF11b8区からF11f8区に位置し、平坦部に立地している。途中、F11d8区で20cmほど途切れた部分があるが、2条とも方向・覆土・掘り方がほぼ同一であることから、一つの遺構として記述する。

重複関係 第604・623A・623B・625・627・633号住居跡、第42号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 F11f8区から北方向（N-4°-W）へ直線的に調査区域外へ延びている。確認された長さは約17mである。規模は上幅45～50cm、下幅30～35cm、深さ10～20cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

覆土 2層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片48点(坏16, 甕32), 須恵器片8点(坏4, 甕4), 石器1点(砥石)が出土している。多くが細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。5618・5619は覆土中からの出土である。

所見 10世紀中葉と考えられる第633号住居跡を掘り込んでいることから、時期はそれ以降と考えられる。

第38号溝跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5618	土師器	椀	-	(1.4)	-	石英, 長石, 金雲母	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	10%, 底部外面墨書「□」

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5619	砥石	10.9	3.6	3.2	156.5	酸性凝灰岩	砥面4面, 未貫通の孔2か所	覆土中	

第39号溝跡 (付図・第168図)

位置 調査区中央部のE 8 e4区からE 8 h3区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第15号柵跡を掘り込んでいる。

規模と形状 E 8 h3区から北方向(N-10°-E)へ直線的に延びている。両端は調査区域外へ延びており、確認された長さは約15.5mである。規模は上幅120~140cm, 下幅30~50cm, 深さ60~70cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる箱葉研状である。

覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量, 鹿沼パミス極微量, 締り強 3 黒褐色 ローム粒子微量, 鹿沼パミス極微量
2 暗褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス極微量 4 黒褐色 ロームブロック少量, 鹿沼パミス極微量

遺物出土状況 土師器片80点(坏42, 椀3, 甕35), 須恵器片9点(坏2, 高台付坏1, 蓋1, 甕5)が出土している。いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できるような良好な遺物は出土していないが、形状から近世以降の境界溝と考えられる。

第40号溝跡 (付図・第168図)

位置 調査区中央部のE 8 e5区からF 8 c8区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第647・648・650・654号住居跡, 第1876号土坑, 第41号溝跡, 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 F 8 c8区から西方向(N-89°-W)に延び、F 8 c6区で北西方向(N-50°-W)に曲がり、さらにF 8 b5区で北方向(N-3°-E)に曲がり、調査区域外へ延びている。確認された長さは約41mである。規模は上幅50~100cm, 下幅30~50cm, 深さ5~10cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片58点(坏15, 椀2, 甕41), 須恵器片5点(蓋1, 甕4), 鉄滓1点が出土している。いずれも細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できるような良好な遺物は出土していないが, 16世紀代と考えられる第1号道路跡を掘り込んでいることから, 時期は近世以降と考えられ, 境界溝と推測される。

第41号溝跡(付図・第168図)

位置 調査区中央部のF8b6区からF8c6区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第40号溝に掘り込まれている。

規模と形状 F8b6区から南方向(N-168°-W)に伸び, F8c6区で南西方向(N-143°-W)に曲がり, 調査区域外へ延びている。確認された長さは約6.5mである。規模は上幅50~60cm, 下幅30~55cm, 深さ5~10cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 単一層で, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。

第42号溝跡(付図・第168・169図)

位置 調査区中央部のE8f8区からF8d8区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第495・510・655・656号住居跡, 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 F8d8区の調査区域外から東方向(N-89°-E)に伸び, 北方向(N-7°-E)に曲がり, さらに, E8f9区で西方向(N-77°-W)へ曲がり, 調査区域外へ延びている。確認された長さは約36mである。規模は上幅60~110cm, 下幅10~30cm, 深さ40~50cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して直線的に立ち上がる箱薬研状である。

覆土 3層に分層される。層内にロームブロック・粒子を均一に含むことから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 明褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量, 締め弱

2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片160点(坏39, 椀3, 鉢1, 甕116, 甗1), 須恵器片34点(坏8, 高台付坏2, 盤1, 円面硯1, 蓋4, 瓶1, 甕17), 土師質土器片5点(焙烙1, 内耳鍋1, 火鉢1, 目皿1, 竈顎1), 瓦質土器片2点(焙烙1, 火鉢1), 陶器片22点(碗2, 鉢7, 瓶6, 挿鉢3, 古瀬戸1, 常滑甕3), 磁器片16点(碗15, 青磁碗1), 瓦18点, 土製品片3点(支脚1, 羽口1, 塀1), 石器1点(砥石), 鉄製品8点(釘5, 不明3), 鉄滓1点が出土している。多くが細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 古墳時代から近代にわたる時期の遺物が出土しているが, 多くは流れ込みによるものと考えられる。時期は最も新しい遺物が近代の磁器碗のため, 近代には埋没していたものと考えられる。性格は形状から境界溝と考えられる。

第42号溝跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5620	須恵器	円面硯	[16.9]	(1.5)	-	石英, 長石	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
5621	瓦質土器	焙烙	[25.8]	3.4	[25.0]	石英, 長石, 金雲母	黒褐	普通	外面ナデ, 底部外面ヘラ削り	覆土中	10%, 内面炭化物付着
5622	陶器	折縁深皿	[29.8]	(1.6)	-	緻密	にぶい黄褐, オリーブ	普通	ロクロナデ	覆土中	10%, 古瀬戸後IV期(古)
5623	陶器	播鉢	[35.0]	(5.3)	-	長石	極暗赤褐	良好	ロクロナデ	覆土中	10%, 堺産
5624	青磁	碗	-	(1.3)	-	緻密	灰白, 明るい灰黄緑	良好	ロクロナデ	覆土中	5%, 龍泉窯産

第44号溝跡 (付図・第168・169図)

位置 調査区中央部のE 8 g 8区からE 8 i 8区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第45号溝跡, 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 E 8 i 8区から北方向(N-5°-E)に延び, E 8 g 8区で第45号溝跡と重なって調査区域外へ延びている。確認された長さは約7.5mである。規模は上幅170cm, 下幅50cm, 深さ30cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 4層に分層される。層内に焼土・炭化物を含むことから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 締り強
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 締り強
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 締り強
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片24点(坏5, 高坏1, 甕18), 土師質土器片7点(内耳鍋), 陶器片1点(瓶子), 土製品片2点(埴)が出土している。多くが細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 覆土第3層は硬化しており, 道路として使用されていた可能性もあるが, 斜面部で遺構の遺存状態が悪く, 硬化を面的に捉えることができなかつたため, 溝と判断した。16世紀代と考えられる第1号道路跡を掘り込んでいることから, 時期は近世以降と考えられる。

第44号溝跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5625	陶器	瓶子	-	(1.3)	[10.4]	長石, 黒色粒子	灰白, 黒褐	良好	底部回転糸切り, 鉄釉流し掛け	覆土中	10%, 古瀬戸後期

第45号溝跡 (付図・第168・169図)

位置 調査区中央部のE 8 f 8区からE 8 i 8区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号道路跡を掘り込み, 第44号溝に掘り込まれている。

規模と形状 E 8 i 8区から北方向(N-2°-E)に調査区域外へ延びている。確認された長さは約12.5mである。規模は上幅45~80cm, 下幅15~20cm, 深さ30cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 単一層で, 堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片15点（坏3，甕12），須恵器片17点（坏2，高台付坏1，蓋1，甕13），灰釉陶器片3点（碗1，瓶2），土師質土器片1点（香炉），陶器片4点（古瀬戸瓶子1，常滑甕3），石器1点（磨石），古銭1点が出土している。多くが細片で，破断面が摩滅しており，周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 16世紀代と考えられる第1号道路跡を掘り込んでいることから，時期は近世以降と考えられる。

第45号溝跡出土遺物観察表（第169図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5626	須恵器	高台付坏	-	(3.4)	[7.2]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	20%、内面研磨・墨付着脱用カ
5627	灰釉陶器	碗	-	(2.6)	[7.8]	長石	灰、灰	普通	高台貼り付け、体部内面施釉、直接重ね焼き痕	覆土中	10%、内面一部自然釉、三河・遠江系折戸53号窯式併行

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5628	磨石	10.3	8.6	3.6	422	安山岩	両面・側面全周に擦痕、両端部に敲打痕	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5629	寛永通寶	2.5	0.6	1.1	2.9	銅	背面（上）「文」	覆土中	新寛永、初铸年寛文8年(1668)、PL48

第47号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区西部のC4g8区からC4g0区に位置し，南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 C4g8区から東方向（N-93°-E）へ直線的に伸び，確認された長さは約9.5mである。規模は上幅25～40cm，下幅8～20cm，深さ20cmである。底面はほぼ平坦で，壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で，堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量，締り弱

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず，時期・性格ともに不明である。

第48号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区西部のC4h1区からC5h4区に位置し，南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第52号溝跡を掘り込み，第51号溝に掘り込まれている。

規模と形状 C5h4区から南方向（N-176°-W）へ直線的に伸び，C5i4区で西方向（N-86°-W）へ曲がり，調査区域外へ伸びている。確認された長さは約60mである。規模は上幅50～180cm，下幅20～100cm，深さ10～40cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量，粘性弱，締り極めて弱

2 黒褐色 ローム粒子微量，粘性弱，締り極めて弱

3 暗褐色 ローム粒子中量，鹿沼バミス少量，締り弱

4 暗褐色 ロームブロック中量，締り極めて弱

遺物出土状況 土師器片6点（甕），須恵器片2点（坏1，高台付坏1），土師質土器片5点（内耳鍋），陶器片2点（常滑甕），磁器片1点（碗）が出土している。多くが細片で，破断面が摩滅しており，周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できるような良好な遺物は出土していないが、ほぼ東西に正しく延びており、近世以降の境界溝と考えられる。

第49号溝跡（付図・第168図）

位置 調査区西部のC 5 i 2 区からD 5 a 2 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 D 5 a 2 区から北方向（N - 10° - E）へ直線的に延び、確認された長さは約6 mである。規模は上幅50～80cm、下幅15～40cm、深さ15cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第51号溝跡（付図・第168・169図）

位置 調査区西部のC 4 b 6 区からD 4 b 6 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第671号住居跡、第48・52号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 D 4 b 6 区から北方向（N - 1° - E）に調査区域外へ延びている。確認された長さは41.5mである。規模は上幅35～70cm、下幅20～30cm、深さ40～50cmである。底面は緩やかな弧状で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを多く含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、炭化物微量、締り強
- 2 極暗褐色 ロームブロック多量、締り弱
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量、粘性弱

遺物出土状況 土師器片6点（甕）、須恵器片2点（坏1、高台付坏1）、土師質土器片1点（内耳鍋）、陶器片2点（碗1、挿鉢1）、磁器片1点（碗）が出土している。多くが細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 出土遺物と形状から近世以降の境界溝と考えられる。

第52号溝跡（付図・第168・169図）

位置 調査区西部のC 4 g 3 区からD 4 d 2 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2045号土坑、第48・51号溝に掘り込まれている。

規模と形状 D 4 d 2 区から北東方向（N - 60° - E）へ直線的に延び、確認された長さは54mである。規模は上幅80～170cm、下幅40～60cm、深さ50～75cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 3層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性弱、締り極めて弱
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量、炭化粒子微量、締り弱
- 3 褐 色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片16点（坏6、高坏1、甕7、手捏2）、須恵器片22点（甕）、土師質土器片1点（内耳

鍋), 瓦 1 点, 縄文土器片 2 点が出土している。多くが細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できるような良好な遺物は出土していないが, 近世以降の境界溝と考えられる第51号溝に掘り込まれており, 時期はそれ以前になると考えられる。

第52号溝跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5630	土師質土器	内耳鍋	-	(5.0)	-	石英, 長石, 金雲母	明赤褐	普通	外面ナデ, 耳部貼り付け	覆土中	5%

第55号溝跡 (付図・第169図)

位置 調査区西部のC 5 i 7 区からD 5 a 6 区に位置し, 南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 D 5 a 6 区から北北東方向 (N - 18° - E) へ直線的に延びている。両端は調査区域外へ延びており, 確認された長さは約10.5mである。規模は上幅35~80cm, 下幅20~45cm, 深さ20~30cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して直線的に立ち上がる箱薬研状である。

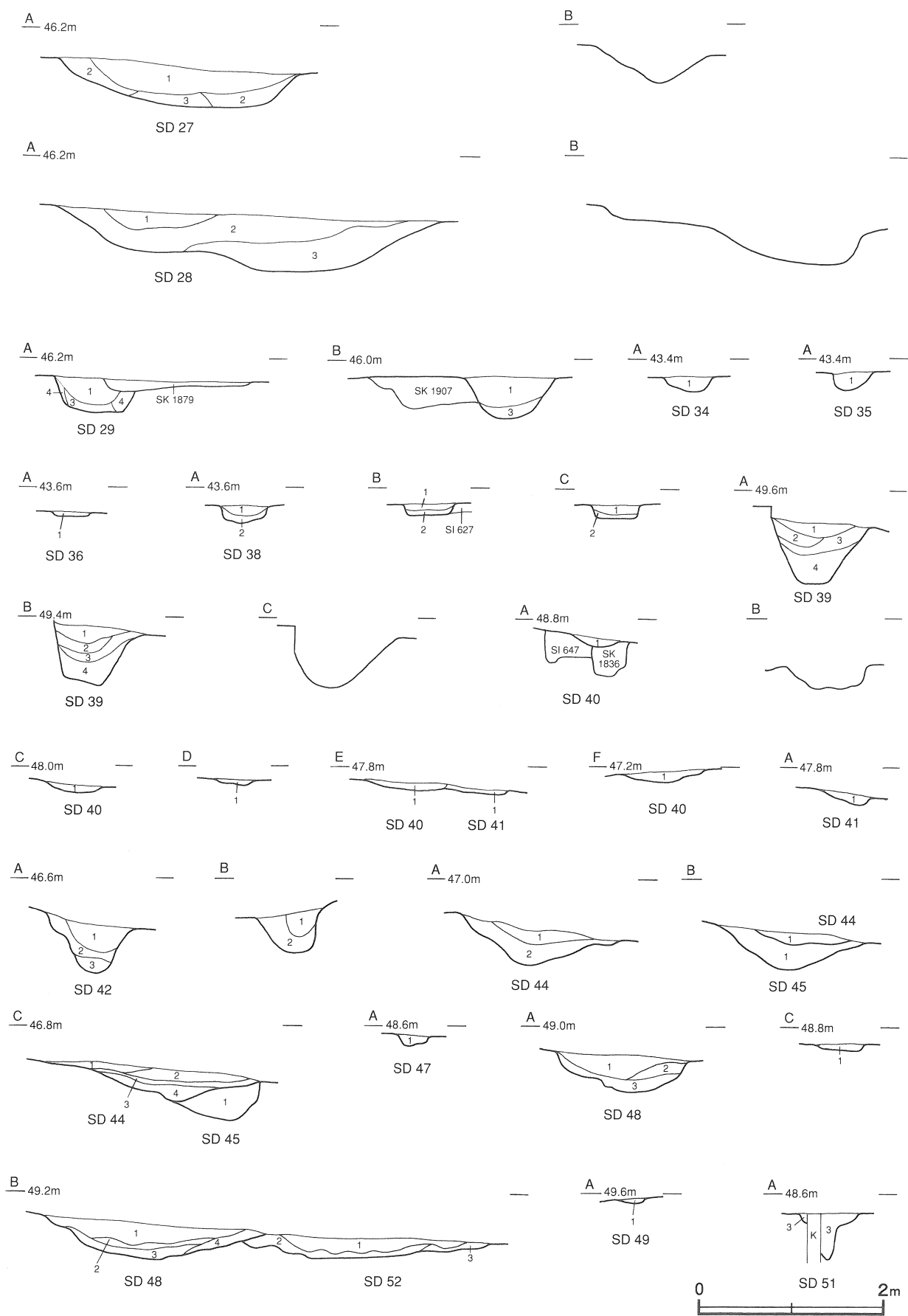
覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。

土層解説

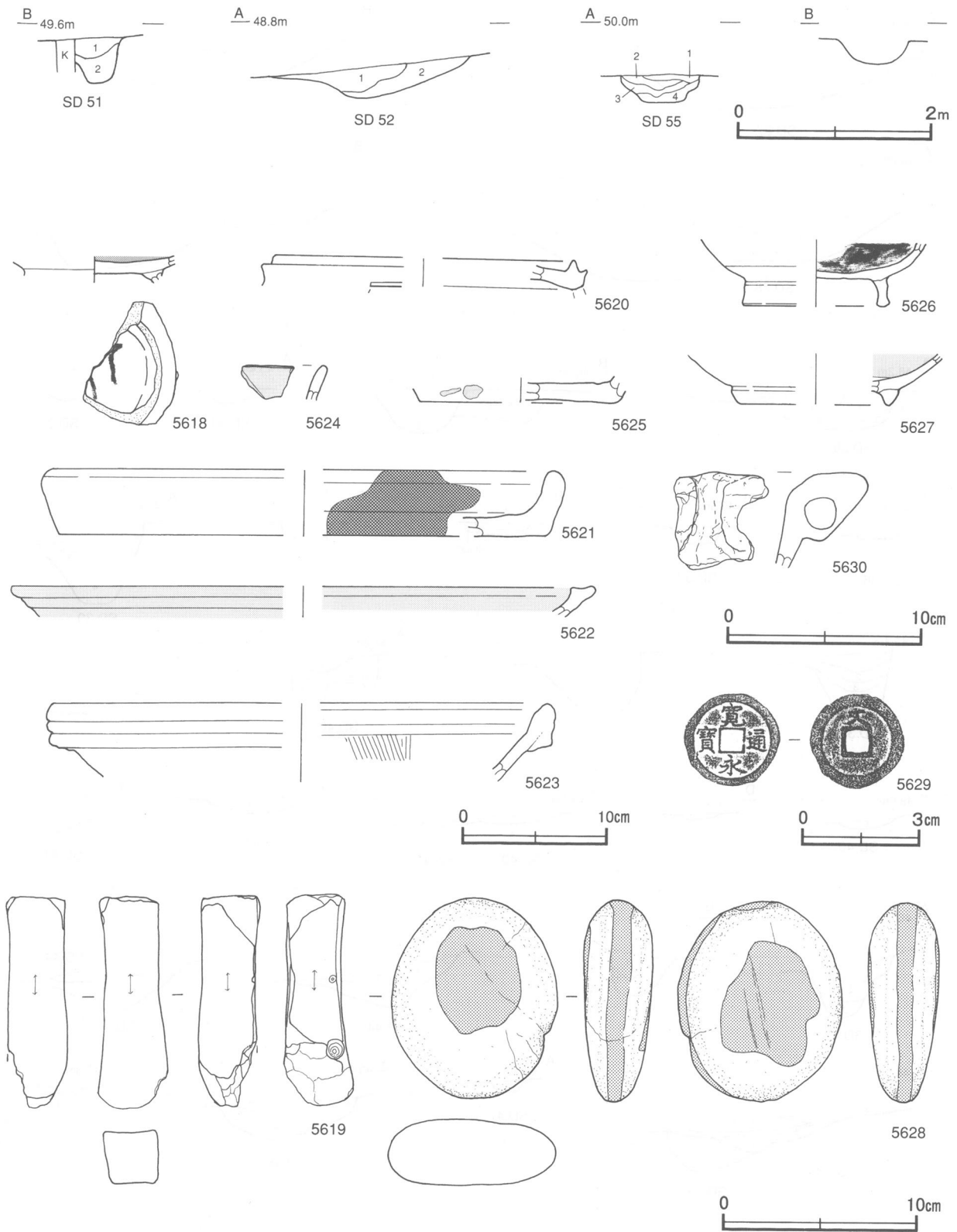
- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子・鹿沼バミス微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 締り弱

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期を判断できるような良好な遺物は出土していないが, 形状から近世以降の境界溝と考えられる。



第168图 第27~29·34~36·38~42·44·45·47~49·51·52号沟迹土层断面图



第169图 第51·52·55号沟迹土层断面图，第38·42·44·45·52号沟迹出土遗物实测图

(4) 道路跡

第1号道路跡 (付図・第170図)

位置 調査区中央部のE8i3区からE9i3区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第495・652号住居跡を掘り込み、第40・42・44・45号溝に掘り込まれている。

規模と形状 E9i3区から西方向(N-92°-W)へ途中やや蛇行しながら調査区域外へ延びている。確認された長さは約35mである。規模は上幅85~120cm, 下幅40~80cm, 深さ45~50cmである。底面は緩やかな弧状を呈している。

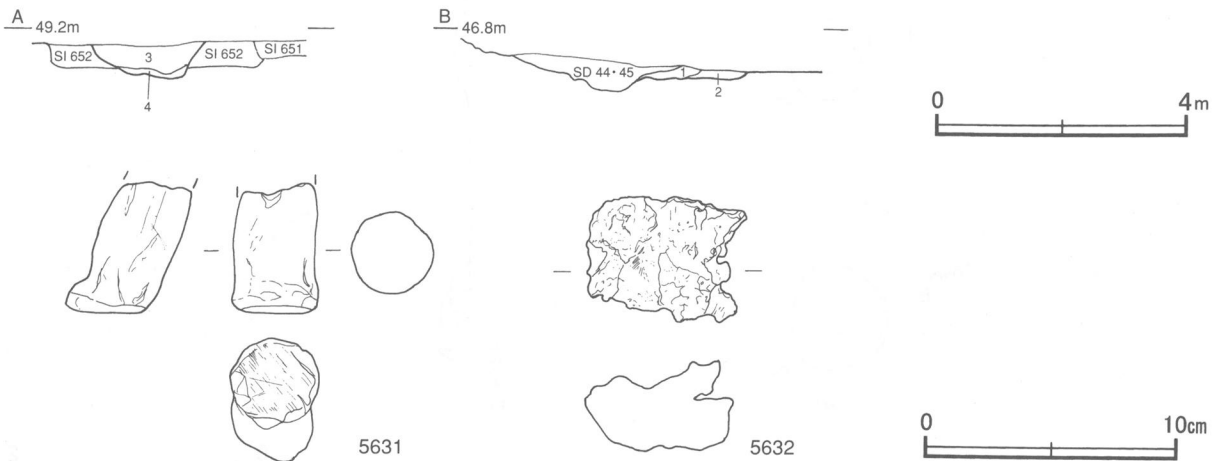
覆土 4層に分層される。第1~4層は今年度調査区域内でのみ確認されたもので、『辰海道遺跡1』と土層番号は対応していない。木の根に攪乱された部分が多く、硬化している場所を面的にとらえることはできなかったが、第4層上面や遺構の底面などに部分的に硬化面が確認された。使用している段階で徐々に斜面上部から土砂が流れ込むため、底面や層中に部分的に硬化面が形成されたものと考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 4 黒褐色 鹿沼パミス少量, ロームブロック微量, 上面が硬化している

遺物出土状況 今年度調査区域内では、土師器片38点(坏9, 碗3, 甕26), 須恵器片17点(坏2, 高台付坏1, 甕14), 土師質土器片1点(小皿), 弥生土器片1点, 陶器片1点(壺), 瓦2点, 土製品1点(獣足カ), 鉄滓1点が出土している。いずれも細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 斜面部を切り通し状に掘り込み構築された道路跡である。『辰海道遺跡1』では、時期を出土土器から16世紀代と推定している。5631は脚部のみの出土であるが、土馬などの可能性が考えられる。



第170図 第1号道路跡土層断面・出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表 (第170図)

番号	器種	長さ	幅	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5631	獣足カ	(5.2)	3.5	3.3	(69.6)	粘土	ナデ, 胎土に石英・長石・金雲母含む	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴		出土位置	備考
5632	鉄滓	5.0	6.4	3.6	133.7	着磁, 表面茶褐色, 内面暗褐色		覆土中	

(5) 柵跡

第14号柵跡 (第171図)

位置 調査区西部のC 5 i 6 区からD 5 a 6 区に位置し、南から北へ下がる傾斜地に立地している。

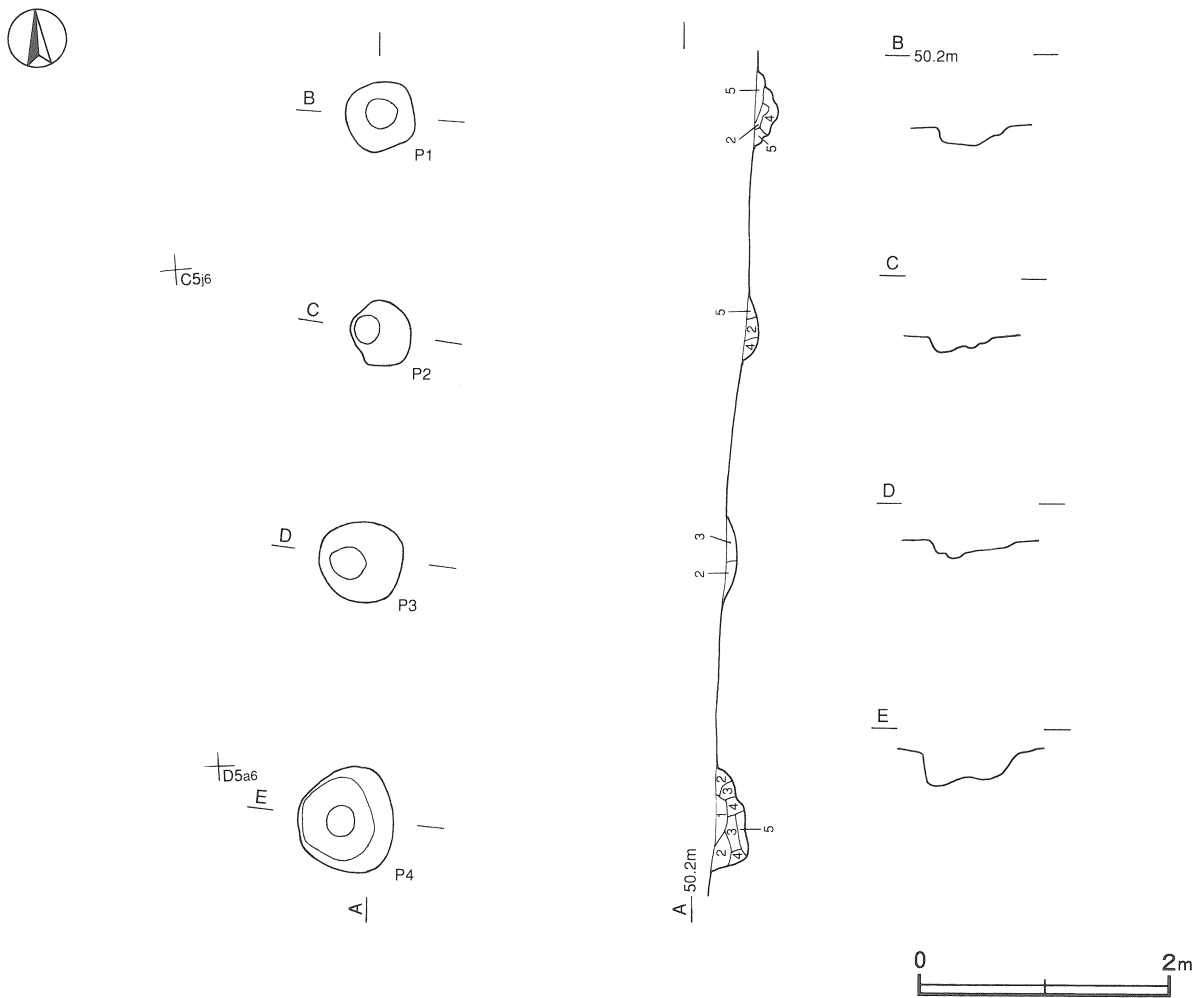
規模と形状 ピットが4か所、N - 8° - E方向へ直線的に並んでいる。径50~80cmの円形で、深さは10~22cmである。ピット間寸法はP1・P2間が1.7m、P2・P3間が1.85m、P3・P4間が2.1mである。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子多量, 締り強 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量, 締り弱 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量, 締り弱 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子微量, 締り強 | | |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第171図 第14号柵跡実測図

第15号柵跡 (第172図)

位置 調査区中央部のE 8 g 3 区からE 8 i 3 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第39号溝に掘り込まれている。

規模と形状 ピットが4か所、N - 7° - E方向へ直線的に並んでいる。径40~65cmの円形で、深さは60~70

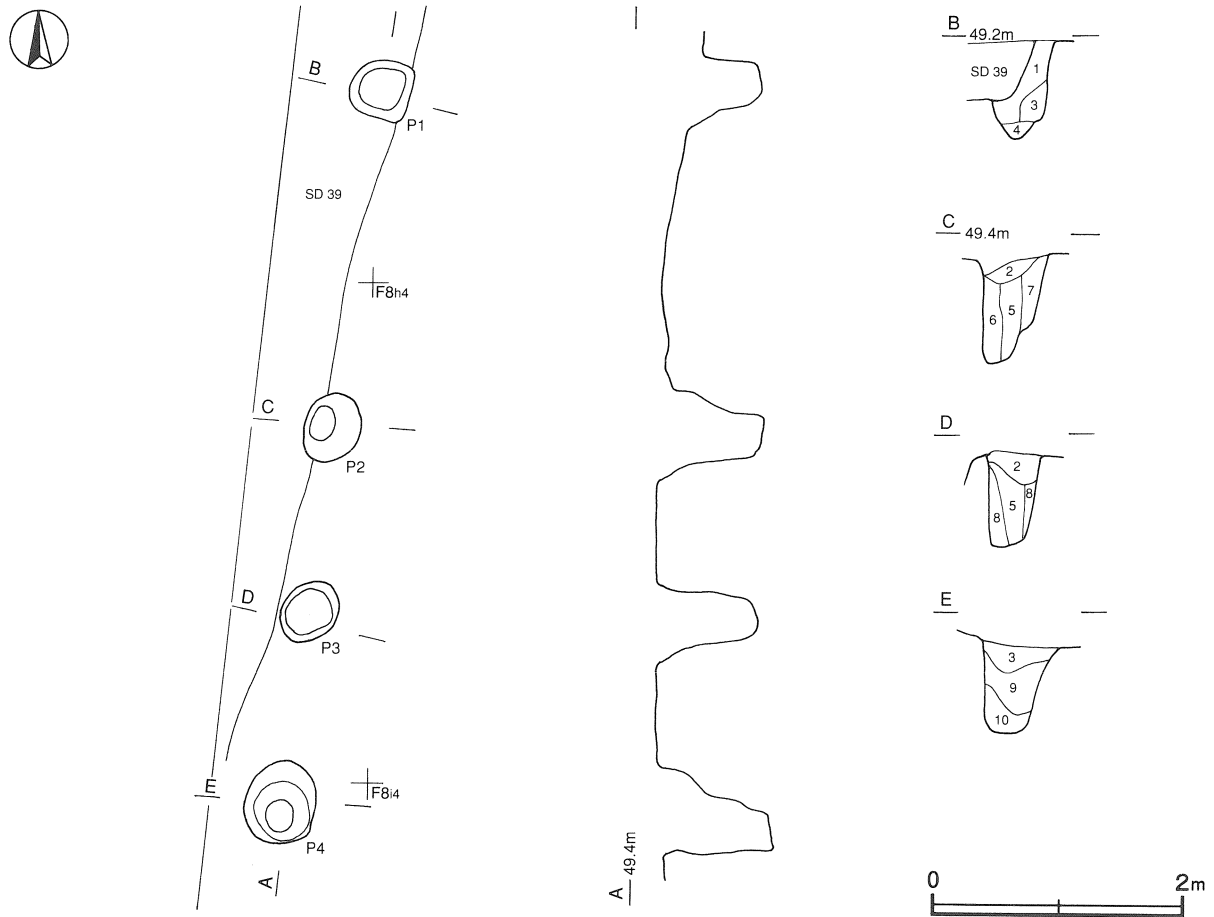
cmである。ピット間寸法はP1・P2間が2.7m, P2・P3間が1.5m, P3・P4間が1.7mである。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|----------|-------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量, 粘性強 | 6 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼パミス微量, 縮り強 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量 |
| 4 黒褐色 | 鹿沼パミス少量, ロームブロック微量, 粘性強 | 9 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量, 縮り弱 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



第172図 第15号柵跡実測図

第16号柵跡 (第173図)

位置 調査区中央部のE 8 j 6区からF 8 b 6区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

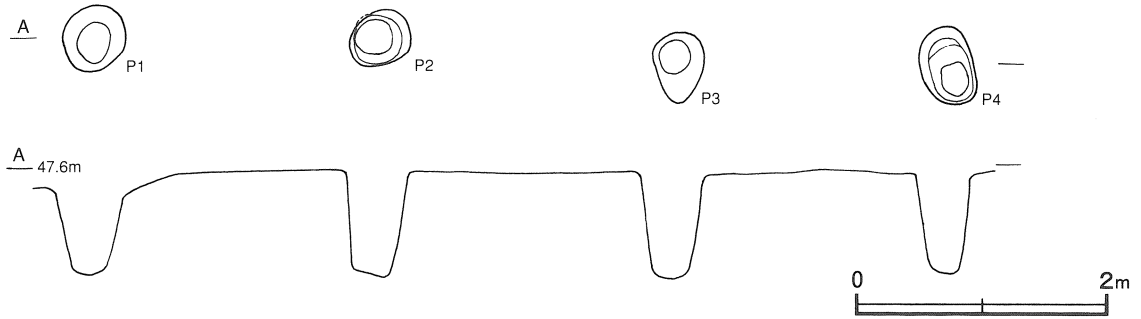
規模と形状 ピットが4か所, N-3°-E方向へ直線的に並んでいる。径40~60cmの円形で, 深さは70~80cmである。ピット間寸法はP1・P2間が2.25m, P2・P3間が2.4m, P3・P4間が2.2mである。

遺物出土状況 P3の覆土中から土師器片1点(坏)が, P4の覆土中から土師器片1点(高坏)が出土しているが細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 遺構に伴うといえる遺物は出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



F867

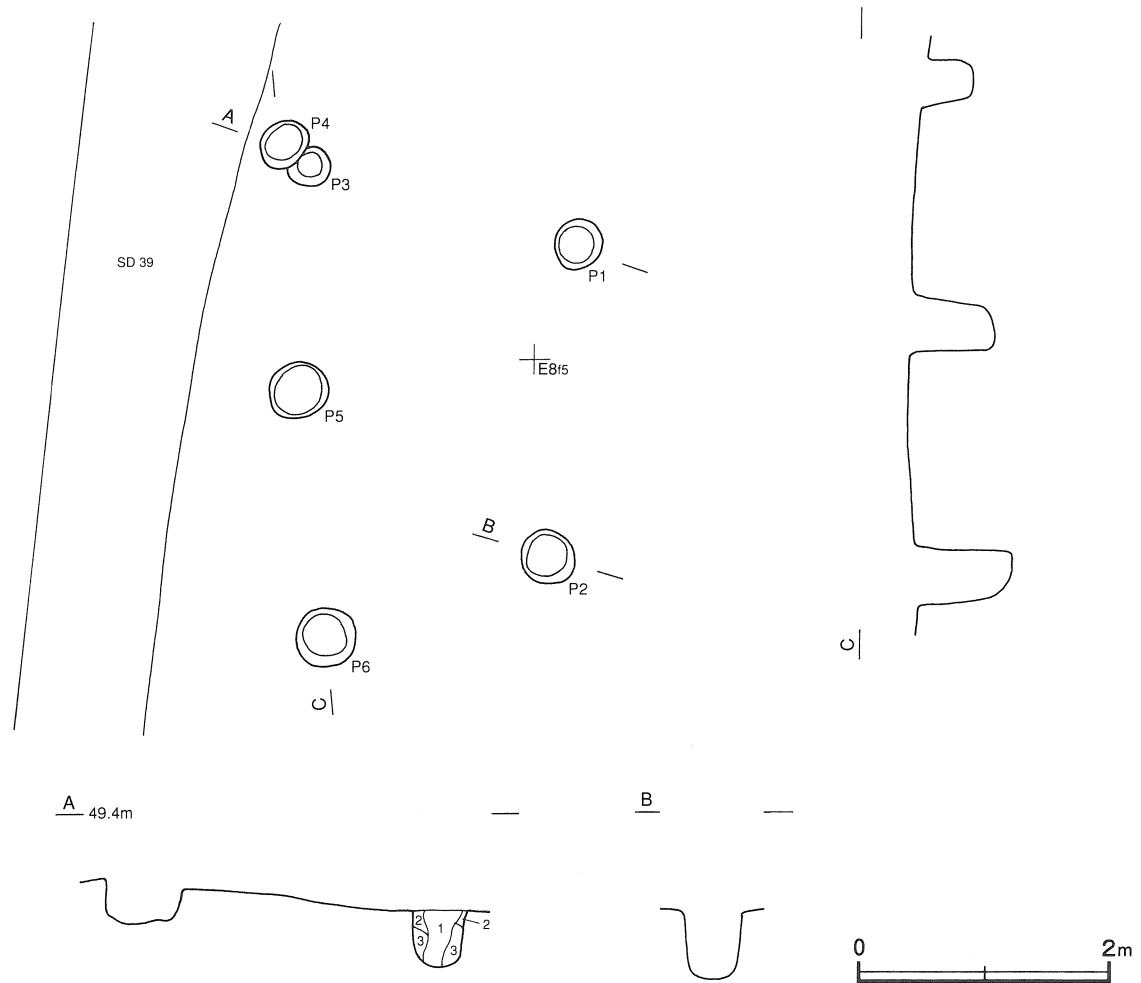


第173図 第16号柵跡実測図

(6) ピット群

第41号ピット群 (第174図)

位置 調査区中央部のE 8 e4 区からE 8 f5 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。



第174図 第41号ピット群実測図

規模と形状 南北4.5m，東西2.5mの範囲から6か所のピットを確認した。径30～45cmの円形で，深さは40～80cmである。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量，粘性・締り弱
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，粘性・締り弱
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 遺物は出土していない。

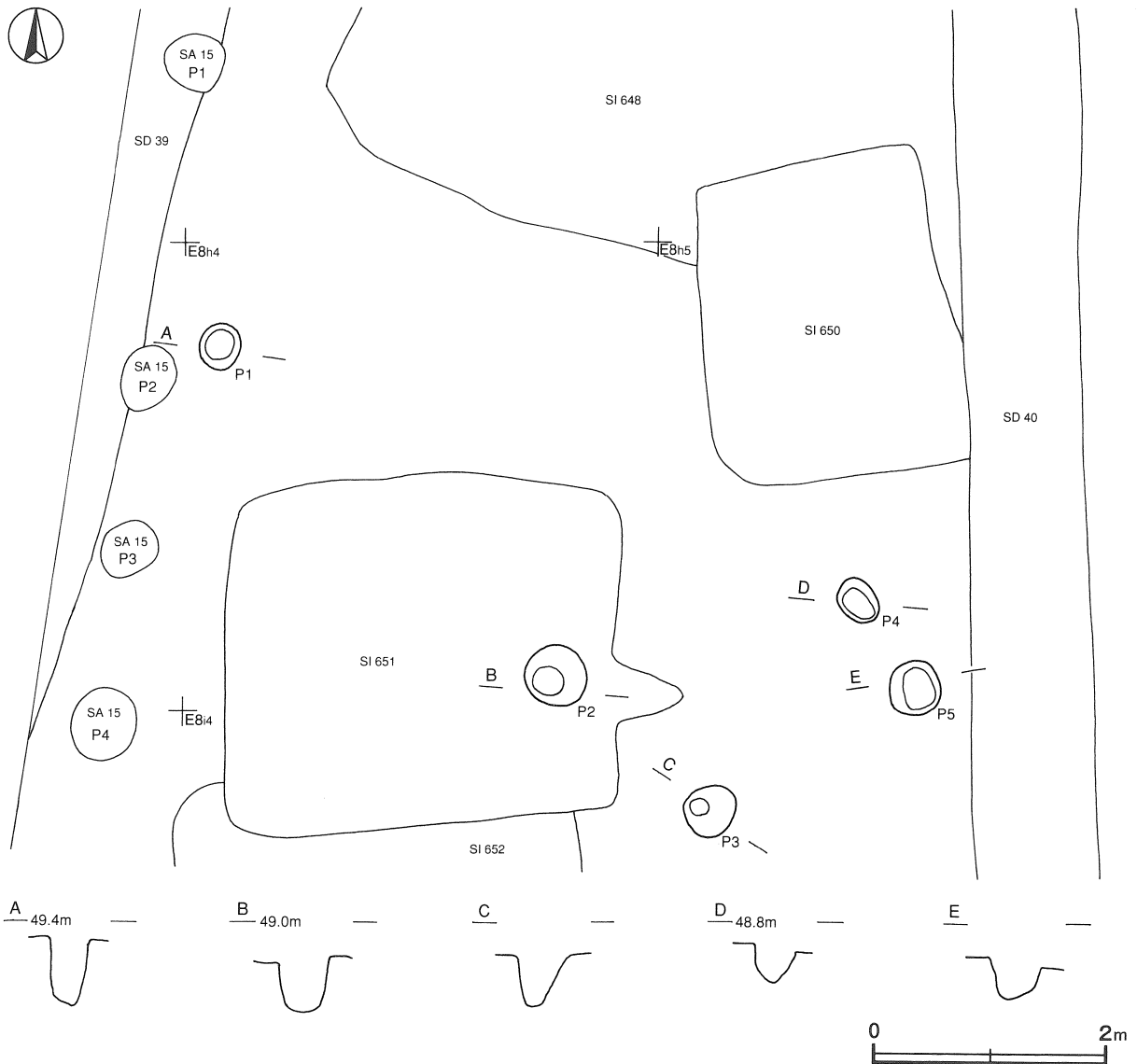
所見 6か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。遺物も出土しておらず，時期・性格ともに不明である。

第42号ピット群（第175図）

位置 調査区中央部のE 8 h4 区からE 8 i 5 区に位置し，西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 P2 が第651号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北4.5m，東西6.5mの範囲から5か所のピットを確認した。径25～50cmの円形で，深さは30～55cmである。



第175図 第42号ピット群実測図

遺物出土状況 P2の覆土中から土師器片1点(甕)が出土しているが細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 5か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。遺構に伴うといえる遺物も出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第43号ピット群 (第176図)

位置 調査区中央部のE8j6区からF8b8区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 P4が第1914号土坑を、P6・P8～P11が第661・662号住居跡を、P16が第1915号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南北10.0m、東西6.0mの範囲から21か所のピットを確認した。径30～55cmの円形で、深さは40～80cmである。

土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量、締り弱 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 P7の覆土中から土師器片2点(甕)が出土しているが細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見 21か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。遺構に伴うといえる遺物も出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第44号ピット群 (第177図)

位置 調査区中央部のE8c9区からE8f9区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 P10・11が第27号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北13.0m、東西4.0mの範囲から13か所のピットを確認した。径20～40cmの円形で、深さは10～40cmである。

土層解説

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子微量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量 |
|----------------|-----------------|

遺物出土状況 P13の覆土中から土師器片2点(坏1, 甕1)が出土しているが細片で、破断面が摩滅しており、周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

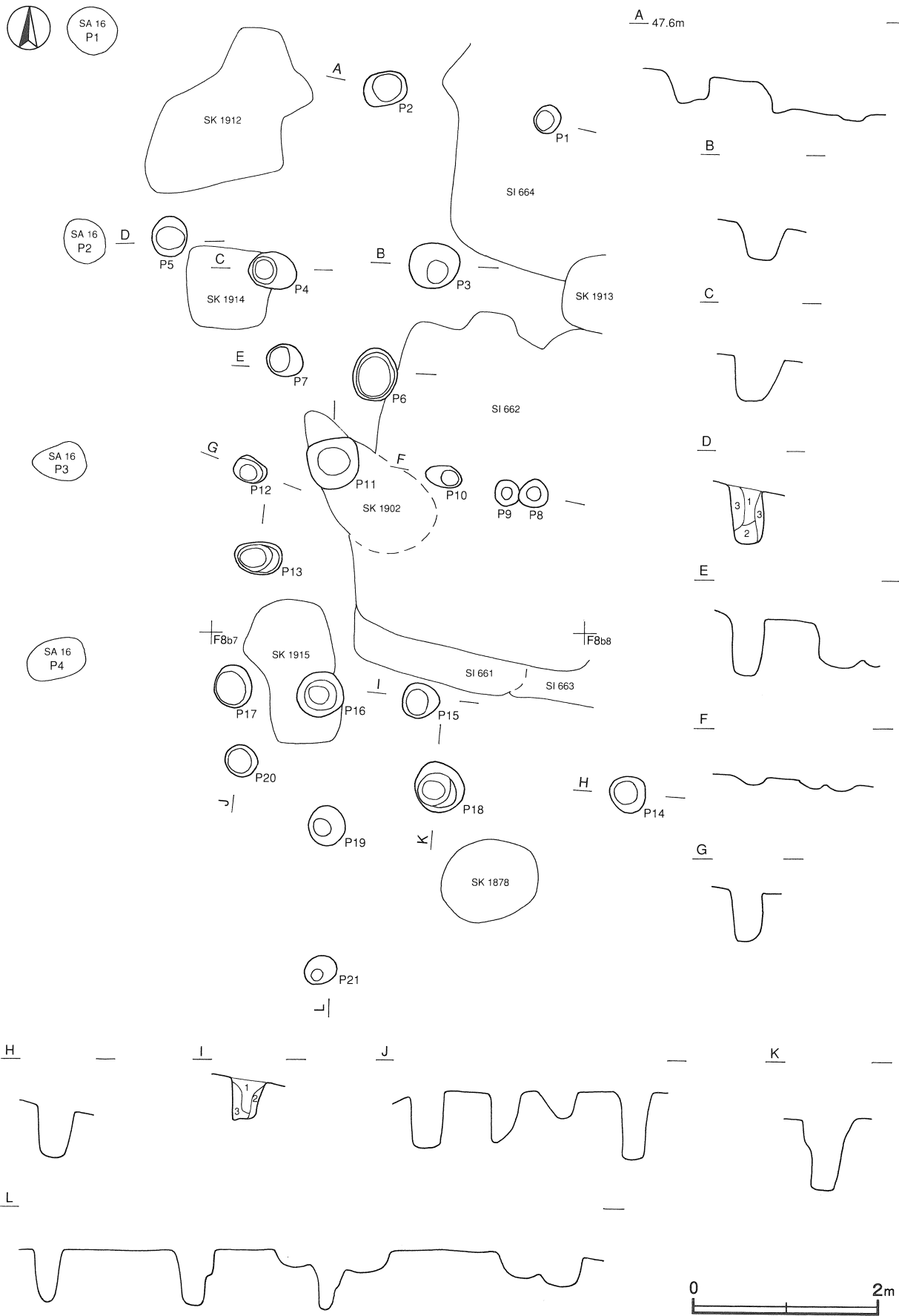
所見 13か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。遺構に伴うといえる遺物も出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

第45号ピット群 (第178図)

位置 調査区中央部のD8j0区からE8b0区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 P1が第484号住居跡を掘り込み、P8が第1901号土坑に、P10・11が第1900号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北7.5m、東西5.0mの範囲から19か所のピットを確認した。径35～50cmの円形で、深さは20～70cmである。



第176図 第43号ピット群実測図



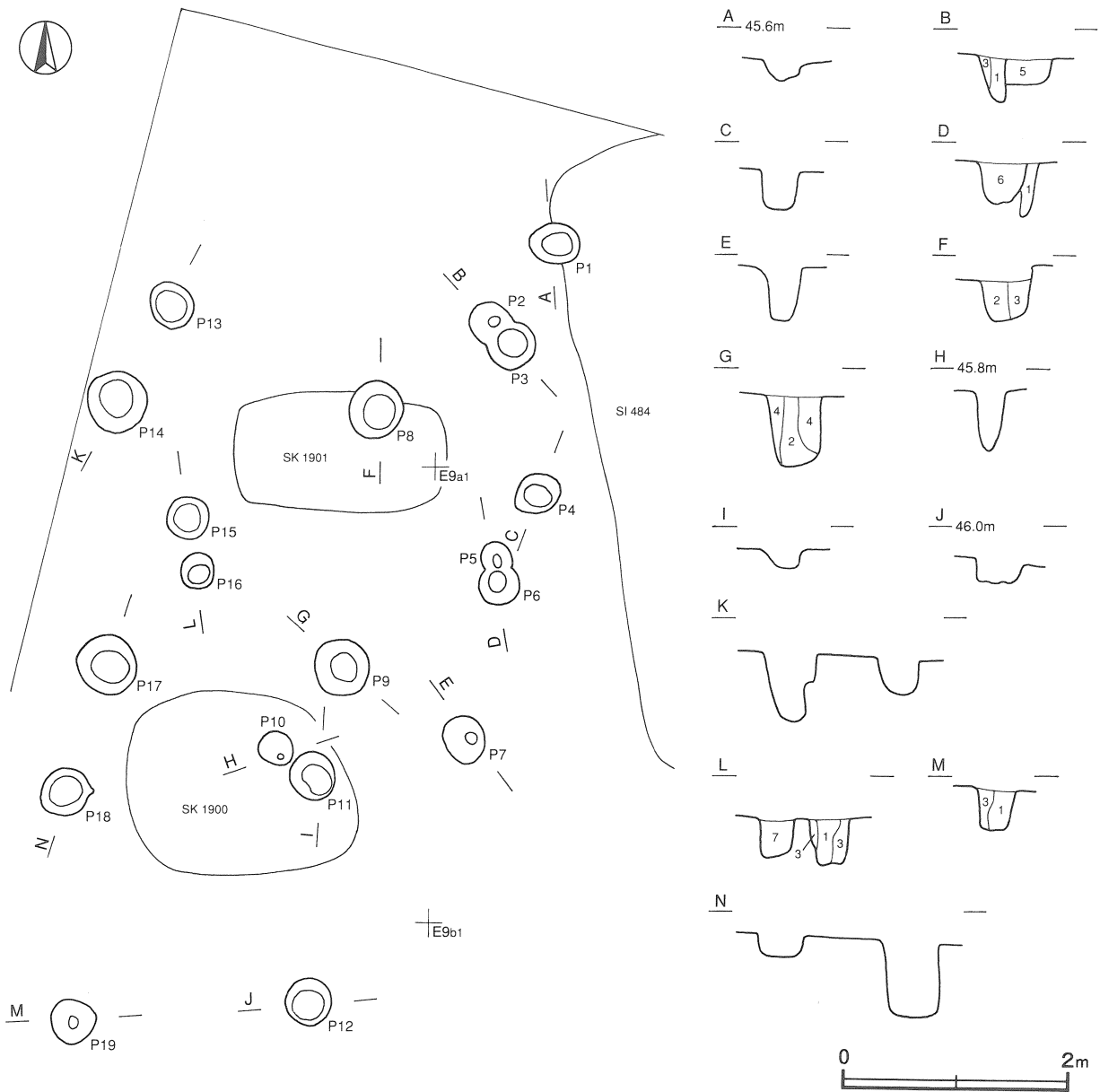
第177図 第44号ピット群実測図

土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 P13の覆土中から土師器片2点(坏)が, P14の覆土中から土師器片1点(甕)が, P18の覆土中から土師器片1点(甕)が出土しているが細片で, 破断面が摩滅しており, 周囲の遺構からの流れ込みと考えられる。

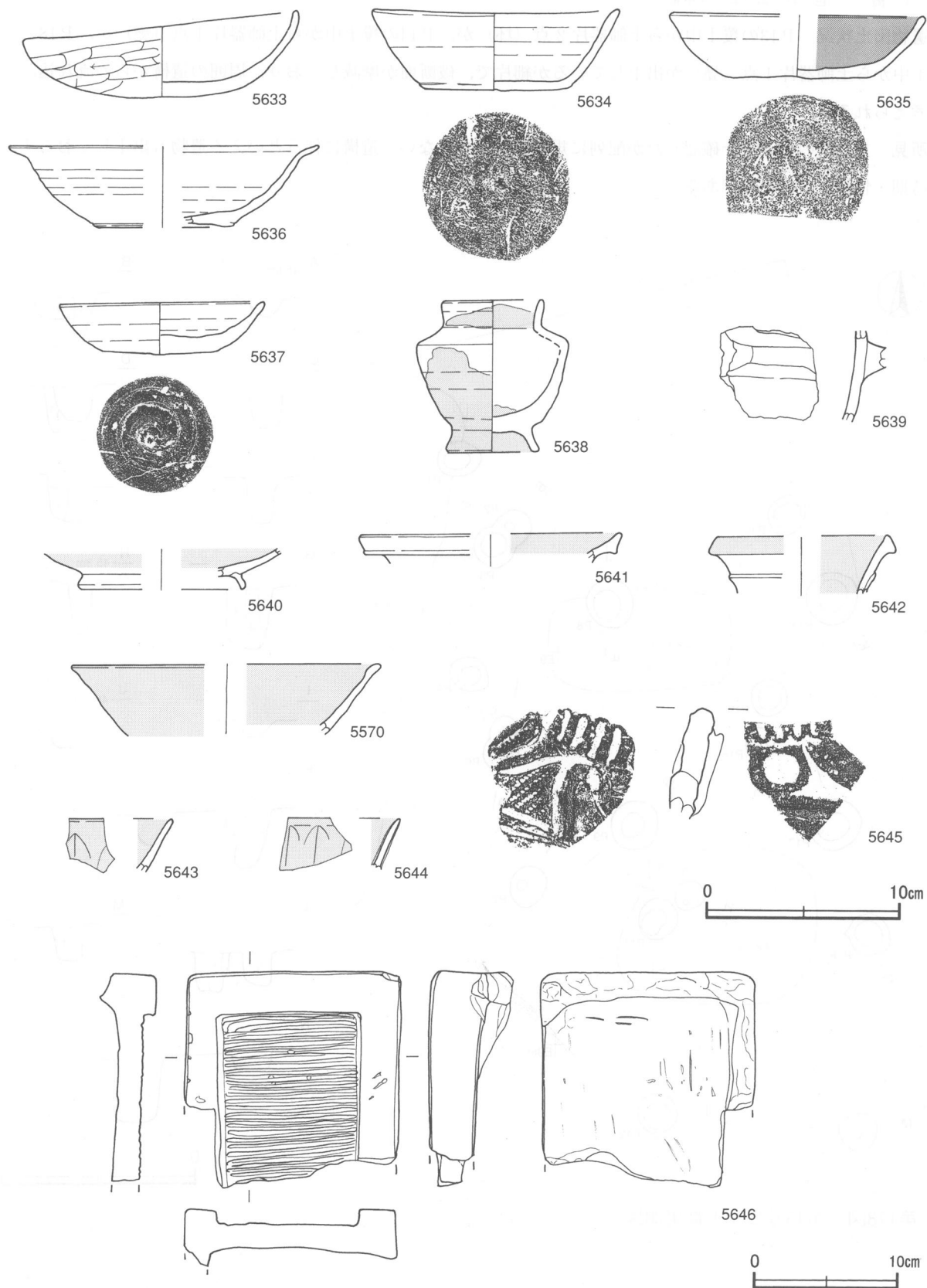
所見 19か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。遺構に伴うといえる遺物も出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



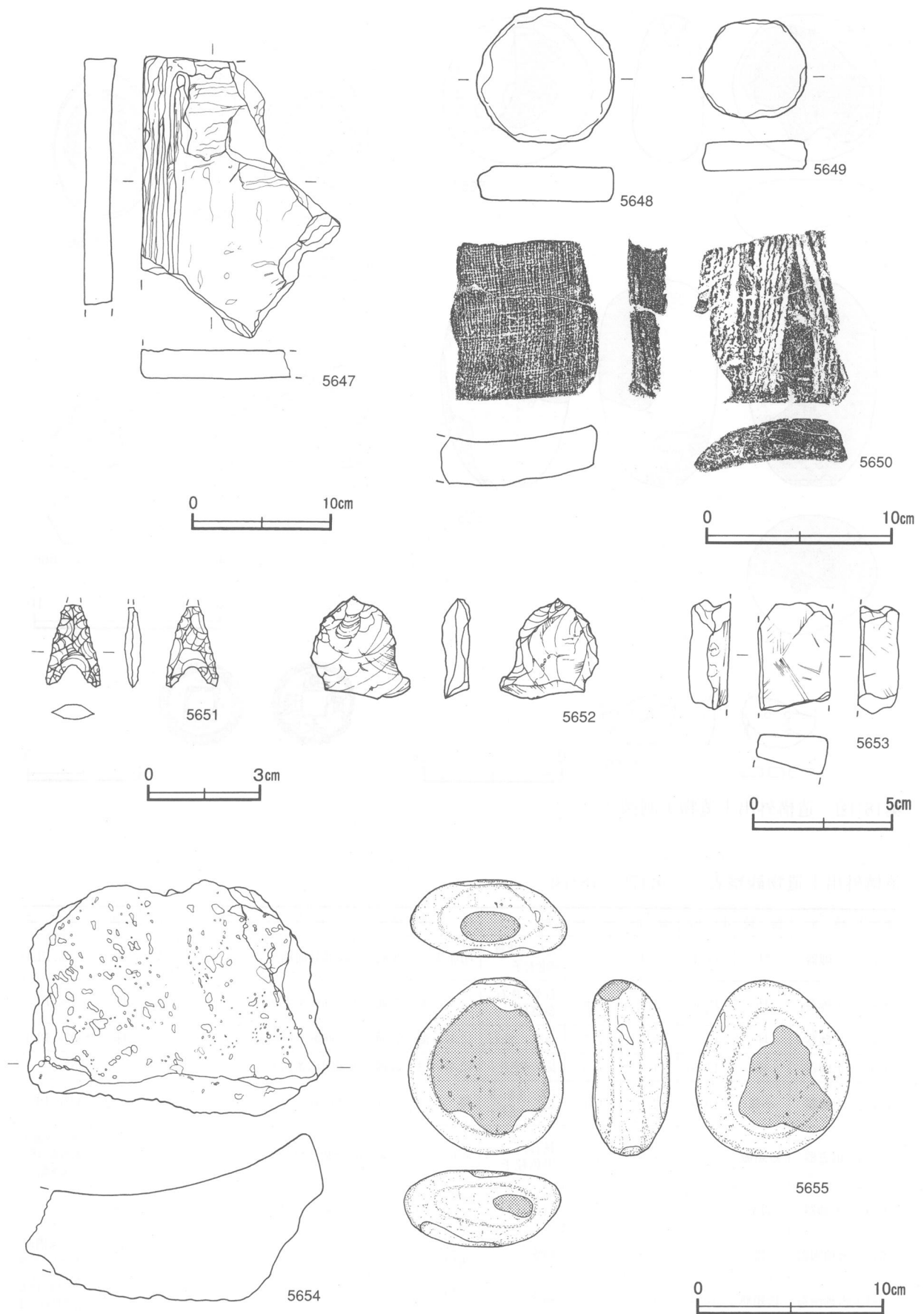
第178図 第45号ピット群実測図

(7) 遺構外出土遺物 (第179~181図)

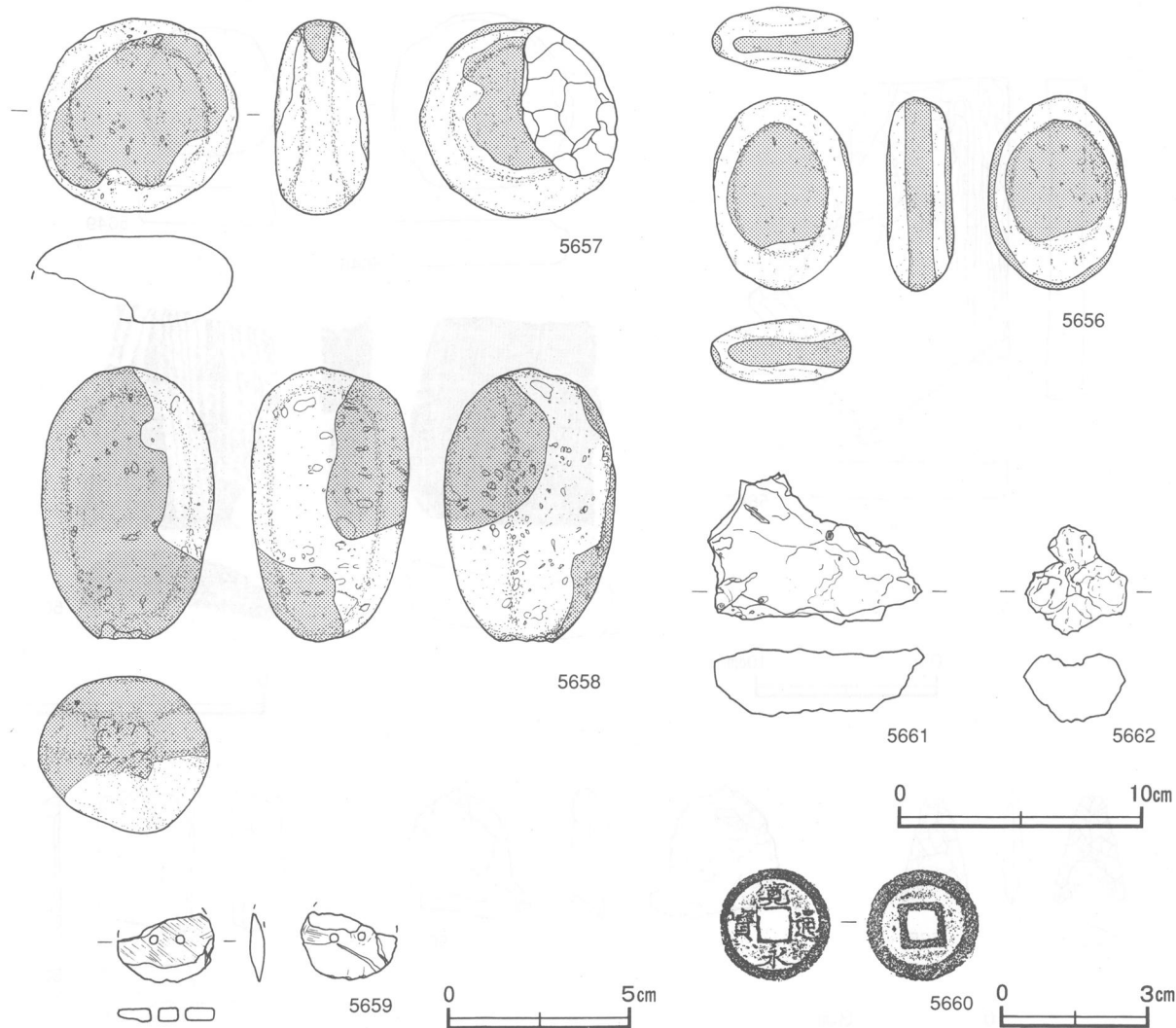
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、主なものを実測図および遺物観察表で掲載する。



第179図 遺構外出土遺物実測図(1)



第180図 遺構外出土遺物実測図(2)



第181図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第179~181図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5633	土師器	坏	14.4	4.4	-	長石, 黒雲母, 赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ, 内面ナデ	Ⅲ区表採	95%, PL41
5634	土師器	坏	12.8	4.3	7.8	石英, 長石, 金雲母	にぶい褐	普通	底部外面不定方向ヘラ削り	Ⅲ区表採	60%, PL41
5635	土師器	坏	[13.2]	3.3	7.5	石英, 長石	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り	Ⅲ区表採	50%, PL41
5636	土師器	坏	[15.8]	4.2	[7.3]	長石, 赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	G12a4区	25%
5637	土師器	小皿	10.5	2.7	6.1	石英, 長石, 黒雲母, 赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	E8j7区	80%, PL41
5638	須恵器	短頸壺	4.9	7.8	4.7	長石, 黒色粒子	灰白	普通	高台貼り付け	F11d8区	100%, 外面自然釉, 内面凹形の降灰, 表面風化, PL41
5639	土師器	羽釜	-	(4.7)	-	石英, 長石, 黒雲母	にぶい褐	普通	突帯貼り付け	Ⅲ区表採	5%
5640	灰釉陶器	皿	-	(2.1)	[8.6]	緻密	灰黄, 灰白	良好	高台貼り付け	Ⅱ区表採	5%, 東濃産光ヶ丘1号窯式
5641	灰釉陶器	長頸瓶	[13.4]	(1.5)	-	緻密	灰白, 灰オリーブ	良好	ロクロナデ	E8j6区	5%, 内面自然釉, 猿投産黒笹90号窯式
5642	灰釉陶器	長頸瓶	[8.8]	(3.0)	-	緻密, 黒色粒子	灰黄, 黄みのにぶい黄緑	良好	ロクロナデ, 頸部突帯貼り付け	SI271	5%, 猿投産, PL41

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5570	緑釉陶器	碗	[13.8]	(3.9)	-	緻密	灰白, 緑みのあざやかな黄緑	良好	ロクロナデ, 緑釉刷毛塗り	Ⅲ区表採	10%, 外面被熱により変色, 炭投産黒笹90号窯式, PL41
5643	青磁	碗	-	(2.8)	-	緻密	灰, 灰オリーブ	良好	鑄蓮弁文	Ⅲ区表採	5%, 龍泉窯産, PL41
5644	青磁	碗	-	(2.7)	-	緻密	灰白, 緑みのうすい黄緑	良好	鑄蓮弁文	K12c3区	5%, 龍泉窯産, PL41
5645	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石	明赤褐	普通	波状口縁の波頂部, 沈線による区画の中にRL単節斜縄文, 隆帯を垂下, 内面に浮き彫り風の文様構成	Ⅱ区表採	5%, 中期中葉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5646	埴	(14.8)	14.7	(4.0)	(838)	粘土	櫛歯状工具による沈線, ナデ, 胎土に石英・長石・金雲母含む	SI648	PL45
5647	埴	(20.2)	(14.3)	(2.2)	(570)	粘土	ナデ, 胎土に石英・長石・金雲母含む	SI647	
5648	土製円盤	7.4	7.4	1.9	129.2	埴転用	外縁を打ち欠いて円盤状に整形, 胎土に石英・長石・金雲母含む	SI647	PL44
5649	土製円盤	5.3	5.8	1.5	59.9	埴転用	外縁を打ち欠いて円盤状に整形, 胎土に石英・長石・金雲母含む	SI647	PL44
5650	平瓦	(8.0)	(9.0)	2.3	247	粘土	凹面布目痕, 凸面縄叩き痕	Ⅳ区表採	
5651	石鏃	(2.1)	1.4	0.4	(0.88)	チャート	無茎, 先端を欠く	SI606	PL45
5652	剥片	3.5	3.6	1.0	9.9	黒曜石	表面・裏面に剥離痕	Ⅱ区表採	PL45
5653	砥石	(3.9)	(2.6)	(1.4)	(22.3)	頁岩	砥面3面	Ⅴ区表採	
5654	石皿	(12.6)	(16.0)	(9.0)	(1660)	安山岩	内面摩滅	D4b4区	PL47
5655	磨石	9.5	8.4	4.1	396	安山岩	両面と側面の一部に擦痕, 端部に敲打痕	SI662	
5656	磨石	7.9	5.7	2.7	135	安山岩	両面と側面全周に擦痕	SI669	PL46
5657	磨石	8.0	8.0	3.9	300	安山岩	両面と側面の一部に擦痕	Ⅱ区表採	
5658	磨石	11.2	7.0	6.4	550	安山岩	前面に擦痕, 端部に敲打痕	SI608	PL46
5659	双孔円板	(1.9)	2.6	0.35	(2.1)	頁岩	両面研磨	SI607	PL45

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5660	寛永通寶	2.3	0.6	1.1	2.3	銅	背面無文	SI659	新寛永, 初鑄年元禄10年(1697), PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5661	鉄滓	8.2	6.1	2.8	80.7	表面茶褐色, 地灰褐色	Ⅴ区表採	
5662	鉄滓	4.5	4.1	2.2	38.0	表面茶褐色, 地暗褐色	Ⅴ区表採	

表3 古墳時代竪穴住居跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	炬・竈	貯蔵穴			
271	F12g6	N-12°-W	方形	4.9×4.9	6~18	平坦	ほぼ 全周	4	1	-	竈1	-	人為	土師器(坏,高坏,甕),須惠器片,灰釉陶器片	7世紀前半
430	K12a4	N-10°-E	[方形]	[6.5]×6.2	20	平坦	一部	-	-	1	(竈1)	-	不明	土師器(坏,高坏,甕)	6世紀前葉
484	E9a1	N-13°-W	長方形	5.6×4.9	13~30	平坦	一部	4	1	-	-	-	人為	土師器(坏,甕,甗)	6世紀前葉
493	E8g0	N-9°-E	方形	5.6×5.4	15~25	平坦	一部	4	1	2	竈1	1	人為	土師器(坏,甕),須惠器片	6世紀前葉
603A	G12a5	N-0°	方形	3.5×3.4	-	平坦	一部	-	1	-	-	-	不明	土師器(坏)	6世紀中葉
603B	G12a5	N-0°	方形	4.6×4.3	-	平坦	一部	3	1	6	(竈1)	-	不明	土師器(坏)	6世紀後葉
603C	G12a5	N-0°	方形	5.5×5.5	20~29	平坦	全周	4	1	-	竈1	1	自然	土師器(坏,甕),須惠器(坏,甕,提瓶)	7世紀前半
606A	F12f3	N-6°-W	方形	4.7×4.3	-	平坦	全周(2)	1	2	(竈1)	-	人為	土師器(坏,甕)	7世紀初頭 ~前葉	
606B	F12f3	N-8°-W	[方形]	[5.9]×5.4	-	平坦	ほぼ 全周	-	-	1	(竈1)	-	人為	土師器(坏,甕),須惠器(甕),砥石	7世紀前半
606C	F12f3	N-5°-W	方形	6.6×6.4	24~26	平坦	全周	4	1	2	竈1	-	自然	土師器(坏,甕),須惠器(坏,甕,甗),支脚,鉄鏝	7世紀後半
608	F12f4	N-10°-W	[方形]	6.7×6.7	24~32	平坦	半周	4	2	1	-	-	自然	土師器(坏,高坏,甕),須惠器(坏,甕),支脚,双孔円板	6世紀後葉
623A	F11c8	N-0°	長方形	4.3×3.0	-	平坦	ほぼ 全周	-	1	1	-	-	不明	土師器(坏,甕),須惠器片	7世紀後半
623B	F11c8	N-0°	長方形	4.3×3.8	8~25	平坦	全周	3	1	2	竈1	-	人為	土師器(坏,甕),須惠器(坏,蓋,台付長頸瓶,甕)	7世紀末葉~ 8世紀初頭
631	F12f4	N-0°	[方・長方形]	4.9×(4.6)	70	平坦	一部	2	-	-	-	-	自然		6世紀中葉 以前
632	F11e9	N-10°-E	方形	3.3×3.2	42~45	平坦	一部	-	1	1	竈1	-	人為	土師器(坏,甕),須惠器(坏,盤,長頸瓶,甕),灰釉陶器片	7世紀後半
666	D5a4	N-94°-E	方形	6.8×6.7	24~44	傾斜	半周	4	1	1	竈1	2	自然	土師器(坏,碗,高坏,小形壺,小形甕,甗,甗),須惠器片,有舌尖頭器	6世紀初頭
667	C4f0	N-4°-W	方形	4.2×4.1	30	傾斜	-	4	1	-	竈1	-	自然	土師器(坏,甕,甗)	7世紀前半
670	C4c7	N-0°	[方・長方形]	5.3×(3.4)	20	平坦	-	2	1	-	-	-	自然	土師器(坏,高坏,鉢,甕),須惠器片	7世紀前半
671	C4b6	N-22°-E	[方・長方形]	6.2×(3.6)	12~22	平坦	-	2	-	-	-	1	自然	土師器(坏,甕,罎,器台),土製支脚	4世紀後半
672	C4b4	N-8°-E	方形	7.4×7.4	18~24	傾斜	-	4	2	1	竈1	1	自然	土師器(坏,甕,甗),紡錘車	6世紀後葉
673	C4a3	N-34°-E	[方・長方形]	4.2×(2.8)	16~20	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器(坏,器台,甕)	5世紀後半
674	C4a1	N-28°-W	[方・長方形]	(5.3)×(3.3)	12~18	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(罎,器台,甕)	4世紀前半
675	C4a1	N-0°	[方・長方形]	8.3×(7.0)	42	傾斜	-	1	-	-	(竈1)	-	自然	土師器(坏,高坏,甕)	6世紀前葉

表4 奈良・平安時代竪穴住居跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	炬・竈	貯蔵穴			
495	E8i9	N-5°-E	長方形	6.0×5.3	12~44	平坦	一部	3	1	-	竈1	1	人為	土師器(甕),須惠器(高台付坏)	8世紀初頭 ~前葉
510	E8g9	不明	不明	(4.5)×(1.2)	10~20	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏,甕)	8世紀代
602A	F12i5	N-1°-W	長方形	5.2×4.3	18~31	平坦	全周	4	-	-	竈1	-	不明		7世紀後葉
602B	F12j5	N-1°-W	長方形	5.2×4.7	18~31	平坦	-	4	1	2	竈1	-	人為	土師器(坏,碗,高坏,甕,甗),須惠器(坏,高台付坏,蓋,高坏,甕),砥石,刀子,鉄鏝,鉄滓	8世紀前葉
604	F11b7	N-8°-E	長方形	4.3×3.7	24~30	平坦	-	-	-	-	竈1	-	自然	土師器(坏,高台付皿,鉢,高坏,甕),須惠器(坏,高台付坏,盤,甕),灰釉陶器(短頸壺,長頸瓶カ)	9世紀後葉
607	F12f5	N-0°	[方・長方形]	5.5×(3.5)	38~50	平坦	-	2	1	-	-	-	自然	土師器(坏,甕),須惠器(坏,高台付坏,蓋,高坏,甕,甗),支脚,紡錘車,双孔円板,剥片,不明石製品,鉄鏝	8世紀前葉
609	F11d7	N-12°-E	方形	3.4×3.2	-	平坦	全周	-	1	1	(竈1)	-	自然	土師器(坏,碗,甕),須惠器(坏,甕)	8世紀後葉
610	F12e2	N-8°-E	[方・長方形]	4.0×(2.8)	31~36	平坦	全周	2	1	-	-	-	自然	土師器(坏,皿,鉢,甕),須惠器(坏,高台付坏,盤,蓋,控鉢,高甕,甕),砥石	9世紀中葉
612	F12h2	N-9°-E	長方形	3.5×3.0	23~32	平坦	-	-	1	-	竈1	-	人為	土師器(坏,高坏,甕,甗),須惠器(坏,高台付坏,蓋,甕),砥石,沈子,釘,碗状滓,燒礫	9世紀前葉
613	F12g1	N-8°-W	長方形	4.0×3.2	8	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏,碗,甕,甗),須惠器(坏,盤,甕),釘	10世紀前葉
615	F12f1	N-5°-W	長方形	2.9×2.5	15~22	平坦	全周	-	1	-	竈1	-	人為	土師器(坏,碗,甕),須惠器(坏,盤,蓋,甕),灰釉陶器(碗,長頸瓶)	10世紀前葉
616	F12f1	N-2°-E	長方形	3.3×2.7	11	平坦	-	-	1	-	竈1	-	人為	土師器(坏,碗,甕),須惠器(坏,高台付坏,蓋,鉢,甕)	9世紀前葉
617	F12e1	N-8°-E	[方・長方形]	3.0×(2.7)	20~24	平坦	全周	-	-	-	竈1	-	人為	土師器(坏,高台付皿,甕),須惠器(坏,蓋,甕),砥石	8世紀中葉
618	F12d1	N-96°-E	長方形	3.4×3.0	8~12	平坦	全周	-	1	1	竈1	-	不明	土師器(坏,碗,小形甕,甕),須惠器(坏,甕),灰釉陶器(碗)	10世紀前葉

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
619	F11e0	N-15°-E	長方形	5.1×4.4	16~24	平坦	全周	-	1	2	竈1	1	人為	土師器(坏, 碗, 皿, 高台付皿, 耳皿, 鉢, 器台, 甕, 甌), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 蓋, 鉢, 瓶, 甕), 灰釉陶器(碗カ, 長頸瓶), 管状土錘, 釘	9世紀後葉
621	F11c9	N-12°-E	[方・長方形]	2.6×(1.0)	18~20	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 甕), 須惠器(坏, 甕), 鉄滓	10世紀以降
622	F11c9	N-101°-E	[方・長方形]	4.6×(3.2)	2~12	平坦	全周	-	-	3	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 皿, 高台付皿, 鉢, 高坏, 甕), 須惠器(坏, 蓋, 瓶, 甕), 緑釉陶器(皿カ), 支脚, 鉄滓	9世紀後葉
624	F11b6	N-10°-E	方形	3.8×3.8	30	平坦	全周	-	-	-	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 甕), 紡錘車, 刀子, 瓦	9世紀前葉
625	F11d7	N-2°-E	長方形	4.4×3.9	10~20	平坦	-	-	-	1	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 皿, 器台, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 鉢, 甕), 灰釉陶器(長頸瓶), 球状土錘, 支脚, 砥石	9世紀後葉
627	F11d8	N-8°-E	長方形	5.0×3.3	12~16	平坦	全周	-	1	2	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 甕), 灰釉陶器(碗, 皿, 長頸瓶), 緑釉陶器(碗, 棧碗), 球状土錘, 支脚, 鉄滓	9世紀後葉
628	F11d6	N-0°	[方・長方形]	2.8×(1.0)	25~30	平坦	全周	-	-	1	-	-	自然	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 甕)	9世紀後葉
629	F11e6	N-2°-E	長方形	4.3×3.5	11~20	平坦	-	-	-	3	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 皿, 高台付皿, 鉢, 甕), 須惠器(坏, 盤, 甕), 灰釉陶器(碗), 刀子	10世紀前葉
630	F11e7	N-12°-E	長方形	3.8×3.0	14~25	平坦	一部	-	1	1	竈1	1	人為	土師器(坏, 碗, 皿, 高台付皿, 鉢, 甕), 須惠器(坏, 盤, 蓋, 甕), 灰釉陶器(長頸瓶)	9世紀中葉
633	F11e8	N-97°-E	方形	3.0×3.0	10~12	平坦	-	-	1	1	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 甕)	10世紀中葉
634	F11e9	N-102°-E	方形	2.7×2.5	30~35	平坦	-	-	-	-	竈1	-	自然	土師器(坏, 甕), 須惠器(坏, 盤, 蓋, 鉢, 甕)	9世紀後葉
635	F11g7	N-61°-E	方形	2.4×2.2	4	平坦	-	-	-	-	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 甕), 灰釉陶器(碗), 支脚カ	10世紀後葉
636	F11h9	N-11°-E	方形	4.1×3.8	28~38	平坦	全周	-	-	-	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 高坏, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 長頸瓶, 甕)	8世紀前葉
637	F12d1	不明	[方・長方形]	(2.4)×(0.9)	16~20	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器(碗, 甕)	10世紀以降
642	F11e0	N-12°-E	長方形	3.3×2.9	-	-	全周	-	1	1	-	-	不明	土師器(坏, 碗, 鉢, 甕), 須惠器(坏, 高盤, 甕), 刀子カ	8世紀以降, 9世紀後葉以前
644	K12c2	N-33°-E	方形	2.6×2.5	5	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 碗, 小皿, 甕), 須惠器(蓋, 甕)	10世紀後半以降
646	K12a3	不明	[方・長方形]	(2.3)×(1.2)	9	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 甕), 須惠器(甕)	10世紀前葉
647	E8e5	N-0°	[方・長方形]	[6.5]×(5.3)	62	傾斜	一部	3	1	-	-	-	自然	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 瓶, 甕)	8世紀前葉
648	E8g5	N-20°-E	方形	5.0×4.9	66~88	傾斜	一部	4	1	-	竈1	-	自然	土師器(坏, 碗, 高坏, 甕, 甌), 須惠器(坏, コップ形, 高台付坏, 盤, 蓋, 長頸瓶, 甕), 灰釉陶器(長頸瓶), 漆付着土器, 瓦, 支脚, 紡錘車, 羽口, 砥石, 釘, 鉄滓	8世紀後葉
649	F8a3	N-10°-E	[方・長方形]	4.6×(3.8)	16	傾斜	一部	-	-	-	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 高台付皿, 蓋, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏), 砥石	10世紀前葉
650	E8h5	N-91°-E	長方形	2.9×2.1	25~32	傾斜	-	-	-	1	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 小皿, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 瓶, 甕), 鉄滓, 鉄滓	11世紀前半
651	E8h4	N-90°-E	長方形	3.3×2.7	12~25	傾斜	-	-	-	1	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 皿, 高台付皿, 鉢, 甕), 須惠器(坏, 蓋, 甕)	9世紀後葉
652	E8i4	N-5°-W	方形	3.5×3.3	12~20	傾斜	-	-	-	-	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 甕), 紡錘車	9世紀中葉
653	E8j4	N-9°-E	[方・長方形]	3.8×(1.4)	6	傾斜	一部	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 甕), 須惠器(甕)	9世紀後葉
654	F8b5	N-10°-E	方形	4.7×4.3	50	傾斜	一部	-	-	2	竈1	-	自然	土師器(坏, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 盤, 甕), 鉄滓	9世紀中葉
655	F8d8	N-13°-E	[方・長方形]	4.6×(3.0)	15	傾斜	一部	-	-	-	竈1	-	不明		8世紀代カ
656	F8c8	N-15°-E	[方・長方形]	3.0×(2.8)	12~30	傾斜	一部	-	-	-	-	-	自然	土師器(坏, 碗, 皿, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 蓋, 甕)	9世紀後葉
657	E8g7	N-113°-E	[長方形]	(3.7)×(2.8)	10~30	傾斜	-	-	-	-	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 皿, 甕), 須惠器(坏), 灰釉陶器(皿), 漆付着土器, 土製円盤, 鉄滓	10世紀後葉
658	E8g7	N-85°-E	長方形	3.2×2.5	15~32	傾斜	-	-	-	-	-	-	人為	土師器(坏, 碗, 小皿, 甕), 須惠器(蓋), 砥石, 焼礫	10世紀中葉
661	F8a7	N-110°-E	[長方形]	(2.3)×(2.0)	16~20	傾斜	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 碗, 甕, 甌), 須惠器(坏), 灰釉陶器(瓶カ), 焼礫	11世紀前半
662	F8a7	N-10°-E	長方形	3.4×2.8	26~34	傾斜	一部	-	-	2	竈1	-	不明	土師器(坏, 碗, 小皿, 甕), 須惠器(坏, 甕), 砥石, 磨石	10世紀後葉
663	F8a7	N-8°-E	方形	3.3×3.1	18~20	傾斜	一部	-	1	2	竈1	-	人為	土師器(坏, 碗, 小皿, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 長頸瓶, 甕, 甌), 瓦, 焼礫	10世紀中葉
664	E8j8	N-97°-E	長方形	3.9×2.9	10~30	傾斜	一部	-	1	1	竈1	1	自然	土師器(坏, 碗, 甕), 羽口, 砥石	11世紀前半
665	E8j8	N-7°-E	方形	2.8×2.8	16	傾斜	一部	-	1	-	竈1	-	不明	土師器(坏, 甕), 須惠器(坏, 甕), 灰釉陶器(瓶), 漆付着土器	9世紀後葉
668	C4c9	N-3°-E	[方・長方形]	4.1×(2.6)	12~44	平坦	-	2	-	-	-	-	自然	土師器(坏)	8世紀以降
669	C4c8	N-7°-W	方形	3.3×3.1	12~20	傾斜	-	-	2	2	竈1	-	自然	土師器(坏, 鉢, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 甕)	9世紀前葉
693	C4a3	N-2°-W	[方・長方形]	(2.0)×(0.9)	60	平坦	全周	-	-	1	-	-	自然	土師器(甕)	8世紀以降

表5 掘立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模(m)	面積 (㎡)	構造	桁柱間 (m)	梁間柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	備考(時期)
12	E 9 c1	N-86°-E	3×2	7.5×4.8	36.0	側柱	2.5	2.5	円形, 楕円形	40~80	礫	10世紀前半
42	F11b7	N-8°-E	(1)×2	(2.1)×3.3	(6.9)	側柱	1.5~1.8	1.5	隅丸方形	20~26	土師器片, 須恵器片	10世紀以降, 旧S B601
43	F11g8	N-89°-E	3×2	5.6×4.2	23.5	側柱	1.5~2.1	1.95~2.3	円形	25~65	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉以降, 旧S B602

表6 土坑一覽表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	主な出土遺物	備考
1601	F12e3	N-0°	楕円形	0.40×0.34	60	外傾	平坦		
1602	F12e3	N-0°	楕円形	0.25×0.20	28	外傾	皿状		
1603	F12e3	N-0°	円形	0.40×[0.38]	64	外傾	平坦		
1604	F12g6	N-90°	楕円形	1.02×0.80	10	外傾	皿状	土師器片	
1605	F12e2	N-0°	円形	0.30×0.30	38	外傾	皿状		
1607	F12i6	N-0°	円形	0.42×0.38	50	外傾	皿状	土師器片	
1612	F12j6	N-65°-E	楕円形	0.56×0.42	40	外傾	平坦	土師器片	
1615	F12j6	N-70°-W	楕円形	0.42×0.34	28	外傾	皿状		
1616	F12j6	N-90°	楕円形	0.38×0.30	22	外傾	皿状		
1617	F12j5	N-40°-W	楕円形	1.12×0.72	14	外傾	平坦		
1618	F12j6	N-200°-E	楕円形	0.30×0.20	50	外傾	皿状		
1619	F12g2	N-90°	楕円形	1.10×0.86	20	外傾	平坦		
1620	F12f2	N-350°-E	楕円形	0.54×0.44	30	外傾	皿状		
1621	F12f2	N-0°	円形	0.46×0.46	22	外傾	皿状	土師器片	
1622	F12i5	N-30°-W	円形	0.24×0.22	38	外傾	皿状		
1623	F12j6	N-35°-W	隅丸方形	0.68×0.56	46	外傾	皿状	土師器片	
1624	F12j5	N-35°-W	楕円形	0.44×0.36	46	外傾	皿状		
1625	F12j5	N-28°-W	円形	0.22×0.20	28	垂直	平坦	土師器片	
1626	F12j5	N-80°-W	楕円形	0.40×0.34	30	外傾	皿状		
1627	F12j5	N-0°	円形	0.34×0.32	38	外傾	皿状		
1628	F12h3	N-0°	円形	0.40×0.38	12	外傾	皿状		
1629	F12h3	N-0°	円形	0.56×0.52	46	緩斜	皿状		
1630	F12h4	N-80°-E	楕円形	1.20×0.72	24	外傾	平坦		
1631	F11d0	N-0°	円形	0.66×0.64	22	外傾	平坦		
1632	F11c0	N-0°	円形	0.30×0.30	40	外傾	皿状		
1633	F12h4	N-20°-E	楕円形	0.96×0.56	32	外傾	皿状	土師器片	
1634	F12h4	N-90°	楕円形	0.50×0.44	35	外傾	皿状	土師器片	
1635	F12h4	N-60°-W	楕円形	0.66×0.55	17	外傾	平坦	礫片	
1636	F11c9	N-70°-E	楕円形	0.70×0.50	28	外傾	凹凸		
1637	F12h3	N-0°	円形	0.42×0.42	22	外傾	平坦	土師器片	
1638	F12h4	N-0°	円形	0.28×0.28	19	垂直	平坦		
1639	F12h4	N-0°	円形	0.44×0.42	20	外傾	平坦		
1640	F12i4	N-0°	円形	0.50×0.50	24	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片	
1641	F12i4	N-0°	円形	0.90×0.84	18	外傾	平坦		
1642	F11e7	N-20°-E	楕円形	0.75×0.64	30	外傾	平坦		
1643	F11c9	N-32°-E	楕円形	0.76×0.50	16	緩斜	皿状	土師器片	
1644	F11d8	N-20°-W	楕円形	0.62×0.42	28	外傾	皿状	土師器片, 須恵器片	
1645	F11b7	N-75°-E	楕円形	0.78×0.63	24	外傾	平坦	土師器片	
1646	F11c9	N-0°	楕円形	0.46×0.32	40	外傾	皿状	土師器片, 灰釉陶器片	10世紀以降
1647	F11h7	N-0°	円形	0.88×0.85	19	緩斜	平坦		
1649	F12i4	N-0°	楕円形	0.46×0.40	26	外傾	平坦	須恵器	
1650	F12i4	N-96°-E	楕円形	0.48×0.32	14	外傾	皿状	土師器片	
1651	F12i4	N-25°-E	楕円形	0.66×0.50	16	外傾	平坦		
1652	F12i4	N-25°-E	楕円形	0.70×0.60	78	外傾	平坦		
1653	F12i4	N-30°-E	楕円形	0.90×0.52	12	外傾	平坦	須恵器	
1654	F11g6	N-52°-W	楕円形	0.29×0.25	75	垂直	皿状		
1655	F11g6	N-0°	円形	0.97×0.91	42	外傾	平坦		
1656	F12i4	N-56°-W	楕円形	0.98×0.82	15	外傾	平坦	土師器片	6世紀以降
1657	F12h3	N-0°	円形	0.40×0.40	14	外傾	皿状		
1658	F12j4	N-0°	円形	0.50×0.48	22	外傾	平坦		
1659	F12h3	N-60°-W	楕円形	0.60×0.46	28	外傾	平坦	土師器片	
1660	F12h3	N-0°	円形	0.30×0.28	25	垂直	平坦		
1661	F12i3	N-0°	円形	0.38×0.34	16	外傾	皿状	土師器片, 須恵器片	
1662	F12i3	N-80°-E	楕円形	0.90×0.62	22	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片	

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	主な出土遺物	備考
1663	F12i3	N-0°	円形	0.40×0.36	26	外傾	皿状	土師器片	
1664	F12i3	N-70°-W	楕円形	1.72×1.12	21	外傾	平坦	土師器片	
1665	F12i3	N-15°-E	楕円形	0.82×0.58	40	外傾	凹凸	土師器片	
1666	F12i3	N-23°-W	楕円形	0.60×0.50	34	外傾	皿状	土師器片	
1667	F12i4	N-0°	不整円形	1.00×0.92	30	外傾	凹凸	土師器片	
1668	F12i3	N-0°	円形	0.70×0.66	12	外傾	平坦		
1669	F12j3	N-0°	円形	0.80×0.78	18	外傾	皿状	土師器片, 弥生土器片	
1670	F12i4	N-69°-W	円形	0.62×0.60	32	外傾	凹凸	土師器片	
1671	F12j6	N-0°	円形	0.26×0.26	20	外傾	皿状	土師器片	
1672	F12i3	N-15°-E	楕円形	0.44×0.32	48	外傾	皿状	土師器片	
1673	F12j3	N-50°-W	[楕円形]	[0.94]×0.72	15	外傾	平坦		
1674	F12j2	N-0°	円形	0.46×0.42	40	垂直	平坦	土師器片	
1675	F12j6	N-0°	円形	0.30×0.28	23	外傾	皿状		
1677	F12i3	N-0°	楕円形	0.50×0.40	24	外傾	平坦	土師器片, 灰釉陶器片	
1678	F12i2	N-10°-W	楕円形	1.40×0.80	18	外傾	平坦	土師器片	
1679	F12j2	N-23°-E	不整楕円形	0.93×0.81	9	緩斜	凹凸	土師器片	
1680	F11g7	N-83°-W	楕円形	0.80×0.70	20	外傾	平坦		
1685	F12e2	N-0°	円形	0.74×0.68	12	外傾	平坦	土師器片	
1686	F12f2	N-60°-W	楕円形	0.34×0.28	48	外傾	皿状		
1687	F12f2	N-0°	円形	0.56×0.60	20	外傾	皿状		
1688	F12f2	N-0°	円形	0.50×0.46	14	外傾	皿状		
1691	F12i2	N-0°	円形	0.64×0.60	15	外傾	皿状		
1694	F12h1	N-80°-E	楕円形	1.53×1.19	20	緩斜	平坦		
1695	F12i1	N-0°	円形	1.50×1.43	17	緩斜	平坦		
1699	F11g9	N-0°	円形	1.42×1.33	16	外傾	平坦	土師器片	
1700	F11d9	N-85°-W	楕円形	0.56×0.30	40	垂直	凹凸		
1701	F11c9	N-0°	円形	0.30×0.30	42	垂直	平坦		
1703	F11c0	N-50°-W	[隅丸方形]	1.12×(0.60)	22	外傾	平坦	土師器片, 須惠器片	
1705	F11f9	N-85°-E	楕円形	0.88×0.86	16	緩斜	凹凸		
1706	F11f8	N-0°	円形	0.70×0.69	47	緩斜	凹凸		
1707	F11g9	N-0°	円形	0.88×0.82	41	外傾	凹凸		
1708	F11e8	N-80°-W	楕円形	0.63×0.52	22	外傾	皿状	土師器片, 須惠器片	
1709	F11h8	N-42°-E	楕円形	0.28×0.24	26	垂直	皿状		
1710	F11g8	N-0°	円形	0.40×0.38	42	垂直	平坦		
1713	F11j0	N-0°	円形	1.34×1.34	56	外傾	凹凸	土師器片, 須惠器片	9世紀前葉
1716	F11b5	-	-	0.80×(0.34)	16	外傾	皿状		
1717	F11b5	不明	[円形]	1.16×(0.41)	38	外傾	平坦	土師器片, 須惠器片, 灰釉陶器片	9世紀以降
1718	F11b5	-	-	1.28×(0.60)	12	緩斜	平坦		
1722	G2a6	N-0°	円形	0.57×0.56	12	外傾	皿状	土師器片	
1723	G2b6	N-0°	円形	0.30×0.30	54	垂直	皿状		
1726	F11f6	N-82°-W	楕円形	1.40×0.74	12	外傾	平坦		
1727	F11f7	N-83°-W	楕円形	0.84×0.68	18	外傾	凹凸		
1728	F11f8	N-86°-W	楕円形	1.09×0.89	33	外傾	平坦		
1730	F11f6	N-0°	円形	0.84×0.78	12	外傾	平坦		
1731	F11e8	N-70°-W	楕円形	0.94×0.76	14	外傾	平坦		
1732	F11h8	N-48°-E	楕円形	0.34×0.28	28	垂直	皿状		
1733	F11f6	N-81°-W	楕円形	1.10×0.86	26	外傾	平坦		
1734	G12b5	N-62°-W	楕円形	0.58×0.34	28	外傾	皿状		
1736	F11h7	N-0°	円形	0.30×0.28	13	垂直	平坦		
1737	F11h7	N-0°	円形	0.23×0.23	40	垂直	皿状		
1738	F11h8	N-0°	楕円形	0.28×0.26	24	外傾	皿状		
1740	F11i6	N-40°-E	楕円形	0.78×0.77	28	外傾	平坦		
1741	F11i6	N-21°-W	楕円形	1.20×1.10	32	外傾	平坦		
1742	F11i9	N-70°-W	楕円形	0.96×0.82	24	外傾	凹凸		
1743	F11h8	N-0°	円形	0.26×0.23	28	外傾	皿状		
1744	F11h9	N-80°-W	楕円形	1.30×[1.30]	24	外傾	平坦	土師器片, 弥生土器片	
1745	F11g6	N-0°	円形	0.50×0.46	21	外傾	皿状	土師器片, 須惠器片	10世紀後葉以降
1746	F12g6	N-90°	楕円形	1.14×0.76	6	外傾	平坦	土師器片, 須惠器片	
1748	F12h6	N-64°-E	楕円形	0.86×0.60	20	緩斜	皿状	土師器片, 須惠器片	
1749	F12h3	N-0°	円形	0.40×0.38	12	外傾	皿状		
1750	F12h3	N-0°	円形	0.22×0.20	6	外傾	平坦		
1751	F12i3	-	(円形)	0.54×(0.40)	11	外傾	平坦		
1752	F12i2	N-18°-E	楕円形	1.30×0.66	12	外傾	平坦	土師器片	
1753	F12h2	N-0°	円形	0.46×0.42	46	外傾	平坦	土師器片	
1754	F12g3	N-90°	楕円形	1.08×0.80	42	外傾	平坦		
1755	F11f6	N-17°-E	楕円形	0.56×0.40	16	外傾	平坦		
1756	F11b8	N-0°	円形	0.37×0.35	26	垂直	平坦		

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	高さ (cm)	壁面	底面	主な出土遺物	備考
1758	F11c8	N-22°-W	隅丸長方形	0.71×0.64	9	外傾	平坦		
1763	F11i8	N-0°	円形	0.40×0.39	16	外傾	皿状		
1764	F11i8	N-0°	円形	0.73×0.66	26	外傾	皿状		
1765	F11j9	N-0°	円形	0.30×0.29	42	垂直	皿状		
1766	F11j9	N-30°-E	楕円形	0.40×0.32	44	垂直	皿状		
1767	F12j2	N-0°	円形	0.25×0.23	27	外傾	皿状		
1768	F12j2	N-72°-E	不整楕円形	0.60×0.38	38	垂直	皿状		
1769	F12j2	N-60°-E	楕円形	0.19×0.12	28	垂直	皿状		
1770	F12g2	N-0°	円形	0.48×0.46	14	外傾	平坦	土師器片	
1771	F12j3	N-68°-E	不整楕円形	0.79×0.63	51	垂直	凹凸	土師器片	
1772	G12a3	N-0°	円形	0.85×0.84	9	外傾	平坦	土師器片	
1775	F12j2	N-76°-E	長楕円形	2.07×0.47	58	外傾	凹凸		
1776	G12a4	N-70°-W	不整楕円形	1.47×0.86	48	外傾	凹凸	土師器片, 須恵器片	
1777	F12j4	N-0°	不整円形	0.84×0.82	28	外傾	皿状		
1778	F12j2	N-38°-W	不定形	0.62×0.48	65	外傾	凹凸	土師器片	
1779	F12j2	N-90°	楕円形	0.37×0.28	19	外傾	皿状	土師器片	
1780	F12j3	N-30°-E	楕円形	0.70×0.45	69	外傾	凹凸	土師器片	
1781	F12h5	N-14°-W	楕円形	1.52×1.12	42	外傾	凹凸		
1782	F12f6	N-0°	楕円形	0.38×0.34	20	外傾	皿状	土師器片	
1783	F12g7	N-0°	円形	0.56×0.54	50	垂直	平坦	土師器片	
1784	F12h6	N-0°	円形	0.50×0.50	50	垂直	平坦	土師器片	
1785	F12h6	N-0°	不整楕円形	0.96×(0.70)	33	外傾	平坦		
1786	F12j4	N-16°-E	楕円形	0.65×0.43	34	垂直	平坦		
1787	F12j4	N-53°-E	楕円形	0.96×0.83	42	外傾	皿状		
1788	G12a4	-	[円形]	0.98×(0.94)	12	外傾	平坦		
1791	F12j4	N-0°	円形	0.30×0.28	36	外傾	平坦		
1792	F11c8	N-82°-E	楕円形	0.51×0.43	28	外傾	皿状	土師器片, 緑釉陶器片	
1793	F11b8	N-0°	[円形]	[0.44]×[0.44]	46	外傾	凹凸		
1801	K12c1	-	円形	(0.85)×(0.73)	16	緩斜	平坦		
1802	K12c1	N-0°	円形	0.90×0.90	15	外傾	平坦	土師器片, 鉄滓	不明
1803	K12c1	N-66°-W	楕円形	0.63×0.50	23	外傾	平坦	土師器片	
1804	K12c2	N-28°-W	楕円形	0.61×0.53	28	外傾	平坦		
1805	K12c1	N-30°-E	楕円形	0.36×0.30	44	外傾	皿状		
1806	K12c2	N-35°-E	楕円形	0.27×0.22	47	外傾	皿状		
1807	K12c3	N-0°	円形	0.43×0.42	44	垂直	皿状	土師器片	
1808	K12c3	N-0°	円形	0.38×0.38	46	垂直	皿状		
1809	K12c3	N-0°	円形	0.38×0.37	18	外傾	皿状		
1810	K12c3	N-0°	不定形	0.54×0.48	23	緩斜	凹凸	土師器片	
1811	K12d3	N-8°-E	隅丸長方形	0.42×0.24	39	外傾	皿状		
1812	K12c3	N-0°	円形	0.58×0.57	24	垂直	平坦		
1813	K12c2	N-11°-W	円形	0.31×0.30	24	外傾	皿状	土師器片	不明
1814	K12c3	N-12°-E	不定形	0.78×0.60	20	緩斜	凹凸	土師器片, 須恵器片	
1815	K12c3	N-0°	円形	0.32×0.32	38	外傾	皿状		
1816	K12c3	N-10°-E	楕円形	0.36×0.28	38	外傾	皿状	土師器片	
1817	K12c3	N-14°-E	楕円形	0.28×0.24	38	垂直	皿状		
1818	K12b4	N-70°-W	隅丸長方形	0.52×0.41	46	外傾	皿状		
1819	K12b4	N-24°-E	隅丸長方形	1.10×0.96	38	外傾	傾斜	土師器片, 砥石	不明
1820	K12c3	N-83°-E	楕円形	1.26×0.97	28	緩斜	凹凸		
1821	K12c2	N-0°	不整円形	0.99×0.94	24	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片, 羽口	10世紀以降
1822	K12b3	N-36°-E	楕円形	0.40×0.34	32	外傾	皿状		
1823	K12c3	N-65°-E	ひょうたん型	0.50×0.32	54	垂直	凹凸		
1824	K12c3	N-90°	楕円形	0.31×0.28	23	外傾	皿状		
1825	K12c2	N-66°-W	楕円形	0.79×0.72	38	緩斜	平坦	土師器片	
1826	K12c3	N-17°-E	隅丸長方形	1.59×1.27	20	外傾	平坦	土師器片	
1827	K12c2	-	不定形	(0.58)×(0.56)	24	-	-		
1828	K12c2	N-70°-E	楕円形	1.44×1.30	20	外傾	平坦	土師器片	
1829	K12b3	N-0°	円形	0.30×0.28	25	外傾	皿状		
1830	K12c2	N-47°-E	楕円形	0.63×0.38	53	垂直	皿状	土師器片	
1831	K12b3	N-26°-W	楕円形	0.37×0.30	53	垂直	凹凸	土師器片, 鉄滓	
1832	K12b3	N-72°-W	ひょうたん型	0.48×0.34	36	外傾	皿状		
1833	K12b2	N-0°	円形	0.33×0.30	22	垂直	皿状		
1834	K12b3	N-78°-E	楕円形	0.33×0.28	36	外傾	皿状		
1835	K12b2	N-48°-W	[楕円形]	(1.55)×1.25	4	緩斜	平坦		
1836	K12b3	N-0°	円形	0.30×0.30	30	外傾	皿状		
1837	K12b3	N-0°	円形	0.31×0.30	40	外傾	皿状		
1838	K12b2	N-13°-E	隅丸長方形	0.41×0.25	40	垂直	皿状	土師器片	
1839	K12b3	N-0°	円形	0.38×0.37	26	外傾	皿状		

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	高さ (cm)	壁面	底面	主な出土遺物	備考
1840	K12a3	N-51°-E	[楕円形]	1.55×(0.62)	44	外傾	平坦	土師器片, 弥生土器片	
1841	K12b2	N-39°-E	楕円形	0.36×0.24	45	外傾	皿状		
1842	K12b3	N-31°-E	楕円形	0.84×0.71	14	外傾	平坦	土師器片	
1843	K12b4	N-30°-W	楕円形	0.31×0.24	64	垂直	平坦		
1844	K12b4	N-76°-W	隅丸長方形	0.51×0.42	22	外傾	皿状		
1845	K12c4	N-40°-E	楕円形	0.32×0.29	24	外傾	皿状		
1846	K12b4	N-0°	円形	0.51×0.49	30	外傾	平坦	土師器片	
1848	K12a3	N-82°-W	不整形円形	0.31×0.28	37	外傾	皿状		
1849	K12a3	N-77°-W	楕円形	1.39×1.23	14	緩斜	平坦		
1850	J12j4	N-50°-E	-	(1.70)×(0.96)	47	外傾	平坦		
1851	J12j4	N-44°-E	楕円形	0.25×0.20	14	外傾	皿状		
1852	J12j4	N-40°-E	楕円形	0.27×0.24	24	外傾	皿状		
1853	K12b2	N-39°-E	楕円形	0.25×0.22	45	垂直	皿状		
1854	J12j4	N-43°-E	楕円形	0.31×0.26	24	外傾	皿状		
1855	J12j4	N-65°-W	楕円形	0.29×0.25	26	外傾	平坦		
1856	J12i4	N-350°-E	[円・楕円形]	(0.50)×(0.24)	56	外傾	皿状		
1857	J12i5	N-20°-E	[楕円形]	1.61×(0.80)	17	外傾	平坦		
1858	K12b3	N-0°	円形	0.27×0.25	51	垂直	皿状	土師器片, 弥生土器片	
1859	K12c2	N-30°-E	[隅丸方形]	(0.35)×0.34	23	外傾	皿状		
1860	K12c2	N-64°-W	楕円形	0.46×0.23	24	外傾	皿状	土師器片, 縄文土器片	
1861	K12b3	N-0°	円形	0.34×0.31	29	外傾	皿状		
1862	K12b3	N-0°	円形	0.49×0.45	32	外傾	皿状		
1875	E8j3	N-0°	円形	0.25×0.23	38	垂直	皿状		
1876	E8f5	N-42°-W	楕円形	2.62×0.70	38	垂直	皿状	土師器片	
1877	E8h7	N-80°-W	楕円形	2.18×1.38	28	外傾	皿状	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	8世紀前葉以降
1878	F8b7	N-55°-E	楕円形	1.05×0.86	27	緩斜	皿状		
1879	E8b0	N-11°-E	楕円形	1.60×0.96	12	外傾	平坦	土師器片, 鉄滓	不明
1880	E8d0	N-39°-E	楕円形	1.50×1.21	25	緩斜	平坦		
1882	F11e0	N-71°-W	不整形楕円形	0.40×0.38	40	外傾	皿状	土師器片, 須恵器片	
1883	F11e9	N-0°	楕円形	0.36×0.32	38	外傾	皿状		
1884	F11e9	N-0°	円形	0.38×0.36	22	外傾	平坦		
1885	F11d0	N-0°	円形	0.46×0.44	52	外傾	皿状		
1886	F11d0	N-90°	楕円形	0.40×0.36	53	外傾	皿状		
1887	F11d9	N-55°-E	楕円形	0.42×0.38	38	外傾	皿状		
1888	F11d9	N-0°	円形	0.52×0.48	36	外傾	皿状		
1889	F11d0	N-30°-E	楕円形	0.50×0.42	44	外傾	皿状		
1900	E9a0	N-63°-W	不整形楕円形	2.02×1.68	10	緩斜	平坦	土師器片	
1901	D9j0	N-90°	長方形	1.89×1.05	19	緩斜	平坦		
1902	F8a7	-	不定形	[1.84]×[0.90]	42	外傾	凹凸		
1903	E8c0	N-83°-W	長方形	1.50×0.88	48	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片	中世以降
1904	E8c0	N-17°-E	楕円形	0.92×0.77	9	緩斜	平坦	土師器片	
1905	E8c0	N-63°-W	長方形	2.10×0.94	44	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片	中世以降
1906	E8c0	N-50°-W	[楕円形]	0.90×0.83	19	緩斜	平坦	土師器片	
1907	E8c0	N-0°	不定形	1.76×1.68	30	外傾	平坦	土師器片	
1909	E8e9	N-12°-E	[円形または楕円形]	(0.64)×(0.24)	40	緩斜	皿状		
1912	E8j7	N-10°-E	不定形	1.65×1.10	34	外傾	凹凸		
1913	F8a8	N-0°	隅丸方形	0.90×0.80	40	垂直	平坦	土師器片, 須恵器片	
1914	F8a7	N-90°	不整形方形	0.90×0.85	56	垂直	凹凸		
1915	F8b7	N-11°-W	不整形長方形	1.58×0.90	26	垂直	平坦	土師器片, 須恵器片	
1951	K12b3	N-28°-E	不整形楕円形	1.36×0.92	17	緩斜	凹凸		
2001	C4b4	N-90°	楕円形	1.10×0.96	7	外傾	平坦	土師器片, 須恵器片	
2002	C4d2	N-0°	楕円形	1.30×1.09	7	緩斜	皿状	土師器片, 鉄滓	
2004	C4f7	N-0°	長方形	1.47×0.95	50	外傾	平坦		近世以降
2005	C4f7	N-90°-E	長方形	1.35×1.19	30	外傾	平坦		近世以降
2006	C4f7	N-0°	長方形	1.71×0.90	42	外傾	平坦	土師器片, 陶器片, 縄文土器片	近世以降
2007	C4f6	N-90°-E	[長方形]	[2.20]×1.35	45	外傾	平坦	土師器片	近世以降
2008	C4g7	N-0°	[方形または長方形]	1.35×(1.20)	35	外傾	凹凸	陶器片	近世以降
2009	C4f6	N-90°-E	長方形	(1.70)×1.50	55	外傾	凹凸		近世以降
2010	C4f7	N-0°	楕円形	0.50×0.44	14	外傾	皿状		
2011	C4a3	N-0°	円形	1.11×1.05	6	緩斜	平坦	土師器片	
2012	C4d2	N-77°-W	楕円形	0.45×0.33	20	垂直	平坦		
2013	C4d2	N-0°	円形	0.46×0.44	65	外傾	皿状		
2014	C4c2	N-0°	円形	0.34×0.32	20	外傾	皿状		
2015	C4c2	N-0°	円形	0.39×0.39	18	外傾	皿状		
2016	C4b3	N-22°-W	楕円形	0.50×0.40	32	垂直	凹凸		
2017	C4c3	N-60°-E	楕円形	0.43×0.35	25	垂直	平坦		
2018	C4d3	N-0°	円形	1.17×1.08	56	垂直	平坦		

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	主な出土遺物	備考
2019	C 4 d4	N-21°-E	楕円形	0.45×0.37	48	垂直	皿状	土師器片	
2020	C 4 d4	N-0°	円形	0.35×0.35	26	垂直	平坦		
2021	C 4 c4	N-0°	円形	0.32×0.30	31	外傾	皿状		
2022	C 4 c4	N-27°-W	楕円形	0.39×0.32	28	外傾	皿状		
2023	C 4 c4	N-50°-E	楕円形	0.42×0.27	16	外傾	皿状		
2024	C 4 c4	N-50°-W	楕円形	0.32×0.28	11	外傾	皿状		
2025	C 4 c4	N-26°-E	楕円形	0.30×0.25	25	外傾	皿状		
2026	C 4 e2	N-0°	円形	0.46×0.44	43	外傾	皿状		
2027	C 4 e7	N-70°-W	楕円形	0.70×0.59	68	緩斜	皿状		
2028	C 4 a1	N-22°-E	楕円形	2.38×1.54	64	外傾	皿状	土師器片	
2029	C 3 j2	N-59°-W	ひょうたん型	0.50×0.38	32	外傾	皿状		
2030	C 4 a2	N-0°	楕円形	0.44×0.32	36	外傾	皿状		
2031	C 4 b2	N-0°	円形	0.42×0.40	25	垂直	皿状		
2032	C 4 b2	N-72°-E	楕円形	0.40×0.27	29	外傾	皿状		
2033	C 4 b2	N-0°	円形	0.33×0.33	50	垂直	皿状		
2034	C 4 a3	N-0°	[円形]	0.35×[0.35]	25	垂直	凹凸		
2035	C 4 a3	N-16°-E	楕円形	0.41×0.36	37	垂直	皿状		
2036	C 4 b2	N-0°	円形	0.35×0.33	35	垂直	平坦		
2037	C 4 b2	N-0°	円形	0.37×0.35	23	外傾	皿状		
2038	C 4 b2	N-0°	円形	0.33×0.33	20	外傾	凹凸		
2039	C 4 b3	N-0°	円形	0.36×0.35	28	垂直	皿状		
2040	D 4 b6	N-0°	長方形	1.09×0.95	57	外傾	平坦	土師器片	
2041	D 4 a0	N-90°	[長方形]	[1.19]×1.00	35	垂直	平坦		
2042	D 4 a0	N-0°	方形	0.92×[0.89]	46	垂直	平坦		
2043	D 4 a5	N-44°-W	楕円形	0.80×0.72	24	緩斜	皿状	土師器片	
2044	C 4 f4	N-20°-E	長方形	1.77×0.92	50	外傾	平坦		
2045	D 4 d2	N-15°-E	長方形	2.50×1.65	132	垂直	平坦	土師器片、須恵器片、土師質土器片、陶器片、縄文土器片、砥石、石皿、剥片、古銭	近世末期以降
2131	C 6 i1	N-87°-E	隅丸長方形	1.87×0.67	13	外傾	平坦		
2132	C 6 h2	N-59°-W	[方形・長方形]	1.56×(1.10)	7	外傾	平坦		

表7 井戸跡一覧表

番号	位置	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	覆土	主な出土遺物	備考(時期)
60	G12a2	円形	2.54×(2.36)	(200)	直立・外傾	-	土師器(坏、碗、甕)、須恵器(坏、甕)、灰釉陶器(皿、平瓶)、曲物、不明木製品、木片	10世紀前葉以降、旧SE601
61	F12j1	円形	1.50×1.40	(90)	直立・外傾	人為	土師器(坏、碗、甕)、須恵器(坏、甕)、灰釉陶器(碗)	9世紀以降、旧SE602
62	F12i1	円形	1.76×1.68	(100)	直立・外傾	自然	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)、灰釉陶器(長頸瓶カ)	9世紀以降、旧SE603
63	F12g1	円形	1.40×1.25	(100)	直立・外傾	人為	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)	10世紀前葉以降、旧SE604
64	F12f1	楕円形	2.38×2.04	(100)	外傾	人為	土師器(坏、碗、甕)、須恵器(坏)、灰釉陶器(皿、長頸瓶カ)	9世紀後葉以降、旧SE605
65	F11h9	円形	0.90×0.86	(100)	直立・外傾	自然	土師器(坏)、須恵器(坏、甕)	8世紀前葉以降、旧SK747・SE606
66	K12d3	[円形]	1.28×(0.62)	(120)	直立	人為	土師器(坏、甕)	旧SE608
67	F11f0	長方形・円形	2.07×1.84	(100)	直立・外傾	人為	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、蓋、甕)	8世紀以降、旧SK648・698・SE609
68	C 4 a3	円形	1.25×1.25	(120)	直立	人為	土師器(甕)	5世紀後半以降、旧SK1003・SE610

表8 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				覆土	主な出土遺物	備考(時期)
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)			
27	E 8 e9 ~ E 9 h1	北西	弧状	(15)	45~135	25~120	9~20	自然		中世
28	E 8 d9 ~ E 9 h1	北北西~北西	弧状	(19)	110~190	45~60	20~30	自然	土師器片、須恵器片、縄文土器片	16世紀以前
29	E 8 b9 ~ E 9 b3	西	直線	(15)	85~120	40~80	45~50	人為	土師器片、須恵器片、陶器片	
34	F12j3 ~ G12a3	北北東	直線	(3.6)	45~60	40~50	15	不明		旧SD601
35	F12i4 ~ G12a4	北北東	直線	(5.2)	35~60	25~45	15~20	不明		旧SD602
36	F12g2 ~ F12h2	北	直線	(5.5)	35~50	30~40	5	不明	土師器片	9世紀前葉以降、旧SD603

番号	位置	方向	形状	規模				覆土	主な出土遺物	備考(時期)
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)			
37	F12e1～F12i2	北	直線	(15)	65～80	50～60	8～10	不明	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉以前, 旧SD604
38	F11b8～F11f8	北	直線	(17)	45～50	30～35	10～20	不明	土師器片, 須恵器片, 砥石	10世紀中葉以降, 旧SD605
39	E8e4～E8h3	北	直線	(15.5)	120～140	30～50	60～70	自然	土師器片, 須恵器片	近世以降, 旧SD606
40	E8e5～F8c8	西～北	直線	(41)	50～100	30～50	5～10	不明	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	近世以降, 旧SD607
41	F8b6～F8c6	南～南西	弧状	(6.5)	50～60	30～55	5～10	不明		旧SD608
42	E8f8～F8d8	東～北～西	直線	(36)	60～110	10～30	40～50	自然	土師器片, 須恵器片(円面硯), 土師質土器片, 瓦質土器片, 陶器片(古瀬戸, 堺), 磁器片(青磁)	近代以前, 旧SD609
44	E8g8～E8i8	北	直線	(7.5)	170	50	30	人為	土師器片, 土師質土器片, 陶器片(古瀬戸), 土製品片	近世以降, 旧SD611
45	E8f8～E8i8	北	直線	(12.5)	45～80	15～20	30	不明	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 土師質土器片, 陶器片, 磨石, 古銭	近世以降, 旧SD612
47	C4g8～C4g0	東	直線	9.5	25～40	8～20	20	不明		旧SD614
48	C4h1～C5h4	南～西	直線	(60)	50～180	20～100	10～40	自然	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 陶器片, 磁器片	近世以降, 旧SD615
49	C5i2～D5a2	北	直線	6	50～80	15～40	15	不明		旧SD616
51	C4b6～D4b6	北	直線	(41.5)	35～70	20～30	40～50	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 陶器片, 磁器片	近世以降, 旧SD618
52	C4g3～D4d2	北東	直線	54	80～170	40～60	50～75	自然	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片, 瓦, 縄文土器片	旧SD619
55	C5i7～D5a6	北北東	直線	(10.5)	35～80	20～45	20～30	自然		近世以降

表9 柵跡一覧表

番号	位置	方向	柱穴数	柱穴平面形	長さ(m)	柱穴間距離(m)	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
14	C5i6～D5a6	N-8°-E	4	円形	5.65	1.7～2.1	50～80	10～22		旧SB44
15	E8g3～E8i3	N-7°-E	4	円形	5.9	1.5～2.7	40～65	60～70		
16	E8j6～F8b6	N-3°-E	4	円形	6.85	2.2～2.4	40～60	70～80	土師器片	

表10 ピット群一覧表

番号	位置	範囲(m)		柱穴数	柱穴平面形	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
		南北	東西						
41	E8e4～E8f5	4.5	2.5	6	円形	30～45	40～80		
42	E8h4～E8i5	4.5	6.5	5	円形	25～50	30～55	土師器片	
43	E8j6～F8b8	10.0	6.0	21	円形	30～55	40～80	土師器片	
44	E8c9～E8f9	13.0	4.0	13	円形	20～40	10～40	土師器片	
45	D8j0～E8b0	7.5	5.0	19	円形	35～50	20～70	土師器片	

第4節 まとめ

辰海道遺跡は平成13年度及び平成14年度の2か年で、5,333.52㎡が発掘調査された。その内、平成13年度調査分は『茨城県教育財団文化財調査報告第222集 辰海道遺跡1』として報告されている（以下、平成13年度調査分を『辰海道遺跡1』と略し、平成14年度調査分を『辰海道遺跡2』と略す）。ここでは、『辰海道遺跡1』の成果とあわせて当遺跡の遺構と遺物について概観し、若干の考察を加えてまとめとしたい。遺物の年代観については『辰海道遺跡1』で示された編年に準拠している。なお、調査区域は進行上5区画に分け、各区画を第1～5区と呼称した。その区分については第2図を参照していただきたい。

1 時期ごとの概要

まず、『辰海道遺跡1』で設定された第1～19期の各期ごとに、遺跡全体と『辰海道遺跡2』についての概要を述べる。なお、『辰海道遺跡1』で報告されている遺構について、調査の進行に伴い、集落の構造や遺構間の重複関係について新たに判明したことにより、帰属時期の変更をしたものがある。その際の時期・解釈に対する責の一切は筆者にある。

(1) 弥生時代

第1・2期

第1期は弥生時代後期前半、第2期は弥生時代後期後半に比定されているが、『辰海道遺跡2』では第1・2期ともに該当する遺構は確認できず、少量の遺物が他の時代の遺構に流れ込んだ形で検出されたのみである。『辰海道遺跡1』では第1期は6軒、第2期は4軒の住居跡が報告されている。本期の変遷図は略す。

(2) 古墳時代

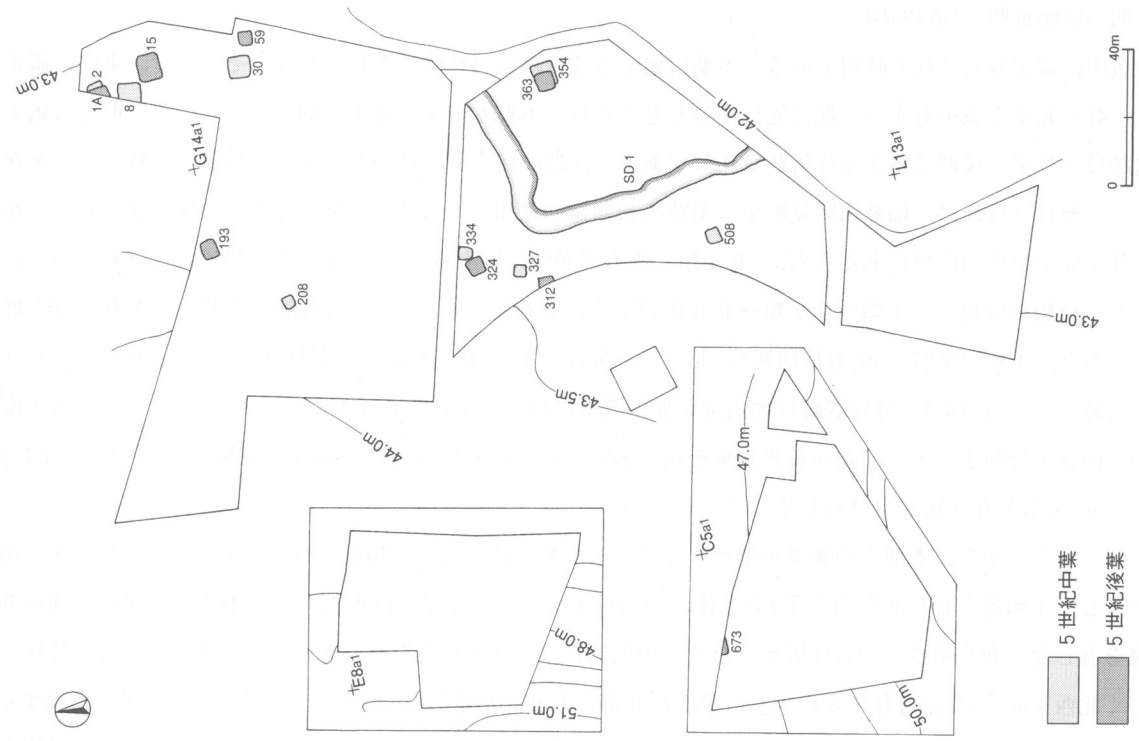
第3期（居館Ⅰ期）（第182図）

本期は土器の形状や遺構の形態からさらに2期に細分されている。前半は第2区に居館が作られる時期である。居館跡は上幅5.6～8.5m、深さ約2mの第1号濠跡により区画されている。確認された第1号濠跡の長さは南北約75m、東西約58mで、北西部と西部中央と南西部に張り出し部を持っている。本期に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では前半が居館内部に2軒、外部に1軒で、後半が居館内部に9軒、外部に5軒である。『辰海道遺跡2』では第5区に4世紀前半に比定した第674号住居跡と、本期の後半に属する第671号住居跡が確認された。前半・後半とも居館内部にある住居跡は一辺が4m以下の小形の住居跡で、いずれも方形区画を意識して構築されている。調査区域内には居宅と思われるような大形住居跡は検出されていないが、首長階級の存在を推定しており、当遺跡から東北東約3kmに位置する長辺寺山古墳と狐塚古墳との関係が考えられている。

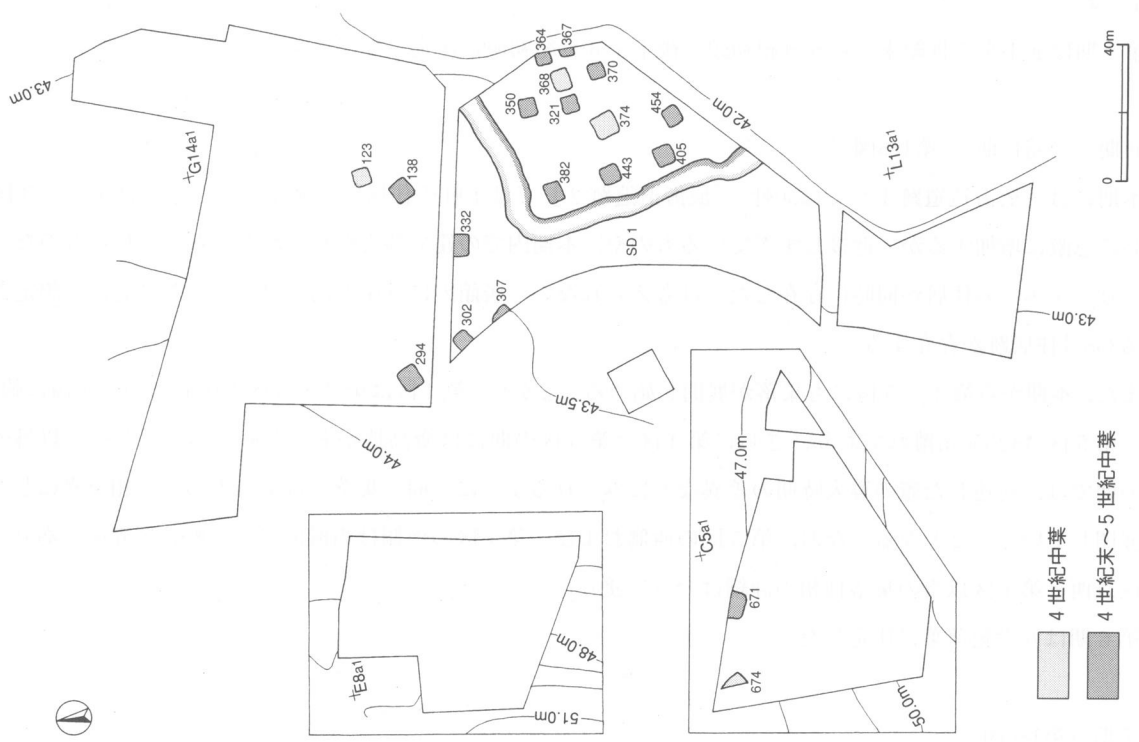
第3期は前半を4世紀中葉、後半を4世紀末から5世紀中葉に比定した。

第4期（居館Ⅱ期）（第183図）

本期も2期に細分されており、『辰海道遺跡1』では前半が8軒、後半が7軒、『辰海道遺跡2』では後半に1軒の住居跡が確認されている。集落は北部へ展開し、2軒程度で構成される小集団が確認できる。居館内には本期内で建て替えが行われたと考えられる2軒のみが確認される。第4期は第3期との間に集落の廃絶または移転による空白期が想定されており、居館の性格も前代とは違う可能性が指摘されている。



第183图 辰海道遺跡集落変遷図（第4期）



第182图 辰海道遺跡集落変遷図（第3期）

第4期は前半を5世紀中葉、後半を5世紀後葉に比定した。

第5期（居館Ⅲ期）（第184図）

住居内に竈が導入される時期である。本期に属する住居跡は14軒確認されており、その中で、東壁に竈を有する一群が北壁に竈を有する一群に先行すると考えられ、本期も前半・後半に細分されている。前期に属する住居跡は10軒で、後期に属する住居跡は4軒である。前期の住居跡にはいわゆる「初期竈」を持つものを含んでいる。榎村宣行氏は、稲敷郡阿見町星合遺跡の初期竈の様相を考察する中で、竈をその構築法から「Ⅰ類」煙道部が完全に壁の内側にあるもの、「Ⅱa類」煙道部が壁に接するもの、「Ⅱb類」煙道部が壁外に出ているものの3種類に分類し、Ⅰ類→Ⅱa類→Ⅱb類のように変遷するとした¹⁾。当遺跡の東壁に竈を有する一群を見てみると、Ⅰ類（第27・462号住居跡）、Ⅱa類（第47・50・146・196・237号住居跡）、Ⅱb類（第281・666号住居跡）となる（第155号住居跡は煙道部が他の遺構に掘りこまれており不明である）。また、住居跡の南北方向の向きで分類すると、真北から北北東を向く第27・47・50・281・462・666号住居跡、北西を向く第146・155・196・237号住居跡に分けられる。

これらのことから、本期内の変遷を整理すると、まず第3区東部にⅠ類竈を有し北を向く第27号住居、第1区に同じくⅠ類竈を有し北を向く第462号住居が出現する。続いて第3区東部には、第27号住居の周囲にⅡa類竈を有し北を向く第47・50号住居が、第3区中央部には、Ⅱa類竈を有し北西を向く第146・237号住居と、同じく北西を向く第155号住居が出現し、第3区北部にもⅡa類竈を有し北西を向く第196号住居が出現する。しかし、第462号住居以降、第1区の調査区域内では集落は展開しない。その後、第3区西部にⅡb類竈を有し北を向く第281号住居が出現し、北竈を持つ住居跡へと展開していくものと考えられる。一方、第5区の第666号住居跡はⅡb類竈を有し北を向くものの、遺物は第281号住居跡などよりもやや新しい様相を示しており、本期の後半に位置づけられると考えられ、第1～3区と第5区では竈の導入時期に若干の差異があったことが推定される。

第5期は前半を5世紀末から6世紀初頭、後半を6世紀初頭に比定した。

第6期（居館Ⅳ期）（第185図）

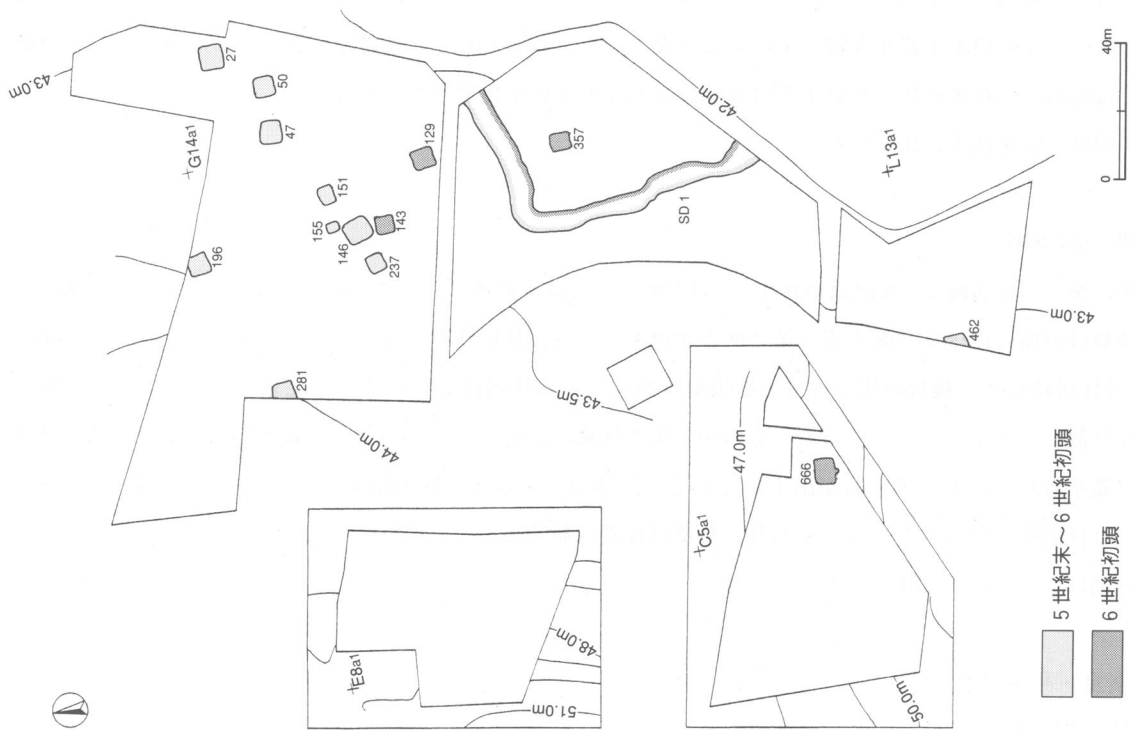
本期には『辰海道遺跡1』では30軒、『辰海道遺跡2』では1軒の住居跡が属する。住居数は第2・3区を中心に急激に増加するが、近接しすぎているものや、本期内での建て替えが行われたと考えられるものなどが見られ、すべての住居が同時に存在したとは考えられない。居館内には中心的施設であった可能性が想定される第358号住居跡が存在する。

また、本期から第4・5区にも集落が展開し始める。しかし、第4区は第2・3区の中心部から北西に約200m、第5区は約350m離れており、さらに第4区と第5区の間には微高地があるため、第5区とそれ以外の区との間では、前述した竈の導入時期の差異などにみられるように、同一集落ではあるものの様相を異にしながら展開していくこととなる。なお、第5区の西側および、第1区の南側は当財団により継続調査中であり、第5区以西と第1区以南の集落様相の詳細は今後に譲りたい。

第6期は6世紀前葉に比定した。

第7期（第186図）

本期も2期に細分されている。前半に属する住居跡は22軒である。本期に至って居館を区画していた第1号



第184図 辰海道遺跡集落変遷図（第5期）



第185図 辰海道遺跡集落変遷図（第6期）

濠跡は、埋没が進みその機能を失っている。集落は前期に引き続き拡張しており、第3区東側と第2区中央部に集中が見られる。集落の中には第142・240・415号住居跡のように一辺が7mを超える比較的大形の住居跡で、須恵器や鉄製品などを持つものが見られ、集落の中心的な住居と考えられる。また、第36号住居跡からは多量の滑石の原石が出土しており、石製模造品の工房との関わりが指摘されている。

後半に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では30軒、『辰海道遺跡2』では4軒である。後半になると第2・3区の中心部に一辺が8～9mの大形の第330・340号住居が出現し、それらを中心に集落は北東・北西・南方向へ展開していく。各方向には、第51・52号住居跡、第379A・379B号住居跡、第603A・603B号住居跡のようにそれほど規模は大きくはないものの、本期内での建て替え・拡張が行われている住居跡が存在している。特に北西方向の一群には、このような住居が今後も継続的に作られており、集落内の小集団の中心になるものと考えられる。また、第245・293号住居跡は平面形が小形の長方形で西壁に竈を有し、何らかの工房跡、もしくは周囲に存在する住居跡に対する付属施設である可能性が考えられる。

一方、第4区には横並び二掛け竈を持つ第521号住居跡を中心に小集団が見られるが、東側の平坦部のみ住居跡が見られ、西側斜面部には進出していない。

第7期は前半を6世紀中葉、後半を6世紀後葉に比定した。

第8期（第187図）

本期に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では29軒、『辰海道遺跡2』では6軒である。第2区北部には大形の第323号住居跡が見られるが、前期から引き続き集落は北西へ展開しており、中心は第250・263号住居跡、第231A・231B号住居跡、第606A・606B号住居跡のような本期内での建て替え・拡張が行われている住居跡と考えられる。同じく前期に展開していた北東部や南部はやや衰退し、住居跡が散在するようになっている。

また、住居跡が北西や北東に続くように展開していることや、第1区に2軒の住居跡が点在することなどから、集落が広範囲に広がる様相を示していること、さらに第260・276号住居跡は平面形が長方形で、竈の使用頻度が低いことや出土土器が非常に少ないことなどから、前期の第245・293号住居跡のように何らかの工房跡、もしくは周囲に存在する住居に対する付属施設である可能性が指摘されている。

第8期は7世紀前半に比定した。

第9期（第188図）

本期に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では12軒、『辰海道遺跡2』では4軒である。集落は急激に縮小し、住居跡数は前期に比べて半減する。第3区の北西部の一群は住居跡数は減っているものの、第602A・606C・623A号住居跡など、複数の建て替え・拡張が行われている住居跡が存在する。北東部ではまとまりが見られなくなり散在するようになっている。その中で第3区東部に孤立している第60号住居跡は、平面形が長方形で東壁に竈を有しミニチュア土器が出土している。全体としては第2区の第372号住居跡以外は第1・2・4・5区には住居跡が見られなくなっており、集落は停滞し始める。

第9期は7世紀後半に比定した。

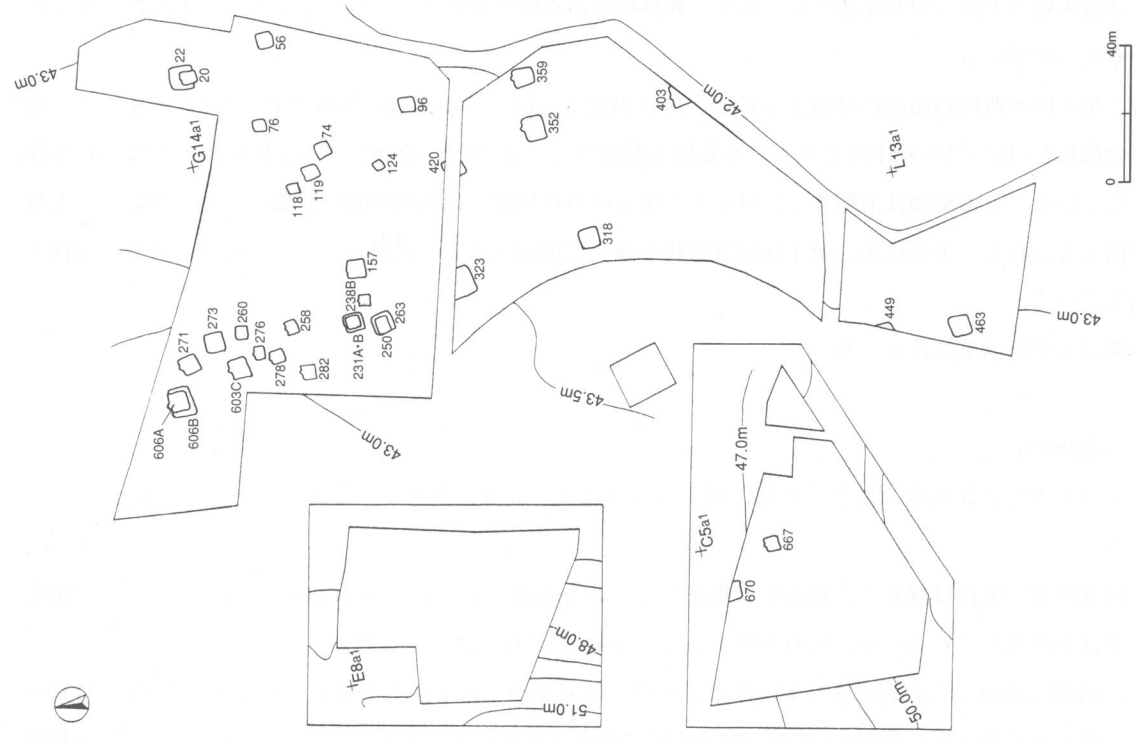
(3) 奈良・平安時代

第10期（第189図）

本期には『辰海道遺跡1』では9軒、『辰海道遺跡2』では5軒の住居跡と第2号鍛冶工房跡が属する。集



第186図 辰海道遺跡集落変遷図（第7期）



第187図 辰海道遺跡集落変遷図（第8期）

落は前期から引き続き衰退傾向にあるが、第3区の北西部の集団は存在している。この集団には前期からの建て替え・拡張住居である第602B・623B号住居跡が見られ、古墳時代の様相を残している。また、第207号住居跡では貼床層の下から炉が確認されており、被熱痕のある礫片が出土していることから、鍛冶炉であった可能性が考えられている。

一方、第4区の西側斜面部には第2号鍛冶工房が出現し、同じく斜面部に形成された第647号住居や、東側平坦部の第492・495・499号住居とともに小集団を形成する。この内、第492・499号住居跡からは砥石や鉄滓が出土している。この集団は前期までに見られた第4区の住居跡とは様相が違い、鍛冶工房を中心とした職人的な集団と考えられ、本期以後、第4区は各時代を通じて鍛冶・漆工・紡績などの工房的様相の強い地区として展開していく。

第10期は8世紀前葉に比定した。

第11期（第190図）

前期よりもさらに住居数は減り、本期に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では11軒、『辰海道遺跡2』では1軒である。

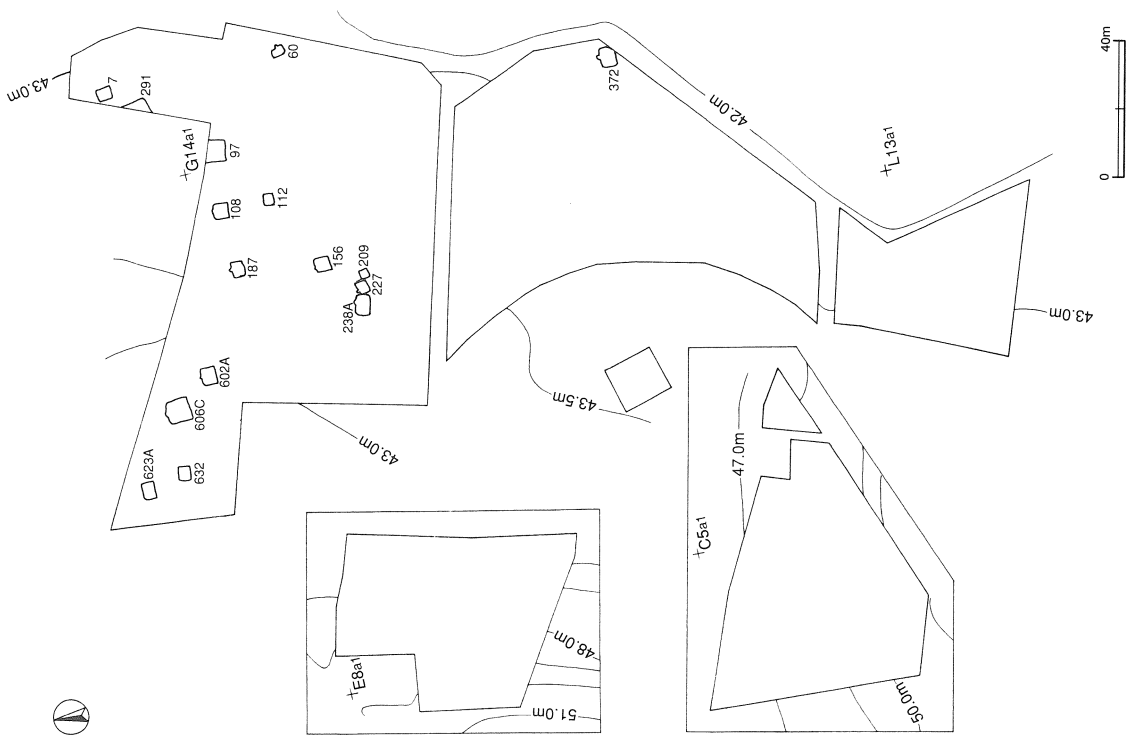
第3区北西部の集団は健在で、鍛冶炉と推測されている遺構を持つ第207号住居跡から建て替えた第203号住居跡（鉄滓が出土している）や、砥石が出土している第257号住居跡などが見られる。

また、前期で出現した鍛冶関連の集団は第4区からは姿を消し、平面形が横長の長方形の第498号住居のみとなる。代わって第1区に第433・460・483号住居で構成される小集団が出現する。この中の第433号住居跡からは砥石や椀状滓、流動滓さらには製錬時に排出される鉄滓などが出土し、平面形が横長の長方形の第460号住居跡からは廃絶時に遺棄されたと考えられる羽口片が出土していることなどから、これらを鍛冶関連の集団と推測しており、近接地に製鉄を行う作業場の存在が想定されている。このような状況を第4区の集団が第1・3区へ移動・合流したと捉えるか、第4区の集団は姿を消し、まったく新たに第1区の集団が鍛冶を始めるようになったと捉えるべきなのかは不明であるが、『辰海道遺跡1』では新治郡衙との位置関係を考慮し、本期は律令体制の地方支配が確立し始めた時期であり、在地の豪族を取り込みながら、人民支配の遂行と経済基盤の強化を図る過程でこれら鍛冶関連の手工業も統制されていったものと推測している。これをふまえると、前期から続く鍛冶関連の集団が郡衙の影響のもと、第1・3区の集団へと合流・再構成された可能性が強いものと考えられる。『辰海道遺跡1』で指摘されている通り、これらの集団を構成する住居跡が等質であることは官主導型である可能性を強め、さらには第262号住居跡から朱墨痕の見られる転用硯（須恵器高台付坏）が出土していることは、官の影響があったことを示唆するものであろう。

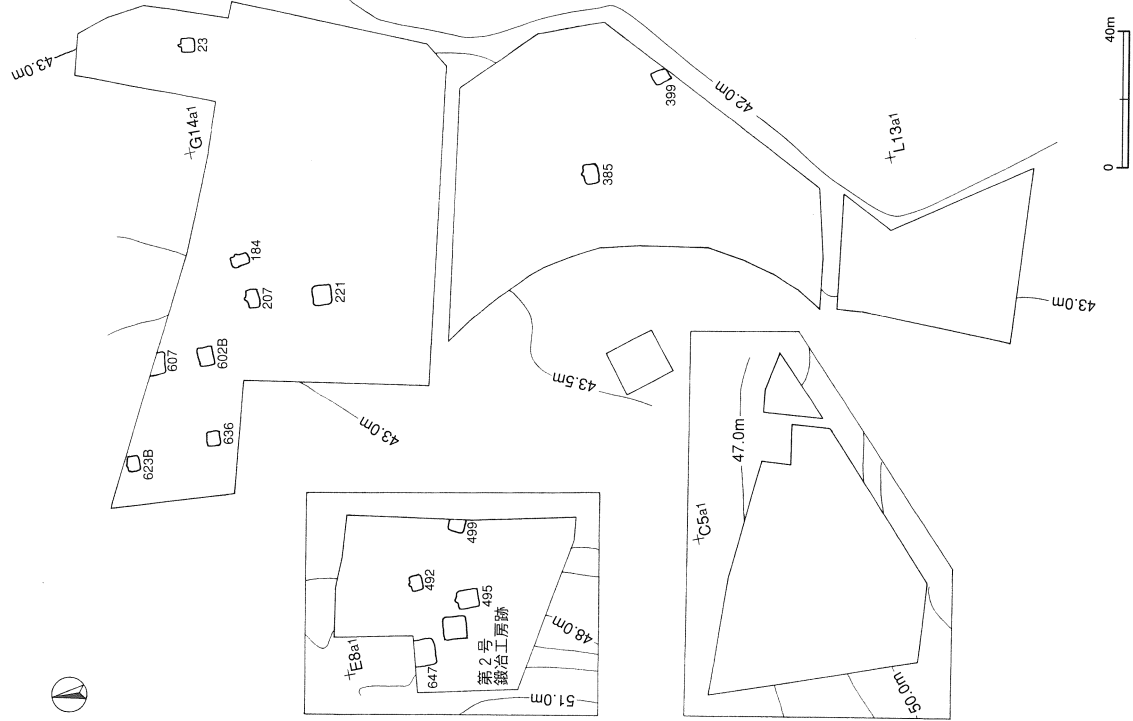
第11期は8世紀中葉に比定した。

第12期（第191図）

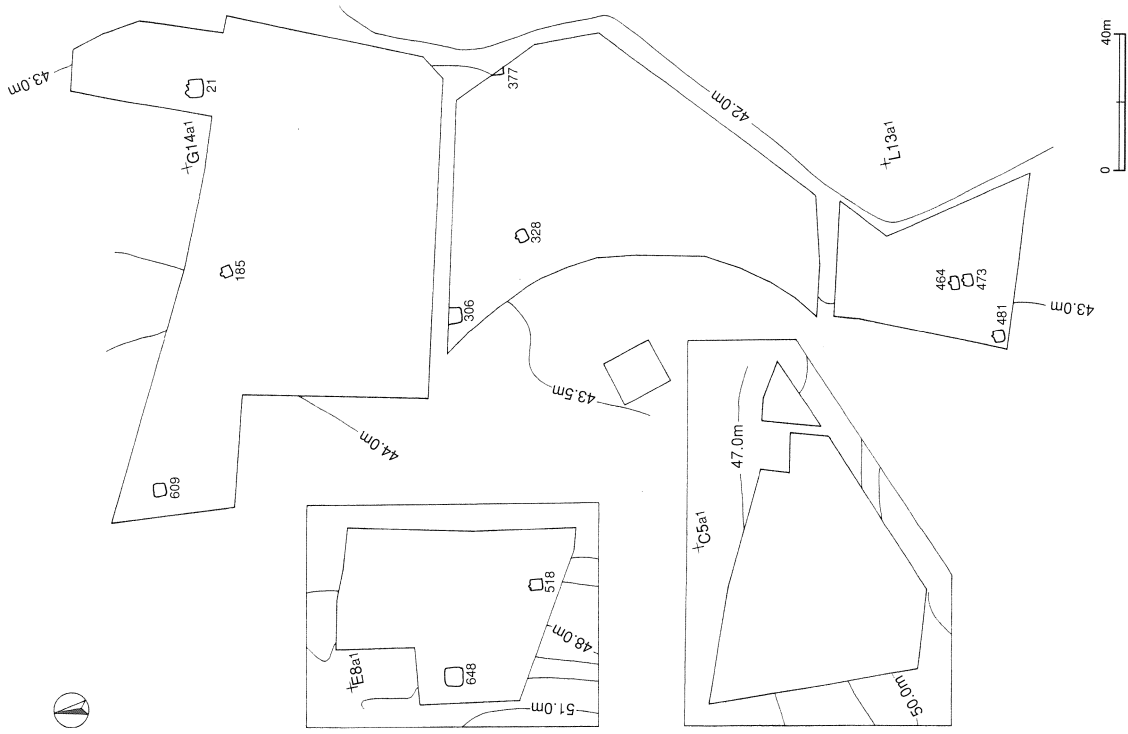
本期に属する住居跡は『辰海道遺跡1』では9軒、『辰海道遺跡2』では2軒である。第3区の北西部の集団は姿を消し、第2・3区には数軒の住居が点在するのみとなる。第1区には3軒の住居跡が見え、これらの住居跡からは鍛冶滓や砥石、鉄鎌が出土しており、明確な工房は確認されていないが前期に引き続き鍛冶関連の集団が存在していた可能性が考えられている。第4区には漆工や紡績に関わる遺物が多数出土した第648号住居が西側斜面部に出現する。職人もしくは手工業を統率する有力者の存在がうかがえ、調査区域内には第518号住居跡しか見られないものの、周囲に工房の存在が推測される。第648号住居跡の覆土中からは大形の椀状



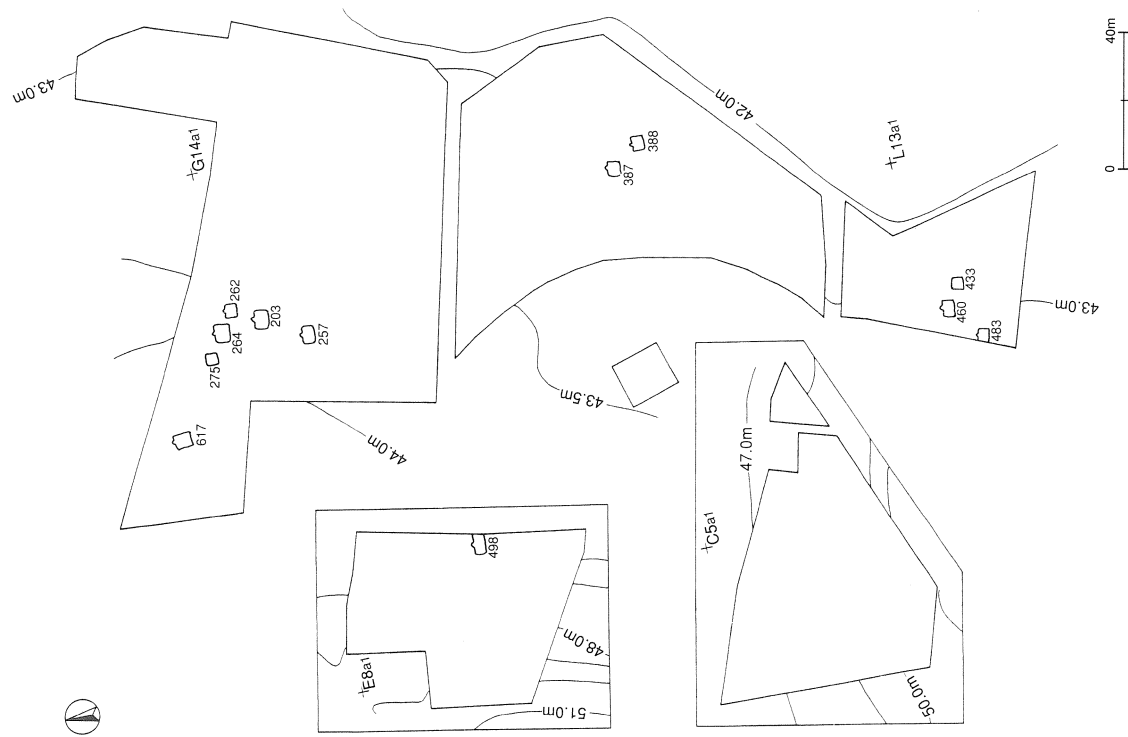
第188圖 辰海道遺跡集落變遷圖 (第9期)



第189圖 辰海道遺跡集落變遷圖 (第10期)



第191图 辰海道遗址集落变迁图（第12期）



第190图 辰海道遗址集落变迁图（第11期）

滓も出土しており、調査区域外に鍛冶工房があった可能性も考えられる。

一方、第2区東部の第377号住居跡からは「庄」と墨書された須恵器坏が出土している。当遺跡からは本期以降、「庄」あるいは「庄南」と記された墨書土器が多数出土するようになり、『辰海道遺跡1』では、当遺跡が所在する地域が「坂戸庄」と呼称されている²⁾こととあわせて、当地に初期荘園の存在を推定している。住居数から見て、本期は弥生・古墳時代以来の集落が衰退し、空闲地あるいは荒廃田となりつつある時期であり、天平15(743)年の墾田永年私財法の施行を受け、新たな有力者の下、遺跡周辺の再開発を行い荘園として形成されていったことは十分に考えられる。

第12期は8世紀後葉に比定した。

第13期(第192図)

集落内に掘立柱建物群が形成される時期である。本期に属する遺構は『辰海道遺跡1』では9軒の住居跡と7棟の掘立柱建物跡、1基の井戸跡、2条の溝跡、2条の柵跡で、『辰海道遺跡2』では4軒の住居跡である。『辰海道遺跡1』では本期から第15期まで随時建て替えられている建物群を倉庫と断定し、その内、第18号掘立柱建物跡は総柱式で、建て替え後の第19号掘立柱建物跡(第14期)から炭化米が出土していることから、主に穎稲を保管していたと推定している。そして、配置や掘り方などから建物群に官的様相を感じるとし、郡衛が掌握した借倉のような倉庫群として存在していたか、もしくは初期荘園の開発に国司や郡司の存在を推測し、その影響により掘立柱建物群が官的な様相を示しているのではないかと想定した。さらに、第4A・4B号溝跡により二分されている掘立柱建物跡群を、北部は倉庫群、南部は徴税機能を分掌し、物資の集積・管理を行った官衛的な区域であるとしている。開発の主体者や官の影響がどの程度のものであったかは再検討の余地があるが、第120号住居跡から「西宅」、第366号住居跡から「庄」などの墨書土器が出土していること、第17・120号住居跡からは朱墨痕の見られる転用硯(須恵器高台付坏)が出土していること、さらには第612号住居跡からは漆付着遺物と多数の転用硯(須恵器盤・蓋)や砥石が出土していることなどから、少なくとも前期に萌芽が見られた初期荘園は、本期に至り小規模な各種手工業を取り込みながら拡大し、物資の集積や管理を行う場所や人々が現れるようになった、ということはいえるであろう。

第13期は9世紀前葉に比定した。

第14期(第193図)

本期に属する遺構は『辰海道遺跡1』では17軒の住居跡と10棟の掘立柱建物跡、1基の井戸跡、2条の溝跡で、『辰海道遺跡2』では4軒の住居跡である。前期から続く掘立柱建物群の内、建て替えの行われている倉庫群(第18・19・25号掘立柱建物跡、第16・24号掘立柱建物跡)は穎稲類保管の「屋」と考えられており、前期に第1区にあった管理統括の機能を持っていたと推定される第20号掘立柱建物は未調査区へ建て替えられたであろうと推測されている。そして、全体の性格として、郡司の直接的な管轄下に置かれた郡衛出先施設あるいは郡司が深く関わった初期荘園の荘所、またはその両面の性格を持ったものと推測されている。

これらの推論に、第630号住居跡から「屋」と墨書された土器が出土していることはそれを裏付けるものといえよう。また、第14号掘立柱建物跡を掘り込んでいる第437号住居跡の覆土中からは、門金具が出土しており、これはおそらく第14号掘立柱建物跡に伴うものと考えられ、倉庫としての機能が推定されよう。しかし、一方で第16・24号掘立柱建物跡と重複関係のある、あるいは周囲に存在する第352・358・361号住居跡(いずれも古墳時代の住居跡)の覆土中からは緑釉陶器片が出土している(第201図)。同様に、第19・25号掘立柱建

物跡の周囲の第586号土坑（10世紀後半以降）からも緑釉陶器片が出土し、他にも掘立柱建物群の周囲から緑釉陶器片が出土している。さらに、灰釉陶器片は第19・25・35号掘立柱建物跡をはじめとして掘立柱建物跡群の周囲から多数出土している。無論これらの施釉陶器片の内には出土した遺構に伴うものも含まれるが、緑釉陶器片のほとんどが細片で覆土中からの出土であることと、田中広明氏が埼玉県上里町中堀遺跡の分析をする中で「（緑釉陶器の）使用の主体は、掘立柱建物にあり、廃棄は遺跡内の一定区域に限定されていた」「保管から廃棄は、限定された場所で行われていた」という指摘をしている³⁾ことを踏まえると、出土した施釉陶器片の内のいくつかは掘立柱建物跡に属するものであり、主に穎稻類を保管していた倉庫群と考えられている掘立柱建物群の中には、これら施釉陶器を保管する倉庫、さらには、使用する饗応の場、有力者の居住空間としての性格を持つものも含まれていたと考えられる。

また、第179号住居跡からは鉄鉗が、第652号住居跡からは漆附着土器が、第101・212号住居跡からは紡錘車出土しており、各種手工業は本期にも存在していたようである。なお、本期から集落内に東壁に竈を有する住居跡が出現する。

第14期は9世紀中葉に比定した。

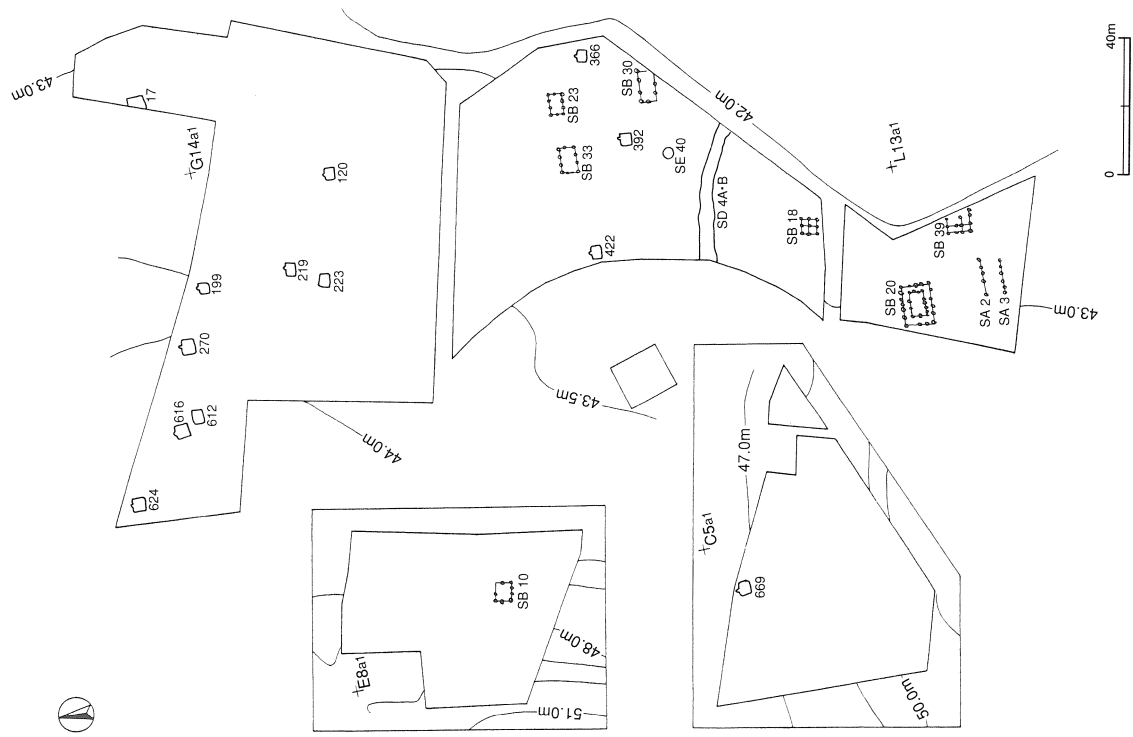
第15期（第194図）

本期には『辰海道遺跡1』では22軒の住居跡と3棟の掘立柱建物跡、2条の溝跡が、『辰海道遺跡2』では11軒の住居跡、1基の井戸跡が属する。掘立柱建物跡群は数を減らしているものの、住居跡は第3区を中心に増加しており、「新室」「新」「室」「庄」「庄南」と墨書された土器が出土していることから、本期には当集落が大形の荘園に成長していると考えられている。また、飛躍的に増加した施釉陶器の検出にうかがえる集落の経済的繁栄は、鉄生産を中心とした荘園経営によるものであるという可能性が提示されている。

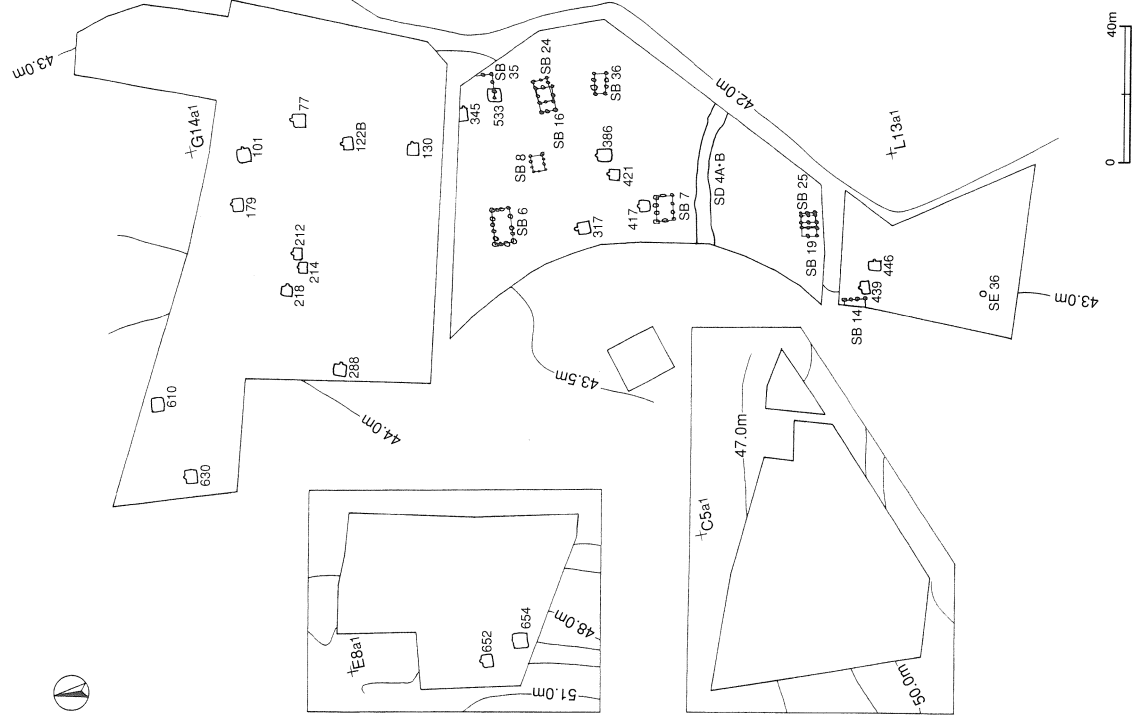
一方、第3区の北西部に7軒の住居と1基の井戸で構成された集団が出現する⁴⁾。この集団は多数の施釉陶器を所持しており、中でも第627号住居跡からは11点の灰釉陶器片、2点の緑釉陶器片が出土し、1つの遺構から出土した数としては当遺跡内で最も多い。その他にもこの集団からは「井上」「弘廣」と墨書された土器、「𠄎」とヘラ書きされた土師器杯、土師器耳皿、漆附着遺物（須恵器杯、土師器甕、灰釉陶器平瓶、曲物）、朱墨痕の残る転用硯、砥石などの特徴ある遺物が出土している。「井上」と墨書された土器は第16期にも見られ、この集団の標識文字である可能性が考えられる。この集団は、明確な空白域により第3区の他の住居跡と区別されていることから特殊な集団であることが推測され、朱墨痕の残る転用硯の出土から構成員に識字層の存在が推定される。当遺跡の管理統括の機能を持っていたと推定されている第4A・4B号溝跡の南にあった掘立柱建物跡群が、本期には見られなくなることを考えると、この集団に管理統括の機能の一部が移動していた可能性も考えられる。また、第3区北東部の第4号掘立柱建物跡及びその周囲の遺構からは緑釉陶器片が出土しており、北西約15mにある「新室」「新」「室」と墨書された土器、耳環、手鎌、置き竈などを出土した第19号住居跡との関連がうかがえる。

第4区には6軒の住居跡で構成された集団が存在するが、これらの住居跡からは「御屋万得」と墨書された土器、油煙附着土器、漆附着土器（須恵器杯）などが出土しており、一般的な住居とは性格が違い、以前から引き続き職人的な集団であると考えられる。さらに、後述する文字資料・漆工・住居内祭祀などの観点からこの集団は第3区北西部の集団と有機的なつながりを持っていたことが推測される。

第15期は9世紀後葉に比定した。



第192図 辰海道遺跡集落変遷図 (第13期)



第193図 辰海道遺跡集落変遷図 (第14期)

第16期（第195図）

本期には『辰海道遺跡1』では21軒の住居跡と2棟の掘立柱建物跡、1基の井戸跡が、『辰海道遺跡2』では6軒の住居跡と2棟の掘立柱建物跡が属する。『辰海道遺跡1』では延喜2（902）年の荘園整理令の施行により、当遺跡の開発主体と想定している国司や郡司層が積極的に荘園経営に関与することが少なくなった結果、掘立柱建物が減少し、第4A・4B号溝が埋没したのではないかと推測している。そして、次期に住居数が著しく増加することから、崩壊していく律令体制の中、国司・郡司に代わって在地有力者層が荘園領主となり、新たな体制へと転換していったと考えている。

『辰海道遺跡2』では、前期に出現した第3区北西部の集団は掘立柱建物を有すようになり、主な出土遺物は灰釉陶器、井上と墨書された土器や「井」と刻書された土器、漆付着土器、刀子、釘などである。また、集落全体としてはしばらく住居数の少なかった第1区に住居が増え始めるなど、次期へ向けて集落が拡大していく様子がうかがえる。

第16期は10世紀前葉に比定した。

第17期（第196図）

本期に属する遺構は『辰海道遺跡1』では51軒の住居跡と1棟の掘立柱建物跡、1基の井戸跡で、『辰海道遺跡2』では2軒の住居跡である。前期より住居数が倍増し、当集落の最盛期を迎える。第3区北西部の集団は姿を消すが、集落は第3区を中心に広範囲に広がりを見せる。本期でも「庄」「南」などの墨書土器が出土しており、引き続き多くの施釉陶器が出土していることは、集落の繁栄をうかがわせる。また、本期には多くの住居が東壁に竈を有するようになる。

第17期は10世紀中葉に比定した。

第18期（第197図）

本期に属する遺構は『辰海道遺跡1』では46軒の住居跡で、『辰海道遺跡2』では3軒の住居跡である。集落は前期とほぼ同数の住居跡で構成されている。『辰海道遺跡1』では前期と本期に多数の鉄生産に関わる遺物が遺跡の広範囲から出土していることから、大規模な鉄生産が行われていたと考え、在地有力者の経営基盤として集中的生産が行われた結果である、と述べている。

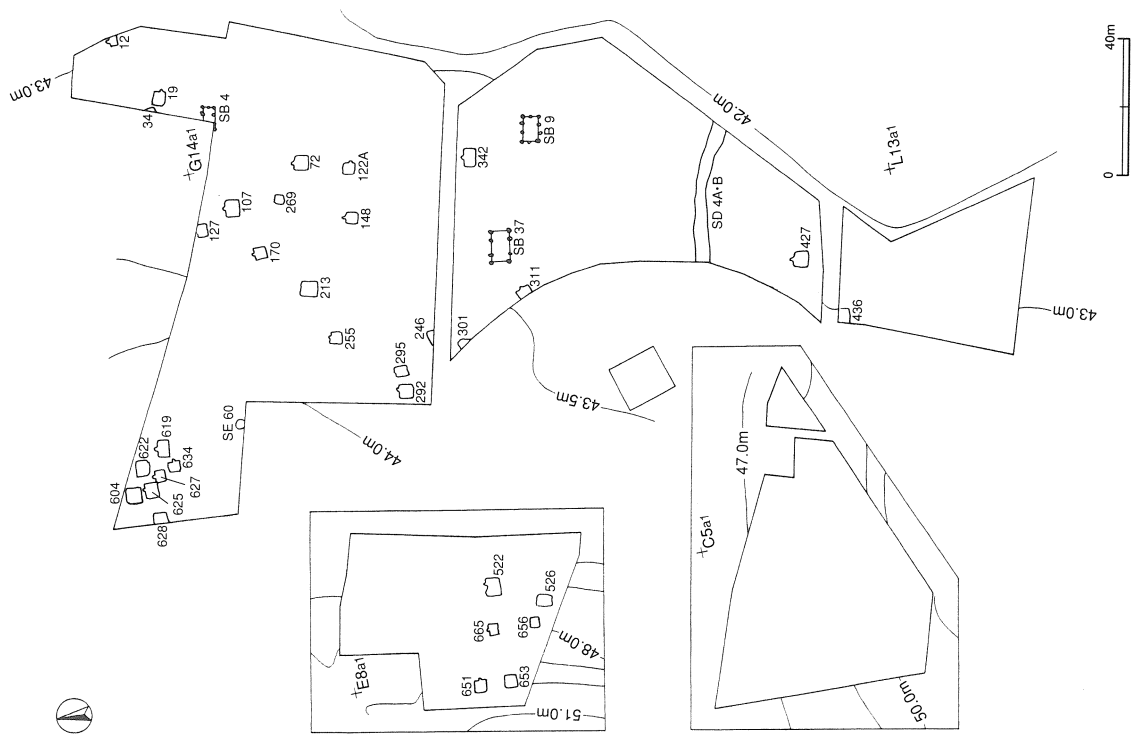
一方、第4区では漆付着土器が出土しており、近接した場所への建て替えが行われている住居跡などが見られ、前代以来の工房地区が存在していたと考えられる。

第18期は10世紀後葉に比定した。

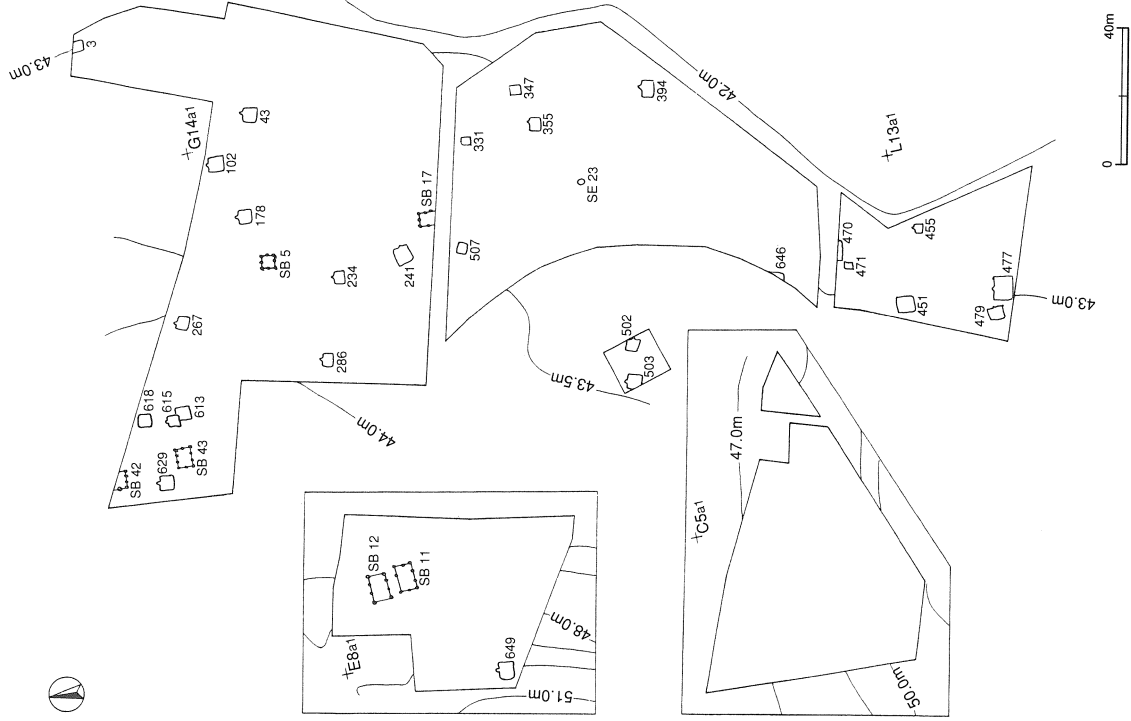
第19期（第198図）

本期には『辰海道遺跡1』では13軒の住居跡と1軒の鍛冶工房跡が、『辰海道遺跡2』では3軒の住居跡が属する。前期に比べ住居数は激減するが、第3区には鍛冶工房が見られ、周囲の遺構から羽口や炉壁材、鉄滓等が検出されており、外部への交易品として製鉄が引き続き行われていたと推測されている。

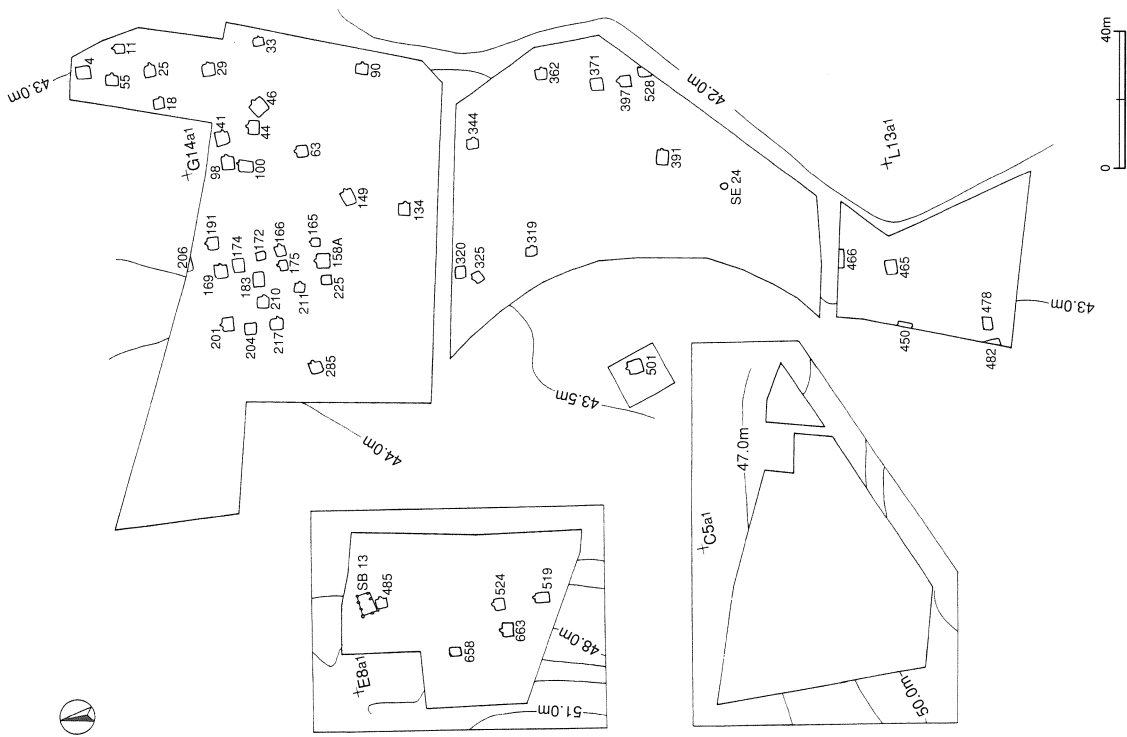
住居数が減少することの一因にはこの時期、竪穴式の住居から壁立式の平地住居への転換により、遺構としての検出が難しくなっていることと合わせ、10世紀後葉以降、特に11世紀中頃以後に繰り返し出された荘園整理令による社会的な変化による影響も考えられる。こののち、当遺跡を含む坂戸郷、大幡郷は中郡と呼ばれるようになり、長寛元（1163）年、中郡氏の蓮華王院への寄進による中郡荘成立⁵¹へとつながる中世的な世界へ



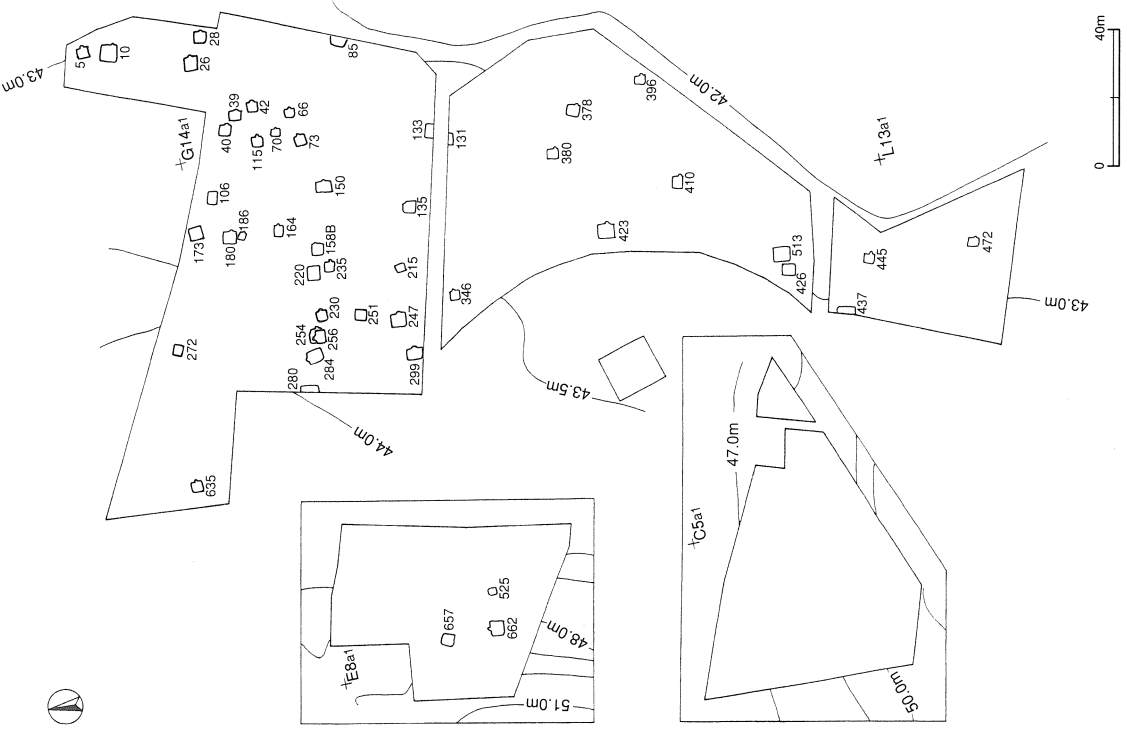
第194图 辰海道遗址集落变迁图（第15期）



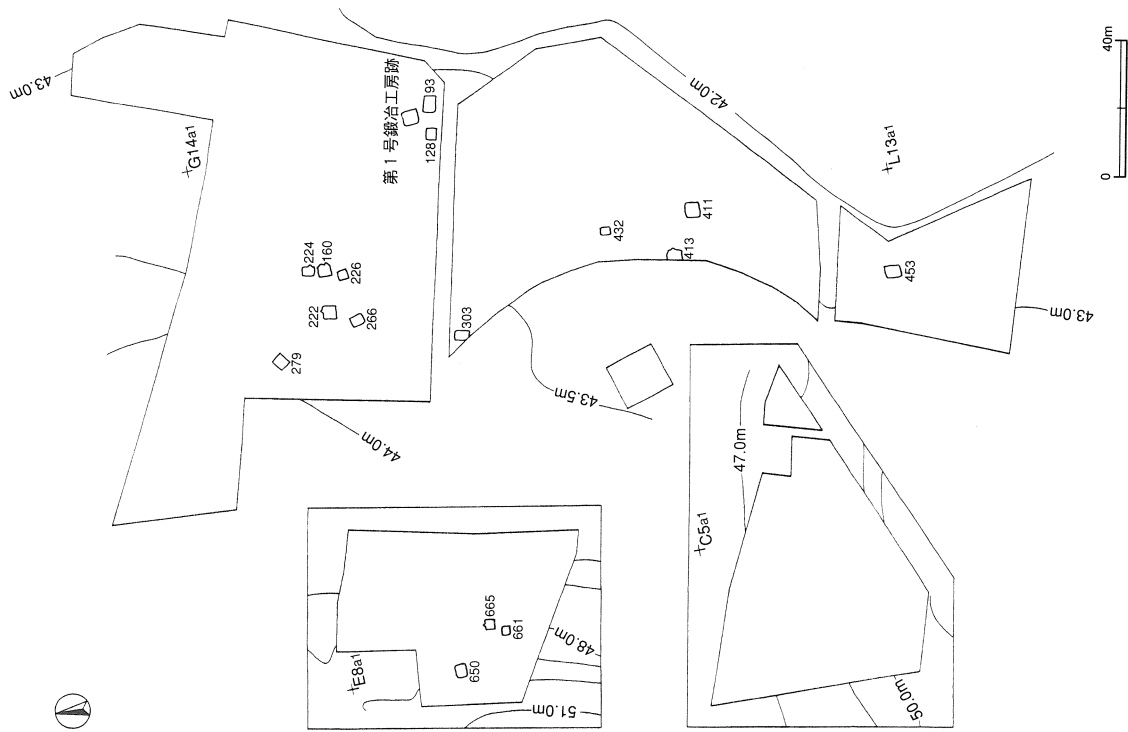
第195图 辰海道遗址集落变迁图（第16期）



第196图 辰海道遗址集落变迁图（第17期）



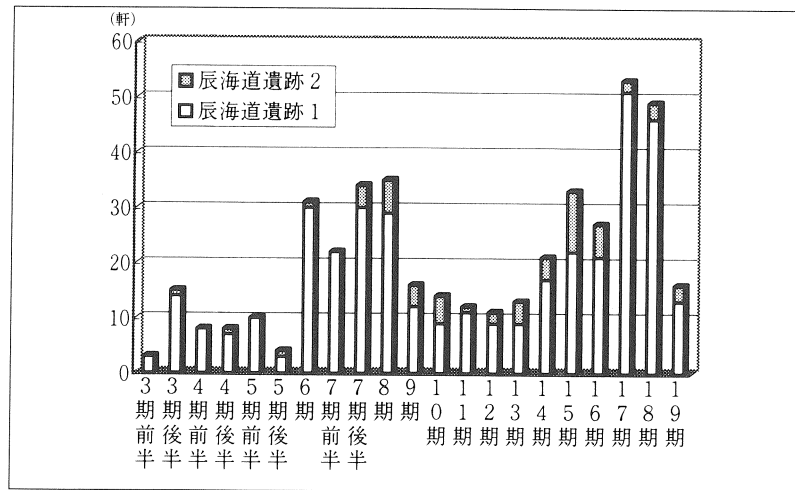
第197图 辰海道遗址集落变迁图（第18期）



第198図 辰海道遺跡集落変遷図 (第19期)

表11 住居数変遷表

時期	辰海道遺跡1	辰海道遺跡2	計
3期前半	3	0	3
3期後半	14	1	15
4期前半	8	0	8
4期後半	7	1	8
5期前半	10	0	10
5期後半	3	1	4
6期	30	1	31
7期前半	22	0	22
7期後半	30	4	34
8期	29	6	35
9期	12	4	16
10期	9	5	14
11期	11	1	12
12期	9	2	11
13期	9	4	13
14期	17	4	21
15期	22	11	33
16期	21	6	27
17期	51	2	53
18期	46	3	49
19期	13	3	16



と変化していく。そのような状況の中で、弥生時代から盛衰を繰り返した辰海道の集落は本期を持って一時消滅する。

第19期は11世紀前半に比定した。

(4) 中・近世

中・近世に属する遺構・遺物はわずかであるが、第4区の東側平坦部には土坑墓群があり、西側斜面部にはピット群が見られる。このピット群の周囲の溝などからは龍泉窯産の青磁（鎬蓮弁文碗）や、古瀬戸（瓶子・折縁深皿）、常滑（甕）などの破片が出土しており、掘立柱建物が存在していた可能性がある。「文殊院」という地名が残ることと、東西に走る第1号道路跡の存在とあわせ、第4区の西側斜面部および斜面上に堂宇が存在していた可能性がある。また、第5区には平面形が隅丸方形で、底面付近に炭化物が残存していた土坑群があり、形状から見て近世の墓坑であろう。当地域周辺では家の墓を寺院内に持つ場合もあるが、自身の耕作地の隣や里山の空闲地に小規模な墓地を形成する場合があります。起源は中世末期までさかのぼることができる。第5区の土坑墓群もそうしたもののひとつと考えられる。

註

- 1) 樫村宣行 「星合遺跡における初期カマドの様相について」『菟玖波 第3号－高根信和先生還暦記念号－』 菟玖波倶楽部 1999年3月
- 2) 呼称としては残るものの、史料では確認できない（国立歴史民俗博物館 『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書6 日本荘園データ1（畿内・東海道・東山道）』 1995年3月）。
- 3) 田中広明 『地方の豪族と古代の官人－考古学が解く古代社会の権力構造－』 柏書房 2003年4月
- 4) この集団の周囲には明確に時期区別できなかったものの、奈良・平安時代の可能性が考えられる井戸跡6基が集中している。
- 5) 岩瀬町史編さん委員会による推論（岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町 1987年3月）。史料の初見は承安4（1174）年である。

2 灰釉・緑釉陶器（第199～201図，表12・13）

『辰海道遺跡2』では、51点の灰釉陶器片、6点の緑釉陶器片が出土した（表13）。『辰海道遺跡1』では139点の灰釉陶器片、43点の緑釉陶器片¹⁾が報告されており、合計は灰釉陶器片190点、緑釉陶器片49点である。これらの施釉陶器を器種、窯式²⁾、産地³⁾別に分類したのが表12である。以下、当遺跡出土の施釉陶器とその状況について、当財団の奈良・平安時代研究班⁴⁾と、川井正一氏⁵⁾の論考をもとに概観していく。

当遺跡から出土した灰釉陶器の最も古い段階のものは井ヶ谷78号窯式で、最新のものは折戸53号窯式のものである。また、器種は碗が全体の42%と多く、以下長頸瓶（22%）、皿（13%）、短頸壺（2%）、蓋（2%）となり、産地は猿投産（90%）、東濃産（8%）、三河・遠江系（2%）が見られる。これらを茨城県内の状況と比較すると、井ヶ谷78号窯式の段階は茨城県内での出土量、分布域が拡大する時期であると指摘されており、器種は長頸瓶が大部分を占めることも合致している。折戸53号窯式の段階から大幅に出土量が低下することも同様である。しかし、黒笹90号窯式のもので窯式不明のものを除いた出土数の68%を占めることは、茨城県内全体の様相（50%）とはやや異なる点である。また、器種構成についても茨城県内の平均的な出土状況（長頸瓶が多く、碗・皿が続く）に比べるとやや様相が異なる。明確な理由は分からないが、長頸瓶よりも碗の供給量が増加する黒笹90号窯式期の後半段階の出土量が比較的多いことが考えられるであろうか。産地については

猿投産が大部分を占めつつも東濃産が比較的多く出土していること、三河・遠江系と考えられるものが出土していることなどが特徴である。東濃産の製品は結城市峯崎遺跡などから多く出土しており、その流通には東山道による陸送が想定され、隣国下野の国府市との交易などが行われていた可能性がすでに指摘されている⁶⁾。当遺跡も下野国に近く、同様な交易が行われていた可能性が考えられ、『辰海道遺跡1』で述べられているように、8～9世紀に益子産や三毘産の須恵器が出土していることはその傍証となろう。三河・遠江系としたものは二川窯、宮口窯、清ヶ谷窯などの製品と思われるが、筆者の力量では決定できなかったものを総称した。これら二川窯、宮口窯、清ヶ谷窯などの製品は近年の調査・研究によりつくば・霞ヶ浦周辺を中心に出土している⁷⁾ことが明らかになっている。

緑釉陶器の出土状況は、最も古い段階のものは黒笹14号窯式で、最新のものは折戸53号窯式のものである。器種は1点の壺・甕類を除くと他はすべて碗・皿類である。陰刻花文の見られるもの5点(稜碗1・皿1・段皿2・瓶1)が特筆される。産地はほとんど猿投産で、2点のみ尾北産が見られる。49点の緑釉陶器の出土は県内では中原遺跡の98点に次ぐものである。

以上のことから若干の考察をしてみたい。茨城県内の施釉陶器の流通は水上交通をキーワードとし、①久慈川流通圏、②那珂川流通圏、③霞ヶ浦流通圏、④鬼怒川流通圏に分かれ、交通の要衝である津あるいは河川港を経て、大規模集落さらには小規模集落へと流通していくことが指摘されている⁸⁾(第199図)が、当遺跡ほどの流通圏に属するものであろうか。注目したいのは桜川である。当遺跡は桜川の支流である泉川右岸に立地し、泉川は遺跡の南約800mの地点で桜川と合流している。その後、桜川は筑波山麓の西側を南下し、霞ヶ浦へ注いでいる。途中には真壁郡・筑波郡・河内郡の郡衙が存在する(推定地を含む)ように、この川は古代において重要な役割を持っていたと推測され、当遺跡の南方に河川港(川津)が存在した可能性が考えられる。霞ヶ浦の津(土浦市石橋北遺跡など)から桜川を遡行し、岩瀬盆地へ至るルートが推測されうるならば、当遺跡は霞ヶ浦流通圏に属するといえ、常陸国府との繋がりも考えられよう。つくば・霞ヶ浦周辺を中心に出土している三河・遠江系の灰釉陶器が出土していることも傍証となる。一方、東濃産の施釉陶器が出土していることは東山道による陸送が想定され、峯崎遺跡と同様に隣国下野の国府市との交易などが行われていた可能性は前述したが、その場合に注目したい点は那賀郡河内駅から新治郡大神駅を経て下野に通ずる常陸・下野連絡駅路である。この駅路は中村太一氏によると第200図のように想定されており⁹⁾、当遺跡の付近を通る¹⁰⁾。さらにつくば方面から益子への南北道¹¹⁾がある。これらの桜川、常陸・下野連絡駅路、つくば・益子道が交わる場所が当遺跡周辺であり、交通の要衝であったことが考えられる¹²⁾。

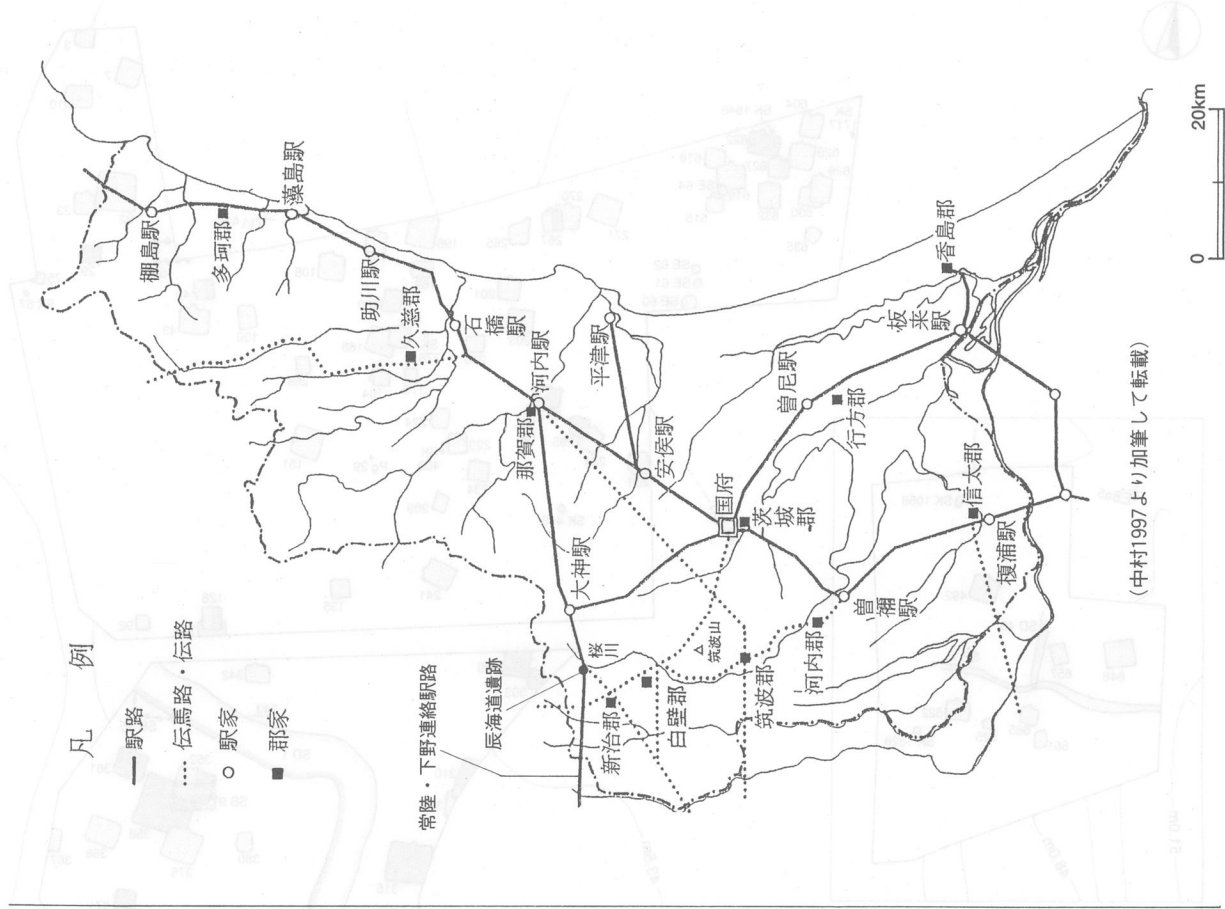
次に、緑釉陶器の出土状況について述べる。第201図は当遺跡出土の施釉陶器の分布図である。これを見ると、灰釉陶器の広範囲な分布に比べ、緑釉陶器の分布には集中が見られる。第1項の第14期の部分では、田中氏の「(緑釉陶器の)使用の主体は、掘立柱建物にあり、廃棄は遺跡内の一定区域に限定されていた」「保管から廃棄は、限定された場所で行われていた」という指摘¹³⁾を受けて、緑釉陶器の多くが細片で覆土中からの出土であり、出土した遺構の多くが緑釉陶器の時期と合わないこと、周囲に掘立柱建物跡が存在することなどから、これらの緑釉陶器は掘立柱建物跡に属するものであり、その性格に施釉陶器を保管する倉庫、あるいは使用する場を想定した。また、前述したのは第1区と第2区南部付近、第2区東部付近についてであるが、第2区西部にもやや集中が見られ、調査区域外に掘立柱建物が存在した可能性がある。なお、第3区北東部と北西部には遺跡内で優位な立場にあったと推定される住居跡があり、緑釉陶器はそこに属する人物のものであろう。

当遺跡で施釉陶器の出土量が増加しはじめる9世紀前半代は掘立柱建物群が出現し、遺跡が拡大していく時期である。これら多くの施釉陶器の消費から、交通の要衝という立地を背景に、豊富な財力を持った人々の姿

がうかがえよう。

註

- 1) 『辰海道遺跡1』の本文中では出土した緑釉陶器片は42点とあるが、第586号土坑からも遺物番号4599の緑釉陶器輪花碗が出土しており、総数43点となる。
- 2) 猿投窯跡群のものを使用。
- 3) 『辰海道遺跡1』で「猿投産（二川産の可能性を残す）」「猿投産（尾北産の可能性を残す）」とされているものも表中では猿投産とした。
- 4) 奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(1)」『研究ノート』4号 助茨城県教育財団 1995年6月
奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(2)」『研究ノート』5号 助茨城県教育財団 1996年6月
奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(3)」『研究ノート』6号 助茨城県教育財団 1997年6月
奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(4)」『研究ノート』7号 助茨城県教育財団 1998年6月
奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(5)」『研究ノート』8号 助茨城県教育財団 1999年6月
- 5) 川井正一 「国分遺跡出土施釉陶器の検討」『国分遺跡－確認調査報告書－』 石岡市教育委員会 2002年3月
「萌黄色の器－施釉陶器の交易と流通について－」『茨城史林』第26号 茨城地方史研究会 2002年6月
- 6) 註5と同じ。
- 7) 石岡市国分遺跡，つくば市中原遺跡，同市熊の山遺跡，水戸市梶内遺跡などから出土している（川井前掲）。
- 8) 註4と同じ。
- 9) 中村太一 「常陸国真壁郡の古代官道」『筑波山陰 真壁周辺の古道』展示図録 真壁町歴史民俗資料館 1997年10月
- 10) この連絡路は金谷遺跡，当向遺跡の付近を通過する。両遺跡とも奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されており，平成16年3月に当財団により報告書刊行予定である。
- 11) 瓦吹 堅 「岩瀬盆地考古学点描」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』 阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
2003年4月
また，この道は益子からさらに北上すると栃木県南那須町で東山道に合流すると考えられる。合流地付近の南那須町長者ヶ平遺跡からは駅家の可能性もある官衙関連遺跡が確認されており，周囲には当遺跡と音の通じる「タツ街道」という地名がある（栃木県立しもつけ風土記の丘資料館編 『律令国家の地方官衙－古代の役所Ⅱ－』展示図録 栃木県教育委員会 2002年10月）。
- 12) 田中氏は「市」は，国内物流の結節点として幹線道路の交差点や渡河点，港や津，あるいは国府などに成立した」と指摘しており，当遺跡の周辺にも「市」の存在が推測される（田中前掲）。
- 13) 田中前掲。



第200図 常陸国内交通路想定図



第199図 茨城県域の施釉陶器分布図



第201図 辰海道遺跡遺物出土分布図（施釉陶器）

表12 灰釉・緑釉陶器分類表

灰釉陶器

器種	窯式	井ヶ谷78号窯式	黒笹14号窯式	黒笹14～90号窯式	黒笹90号窯式	折戸53号窯式	窯式不明	計
碗		0	8	1	54	7	9	79
皿		0	1	0	18	4	2	25
長頸瓶		2	6	2	15	0	17	42
短頸壺		0	0	1	2	0	1	4
壺・瓶類		0	7	8	11	1	7	34
蓋		0	2	0	1	0	0	3
不明		0	0	0	3	0	0	3
計		2	24	12	104	12	36	190

※窯式・器種には推定を含む、皿には輪花皿・段皿・折縁皿・耳皿を含む、壺・瓶類には広口瓶・手付瓶・小瓶・平瓶を含む

緑釉陶器

器種	窯式	井ヶ谷78号窯式	黒笹14号窯式	黒笹14～90号窯式	黒笹90号窯式	折戸53号窯式	窯式不明	計
碗		0	2	0	21	1	4	28
皿		0	0	0	15	1	1	17
碗・皿類		0	0	0	3	0	0	3
壺・瓶類		0	0	1	0	0	0	1
計		0	2	1	39	2	5	49

※窯式・器種には推定を含む、碗には輪花碗・稜碗を含む、皿には段皿を含む

産地

器種	窯式	井ヶ谷78号窯式	黒笹14号窯式	黒笹14～90号窯式	黒笹90号窯式	折戸53号窯式	窯式不明	計
猿投		2	26(2)	13(1)	134(39)	11(1)	30(3)	216(46)
東濃		0	0	0	9	1	5	15
尾北		0	0	0	0	1(1)	1(1)	2(2)
三河・遠江系		0	0	0	0	1	3	4
不明		0	0	0	0	0	2(1)	2(1)
計		2	26(2)	13(1)	143(39)	14(2)	41(5)	239(49)

※窯式・産地には推定を含む、()内の数字は緑釉陶器数(内数)

表13 灰釉陶器・緑釉陶器一覧表

番号	遺物番号	遺構	遺構の時期	出土位置	種別	器種	部位	産地・窯式・その他
1	5157	S I 604	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	短頸壺	体部	猿投産黒笹90号窯式カ
2	5158	S I 604	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶カ	体部	猿投産
3	-	S I 615	10世紀前葉	覆土中	灰釉陶器	碗	体部	東濃産
4	-	S I 615	10世紀前葉	確認面	灰釉陶器	長頸瓶	体部	東濃産
5	5236	S I 618	10世紀前葉	覆土中	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
6	5257	S I 619	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗カ	底部	猿投産黒笹90号窯式
7	5258	S I 619	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
8	5259	S I 619	9世紀後葉	東壁際床面	灰釉陶器	長頸瓶	頸部	猿投産、5260と同一個体カ
9	5260	S I 619	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	頸部	猿投産、5259と同一個体カ
10	-	S I 622	9世紀後葉	覆土中	緑釉陶器	皿カ	体部	尾北産カ
11	5300	S I 625	9世紀後葉	竈内中層	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹14号窯式カ
12	5301	S I 625	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	頸部	猿投産
13	5312	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
14	5313	S I 627	9世紀後葉	東部上層	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
15	5314	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
16	5315	S I 627	9世紀後葉	竈内	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
17	5316	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式カ
18	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗カ	体部	東濃産カ
19	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗カ	体部	東濃産カ
20	5317	S I 627	9世紀後葉	中央部上層	灰釉陶器	皿	口縁部～底部	東濃産光ヶ丘1号窯式
21	5318	S I 627	9世紀後葉	中央部上層	灰釉陶器	皿	口縁部	猿投産黒笹90号窯式、5319と同一個体カ
22	5319	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	皿	口縁部	猿投産黒笹90号窯式、5318と同一個体カ
23	5320	S I 627	9世紀後葉	竈内	灰釉陶器	皿	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
24	5321	S I 627	9世紀後葉	竈内	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
25	5322	S I 627	9世紀後葉	中央部上層	灰釉陶器	長頸瓶	体部	猿投産黒笹90号窯式カ
26	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	体部	猿投産
27	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	体部	猿投産
28	5323	S I 627	9世紀後葉	覆土中	緑釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
29	5324	S I 627	9世紀後葉	東部下層	緑釉陶器	稜碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
30	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	緑釉陶器	碗カ	体部	猿投産カ
31	-	S I 627	9世紀後葉	覆土中	緑釉陶器	碗カ	体部	猿投産カ

番号	遺物番号	遺構	遺構の時期	出土位置	種別	器種	部位	産地・窯式・その他
32	5341	S I 629	10世紀前葉	南部中層	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式、2片
33	5354	S I 630	9世紀中葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹14号窯式カ
34	-	S I 632	7世紀後半	覆土中	灰釉陶器	碗カ	体部	猿投産
35	5371	S I 635	10世紀後葉	竈内	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産折戸53号窯式カ
36	5413	S I 648	8世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹14号窯式カ
37	5484	S I 657	10世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	皿	口縁部	猿投産
38	-	S I 661	11世紀前半	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶カ	頸部	猿投産
39	-	S I 665	9世紀後葉	覆土中	灰釉陶器	碗カ	体部	猿投産
40	5559	S K 1646	不明	覆土中	灰釉陶器	折縁皿	口縁部	猿投産折戸53号窯式
41	5566	S K 1717	不明	覆土中	灰釉陶器	皿	口縁部	猿投産黒笹14号窯式カ
42	5609	S E 60	10世紀前葉以前	覆土中	灰釉陶器	平瓶	口縁部	猿投産、内面漆付着
43	-	S E 60	10世紀前葉以前	覆土中	灰釉陶器	皿	体部	猿投産黒笹90号窯式
44	-	S E 61	不明	覆土中	灰釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
45	-	S E 62	不明	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶カ	体部	猿投産
46	5616	S E 64	不明	地下水面下	灰釉陶器	皿	底部	猿投産黒笹90号窯式
47	-	S E 64	不明	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶カ	体部	猿投産カ
48	-	S E 64	不明	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶カ	体部	三河・遠江系
49	5627	S D 45	近世以降	覆土中	灰釉陶器	碗	底部	三河・遠江系、折戸53号窯式併行
50	-	S D 45	近世以降	覆土中	灰釉陶器	瓶	体部	三河・遠江系
51	-	S D 45	近世以降	覆土中	灰釉陶器	瓶	体部	三河・遠江系
52	5640	-	-	Ⅱ区表採	灰釉陶器	皿	底部	東濃産光ヶ丘1号窯式
53	5641	-	-	E 8 j 6 区表採	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
54	5642	S I 271	7世紀前半	覆土中	灰釉陶器	長頸瓶	口縁部	猿投産
55	5570	-	-	Ⅲ区表採	緑釉陶器	碗	口縁部	猿投産黒笹90号窯式
56	-	-	-	E 8 j 6 区表採	灰釉陶器	皿カ	体部	猿投産
57	-	-	-	Ⅱ区表採	灰釉陶器	碗カ	体部	東濃産

3 文字資料（第202・203図，表14）

当遺跡から出土した墨書・刻書・ヘラ書きなどが見られる遺物は『辰海道遺跡1』『辰海道遺跡2』を合わせて162点である。その内、1点の遺物に2か所認められるものが6点あるため、計168点の文字資料が存在する。168点の内、墨書が106点、刻書が15点、ヘラ書きが47点である。材質別では土師器が118点、須恵器が49点、滑石(紡錘車)¹⁾が1点である。器種別では坏が118点、碗(高台付坏, 高台付碗を含む)が34点、高台付皿が5点、蓋が3点、皿・甕が各2点、小皿・耳皿・紡錘車が各1点となっている。記された文字・記号では「福」「大」「万富集」「万富」「万木」「万」などの吉祥句的なものや、「×」「十」「-」「=」などが見られる。また、「庄」「庄南」「善庄」「□庄」などの文字は荘園との関連が考えられ、「新室」「室」「西宅」「八万八万家」「御屋万得」「屋」などの文字は荘所や有力者の居宅などとの関係がうかがえる。しかし、容器の管理に関する文字や、官人の役職・施設などを示す文字は出土しておらず、文字資料からは官衙的な様相は見受けられない。以上が出土した文字資料の概要であるが、当遺跡は前述したように南部と西部で引き続き調査が進行中であることもあり、詳細な分析は今後の課題とし、ここでは特徴的なものをいくつか選び、小考を試みることにしたい。

当遺跡出土の文字資料を特徴付ける第一の字句は「庄」に関わるものであろう。これらには「庄」「庄南」「善庄」「□庄」および関連すると考えられる「南」「□南」がある²⁾。数は「庄」10点、「庄南」7点、「善庄」「□庄」「南」「□南」各1点の総数21点である。すべて墨書であり、1点のみ須恵器で他はすべて土師器である。器種別では坏が16点、高台付坏(碗)が3点、高台付皿・皿が各1点となっている。最も古いものは第377号住居跡から出土した須恵器の坏で、床面からの出土とされており、住居廃絶時に伴うものと考えられ8世紀後葉に比定されている。墨書された文字は「庄」である。なお、古墳時代の遺構である第1号濠跡からも2点の「庄」関連墨書土器が出土しているが、埋没過程での流れ込みと考えられる。一方、最も新しいものは10世紀中葉と比定されている住居跡から出土している。これには覆土中から出土したものも含んでいるが、土器の時期もそれほど差はないと考えられる。これら「庄」関連墨書について『辰海道遺跡1』の本文中では同一筆跡は3点のみで、他は複数人による筆跡であること、「庄」は居宅などを表すと考えられること、すべて識字者

層によって書かれたことなどが指摘されている。また、まとめでは8世紀後葉以降に「庄」あるいは「庄南」と記された墨書土器が多数出土するようになり、当遺跡が所在する地域が「坂戸庄」と呼称されていることとあわせて、当地に初期荘園の存在を推定していることは前述した通りである。荘園遺跡について広く全国の事例について論じた宇野隆夫氏の論考によると「庄」やそれに関わる文字資料が出土した遺跡は32か所で、それらの内のいくつかは文献資料からも荘園遺跡として認められるものである³⁾。例えば、東大寺の初期荘園である横江荘として著名な石川県金沢市上荒屋遺跡からは多くの「東庄」「西庄」などの墨書土器が出土している⁴⁾。また、同県同市藤江B遺跡からは「石田庄」墨書土器が出土し、文献に残らない荘園の発見として注目を集めた⁵⁾。これらの類例から見て、当遺跡も荘園として存在していた時期があったと考えてよいであろう。次に、当遺跡の「庄」関連墨書の出土した遺構を見てみると、15点が竪穴住居跡からで、4点が溝跡、2点が井戸跡からである。その内、第72号住居跡は出土土器の多さや竈の規模から厨的な機能が指摘され、第178号住居跡からは鉄鍬や鍍金具などが墨書土器と併せて出土しており、有力者の存在が指摘されている。しかし、それ以外の遺構には集落内で優位な立場にいたことを示す積極的な証拠はなく、「庄」が居宅などを表すといえるかどうかは現状では不明である。さらに、「庄」と他の文字との関係であるが、出土した墨書には「庄」単独のもの、「菩」または「□」+「庄」のものと、「庄」+「南」がある。「庄」単独のものは前述したように8世紀後葉に現れ、10世紀中葉まで断続的に出土している。一方、「庄」+「南」は確実なものでは9世紀後葉に現れ、「□南カ」というものは9世紀中葉の住居跡から出土しており、おおむね9世紀の後半代から出土し始めると考えられる。『辰海道遺跡1』では「庄南」について「比較的大型の荘園では、荘所は複数存在するため、「庄」の前後いずれかに方位を付け加えた墨書が見られることが多く（中略）当集落が大型荘園に成長していたことを表している」とし、在地有力者の居宅が遺跡の北方に存在していると推定している。周囲の状況が不明であり荘所が複数あるほどの大型荘園であったかどうか、また、横江荘のように、墨書土器に言う東西南北が必ずしも地図上の方位とは一致していないこともある⁶⁾、ということから『辰海道遺跡1』の推定をすべて首肯することはできないものの、「庄南」は当遺跡の位置に起因する名称であるといえ、一種の地名的なものであった可能性も考えられよう。また、「庄南」の墨書土器が出現し始める9世紀後半代は掘立柱建物群が減少し、第3区の北西部に特殊な小集団が出現する時期であり、この時期に一つの画期を見ることも可能であろう。次に、「菩」または「□」+「庄」であるが、「菩庄」「□庄」ともに1点のみの出土である。「菩庄」は第1号濠跡からの出土であり、正確な時期はつかみがたいが、10世紀代のもと考えられ、「□庄」の墨書があるものは10世紀中葉に比定される第285号住居跡からの出土である。小西昌志氏は「(なんらかの文字)」+「庄」という墨書が荘園名を表しているのではなく、「地名」+「庄」という意味が多く、地名でない場合は所有者・管理者関連の文字である可能性があると述べている⁷⁾。この「菩庄」が何を表しているのかは不明であるが、10世紀代は当遺跡の最盛期であり、拡大した荘園を表現する名称の一種であった可能性は考えられよう。

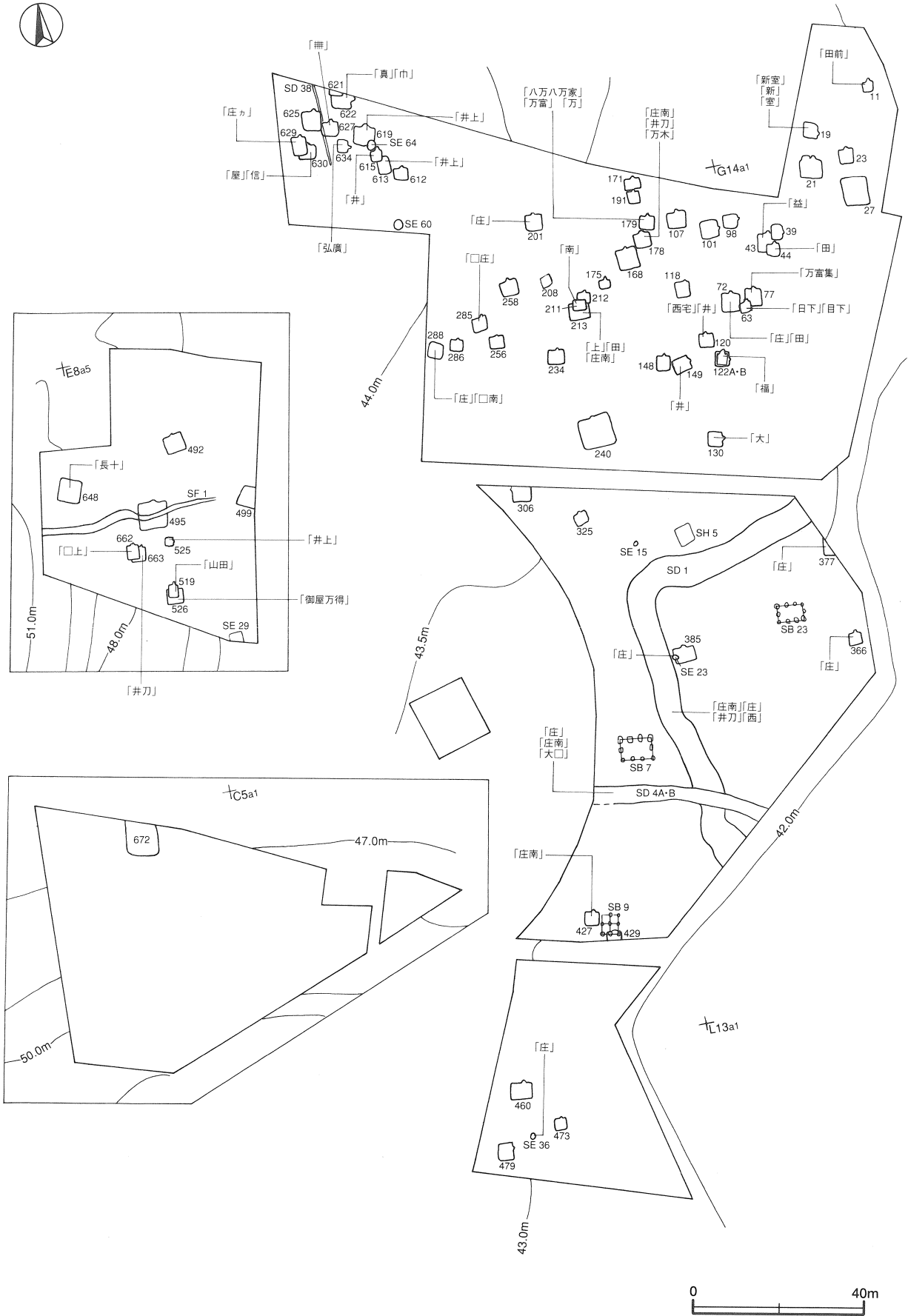
次に、特徴的なものとして、「井上」が挙げられる。この文字が出土する場所は第3区の北西部と第4区に限られる。第3区の北西部には、豊富な施釉陶器、土師器耳皿、朱墨痕の残る転用硯、漆付着遺物などをもち、集落の管理統括機能の一部を有していた可能性のある特殊な集団が存在し、「井上」の文字はこの集団の標識文字であった可能性がある。第4区の工房地区からもこの「井上」の文字は出土しており、両者の間に何らかの関係性がうかがえよう。また、第3区の北西部の集団に属する第627号住居跡から出土した「𠄎」は陰陽道や修験道における「𠄎」（九字（あるいはドーマン））の略字と考えられる。同様に第615号住居跡の「井」もまた九字の略字であると考えられている⁸⁾。こうした魔除けの文字・記号は全国に普遍的に見られるが、その

信仰・祭祀の普及・伝播における点で興味深いのが第634号住居跡から出土した「弘廣」の文字である。千葉県東金市作畑遺跡と同県同市久我台遺跡から出土した「弘貫」という文字は僧侶の名前を示していると考えられており⁹⁾、「弘廣」も僧侶の名前である可能性が考えられる。当時すでに神仏習合的あるいは混在的な信仰・祭祀のあり方は特に地方においては顕著であり、僧侶が純粋な仏教だけではなく、陰陽道や修験道的な信仰や、それらに多大な影響を与えた道教の信仰¹⁰⁾に際して何らかの役割を持っていたことが想像される。しかし、当遺跡からは鉄鉢形土器1点や数点の油煙付着土器などが出土しているのみで、『辰海道遺跡1』では周囲に村落内寺院の存在を示唆しているが、現状では規模の整った仏教施設があったわけではなく、笹生衛氏が主に千葉県内の事例を分析し提唱している、仏教関係遺跡の分類¹¹⁾の内、第5類型¹²⁾のような状況にあったと考えるほうが自然であろう。

最後に「井刀」について述べる。この「井刀」の文字は当遺跡から3点(第178・663号住居跡、第1号濠跡)出土している。須恵器坏1点と土師器坏2点で、すべてヘラ書きであり、生産地で記されたものであろう。同様の文字が墨書された土器が当遺跡の北東約6.0kmに位置する間中遺跡から出土している¹³⁾(第1・203図)。この「井刀」の文字は「いど」と読み、「井戸」と同じ意味である¹⁴⁾。時期差や、ヘラ書きと墨書の差などはあるが、同様の文字が離れた遺跡から出土したことは興味深い。

註

- 1) 第5項で詳述。
- 2) 表14の番号13・16・40・67・79・80・85・91・94・95・96・99・101・104・105・106・120・122・124・125・156である。
- 3) 宇野隆夫 『荘園の考古学』 青木書店 2001年6月
- 4) 金沢市教育委員会 『上荒屋遺跡Ⅱ』 1993年3月
- 5) 石川県教育委員会 『金沢市藤江A, B遺跡 北陸自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1976年3月
- 6) 註3と同じ。
- 7) 小西昌志 「北陸荘園と墨書土器－横江庄の調査成果から－」『古代官衙・集落と墨書土器』 奈良文化財研究所 2003年3月
- 8) 平川 南 『墨書土器の研究』 吉川弘文館 2000年11月
また、山中章氏は都城の刻書・墨書土器の分析から、「×」「#」「*」などの単純な記号は文字を知らない人々が自分の食器を他人と区別するために付けたマークであると推定している(山中 章 「古代の都と村」『AERAMOOK 考古学がわかる』 朝日新聞社 1997年6月)。「井」については同様の識別マークあるいは、「井上」の略であった可能性も考えられる。
- 9) 財団法人千葉県文化財センター 『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』 1993年3月
- 10) 竈の廃棄に際し、火床面付近に土師器の坏や小皿などを重ねた状態で遺棄する行為を行っている住居跡が当遺跡からは3軒確認されているが(第627・663・665号住居跡)、すべて第3区の北西部と第4区に存在する。これらは竈祭祀の一形態と考えられ、竈神という道教的な信仰が集落内の一部に存在していたことを示している。また、第4区の第1号道路跡からは土馬の可能性もある土製品が出土している。
- 11) 笹生 衛 「東国古代集落内の仏教信仰と神祇信仰」『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会 2002年3月
- 12) 第5類型は「仏堂遺構は存在せず、仏具・仏教関連の墨書土器のみ出土。僧侶の訪問や優婆塞・優婆夷の存在」が想定される遺跡である。また、笹生氏はこのような遺跡からは仏教関係遺物と併せて神祇・道教関係の遺物が出土する傾向が強い、と述べている(笹生前掲)。
- 13) 岩瀬町教育委員会 『岩瀬・間中』 1976年5月
- 14) 平川南氏のご教示による。記して感謝したい。



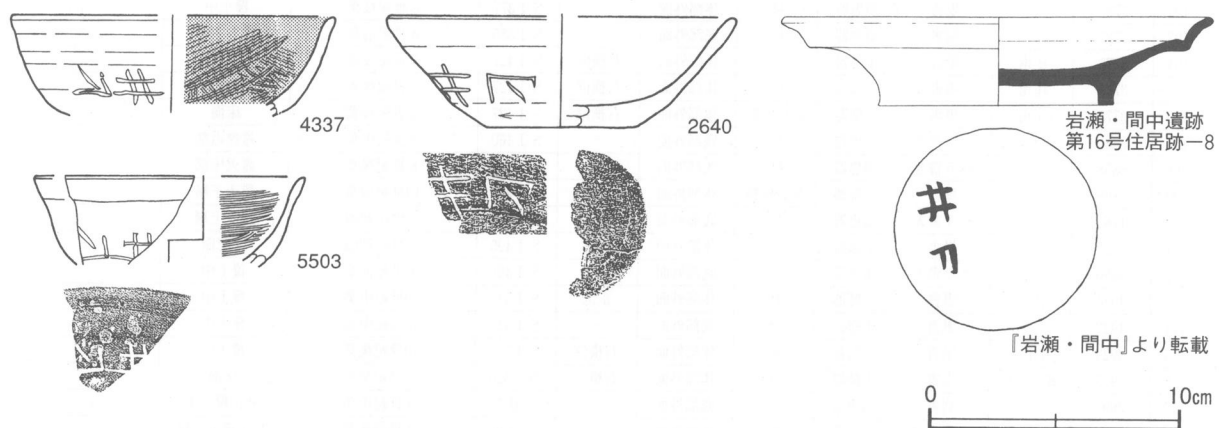
第202図 辰海道遺跡遺物出土分布図（主な文字資料）

表14 文字資料一覧表

番号	遺物番号	釈文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	遺構の時期	出土位置	備考
1	295	△	刻書	土師器	坏	底部外面	-	S I 118	7世紀前葉	覆土上層	
2	722	十	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 168	6世紀中葉	覆土下層	
3	723	十	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 168	6世紀中葉	床面	
4	731	×	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 168	6世紀中葉	覆土上層	
5	732	×	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 168	6世紀中葉	覆土下層	
6	344	×	ヘラ書き	土師器	椀	底部外面	-	S I 208	5世紀中葉	覆土下層	
7	908	×	ヘラ書き	須恵器	甕	口縁部内面	-	S I 240	6世紀中葉	覆土下層	
8	950	>	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 258	7世紀前葉	覆土下層	
9	3800	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 429	古墳時代後期以前	覆土中	
10	4802	十	刻書	土師器	坏	体部外面	-	S H 5	5世紀中葉~それ以前	覆土中層	
11	4009	キ	刻書	須恵器	坏	体部外面	右横位	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土中	
12	4013	十	刻書	須恵器	高台付坏	体部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土中	
13	4014	庄南	墨書	土師器	皿	体部外面	左横位	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土中層	
14	4197	□	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
15	4198	□	墨書	土師器	高台付坏	底部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土中	
16	4286	善庄	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
17	4290	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土中層	
18	4291	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
19	4292	西	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	正位	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
20	4318	三	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
21	4337	井刀	ヘラ書き	土師器	坏	体部外面	右横位	S D 1	4世紀中葉~6世紀前葉	覆土上層	
22	2021	田前カ	墨書	土師器	高台付椀カ	体部外面	左横位	S I 11	10世紀中葉	床面	
23	2055	新室	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土下層	
24	2056	新室カ	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土中	
25	2057	室	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土中	
26	2058	室カ	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土中	
27	2059	新カ	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土中	
28	2060	室カ	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	覆土中	
29	2062	新室	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	床面~覆土下層	
30	2063	新室カ	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	右横位	S I 19	9世紀後葉	床面~覆土下層	
31	2075	>	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 21	8世紀後葉	床面	
32	2082	=カ	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	S I 23	8世紀前葉	床面	
33	2099	□	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	-	S I 39	10世紀後葉	床面	
34	2112	益カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 43	10世紀前葉	床面	
35	2113	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 43	10世紀前葉	覆土中層	
36	2120	田カ	刻書	土師器	高台付椀	体部外面	左横位	S I 44	10世紀中葉	竈火床部	
37	2137	目下カ	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 63	10世紀中葉	覆土下層	
38	2139	目下カ	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 63	10世紀中葉	竈内覆土下層	
39	2504	田カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 72	9世紀後葉	覆土下層	
40	2506	庄カ	墨書	土師器	坏	底部外面	-	S I 72	9世紀後葉	覆土中	
41	2511	万富集カ	墨書	須恵器	坏	体部外面	左横位	S I 77	9世紀中葉	床面	
42	2527	-	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 98	10世紀中葉	覆土下層	
43	2162	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 101	9世紀中葉	覆土中	
44	2541	-	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 107	9世紀後葉	覆土下層	
45	2542	=	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 107	9世紀後葉	覆土下層	
46	2552	西宅	墨書	須恵器	高台付坏	体部外面	右横位	S I 120	9世紀前葉	床面	底部内面に朱墨痕、外面に墨痕、硯転用、2か所有り
47	2552	廿	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 120	9世紀前葉	床面	2か所有り
48	2553	井	ヘラ書き	須恵器	蓋	内面	-	S I 120	9世紀前葉	覆土下層	
49	2557	×	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 122A	9世紀後葉	床面	
50	2748	□	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 122A	9世紀後葉	覆土中	
51	2749	福カ	墨書	須恵器	坏	体部外面	右横位	S I 122A	9世紀後葉	覆土中	
52	2666	=	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 122B	9世紀中葉	床面・P1覆土上層	
53	2667	=	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 122B	9世紀中葉	竈火床部	
54	2571	大	墨書	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 130	9世紀中葉	竈火床部・覆土下層	2か所有り
55	2571	=	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 130	9世紀中葉	竈火床部・覆土下層	2か所有り
56	2572	=	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 130	9世紀中葉	床面	
57	2576	□	墨書	土師器	坏	底部外面	-	S I 148	9世紀後葉	覆土下層	
58	2577	×	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 148	9世紀後葉	覆土下層	
59	2579	=	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 148	9世紀後葉	覆土中層	
60	2580	□	墨書	土師器	蓋	外面	-	S I 148	9世紀後葉	竈右袖部	
61	2768	□	ヘラ書き	須恵器	坏	体部外面	-	S I 148	9世紀後葉	覆土下層	
62	2581	井	刻書	土師器	坏	体部外面	-	S I 149	10世紀中葉	覆土下層	
63	2771	□	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	-	S I 149	10世紀中葉	覆土下層	
64	2621	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 171	10世紀前葉	貯蔵穴覆土上層	
65	2633	廿	ヘラ書き	須恵器	甕	体部外面	-	S I 175	10世紀中葉	床面	
66	2750	□	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 175	10世紀中葉	覆土中	

番号	遺物番号	釈文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	遺構の時期	出土位置	備考
67	2751	庄南	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 178	10世紀前葉	竈内覆土中	
68	2640	井刀	ヘラ書き	須恵器	坏	体部外面	左横位	S I 178	10世紀前葉	覆土中層	
69	2752	=	ヘラ書き	須恵器	坏	体部外面	-	S I 178	10世紀前葉	覆土中	
70	2641	万木	墨書	土師器	高台付皿	体部外面	右横位	S I 178	10世紀前葉	覆土中～下層	
71	2647	八万八万家	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 179	9世紀中葉	覆土下層	
72	2649	万富	墨書	土師器	坏	底部外面	-	S I 179	9世紀中葉	竈火床部	
73	2650	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 179	9世紀中葉	覆土中	
74	2651	万	墨書	土師器	坏	底部外面	-	S I 179	9世紀中葉	覆土中	2か所有り
75	2651	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 179	9世紀中葉	覆土中	2か所有り
76	2652	□	墨書	土師器	坏	体部内面	-	S I 179	9世紀中葉	覆土中	2か所有り
77	2652	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 179	9世紀中葉	覆土中	2か所有り
78	2671	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 191	10世紀中葉	覆土中	
79	2680	庄	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	右横位	S I 201	10世紀中葉	覆土中層	
80	2697	南	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 211	10世紀中葉	床面	
81	2702	-	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 212	9世紀中葉	竈火床部	
82	2703	-カ	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 212	9世紀中葉	竈火床部	
83	2712	上	刻書	土師器	坏	底部内面	-	S I 213	9世紀後葉	覆土下層	2か所有り
84	2712	田	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 213	9世紀後葉	覆土下層	2か所有り
85	2713	庄南カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 213	9世紀後葉	床面	
86	2715	田カ	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 213	9世紀後葉	竈火床部	
87	866	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 234	10世紀前葉	覆土中	
88	3516	□	刻書	土師器	坏	底部内面	-	S I 256	10世紀後葉	竈火床部	
89	3519	十	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 256	10世紀後葉	覆土中	
90	3518	十	ヘラ書き	土師器	高台付椀	底部外面	-	S I 256	10世紀後葉	竈火床部	
91	3595	□庄	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 285	10世紀中葉	貯蔵穴覆土下層	
92	1601	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 286	10世紀前葉	覆土中	
93	1602	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 286	10世紀前葉	覆土下層	
94	3604	庄	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	S I 288	9世紀中葉	床面	
95	3605	□南カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 288	9世紀中葉	貯蔵穴覆土中	
96	3606	庄	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 288	9世紀中葉	覆土下層	
97	3656	十	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 306	8世紀後葉	覆土中層	
98	3682	□	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 325	10世紀中葉	覆土上層	
99	3715	庄	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 366	9世紀前葉	覆土中	
100	3716	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 366	9世紀前葉	覆土中	
101	3719	庄	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位	S I 377	8世紀後葉	床面	
102	3720	□	墨書	須恵器	坏	体部外面	-	S I 377	8世紀後葉	覆土中	
103	3727	□	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	S I 385	8世紀前葉	覆土中層	
104	3775	庄南	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 427	9世紀後葉	床面	
105	3777	庄南	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 427	9世紀後葉	床面	
106	3778	庄南	墨書	土師器	高台付皿	体部外面	右横位	S I 427	9世紀後葉	床面	
107	3839	<	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 460	8世紀中葉	竈煙道部	
108	3858	□	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 473	8世紀後葉	竈火床部	
109	3868	ニハ	墨書	土師器	高台付椀	体部外面	逆位	S I 479	10世紀前葉	覆土下層	
110	1269	×	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 492	8世紀初頭	覆土上層	
111	1323	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 495	8世紀初頭	確認面	
112	3890	-	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 499	8世紀前葉	覆土中	
113	4924	山田	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	S I 519	10世紀中葉	覆土中	
114	4922	□	墨書	須恵器	坏	底部外面	-	S I 519	10世紀中葉	覆土中	
115	3923	井上カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 525	10世紀後葉	覆土中	
116	3925	御屋万得	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 526	9世紀後葉	床面	
117	3993	□	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	S B 7	9世紀中葉	P 10覆土中	
118	3991	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S B 9	9世紀後葉	P 4 覆土上層	
119	4912	□	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	-	S B 23	9世紀前葉	P 4 覆土中	
120	3950	庄	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	左横位	S E 23	10世紀前半	覆土中層	
121	3979	×	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S E 29	中世	覆土中	
122	3965	庄カ	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S E 36	9世紀後半	覆土中層	
123	4006	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 4 A	9世紀代	覆土下層	
124	4445	庄南	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S D 4 A	9世紀代	覆土上層	
125	4448	庄カ	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S D 4 A	9世紀代	覆土中	
126	4005	□	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S D 4 B	9世紀代	覆土下層	
127	4418	□□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 4 B	9世紀代	覆土下層	
128	4447	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 4 B	9世紀代	覆土中層	
129	4424	大□	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S D 4 B	9世紀代	覆土中	
130	4427	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 4 B	9世紀代	覆土中	
131	4428	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S D 4 B	9世紀代	覆土中	
132	4436	□	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	-	S D 4 B	9世紀代	覆土中	
133	4465	×	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	S F 1	16世紀代	覆土中	
134	4503	×	ヘラ書き	土師器	高台付椀	底部外面	-	S K 60	不明	覆土中	
135	4590	二	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S K 1324	不明	覆土中	

番号	遺物番号	釈文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	遺構の時期	出土位置	備考
136	3945	□	墨書	須恵器	坏	体部外面	-	S E 15	不明	覆土中	
137	4007	□	墨書	土師器	小皿	底部外面	-	遺構外	-	-	
138	4738	□□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	遺構外	-	-	
139	4734	幡	墨書	須恵器	坏	体部外面	右横位	遺構外	-	-	
140	5061	×	刻書	土師器	坏	底部内面	-	S I 672	6世紀後葉	床面	
141	5189	N	ヘラ書き	須恵器	高台付坏	底部外面	-	S I 612	9世紀前葉	覆土下層	
142	5208	井上	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 613	10世紀前葉	床面	
143	5216	井	刻書	土師器	坏	体部外面	-	S I 615	10世紀前葉	竈内	
144	5217	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 615	10世紀前葉	覆土中	
145	5237	井上	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 619	9世紀後葉	床面~覆土下層	
146	5241	井上	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 619	9世紀後葉	床面	
147	5242	□□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 619	9世紀後葉	覆土中	
148	5248	井上	墨書	土師器	高台付皿	体部外面	右横位	S I 619	9世紀後葉	覆土中層	高台圏内に朱墨痕
149	5249	井上	墨書	土師器	耳皿	体部外面	左横位	S I 619	9世紀後葉	覆土下層	
150	5263	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S I 621	10世紀以降	覆土中	
151	5265	真	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	S I 622	9世紀後葉	床面	
152	5268	巾	墨書	土師器	皿	体部外面	正位	S I 622	9世紀後葉	床面	
153	5293	□	墨書	土師器	高台付皿	体部外面	-	S I 625	9世紀後葉	床面	2か所有り
154	5293	□	ヘラ書き	土師器	高台付皿	底部外面	-	S I 625	9世紀後葉	床面	2か所有り
155	5306	冊	ヘラ書き	土師器	坏	底部外面	-	S I 627	9世紀後葉	覆土下層	
156	5332	庄カ	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	S I 629	10世紀前葉	覆土上層	
157	5344	屋	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	S I 630	9世紀中葉	床面	
158	5347	信	墨書	須恵器	坏	体部外面	右横位	S I 630	9世紀中葉	床面	
159	5348	一	ヘラ書き	須恵器	坏	体部外面	-	S I 630	9世紀中葉	竈内	
160	5361	弘廣	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 634	9世紀後葉	床面	
161	5364	□	ヘラ書き	須恵器	蓋	外面	-	S I 634	9世紀後葉	覆土上層	
162	5392	□	ヘラ書き	須恵器	坏	底部外面	-	S I 648	8世紀後葉	覆土下層	
163	5418	長十	刻書	滑石	紡錘車	側面	倒位	S I 648	8世紀後葉	床面	
164	5494	□上	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	S I 662	10世紀後葉	覆土中	
165	5503	井刀	ヘラ書き	土師器	坏カ	体部外面	右横位	S I 663	10世紀中葉	覆土中	
166	5606	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S E 60	10世紀前葉以前	覆土中	
167	5614	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	S E 64	10世紀以降	覆土中	
168	5618	□	墨書	土師器	碗	底部外面	-	S D 38	10世紀中葉以降	覆土中	



第203図 「井刀」墨書・刻書土器集成図

4 漆附着遺物（第204・205図，表15）

当遺跡からは漆が付着した遺物が16点出土している（表15）。出土した遺構は、竪穴住居跡10軒，井戸跡1基である（第205図）。これらの遺物は漆の状態や遺物の種類，出土状況などから，漆を使用するにあたっての各工程を復元する手掛りとなる。以下，各工程の概要とともに個々の漆附着遺物について記述する。

漆附着土器について，玉田芳英氏は出土資料・文献史料の両面から考察した論文を発表している¹⁾。また，宮瀧由紀子氏は玉田氏の考察を引きながら，漆を採取してから使用するまでの工程を以下のように整理した²⁾。

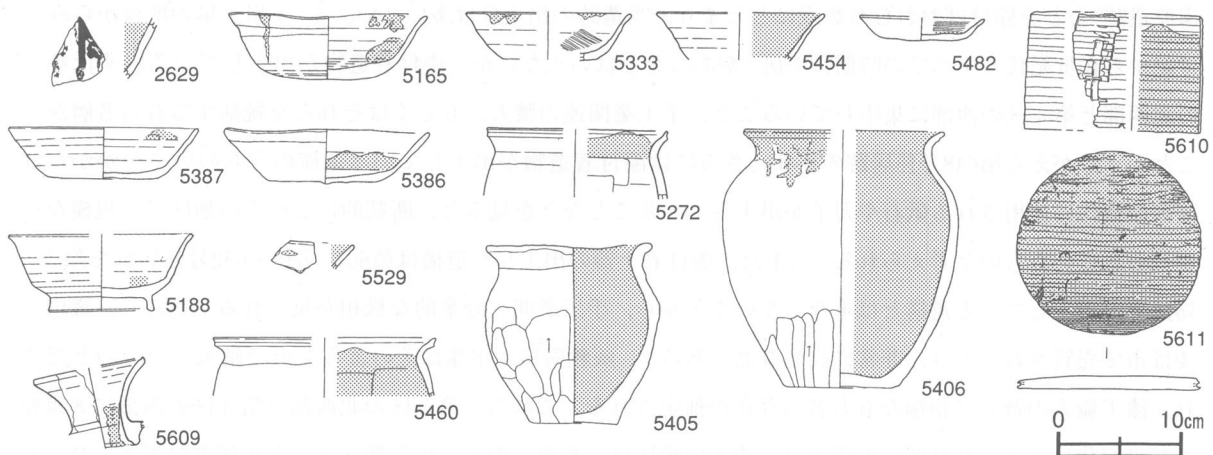
- 「第1段階 漆を木から採取する。→これに関連する遺物は明らかでない。
 第2段階 漆を産地から須恵器壺などに入れて消費地へと運搬する→藁や布などで壺の栓とする。
 第3段階 消費地では須恵器や土師器の甕に漆を移し、貯蔵する→漆を運搬容器から取り出すときは、容器自体を壊して、漆をかき出す。
 第4段階 漆を塗料として使用するには「くろめ」で精製する³⁾必要がある→精製するときには口の広い須恵器盤や土師器埴・甕を使う。
 第5段階 漆塗り作業のときは精製した漆を壺に小出しにし、さらに坏などのパレットに入れ、漆刷毛で塗る→漆は乾燥と埃を嫌うので、塗る作業を中断するときは漆の表面に紙を置いて蓋をした。
 この紙は役所の文書の反故紙を使ったので、漆紙文書として残った。」

この第1段階の漆を「アラミ(荒味)」といい、アラミのごみを濾過したものを「生漆(きうるし)」という。第2・3段階のものは生漆であろう。第4段階でくろめて精製された漆は「透漆(すきうるし)」という。透漆を黒漆にする際には煤や鉄漿をいれる。第5段階の漆がこれにあたる⁴⁾。

当遺跡から出土した漆付着遺物を各段階に当てはめてみると、5609(灰釉陶器の平瓶)は第2段階(運搬具)、5272・5405・5406・5460(土師器の甕)は第3段階(貯蔵具)⁵⁾、5386・5387(須恵器の坏)は第4段階(精製用具)、2629(土師器の坏)、5165・5454・5529(須恵器の坏)、5188(須恵器の高台付坏)、5333(土師器の坏)、5482(土師器の小皿)、5610・5611(曲物)は第5段階(パレット)にそれぞれ使用されたものと考えられる。5609は頸部より上の破片で、奈良県明日香村飛鳥池遺跡などの例を見ると内部の漆をかき出すために意図的に打ち欠き、廃棄されたものであろう。付着した漆は表面が縮れた状態の生漆である。5272や5406は漆が一部膜状になっており、透漆を貯蔵したか、くろめる時にも使用したと考えられる。5386は膜状の透漆が薄く何層か付着しており、くろめる道具として繰り返し使っていたと考えられる⁶⁾。5387はわずかであるが膜状の漆が付着しており、5386と同様な使用方法が推測される。5165・5188・5333・5454・5482・5529は黒漆が付着し、内面が摩滅したものや5165のように刷毛をならした跡が口縁部に見られることなどから、パレットとして使用されたものと考えられる。5610・5611は同一固体と考えられ、付着した漆は黒漆である。奈良県大和郡山市平城京右京八条一坊出土の曲物の例などからパレットとして使用され、貯蔵にも使われていたと推測される。これらの遺物は床面や竈内から出土したものだけを見ても、8世紀から10世紀代まで断続的に出土している。畿内と違い東国の遺跡から出土する漆付着土器は、埼玉県さいたま市根切遺跡⁷⁾や栃木県上三川町多功南原遺跡⁸⁾などを除けばおおむね数点にとどまり、当遺跡の出土量は多いといえる⁹⁾。出土量の増減からみて8世紀から10世紀代のすべての時期に工房¹⁰⁾があったとはいえないが、漆付着遺物が出土している場所は第3区の北西部と第4区の西部に集中していること、手工業関連の職人、もしくはそれらを統括する有力者層がいたことがうかがえる第648号住居跡の存在、さらには漆付着遺物が出土している遺構のうちのいくつかからは、漆器の製作に使用される砥石や刀子が出土していることなどを見ると、断続的にこれらの地区で小規模な漆工が行われていたものと考えられる¹¹⁾。また、漆付着土器の出土した遺構は第607・648・652号住居跡を除き¹²⁾、紡錘車が出土している遺構とは重ならないことから、手工業間に分業的な様相が見られる。さらに、畿内では漆は市で売買されており、非常に高価な品である¹³⁾。灰釉陶器の平瓶はそのような市で購入したのと考えられ、漆工職人の背景に裕福な有力者の存在が推定される。これら、第3区の北西部と第4区の西部に8世紀から10世紀代にかけて断続的に形成された漆工房地区は、形成に際し官の影響があった可能性は考えられるが、官営工房と考えられている他の遺跡と比べるとやや規格性に欠き、遺物のあり方や規模から見て、私営工房的な要素が強いものであったと考えられる。

註

- 1) 玉田芳英 「漆附着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会 1995年9月
- 2) 宮瀧由紀子 「大宮市根切遺跡出土漆附着土器をめぐって」『埼玉考古』32号 埼玉考古学会 1996年5月
- 3) 生漆の水分を抜くことを「クロメル」といい、生漆を攪拌することを「ナヤシ」という。通常、太陽熱か炭火で暖め、「クロメル」ながら「ナヤ」す。これを「精製」という(松田権六 『うるしの話』 岩波書店 1964年11月)。
- 4) 松田前掲
- 5) 5405・5406の甕は当遺跡周辺の土器とは調整方法・胎土などに若干の差異が見られ、市で購入されたものである可能性も考えられる。その場合、この甕は第2段階にも当てはまる。
- 6) ひたちなか市武田西塙遺跡の第172号住居跡から出土した須恵器の坏は内面に生漆(報告書中では漆状の残存物と表記)が付着しており、同様な使用状況が推測される。おそらく、くろめるために小出しにしたものを何らかの状況でそのまま遺棄したものであろう(佐々木義則 『武田西塙遺跡 奈良・平安時代編』 ひたちなか市教育委員会・(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2002年3月)。
- 7) 宮瀧由紀子 「水判土堀の内・林光寺・根切」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第132集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993年12月
- 8) 山口耕一 『多功南原遺跡』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団 1999年3月
「多功南原遺跡出土の文字資料について」『研究紀要 第9号-埋蔵文化財センター創立10周年記念論集-』 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001年3月
- 9) 渡邊大士氏のご教示による。他にも渡邊氏には多大なご教示を受けた。記して感謝したい。
- 10) 集落内で漆工や紡績を行う場合は、鍛冶と違い、遺構として残るような特別な施設はあまり必要なく、住居跡として扱っている遺構の中には工房的要素を持つものが含まれている可能性が考えられる。
- 11) ただし、集落から漆附着土器が断片的に出土した場合は、漆工だけでなく、漆を接着剤として使用していた可能性もある、という玉田氏の指摘(玉田前掲)は考慮しておく必要がある。
- 12) 第607・652号住居跡の紡錘車は覆土中からの出土であり、住居跡に伴わない可能性もある。
- 13) 例えば、天平6(734)年に米1升が0.2文に対し、漆1升は190~200文である(玉田前掲)。



第204図 辰海道遺跡漆附着遺物集成図

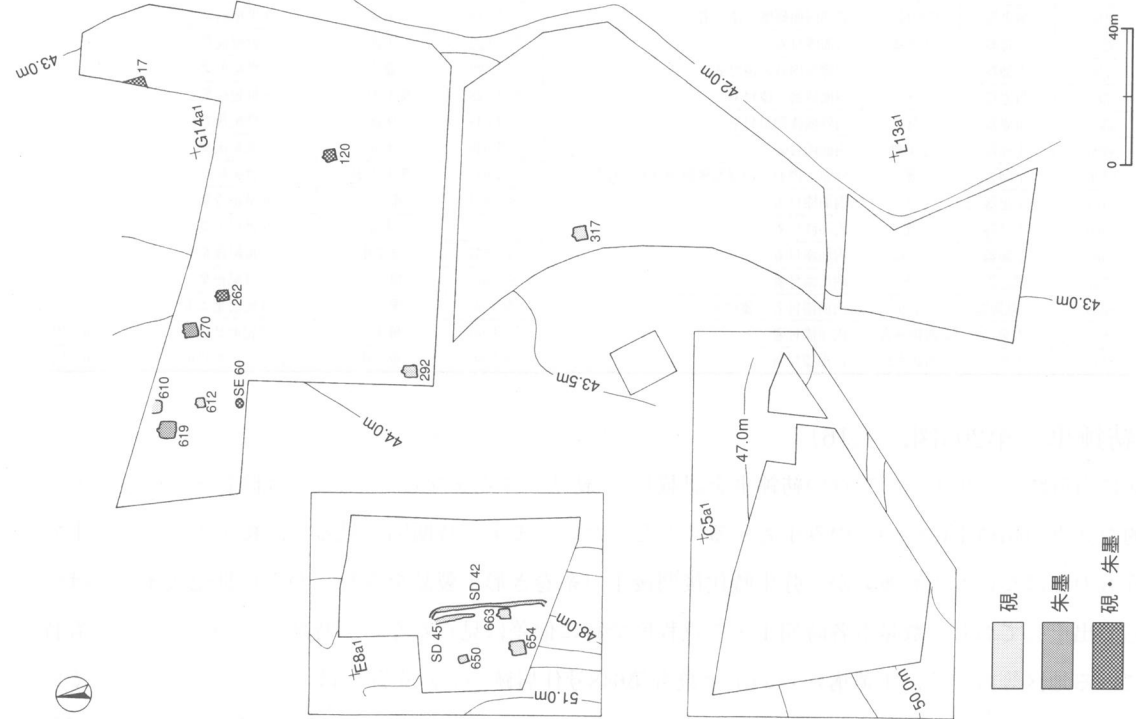
表15 漆附着遺物一覧表

番号	遺物番号	種別	器種	特 徴	出土遺構	出土位置	遺構の時期	備考
1	2629	土師器	坏	内面漆附着	S I 173	覆土中	10世紀後葉	
2	5165	須恵器	坏	内面漆附着	S I 607	床面	8世紀前葉	
3	5188	須恵器	高台付坏	底部内面研磨・漆附着	S I 612	床面	9世紀前葉	
4	5272	土師器	小形甕	内面漆附着	S I 622	床面	9世紀後葉	
5	5333	土師器	坏	口縁部内外面漆附着	S I 629	竈内	10世紀前葉	
6	5386	須恵器	坏	内面研磨・漆附着	S I 648	覆土中層	8世紀後葉	
7	5387	須恵器	坏	内外面漆微量附着	S I 648	床面	8世紀後葉	
8	5405	土師器	小形甕	内面漆附着	S I 648	床面	8世紀後葉	
9	5406	土師器	甕	外面～内面（口縁部破断面含む）漆附着	S I 648	覆土下層	8世紀後葉	
10	5454	須恵器	坏	内面漆附着	S I 651	覆土中	9世紀後葉	
11	5460	土師器	甕	内面漆附着	S I 652	床面	9世紀中葉	
12	5482	土師器	小皿	内面漆附着	S I 657	覆土中	10世紀後葉	
13	5529	須恵器	坏	内面漆附着	S I 665	覆土中	9世紀後葉	
14	5609	灰釉陶器	平瓶	内面漆附着，猿投産	S E 60	覆土中	10世紀前葉以前	頸部片
15	5610	木製品	曲物側板	内面漆附着	S E 60	覆土中	10世紀前葉以前	5611と同一固体カ
16	5611	木製品	曲物底板	内面漆附着	S E 60	覆土中	10世紀前葉以前	5610と同一固体カ

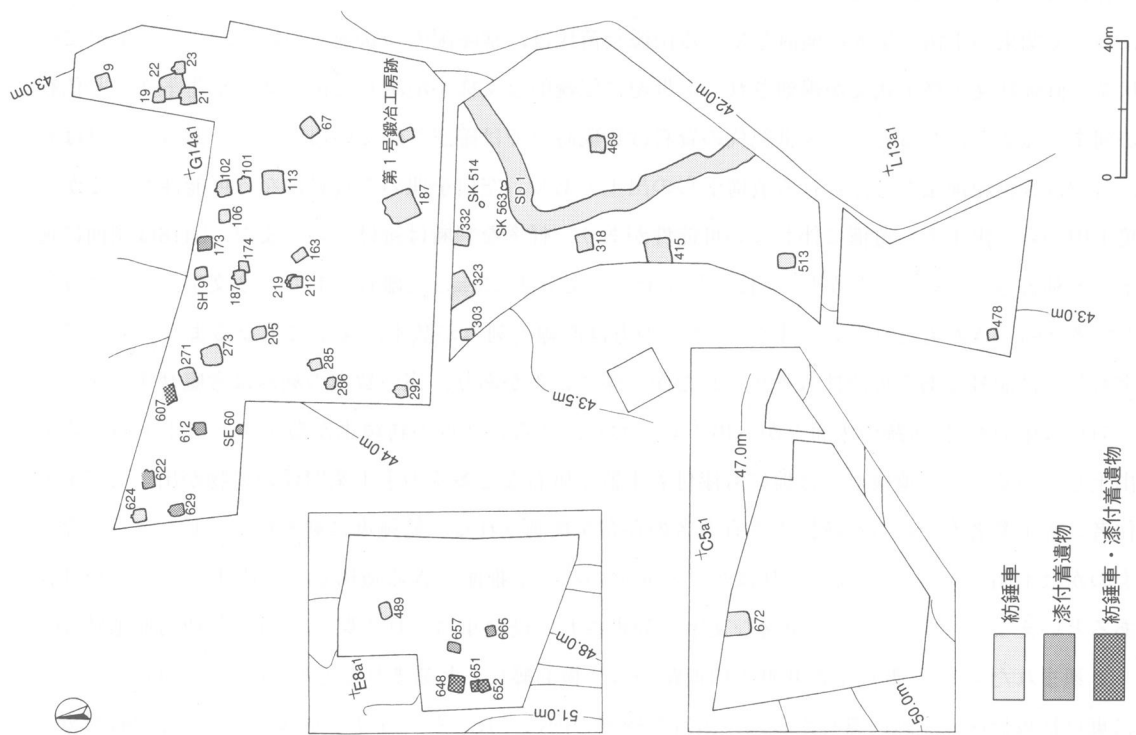
5 紡錘車（第205図，表16）

表16に当遺跡から出土した54点の紡錘車を記載した（紡莖カ3点を含む）。ここでは概要を述べるにとどめ、特徴的な3点の紡錘車についてのみ小考することとしたい。まず、時期別に見ると、覆土中からの出土で遺構に伴うものではないものも多いが、弥生時代後期後半（糸巻き形土製品を含む）から11世紀代までほぼ全時期を通して出土しており、数量も各時期1～5点程度で特に偏差は見られない。時期ごとの分布を見ても特に集中している地区等はなく、1遺構からの出土数も第648号住居跡の3点を除けば1～2点にとどまっている。材質は土製、石製、鉄製、土師器・須恵器転用が存在する。弥生時代はすべて土製品で、古墳時代は石製品（粘板岩・蛇紋岩・滑石）がやや多く、土製品もみられる。9世紀中葉以降、土師器・須恵器からの転用品が現れるようになり、土製・石製品とほぼ同数出土するようになる。9世紀末頃から鉄製品も出土し始める。

次に、当遺跡から出土した線刻を施された紡錘車について述べる。表16の遺物番号801・5173・5418である。801は上面に斜格子状の文様が施されており、5173は下面と側面に鋸歯状の文様が施されている¹⁾。線刻入り紡錘車について関東の事例を集成し検討している山添奈苗氏は、常陸国内の状況について、5～7世紀にかけて鋸歯状文・直弧状文・格子状文が線刻され、7世紀に伝統的な文様が消滅した後、文字や蓮華文など仏教的な絵画が刻まれるようになるとし、8世紀代の資料は集成時点では確認されていないようである²⁾。801は8世紀以降、5173は8世紀前葉と考えられる遺構からの出土であり、空白を埋める資料になる可能性もあるが、両者とも覆土中からの出土で、遺構に伴わない可能性があり、軽率な判断は避けたい。また、5418は側面に逆位で「長十」と刻書されている。しかし、「長」と「十」の文字は1.5cmほど離れており、2文字というよりは1文字ごとで考えるべきかもしれない。また、「十」の方は直線の刻みが数本、文字に重なるように入っており、別な字もしくは記号である可能性も考えられたが、深さに差があり、浅い数本の刻みは考慮せず「十」と判断した。5418は第648号住居跡の床面上から出土しており、さらに2点の紡錘車が覆土中と覆土下層からではあるが出土している。この遺構からは他にも漆附着土器や砥石など多くの手工業関係の遺物が出土しており、その居住者に手工業者かそれらを統括する有力者の存在が推測される。紡錘車に刻まれた「長」という字が何を示すものかは不明であるが、「長」と呼ばれる人物の存在が推測できる遺構からの出土は非常に興味深いものであるといえよう。なお、「長」を含む文字が刻書された紡錘車は、栃木県上三川町多功南原遺跡から「大郷長」と刻まれたもの³⁾、群馬県吉井町矢田遺跡から「物部郷長」と刻まれたもの⁴⁾がそれぞれ出土しており、さらに東京都板橋区四葉地区遺跡からは、煩雑な線刻の内に「長」という文字が含まれている可能性があるものが出土している⁵⁾。



第206図 辰海道遺跡遺物出土分布図 (硯・朱墨)



第205図 辰海道遺跡遺物出土分布図 (紡錘車・漆付着遺物)

註

- 1) 蓮弁表現である可能性も考えられる。
- 2) 山添奈苗 「常総における線刻入り紡錘車」『石岡市遺跡分布調査報告』 石岡市教育委員会 2001年3月
「線刻入り紡錘車から見た古代地域社会－関東地方出土事例から－」『土壁』第6号 考古学を楽しむ会 2002年5月
- 3) 山口前掲
- 4) 関口功一編 「矢田遺跡Ⅱ」(財群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999年3月)
- 5) 小林達雄ほか 『四葉地区遺跡－板橋区四葉地区遺跡発掘調査報告Ⅶ－中近世・古代編－』 板橋区四葉地区遺跡発掘調査会 2000年3月
原 京子 「四葉地区遺跡の考察－古代編①－」『あらかわ』第6号 あらかわ考古談話会 2003年5月

表16 紡錘車一覧表

番号	遺物番号	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土遺構	出土位置	遺構の時期
1	25	(4.1)	0.6	4.7	44.9	粘土	糸巻き形	S I 121	床面	弥生時代後期後半
2	34	5.2	0.7	1.9	49.0	粘土	刺突文	S I 163	P 9 覆土上層	弥生時代後期後半
3	65	3.4	0.6	3.6	32.6	粘土	糸巻き形	S I 469	覆土下層	弥生時代後期後半
4	66	3.4	0.6	1.6	23.8	粘土	-	S I 469	床面	弥生時代後期後半
5	67	5.3	-	11.8	(27.1)	粘土	-	S I 469	覆土中層	弥生時代後期後半
6	148	3.6	1.1	(0.5)	(4.4)	粘板岩	-	S I 22	覆土上層	7世紀前葉
7	231	4.9	0.7	2.2	41.5	粘土	-	S I 67	床面	6世紀中葉
8	285	4.6	0.8	1.7	49.3	蛇紋岩	-	S I 113	床面	6世紀前葉
9	2665	4.7	0.8	1.8	(53.3)	粘板岩	-	S I 187	床面	7世紀後半
10	797	4.0	0.8	1.6	40.0	滑石	-	S I 189	覆土下層	6世紀前葉
11	798	5.0	0.7	2.3	76.8	滑石	-	S I 189	床面	6世紀前葉
12	350	7.1	0.9	2.2	136.9	粘板岩	-	S I 271	覆土中	古墳時代中期～後期
13	1021	5.5	0.9	2.3	91.8	滑石	-	S I 273	覆土下層	7世紀前葉
14	1136	4.8	0.7	1.8	45.0	粘板岩	-	S I 318	覆土上層	7世紀前葉
15	1140	4.5	-	0.8	(27.0)	粘板岩	-	S I 323	覆土中	7世紀前葉
16	3685	(4.5)	[0.7]	1.9	(20.6)	粘土	-	S I 332	覆土上層	4世紀後半
17	1232	4.5	0.7	1.2	(31.8)	粘板岩	-	S I 415	覆土下層	6世紀中葉
18	1267	4.0	0.8	2.1	56.1	粘板岩	-	S I 489	床面	6世紀後葉かそれよりやや以前
19	4162	4.0	0.6	2.2	34.7	粘土	附加条一種の原体による施文	S D 1	覆土下層	4世紀中葉～6世紀前葉
20	4238	[5.0]	[1.2]	1.1	(14.3)	粘土	-	S D 1	覆土中層	4世紀中葉～6世紀前葉
21	4370	(3.9)	0.4	1.34	13.5	粘土	-	S D 1	覆土上層	4世紀中葉～6世紀前葉
22	2068	5.5	0.5	0.3	32.0	鉄	木質付着	S I 119	覆土下層	9世紀末葉～10世紀初頭
23	2080	4.4	0.9	2.5	50.4	粘土	-	S I 21	床面	8世紀後葉
23	2085	5.4	0.7	1.7	68.2	粘板岩	-	S I 23	覆土下層	8世紀前葉
25	2167	4.5	0.8	2.1	58.0	粘土	-	S I 101	覆土下層	9世紀中葉
26	2174	4.0	0.8	2.0	50.4	蛇紋岩	-	S I 102	床面	10世紀前葉
27	2537	3.1	-	0.5	(12.0)	鉄	鉄製紡茎残存	S I 106	覆土下層	10世紀後葉
28	2630	[13.0]	[1.0]	1.1	(58.1)	須恵器甕転用	-	S I 174	覆土中	10世紀中葉
29	834	6.1	1.1	4.1	158.5	粘土	-	S I 205	覆土下層	8世紀前葉以前
30	2710	5.8	0.8	0.9	40.7	須恵器甕転用	-	S I 212	覆土下層	9世紀中葉
31	2733	5.1	0.9	1.4	46.1	粘土	-	S I 219	P 1 底面	9世紀前葉
32	3603	4.8	1.0	1.3	25.0	粘土	-	S I 285	覆土上層	10世紀中葉
33	1069	5.9	1.1	2.2	70.0	粘土	半球状	S I 286	P 1 覆土上層	10世紀前葉
34	3624	(3.6)	[1.0]	0.8	(13.5)	土師器坏転用	-	S I 292	覆土上層	9世紀後葉
35	3642	(7.7)	1.3	1.1	81.9	土師器坏転用	-	S I 303	覆土上層	11世紀前半
36	3643	(5.3)	1.0	1.0	23.2	土師器坏転用	-	S I 303	覆土上層	11世紀前半
37	3867	3.7	0.3	0.2	4.2	鉄	-	S I 478	P 1 覆土下層	10世紀中葉
38	3904	(4.0)	-	0.6	(8.3)	土師器甕転用	-	S I 513	P 2 覆土中	10世紀後葉
39	2519	6.5	0.5	1.3	40.4	土師器高台付坏転用	-	第1号鍛冶工房跡	P 10 底面	11世紀前葉
40	801	5.0	0.8	(1.2)	(16.0)	滑石	上面に斜格子文	第9号方形整穴遺構	覆土中	8世紀以降
41	4512	[7.6]	[1.0]	0.8	(10.6)	土師器坏転用	-	S K 169	覆土中	-
42	4542	-	-	-	(3.0)	鉄	紡茎カ	S K 514	覆土上層	-
43	4593	-	-	-	(14.9)	鉄	紡茎カ	S K 563	覆土中	-
44	4594	-	-	-	(15.1)	鉄	紡茎カ	S K 563	覆土中	-
45	4730	4.4	0.5	2.5	40.7	粘土	-	遺構外	S I 235 覆土中	-
46	4733	5.2	1.0	2.4	26.3	粘土	附加条一種(附加2条)の原体による施文	遺構外	S I 360 覆土中	-

番号	遺物番号	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土遺構	出土位置	遺構の時期
47	4727	4.0	0.6	0.7	22.9	片岩	-	表採	-	-
48	5076	4.5	0.7	1.6	40.7	頁岩カ	側面放射状の調整	S I 672	床面	6世紀後葉
49	5173	(3.3)	-	0.8	(3.9)	滑石	側面・下面に鋸歯状の線刻	S I 607	覆土中	8世紀前葉
50	5284	2.7	0.4	0.55	4.7	シルト	-	S I 624	覆土中	9世紀前葉
51	5416	4.6	0.9	2.6	50.8	粘土	-	S I 648	覆土中	8世紀後葉
52	5418	5.0	0.9	1.7	51.3	滑石	側面に「長十」の刻書	S I 648	床面	8世紀後葉
53	5419	(5.1)	0.8	1.5	(40.1)	滑石	-	S I 648	覆土下層	8世紀後葉
54	5462	(4.1)	-	0.6	(7.45)	須恵器坏転用	-	S I 652	覆土中	9世紀中葉

表17 硯一覧表

番号	遺物番号	種別	器種	特 徴	出土遺構	出土位置	遺構の時期	備考
1	2039	須恵器	高台付坏	転用硯, 内面に朱墨痕	S I 17	覆土下層	9世紀前葉	
2	2552	須恵器	高台付坏	転用硯, 底部内面に朱墨痕, 底部外面に墨痕, 体部外面に「西宅」墨書, 底部外面に「十」ヘラ書き	S I 120	床面	9世紀前葉	
3	3547	須恵器	高台付坏	転用硯, 底部内面に朱墨痕, 底部外面に墨痕	S I 262	床面	8世紀中葉	
4	1011	須恵器	高台付坏	転用硯, 底部外面朱墨痕	S I 270	竈内覆土中	9世紀前葉	
5	3618	土師器	高台付坏	転用硯	S I 292	床面	9世紀後葉	
6	3670	須恵器	盤	転用硯	S I 317	覆土中層	9世紀中葉	
7	5183	須恵器	高盤	転用硯	S I 610	床面	9世紀中葉	
8	5192	須恵器	盤	転用硯	S I 612	覆土下層	9世紀前葉	
9	5193	須恵器	盤	転用硯	S I 612	覆土上層	9世紀前葉	
10	5194	須恵器	蓋	転用硯	S I 612	床面	9世紀前葉	
11	5248	土師器	高台付皿	転用硯, 高台圏内に朱墨痕, 体部外面に「井上」墨書	S I 619	覆土中層	9世紀後葉	
12	5450	須恵器	甕	転用硯	S I 650	覆土中層	11世紀前半	S I 648からの流れ込みか
13	5468	須恵器	盤	転用硯	S I 654	覆土中	9世紀中葉	
14	5512	須恵器	長頸瓶	転用硯	S I 663	床面	10世紀中葉	
15	5607	土師器	碗	転用硯, 高台圏内に朱墨痕, 墨痕	S E 60	覆土中	10世紀前葉以前	
16	5620	須恵器	円面硯	-	S D 42	覆土中	近代以前	
17	5626	須恵器	高台付坏	転用硯	S D 45	覆土中	近世以降	

6 結び

以上、当遺跡の概要と各論を述べてきた。ここで一部繰り返しになるが成果を総括し、遺跡の性格や問題点を考え、まとめたい。

まず、第1項では時期ごとの変遷を概観する中で、弥生時代後期から続く当遺跡は、古墳時代前期に居館が構築され集落が展開していくが、古墳時代における盛期はむしろ居館の廃絶後にあること、7世紀代に集落は衰退し8世紀代もそれが続くこと、8世紀の末頃から集落は再び拡大していくこと、さらに9世紀と10世紀の境目頃に一つの画期がありながら集落は発展し、11世紀代で姿を消すことが再確認できた。

次に、施釉陶器を分析する中で、当集落が霞ヶ浦流通圏に属していると考え、常陸国府と交流があった可能性を推測した。また、東濃産の灰釉陶器が一定量出土していることから、東山道による交易を想定し、これら施釉陶器の流過程から当遺跡の立地を交通の要衝であったと推測し、河川港（川津）の存在を予察した。さらに、緑釉陶器の出土状況からある程度富の集中する人物・場の存在を推測し、総体として豊富な施釉陶器の消費から当遺跡の周辺地域内における優位性を示すことができた。

第3項では文字資料の分析を行い、「庄」関連墨書土器の出土から8世紀後葉以降、当遺跡は荘園として存在したと考えられることを再確認し、「庄」と「庄南」の分析から荘園の拡大などなんらかの変化が見られ、その時期は先の画期と一致することを指摘した。また、文字資料からは当遺跡に官衙的な様相は見られないことを確認した。さらに、「弘廣」「井」などの刻書・墨書土器から集落内での信仰・祭祀のあり方の一端を推測した。

第4項では漆付着遺物の検討から、遺跡内の限定された場所（集落の周縁部）に漆工房が存在したと考え、

その背景に有力者の存在が推定された。これを通して漆工以外の各種手工業をも取り込みながら発展していく集落の様相がうかがえよう。

最後に紡錘車の検討から、漆工と違い紡績には目立った集中がないことが確認できた。これを集中的な生産を行っていなかったと捉えるか、集落内で普遍的に行われていたと捉えるべきなのかは今後の課題の一つといえよう。漆工の部分で指摘した分業の様相についても検討していきたい。

以上が成果の一部を要約したものであるが、これらのことから見えてくる当遺跡の性格を挙げると、

- (1) 弥生時代から平安時代まで存続する遺跡である。
- (2) 古墳時代前期に居館が構築され、後期の初頭まで存続する。
- (3) 7世紀から8世紀にかけて衰退し、その後再び拡大していく。
- (4) 8世紀後葉頃から荘園として存在するようになる。
- (5) 交通の要衝にあり、豊富な施釉陶器に象徴される富裕な集落である。
- (6) 漆工・鍛冶・紡績などの手工業が存在し、特に漆工と鍛冶は特筆に価する。

などになる。古墳時代および居館については『辰海道遺跡1』で詳細な検討がなされているので、ここでは『辰海道遺跡2』の主体である奈良・平安時代について小考したい。『辰海道遺跡1』で当遺跡は「庄」関連墨書土器の出土から荘園遺跡として捉えるべきである、とすでに指摘されており、筆者も同様に考えている。しかし、墨書土器以外には明確な証拠はないうえに、「庄」の墨書が出土しても荘園ではない遺跡の存在があり¹⁾、不確定な部分があることは否めない。そこで、前述した成果を当遺跡の性格を少しでも明確にするための視点で再検討する。まず、7・8世紀に衰退期があることは古墳時代以来の有力者（豪族）が奈良・平安時代には断絶、あるいは存続していても変質していたことが推測されよう。9世紀以降の有力者には前代とは違う性格を想定したい。また、内陸部に位置し、東海道や東山道に面しているわけでもなく、郡衙や寺院でもない遺跡にしては豊富な施釉陶器の出土は一般集落とは違う様相を示し、規模はまったく違うが埼玉県上里町中堀遺跡（勅旨田経営に関わる集落）を類推させる。各種手工業が存在する点は中堀遺跡や他の荘園遺跡にも通じる点があり、しかも一般集落よりはやや規模が大きいいえよう。さらに、朱墨痕の残る転用硯が6点出土しており、何らかの点検作業を行っていたと考えられる。動産の集積・分配に関わることであろう。加えて、鉄製農耕具の少なさにも注目したい。鉄関連の遺構・遺物については『辰海道遺跡1』に詳しく、参照していただきたいが、当遺跡からは鎌が6点出土し、鋏は1点も出土していない。他の大規模な集落遺跡と比較すると非常に少ないといえる。これは遺跡内で鍛冶が行われており、鉄の再利用が積極的に行われていた結果ともいえようが、『辰海道遺跡1』ですでに指摘されているように鉄製農耕具の集中管理が行われていた可能性を考えたい。古庄浩明氏の「(斧・鋏は)ある特定階層による掌握をうかがわせる」という指摘²⁾を考慮すると、鉄製農耕具の集中管理が行われていた可能性は高いと言え、その管理者には荘官などが推定される。

これらの観点から、すべて傍証ではあるものの、当遺跡が一般集落とは違う様相がうかがえ、その性格付けに一定の方向性を見出すことが可能であろう。さらに、当遺跡の開発主体者である有力者の性格については、腰帯具が出土していないこと、円面硯が1点しか出土しておらず、転用硯がほとんどであること、墨書土器には官衙の様相は見られないこと、掘立柱建物が少なく、その配置にも官衙ほどには規格性が見られないことなどから官的影響はやや少ないと考えられ、さらに、当遺跡の拡大し始める9世紀以降は郡司層の没落が始まっていることから、官的影響を評価するならば、その対象は郡司よりもむしろ国司に求めたい。しかし、前述の理由から官的影響はあったが、大きくはないと筆者は考えており、当遺跡は宇野氏分類の「在地有力層主導型」³⁾に該当する遺跡ととらえ、在地の主導性を重視したいと考える。

以上、推測を重ねつつ少しでも当遺跡の性格を明確にするための考察を試みた。今後の課題とすべき点も多く、周辺の遺跡との比較を通してさらなる検討が望まれる。

末尾になりましたが、調査・整理に至る過程でお世話になりました関係諸機関、調査・整理補助員の皆様、ご指導・ご助言をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

註

- 1) 小西前掲
- 2) 古庄浩明 「古代における鉄製農耕具の所有形態－6世紀から10世紀の南関東を中心として－」『考古学雑誌』第79巻第3号
日本考古学会 1994年2月
- 3) 宇野前掲

参考文献

- 阿久津久 「カマドにみる祭祀の一形態」『日立史苑』7 日立市史編さん委員会 1994年3月
- 川井正一・白田正子・青木仁昌 「茨城県域における文字資料集成4」『研究ノート』12号 助茨城県教育財団 2003年6月
- 小林泰文 「集落遺跡にみる土器墨書行為について」『神奈川考古』第34号 神奈川考古同人会 1998年5月
- 笹生 衛 「古代仏教の民間における広がりを受容」『古代』第111号 早稲田大学考古学会 2002年12月
- 高島英之 「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』第9号 日本考古学協会 2000年5月
- 高島英之・宮瀧交二 「群馬県出土の刻書紡錘車についての基礎的研究」『群馬県立歴史博物館紀要』第23号 群馬県立歴史博物館 2002年3月
- 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏 「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 助茨城県教育財団 2001年3月
- 田中広明・末木啓介 「中堀遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第190集 助埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997年12月
- 仲村浩一郎・後藤一成・宮田和男・芳賀友博・鴨志田祐一 「辰海道遺跡1 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第222集 助茨城県教育財団 2004年3月
- 奈良・平安時代研究班 「茨城県域における文字資料集成1」『研究ノート』9号 助茨城県教育財団 2000年6月
- 奈良・平安時代研究班 「茨城県域における文字資料集成2」『研究ノート』10号 助茨城県教育財団 2001年6月
- 奈良・平安時代研究班 「茨城県域における文字資料集成3」『研究ノート』11号 助茨城県教育財団 2002年6月
- 松田政基・齊藤伸明・広岡公夫・黒原秀夫 「峯崎遺跡」『結城市文化財発掘調査報告』第7集 結城市 1996年3月
- 矢ノ倉正男・寺門千勝 「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡 中ノ台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集 助茨城県教育財団 1997年9月

付 章

茨城県辰海道遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は茨城県辰海道遺跡から出土した容器2点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies sp.*)

(遺物No 1, 2)

(写真No 1, 2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柁目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）

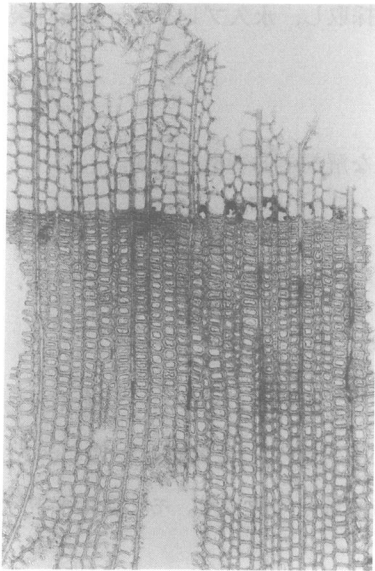
◆使用顕微鏡◆

Nikon

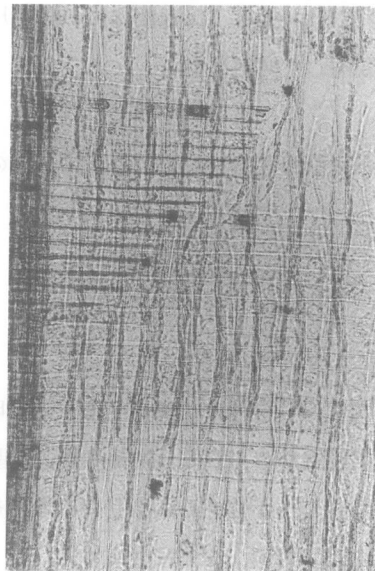
MICROFLEX UFX-DX Type 115

茨城県辰海道遺跡出土木製品同定表

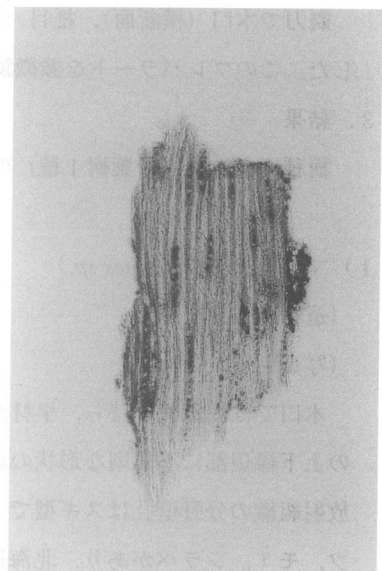
No	品名	樹種
1	曲物	マツ科モミ属
2	底板	マツ科モミ属



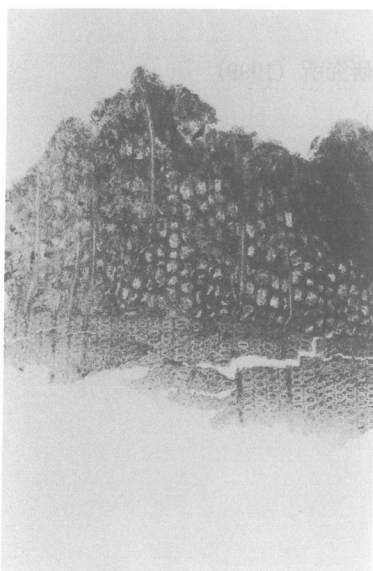
木口×40
No. 1 マツ科モミ属



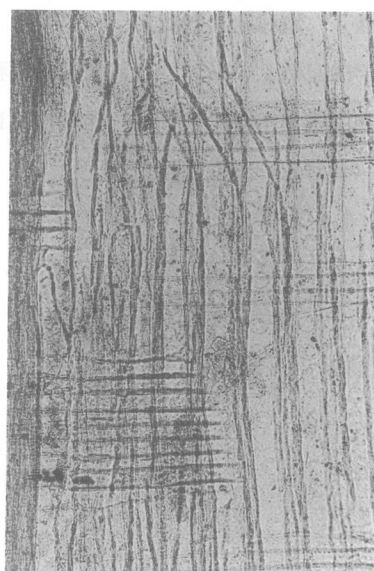
杵目×100



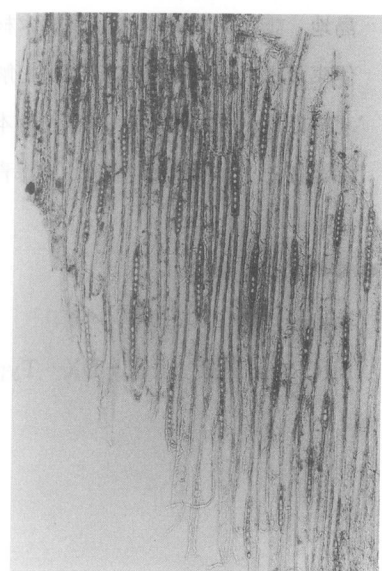
板目×40



木口×100
No. 2 マツ科モミ属



杵目×100



板目×40

写 真 图 版



第271号住居跡完掘状況



第603A号住居跡完掘状況



第603B号住居跡完掘状況



第603C号住居跡完掘状況



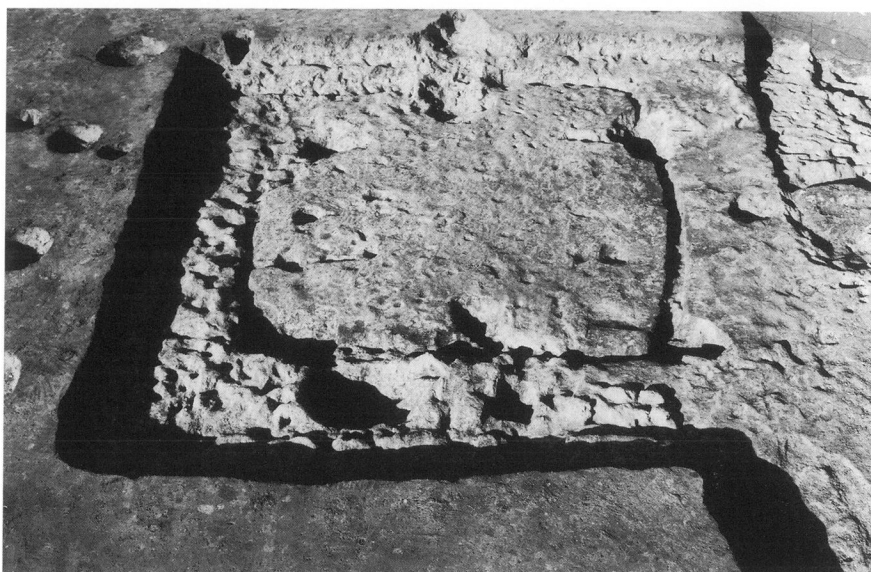
第603C号住居跡
遺物出土状況



第603C号住居跡
遺物出土状況(接写)



第603C号住居跡竈
遺物出土状況(接写)



第606A号住居跡完掘状況



第606B号住居跡完掘状況



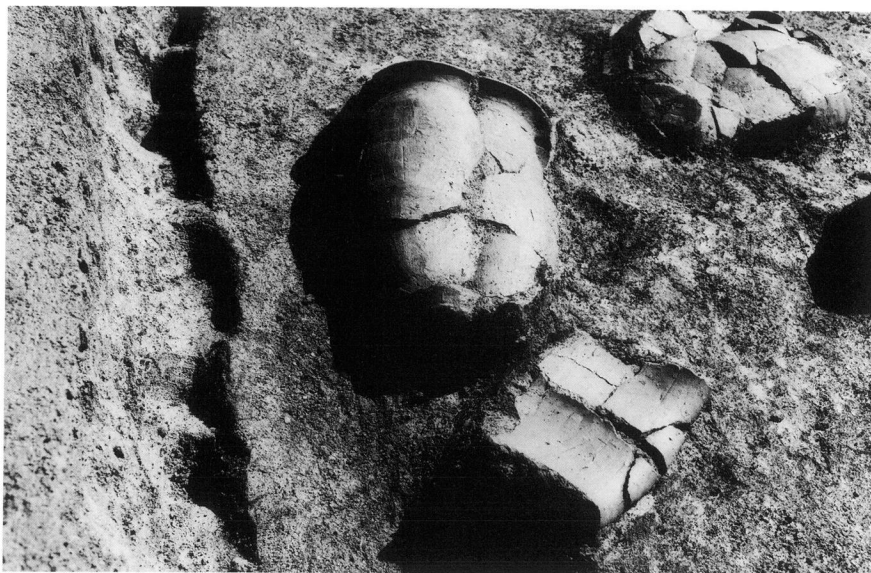
第606B号住居跡竈
遺物出土状況



第606C号住居跡完掘状況



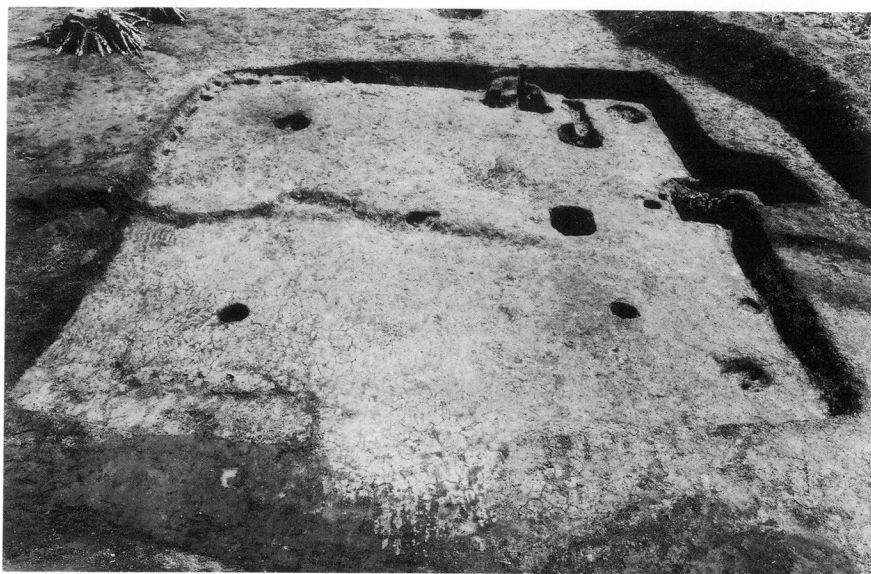
第606C号住居跡
遺物出土状況



第606C号住居跡竈
遺物出土状況(接写)



第631号住居跡完掘状況



第666号住居跡完掘状況



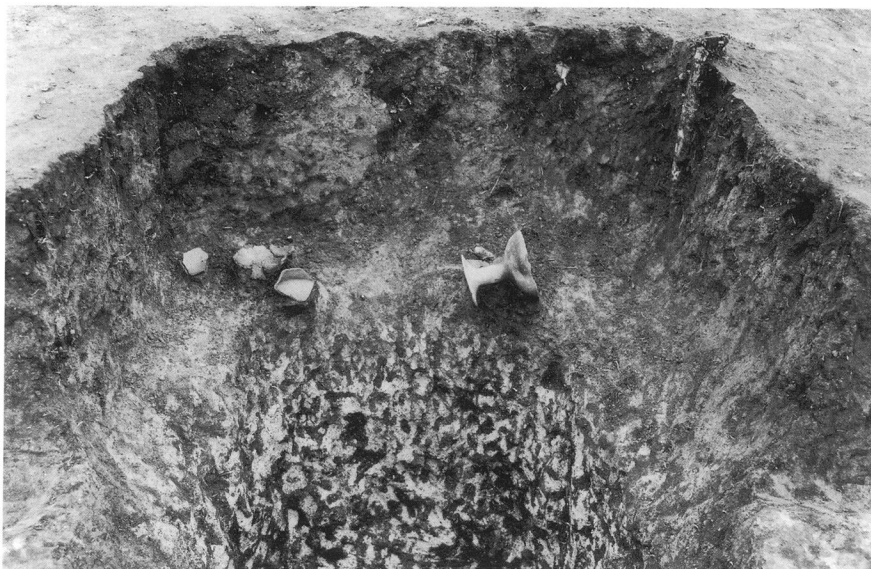
第666号住居跡
遺物出土状況



第666号住居跡竈
遺物出土状況



第666号住居跡竈
遺物出土状況



第666号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第670号住居跡
遺物出土状況



第671号住居跡完掘状況



第672号住居跡完掘状況



第672号住居跡
遺物出土状況



第672号住居跡
遺物出土状況(接写)



第602A号住居完掘状况



第602B号住居跡
遺物出土状况



第604号住居跡完掘状况



第607号住居跡完掘状況

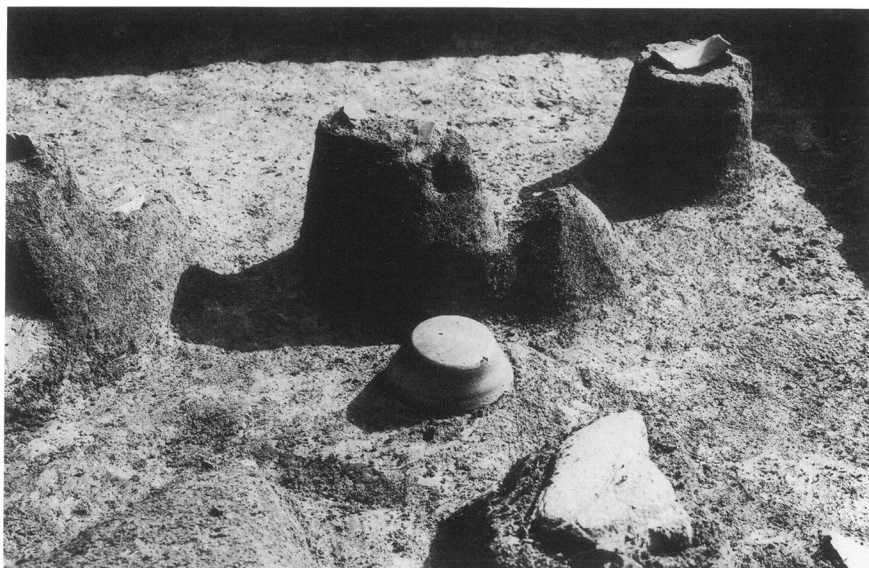


第610号住居跡
遺物出土状況

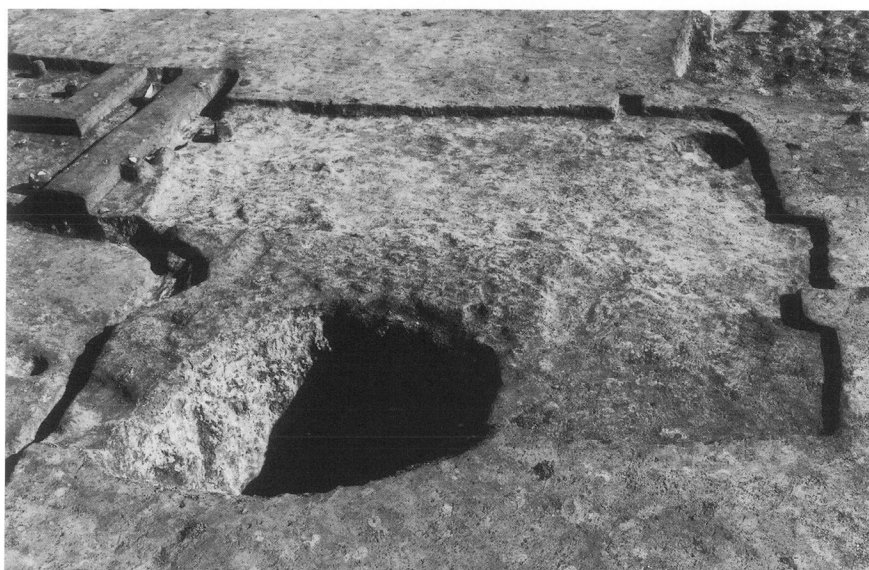


第612号住居跡
遺物出土状況

第612号住居跡
遺物出土状況(接写)



第613号住居跡完掘状況



第615号住居跡完掘状況





第616号住居跡
遺物出土状況

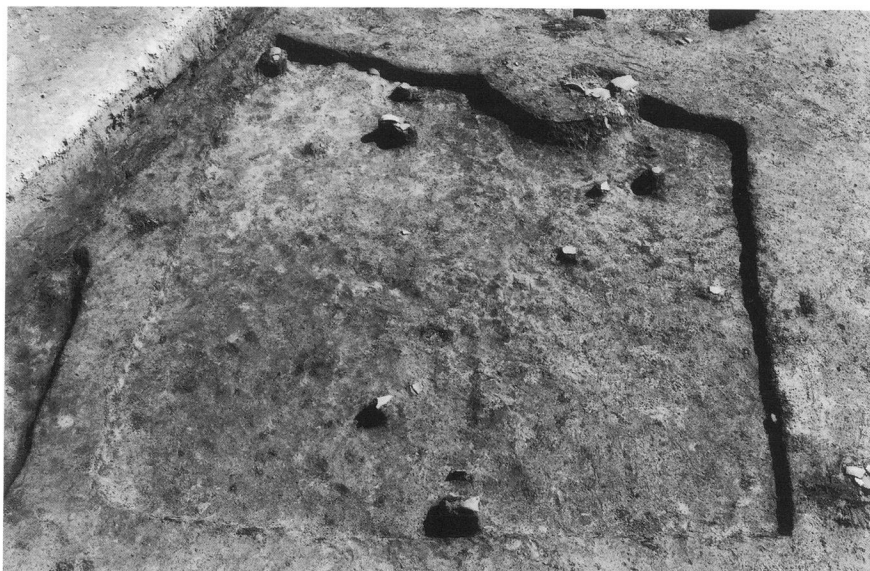


第617号住居跡
遺物出土状況



第618号住居跡完掘状況

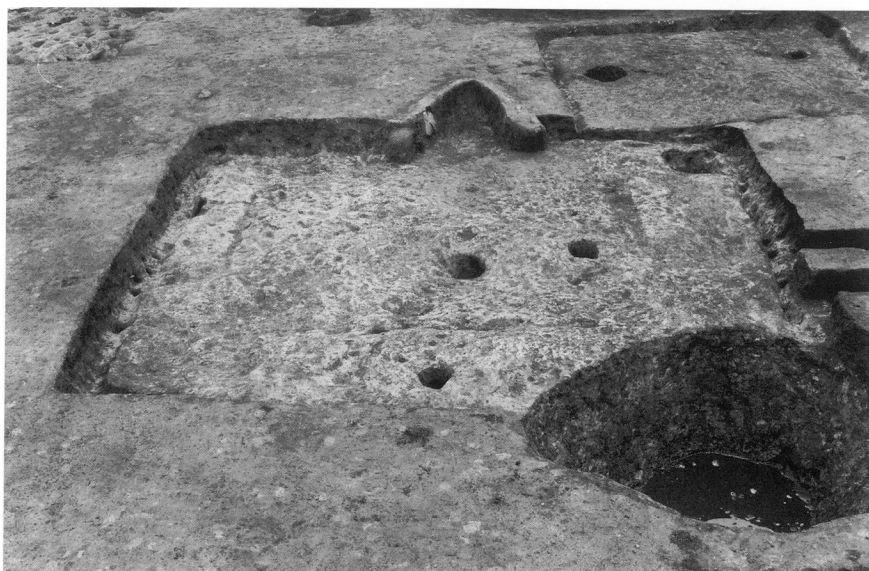
第618号住居跡
遺物出土状況

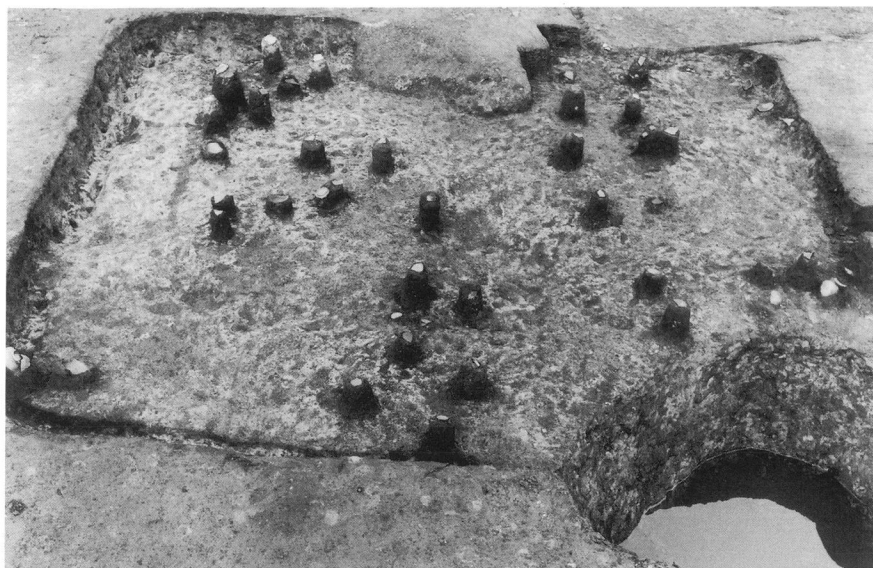


第618号住居跡竈
遺物出土状況



第619号住居跡完掘状況





第619号住居跡
遺物出土状況



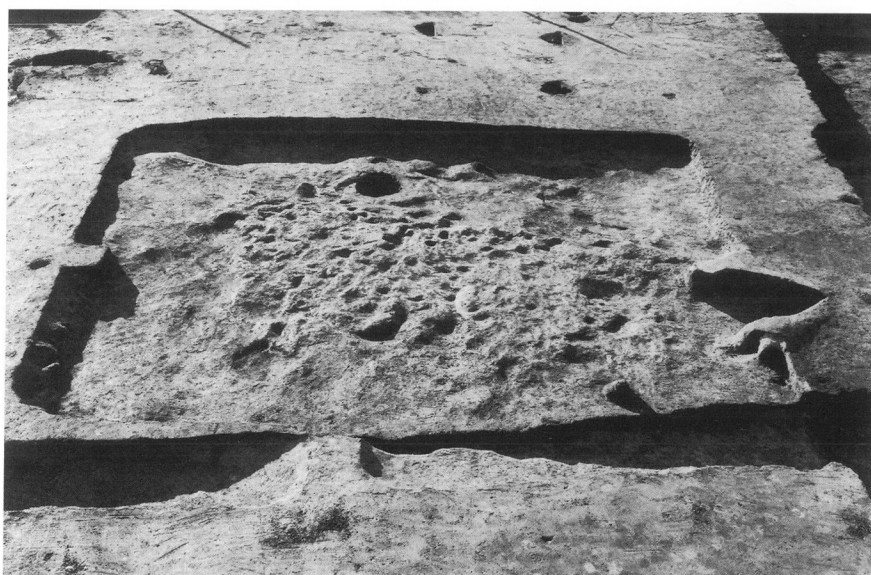
第619号住居跡
遺物出土状況(接写)



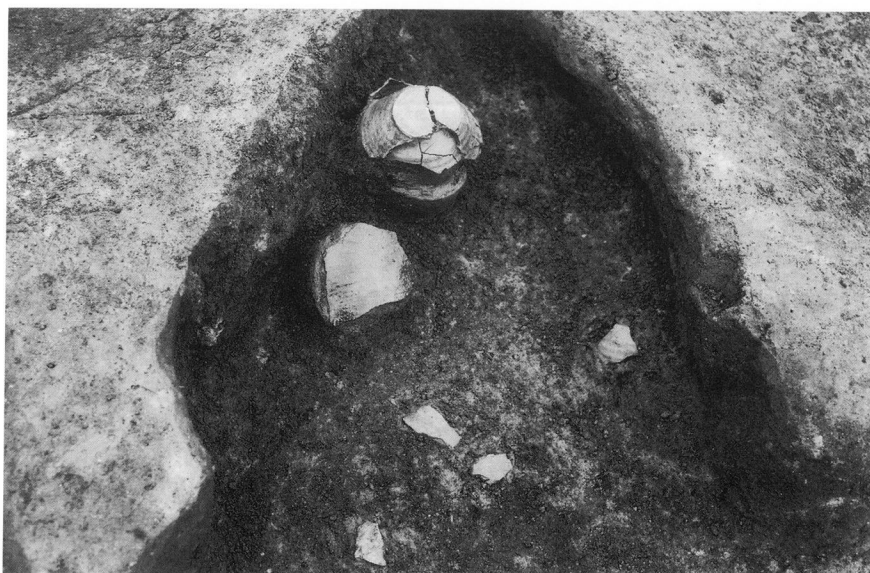
第619号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第621・622号住居跡
遺物出土状況



第625号住居跡完掘状況



第625号住居跡竈
遺物出土状況



第627号住居跡完掘状況



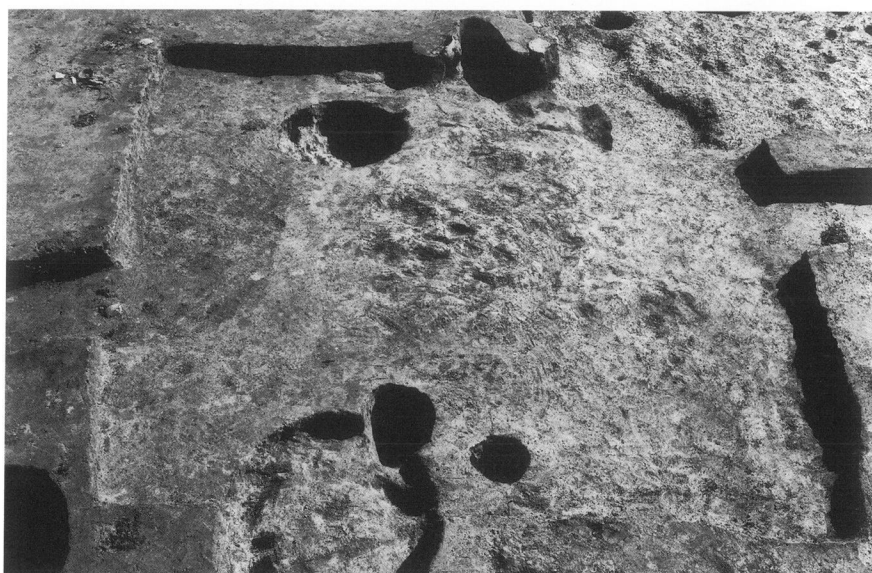
第627号住居跡竈
遺物出土状況



第629号住居跡
遺物出土状況



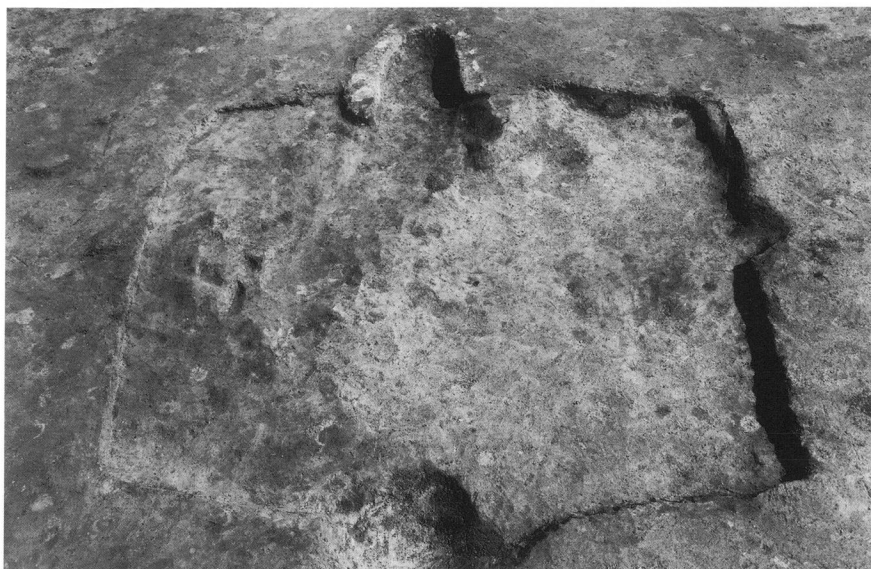
第630号住居跡完掘状況



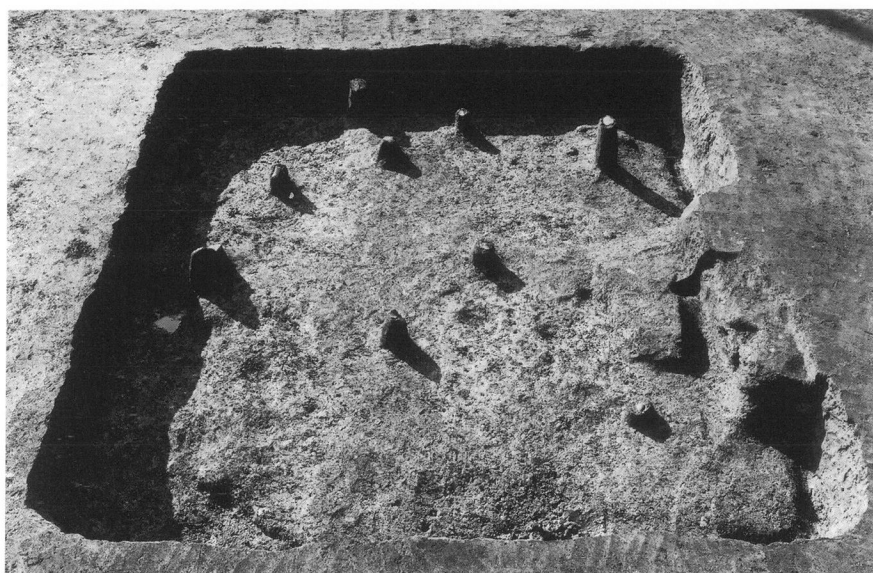
第633号住居跡完掘状況



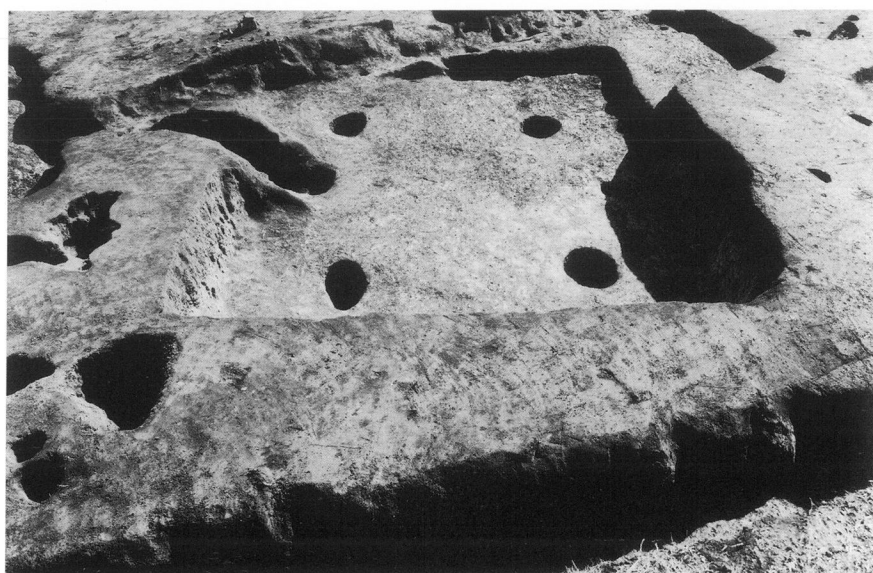
第634号住居跡完掘状況



第635号住居跡完掘状況



第636号住居跡
遺物出土状況



第648号住居跡完掘状況



第648号住居跡
遺物出土状況



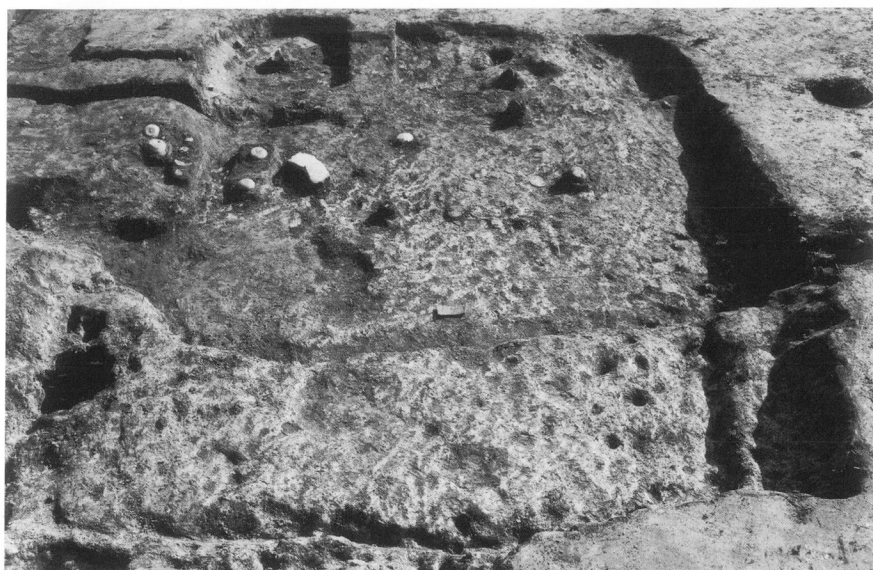
第648号住居跡
遺物出土状況(接写)



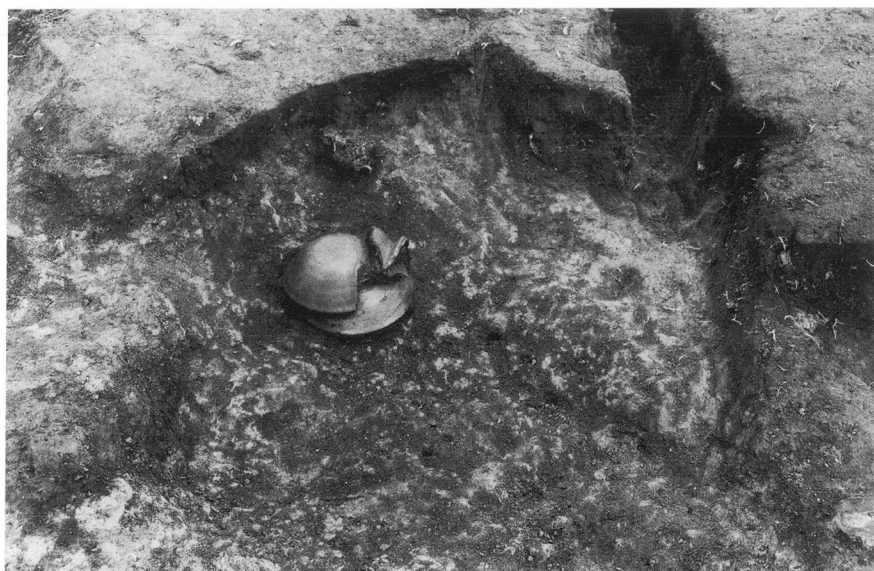
第661~663号住居跡
完掘状況



第662号住居跡
遺物出土状況



第663号住居跡
遺物出土状況



第663号住居跡竈
遺物出土状況

第664・665号住居跡
完掘状況

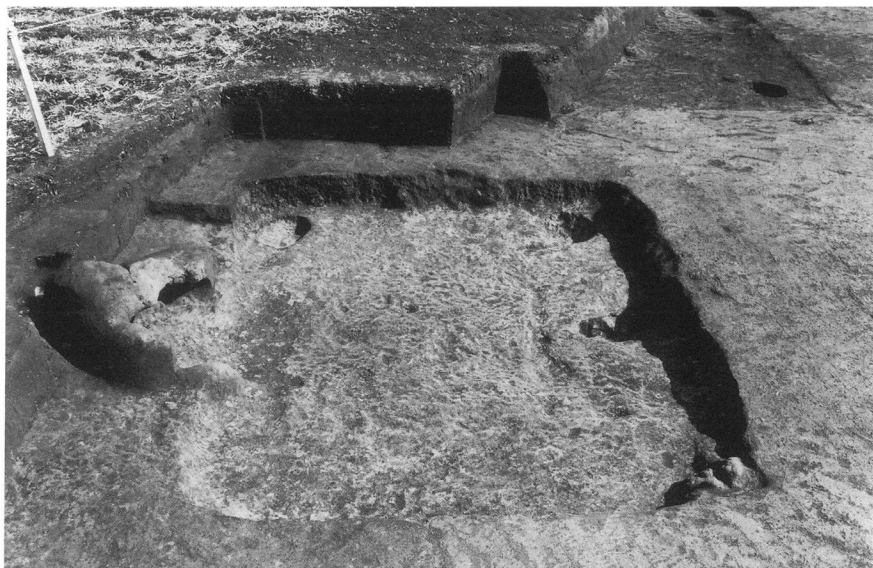


第664号住居跡竈
遺物出土状況



第665号住居跡竈
遺物出土状況

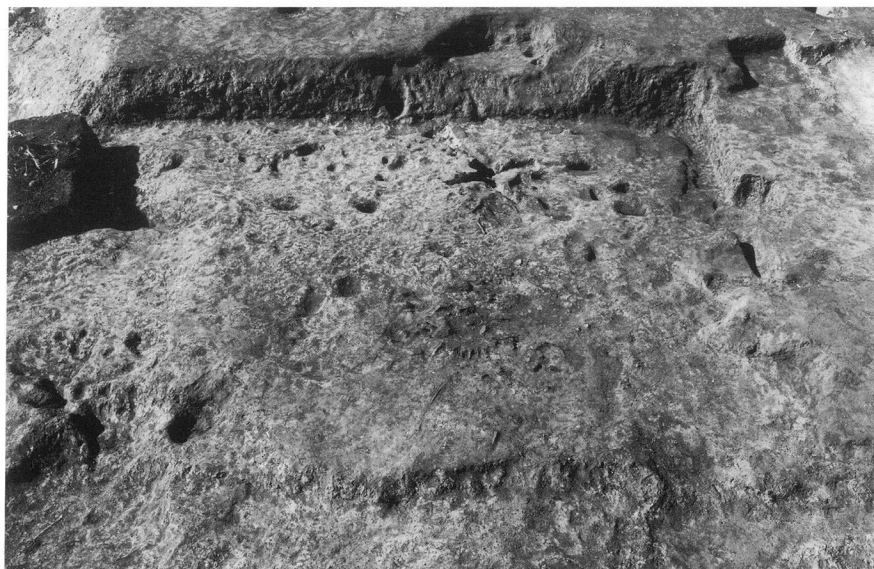




第669号住居跡完掘状況



第669号住居跡竈
完掘状況



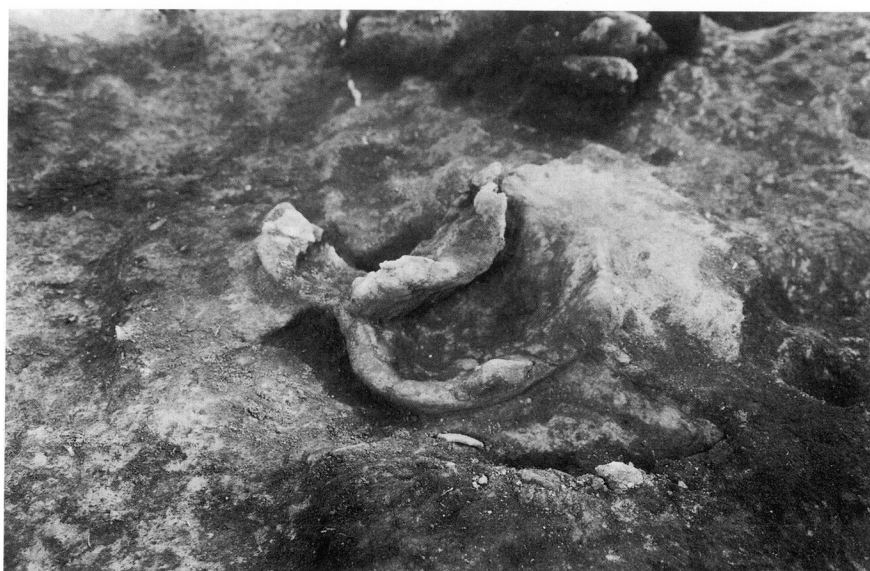
第2号鍛冶工房跡
完掘状況



第 2 号鍛冶工房跡
遺物出土状況(接写)



第 2 号鍛冶工房跡
炉 1 検出状況(東から)



第 2 号鍛冶工房跡
炉 1・2 検出状況
(炉床, 北から)



第 2 号 鍛 冶 工 房 跡
炉 1 土 層 堆 積 状 況 (北 か ら)

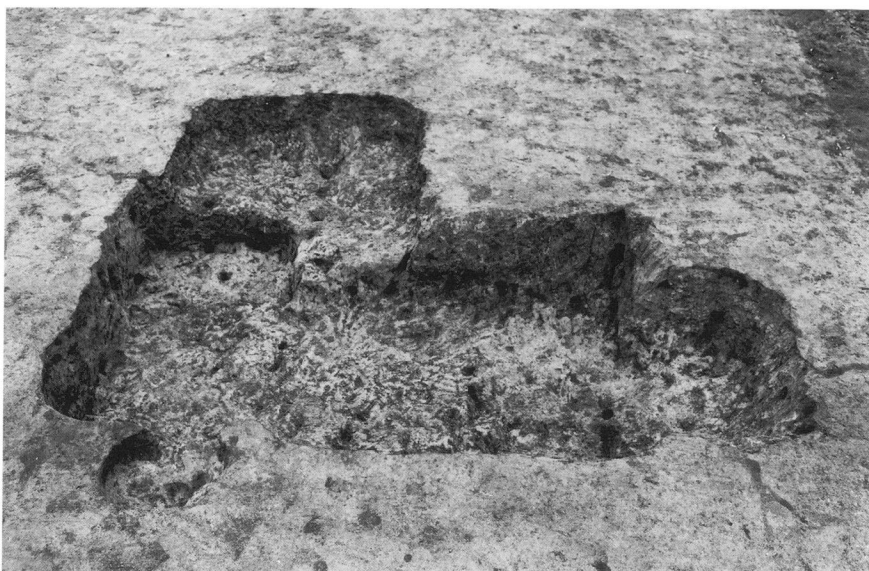


第 2 号 鍛 冶 工 房 跡
炉 2 検 出 状 況
(炉 床 , 北 か ら)



第 1821 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第2006~2009号土坑
完掘状況

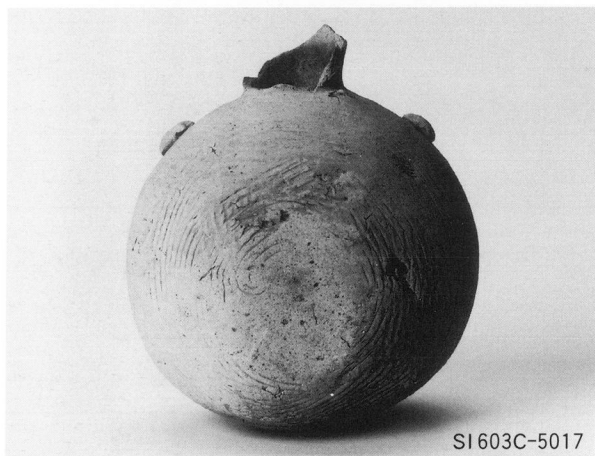
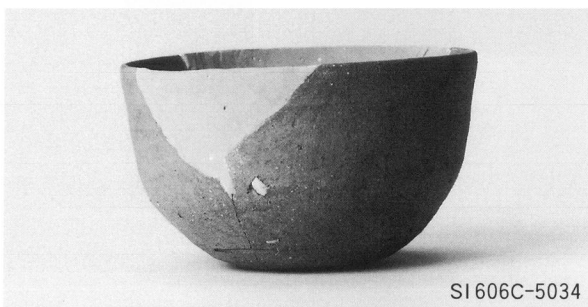


第60号井戸跡
遺物出土状況

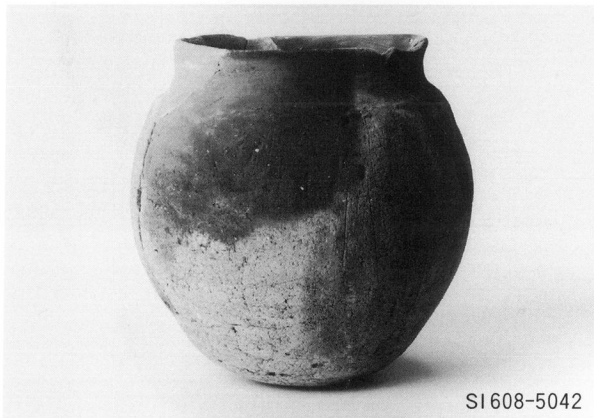


第67号井戸跡
完掘状況

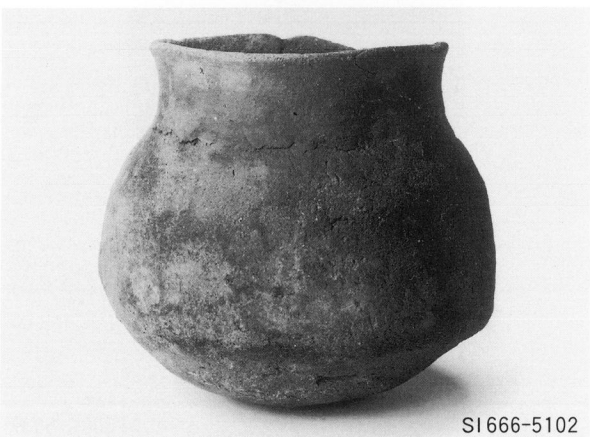




第603C・606C号住居跡出土遺物

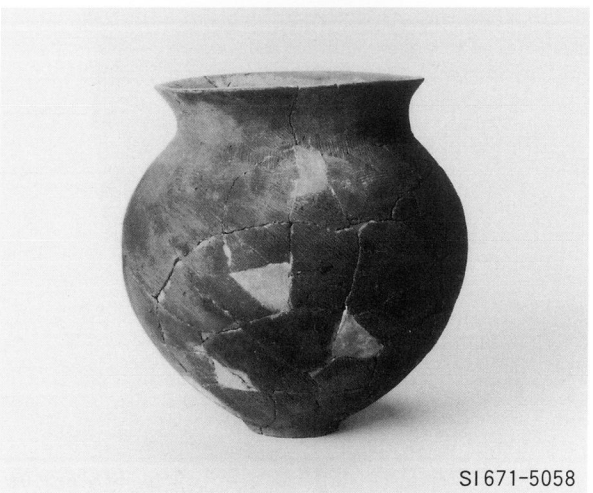
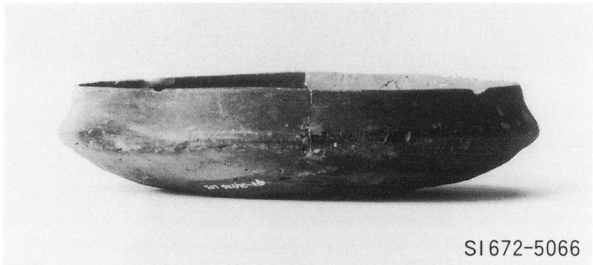
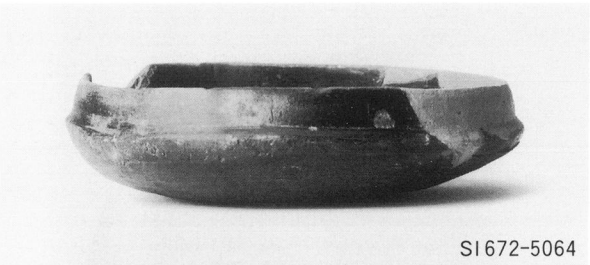
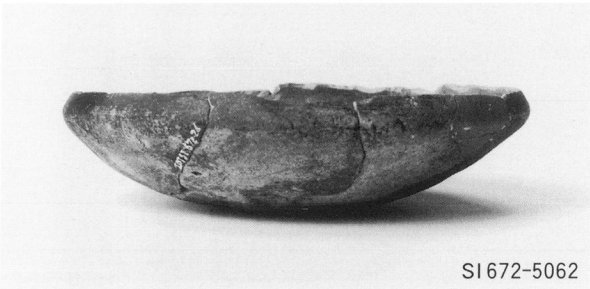


第606C・608・623B号住居跡出土遺物



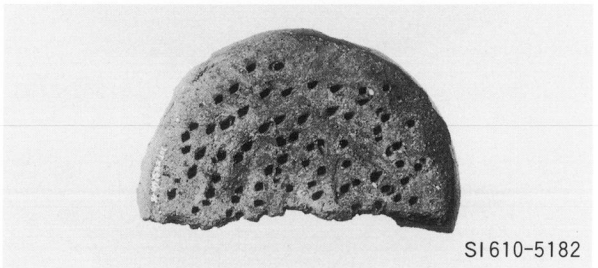
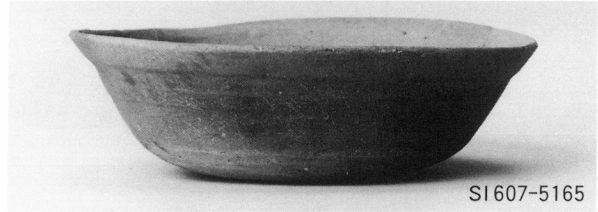
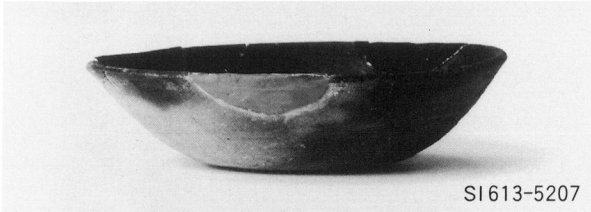
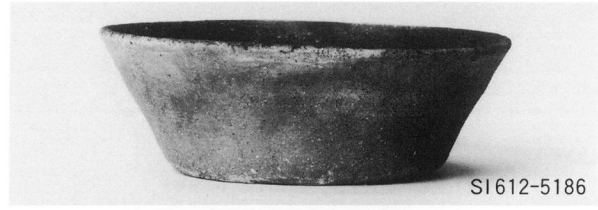
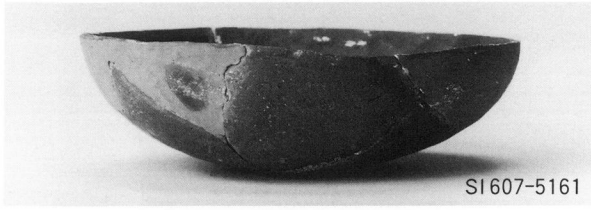


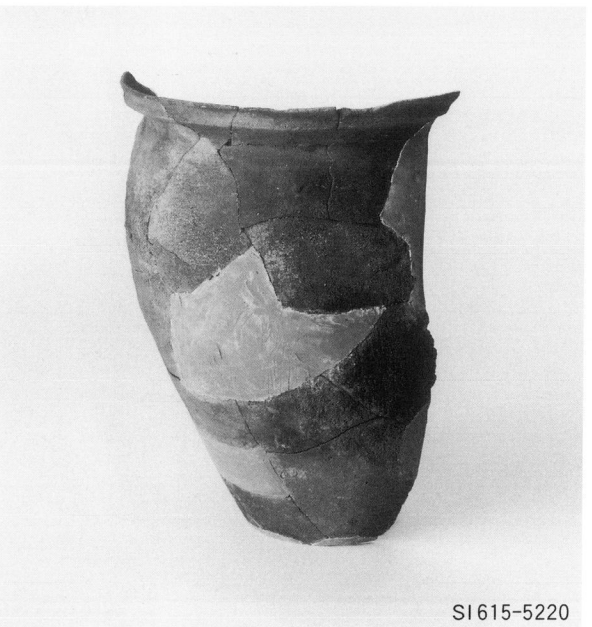
第666・667・670号住居跡出土遺物

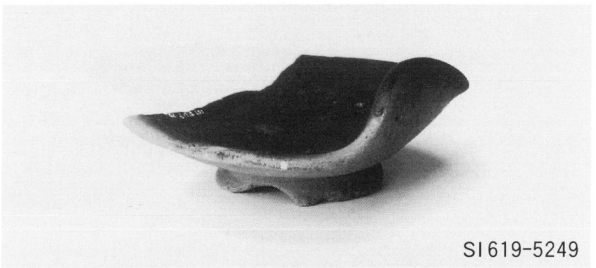




第495・602・604・607・672号住居跡出土遺物

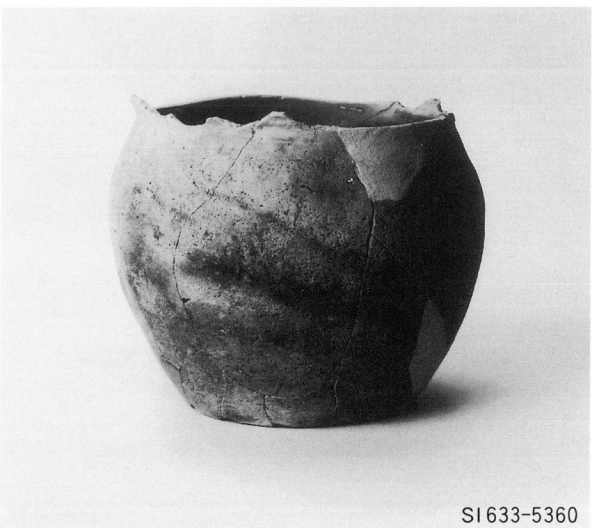
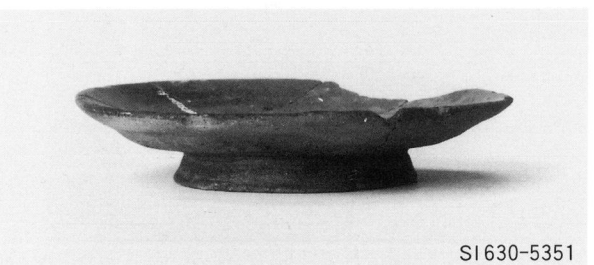


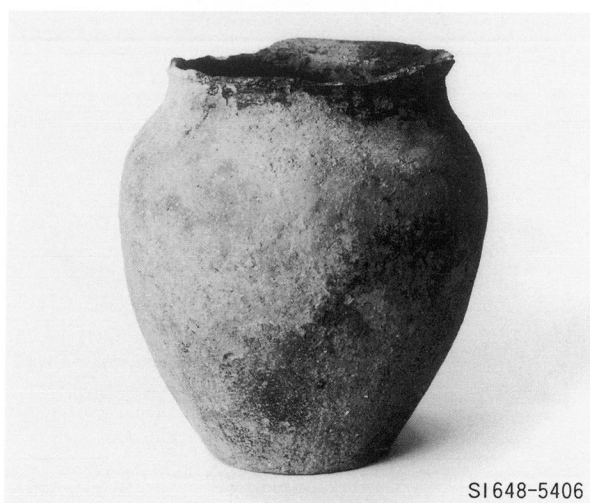
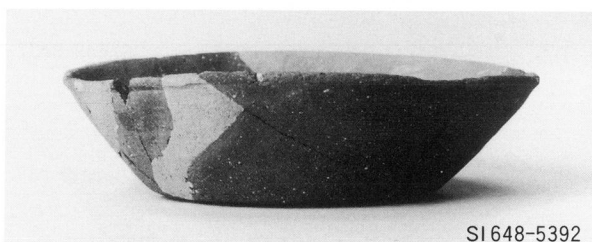
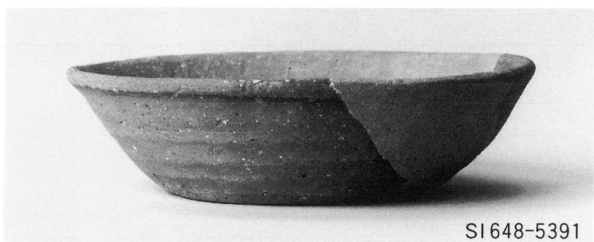




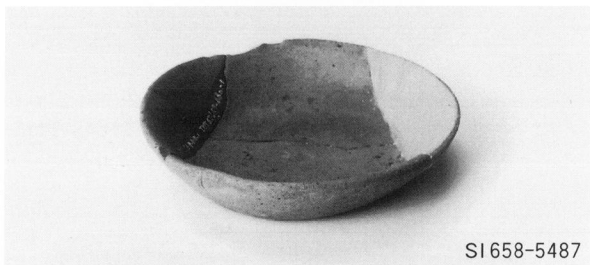


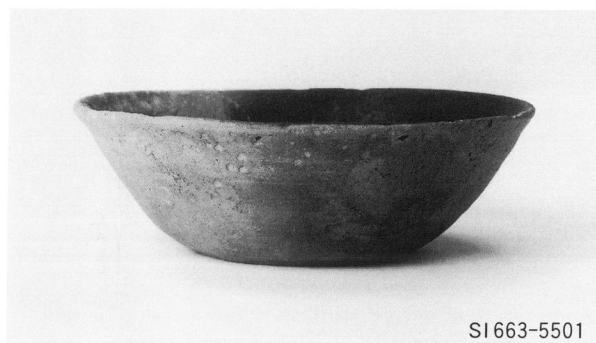
第624・625・627・628・629・630号住居跡出土遺物

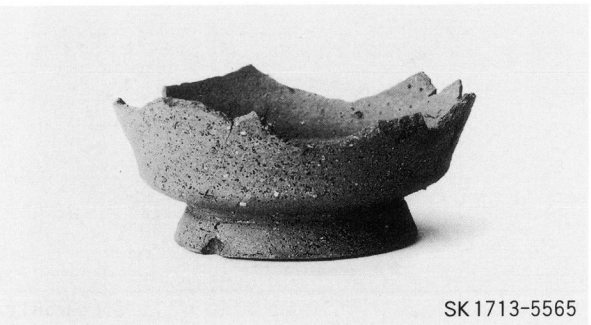
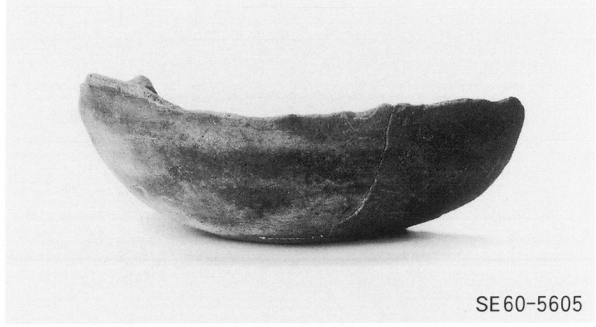




第648号住居跡出土遺物







第665号住居跡，第2号鍛冶工房跡，第1713号土坑，第60号井戸跡出土遺物



SK1656-5561



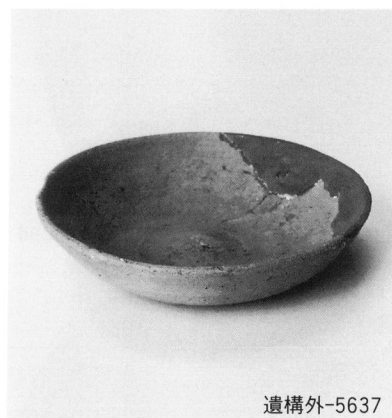
遺構外-5633



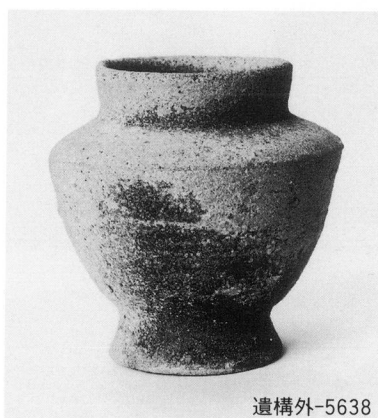
遺構外-5634



遺構外-5635



遺構外-5637



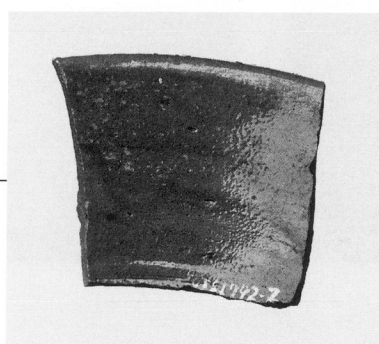
遺構外-5638



SE60-5609



遺構外-5570



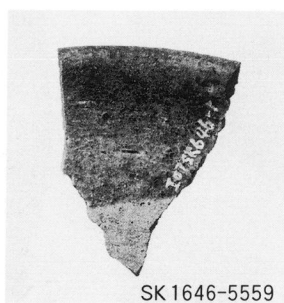
遺構外-5571



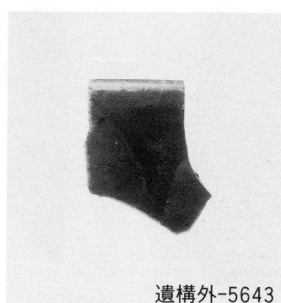
遺構外-5642



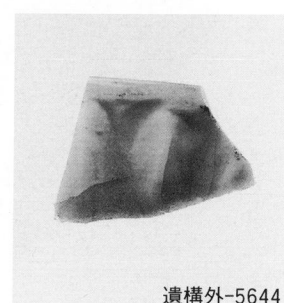
SK1717-5566



SK1646-5559

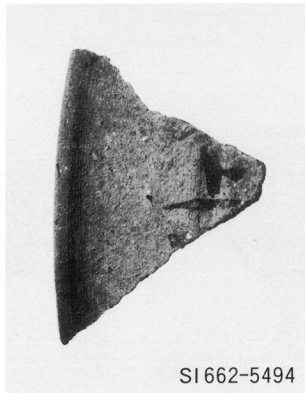
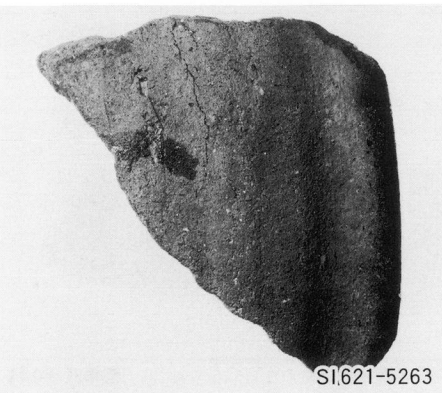
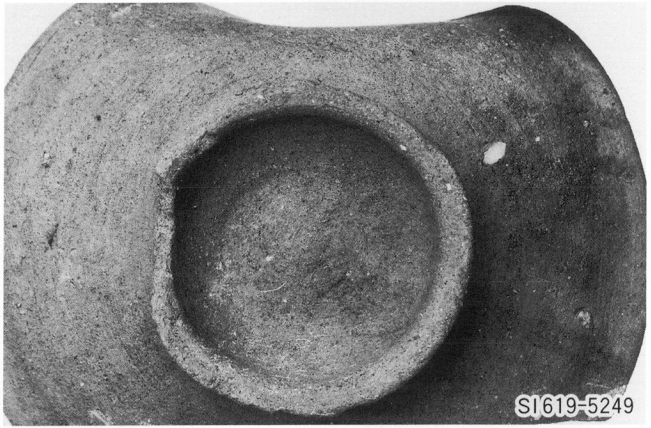
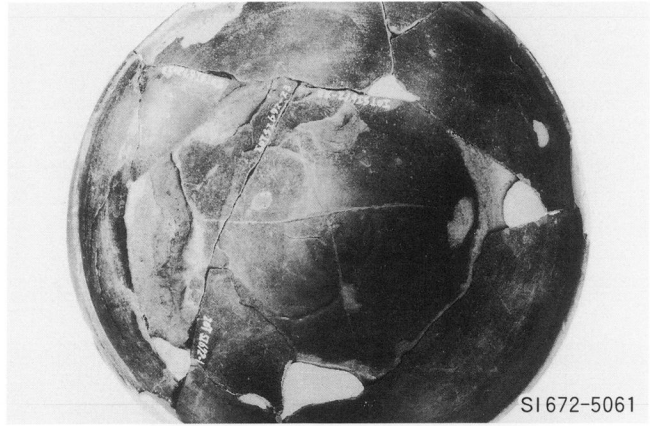
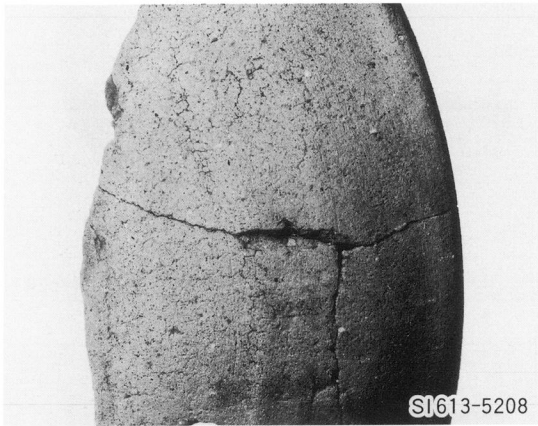


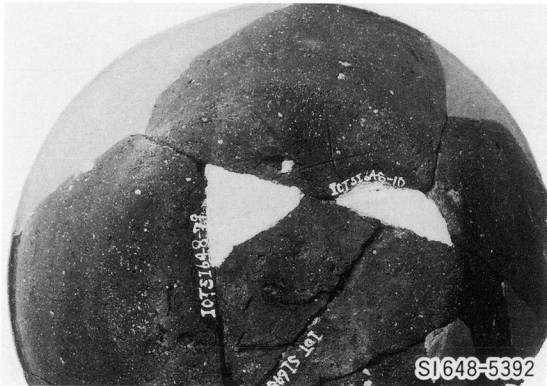
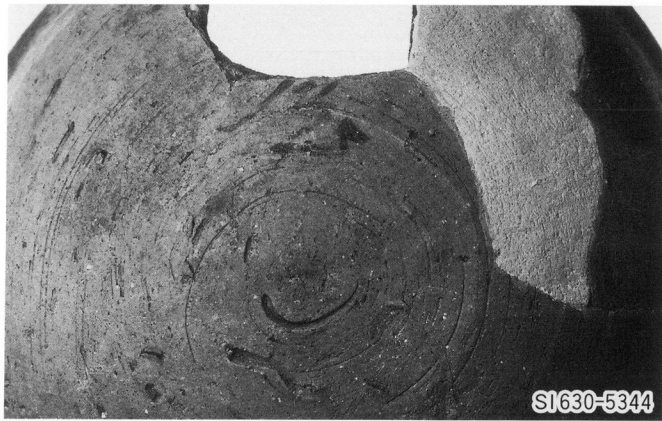
遺構外-5643

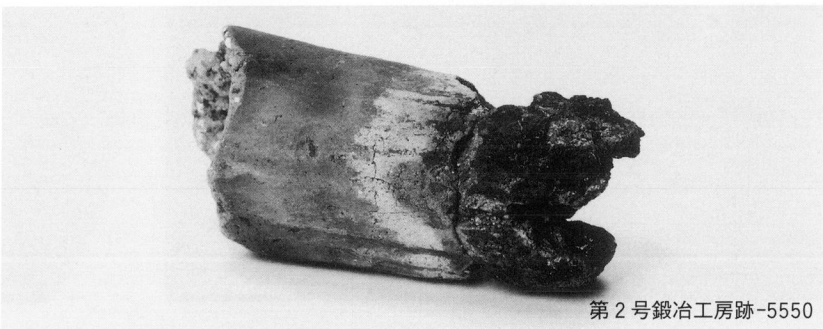
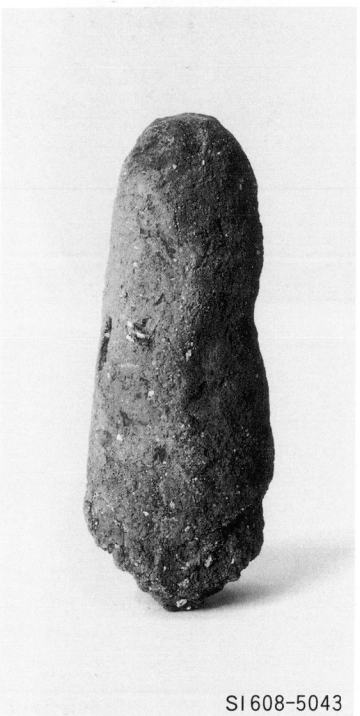
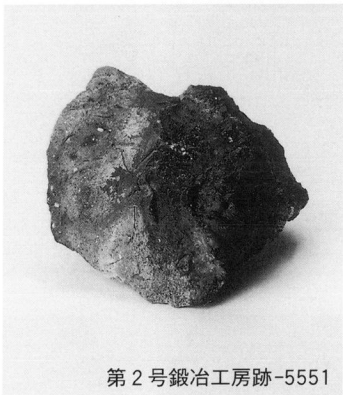
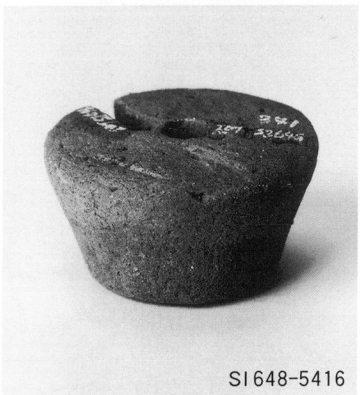


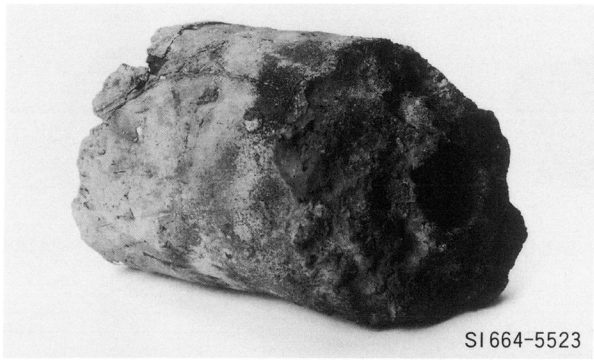
遺構外-5644

第1646・1656・1717号土坑，第60号井戸跡，遺構外出土遺物

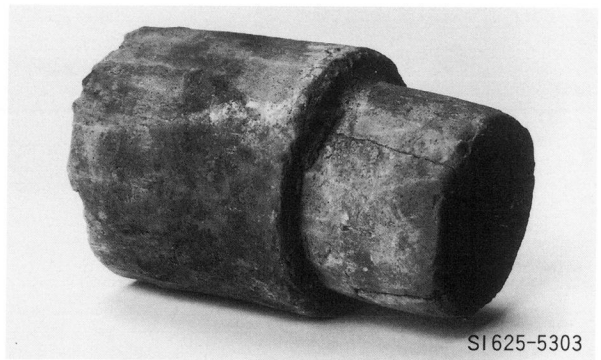




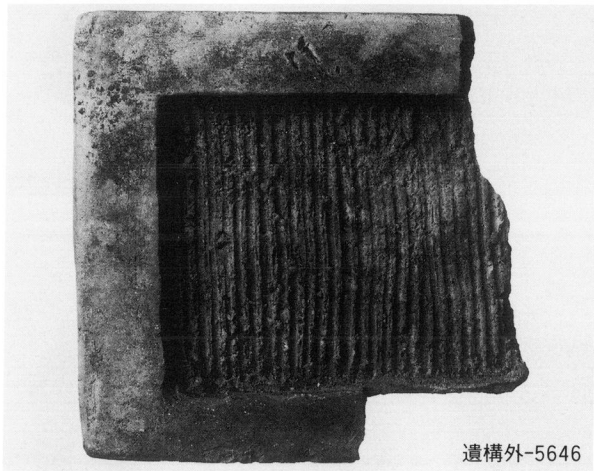




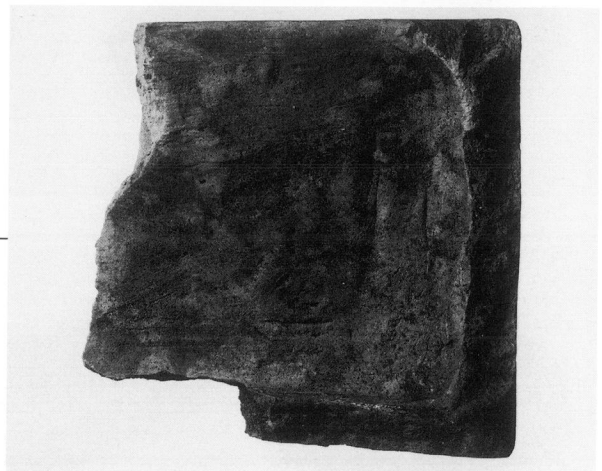
SI664-5523



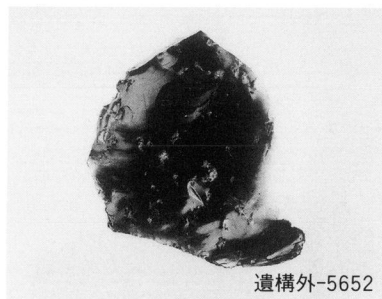
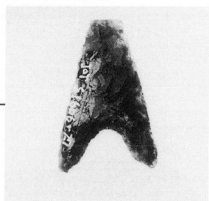
SI625-5303



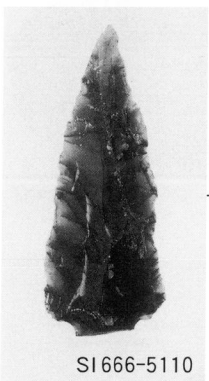
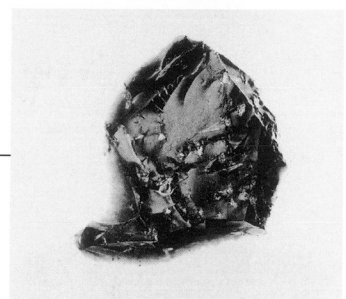
遺構外-5646



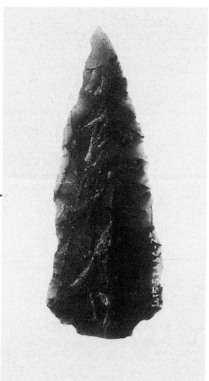
遺構外-5651



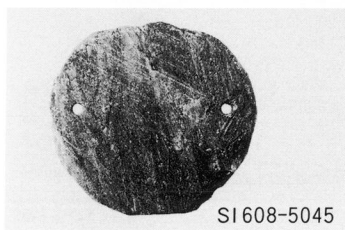
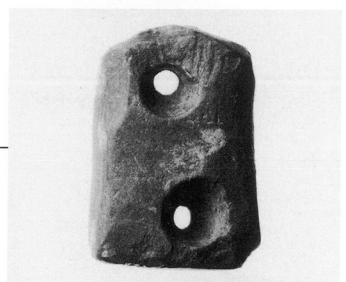
遺構外-5652



SI666-5110



SI607-5174



SI608-5045



SI608-5044

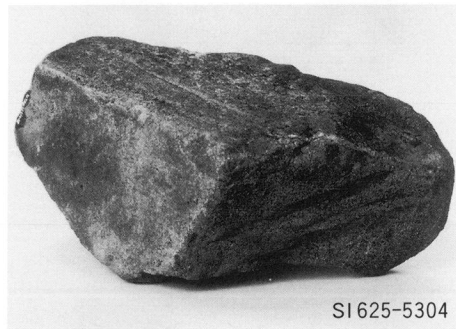
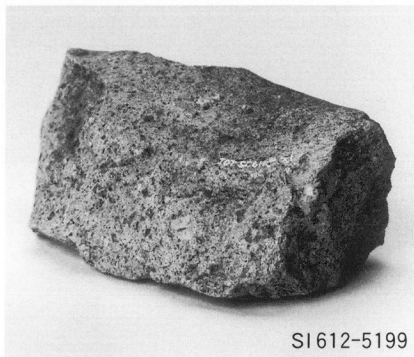
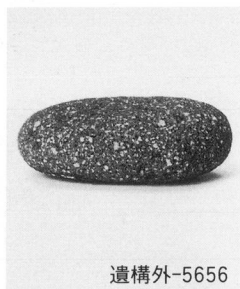
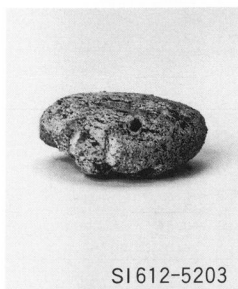


遺構外-5659



SI624-5284

土製品・石器・石製品

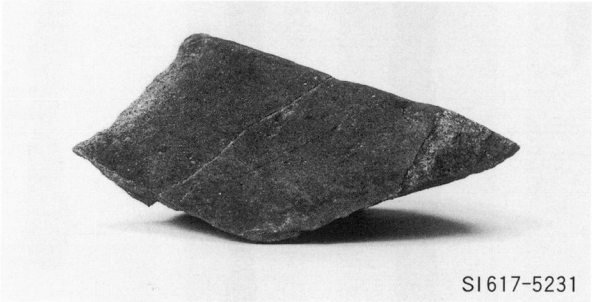




SI 664-5524



SI 662-5500



SI 617-5231



第2号鍛冶工房跡-5552



第2号鍛冶工房跡-5553



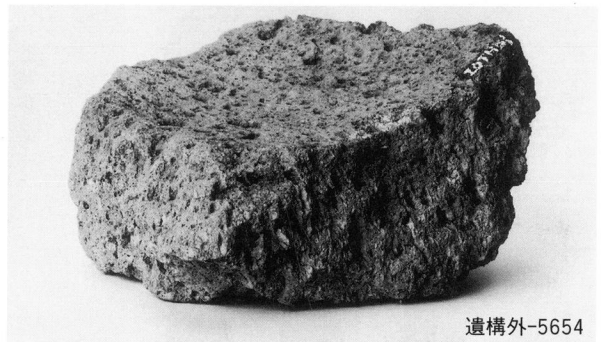
SI 612-5204



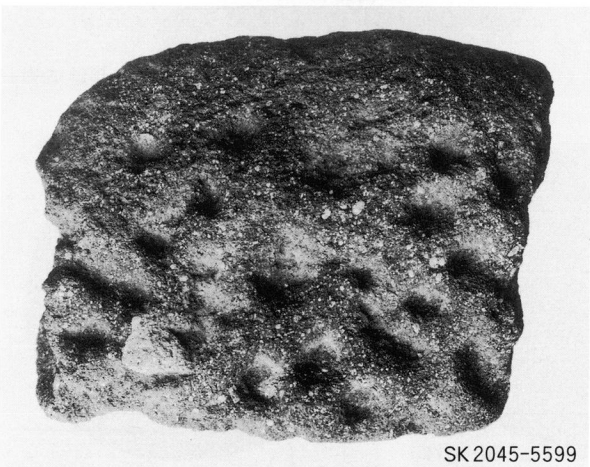
SI 658-5489



SI 627-5326

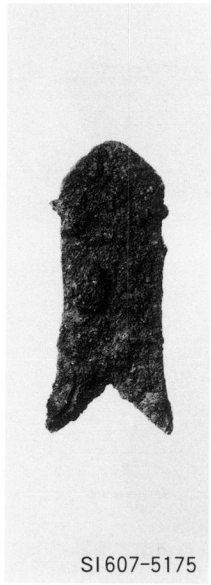


遺構外-5654

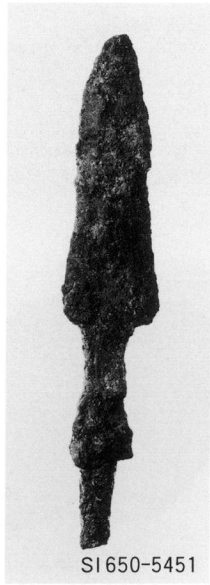


SK 2045-5599

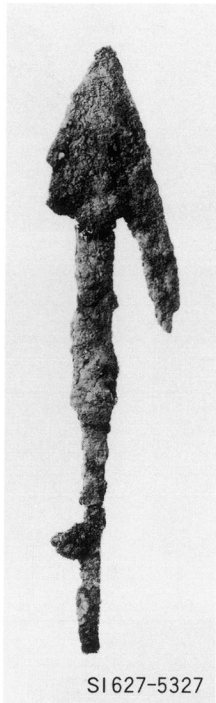




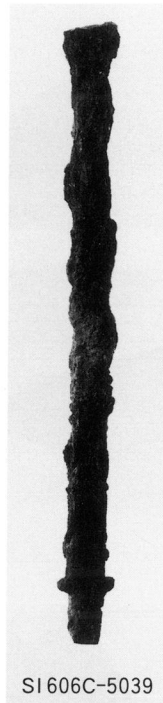
SI607-5175



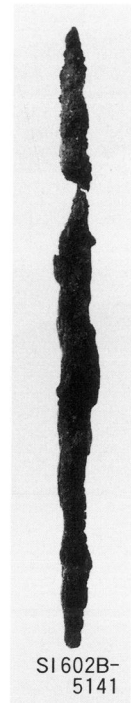
SI650-5451



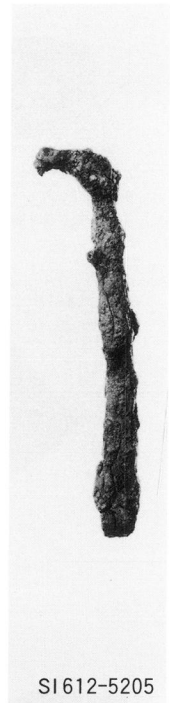
SI627-5327



SI606C-5039



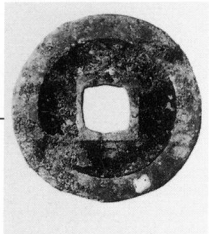
SI602B-5141



SI612-5205



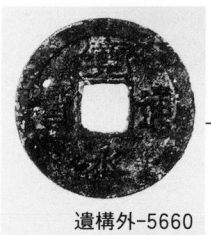
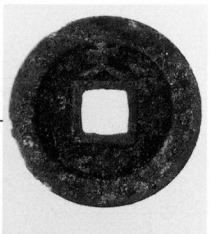
SK2045-5601



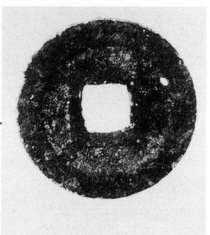
SI642-5378



SD45-5629



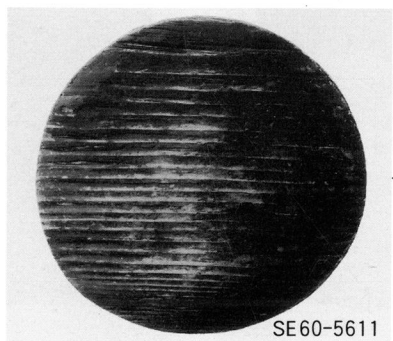
遺構外-5660



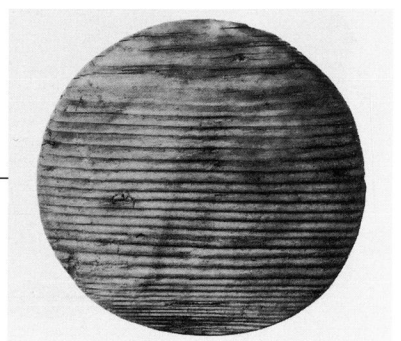
第2号鍛冶工房跡-5556



SE60-5610



SE60-5611



茨城県教育財団文化財調査報告第223集

辰海道遺跡 2

平成16（2004）年3月24日 印刷

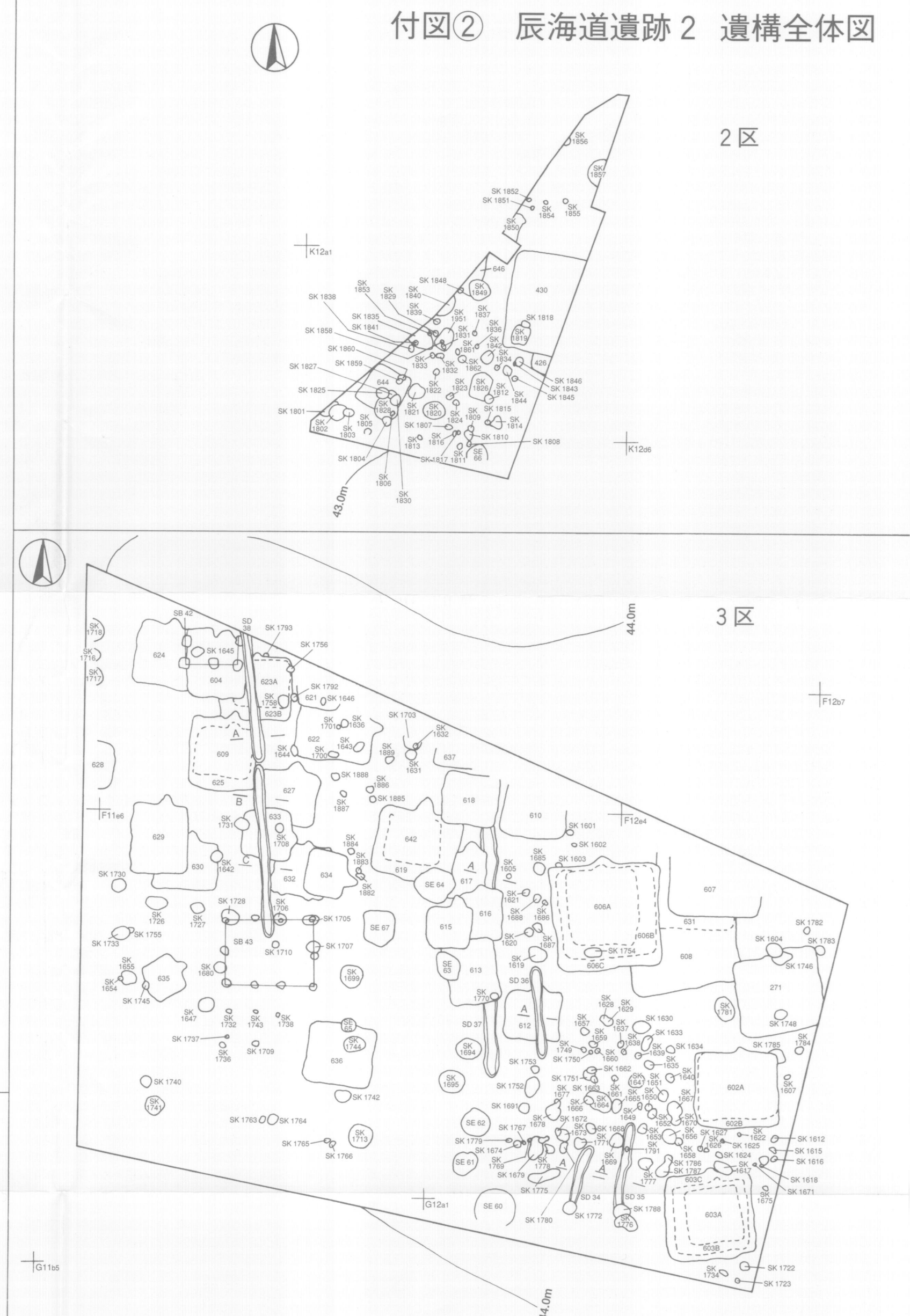
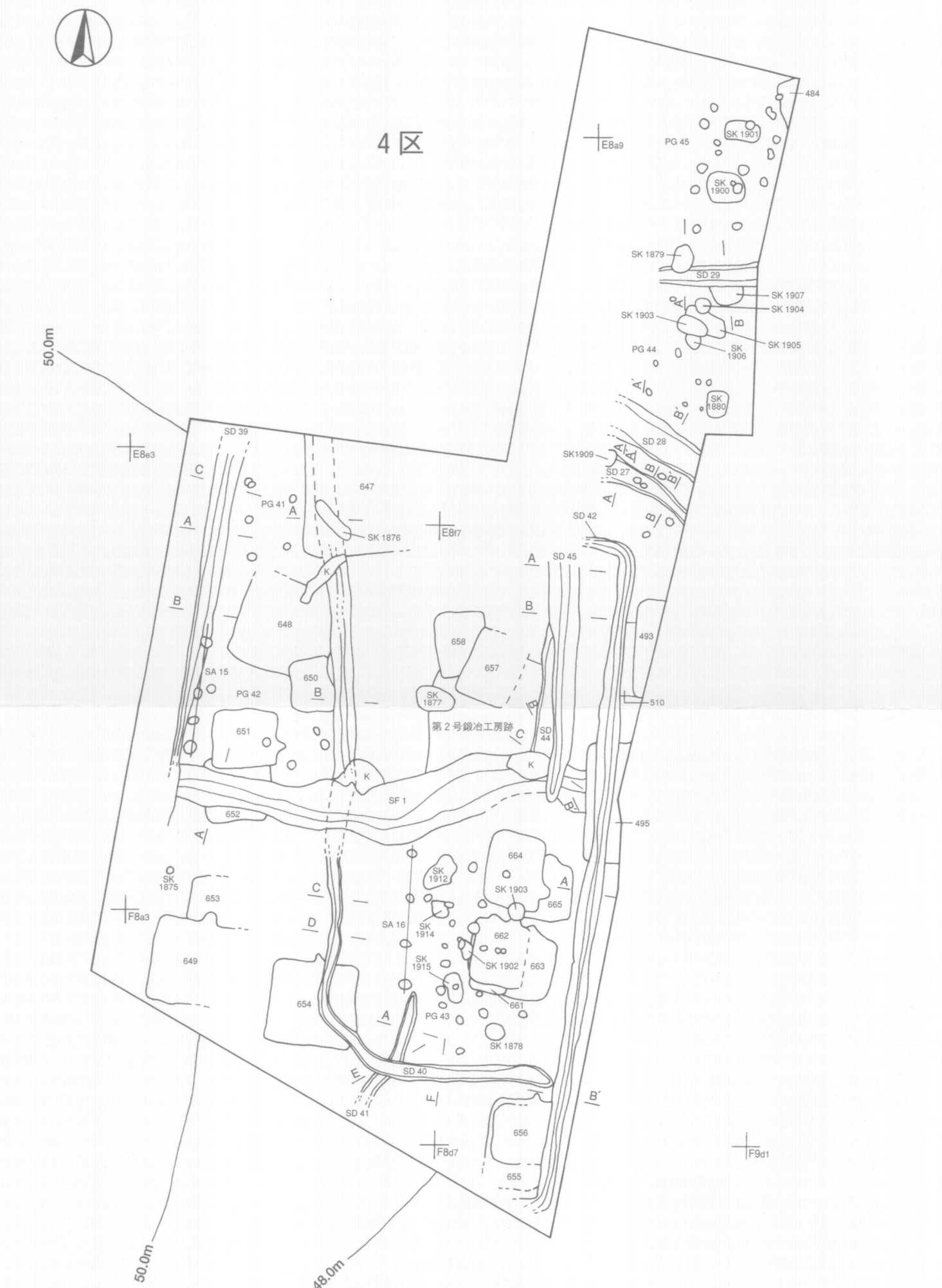
平成16（2004）年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 (有)川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53
TEL 029-253-5551

付図 辰海道遺跡 2 遺構全体図





0 8m

